

真景累ヶ淵

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

今日こんにちより怪談のお話を申上げますが、怪談ばなしと申すは近来大きにすた廃りまして、
 余りせき寄席で致す者もございません、と申すものは、幽霊と云うものは無い、全く神経病だ
 と云うことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌いなさる事でございます。それ故
 に久しく廃つて居りましたが、今日になつて見ると、却かえつて古めかしい方が、耳新しい様
 に思われます。これはもとより信じてお聞き遊ばす事ではございませんから、或あるは流いり違ゆうい
 の怪談ばなしがよかろうと云うお勧めにつきまして、名題を真景累ヶ淵と申し、下しも総ふさのく
 国に羽は生に村ゆうむらと申す処の、累かさねの後日のお話でございしますが、これは幽霊が引続いて出ま
 する、気味のわるいお話でございます。なれども是はその昔、幽霊というものが有ると私わ
 共たくしどもも存じておりましたから、何か不意に怪しい物を見ると、お、怖い、変な物、あり
 やア幽霊じゃアないかと驚きました、只今では幽霊がないものと諦めましたから、頓とんと
 怖い事はございません。狐にばかされるという事は有る訳のものでないから、神経病、又
 天狗てんこうに攫さらわれるという事も無いからやっぱり神経病と申して、何なんでも怖いものは皆神経病

におつつけてしまいましたが、現在開けたえらい方で、幽霊は必ず無いものと定めても、鼻の先へ怪しいものが出ればアツと云つて譬餅しりもちをつくのは、やっぱり神経が些ちと怪しいのでございましょう。ところが或る物識ものしりの方は、「イヤ〜西洋にも幽霊がある、決して無いとは云われぬ、必ず有るに違いない」と仰しやるから、私共は「へエ然うでございませうか、幽霊は矢張やっぱり有りますかな」と云うと、又外の物識の方は、「ナニ決して無い、幽霊なんというは有る訳のものではない」と仰しやるから、「へエ左様でございませうか、無いという方が本当でげしよう」と何方どちらへも寄らず障らず、只云うなり次第に、無いといえば無い、有るといえば有る、と云つて居れば済みますが、極大昔ごくに断見だんけんの論というが有つて、是は今申す哲学という様なもので、此の派の論師の論には、眼に見え無い物は無いに違いない、何んな物でも眼の前に有る物で無ければ有るとは云わせぬ、仮令たとえ何んな理論が有つても、眼に見えぬ物は無いに違いないという事を説きました。すると其処そこへ釈迦が出て、お前の云うのは間違つている、それに一体無いという方が迷つているのだ、と云い出したから、益々分らなくなりまして、「へエ、それでは有るのが無いので、無いのが有るのですか」と云うと、「イヤ然うでも無い」と云うので、詰り何方どちらか慥たしかに分りません。釈迦と云ういたずら者が世に出て多くの人を迷わす哉かな、と申す狂歌も有ります事

で、私共は何方へでも智慧のある方が仰しやる方へ附いて参りますが、詰り悪い事をせぬ方には幽霊という物は決してございませぬが、人を殺して物を取るといふような悪事をする者には必ず幽霊が有ります。是が即ち神經病と云つて、自分の幽霊を脊負つて居るような事を致します。例えば彼奴を殺した時に斯ういう顔付をして睨んだが、若しや己を怨んで居やアしないか、と云う事が一つ胸に有つて胸に幽霊をこしらえたら、何を見ても絶えず怪しい姿に見えます。又その執念の深い人は、生きて居ながら幽霊になる事がございます。勿論死んでから出ると定まつているが、私は見た事もございませぬが、随分生きながら出る幽霊がございます。彼の執念深いと申すのは恐いもので、よく婦人が、嫉妬のために、散し髪で仲人の処へ駈けて行く途中で、巡査に出会しても、少しも巡査が目に入りませんから、突当るはずみに、巡査の顔にかぶり付くような事もございます。又金を溜めて大事にすると念が残るといふ事もあり、金を取る者へ念が取付いたなんといふ事も、よくある話でございます。

只今の事ではありませんが、昔根津の七軒町に皆川宗悦と申す針医がございまして、この皆川宗悦が、ポツ／＼と鼠が巢を造るように蓄めた金で、高利貸を初めたのが病みつきで、段々少しずつ溜るに従つていよいよ面白くなりますから、大した金ではあり

ませんが、諸方へ高い利息で貸し付けてございます。ところが宗悦は五十の坂を越してから女房に別れ、娘が二人有つて、姉は志賀と申して十九歳、妹は園と申して十七歳でございますから、其の二人を楽みに、夜中の寒いのも厭わず療治をしては僅かの金を取つて参り、其の中から半分は除けて置いて、少し溜ると是を五兩一分で貸そうというのが楽しみでございます。安永二年十二月二十日の事で、空は雪催しで一体に曇り、日光おろしの風は身に染みて寒い日、すると宗悦は何か考えて居りましたが、

宗「姉えや、姉えや」

志「あい……もつと火を入れて上げようかえ」

宗「ナニ火はもういゝが、追々押詰るから、小日向の方へ催促に行こうと思うのだが、又出て行くのはおつくうだから、牛込の方へ行つて由兵衛さんの処へも顔を出したいし、それから小日向のお屋敷へ行つたり四ツ谷へも廻つたりするから、泊り掛で五六軒遣つて来ようと思う、牛込は少し面倒で、今から行つちやア遅いから明日行く事にしようと思うが、小日向のはずるいから早く行かないとなあ」

志「でもお父さん本当に寒いよ、若し降つて来るといけないから明日早くお出でなさいな」

宗「いや然うでない、雪は催して居てもなか／＼降らぬから、雪催しで些と寒いが、降らぬ中に早く行つて来よう、何を出してくんな、綿の沢山はいった半纏を、あれを引掛けて然うして奴蛇の目の傘を持つて、傘は紐を付けて斜に脊負つて行くようにしてくんな、ひよつと降ると困るから、なに頭巾をかぶれば寒くないよ」

志「だけれども今日は大層遅いから」

宗「いゝえそうでは無い」

と云うと妹のお園が、

園「お父さん早く帰つておくれ、本当に寒いから、遅いと心配だから」

宗「なに心配はない、お土産を買つて来る」

と云つて出ますと、所謂虫が知らせると云うのか、宗悦の後影を見送ります。

宗悦は前鼻緒のゆるんだ下駄を穿いてガラ／＼出て参りまして、牛込の懇意の家へ一二軒寄つて、すこし遅くはなりましたが、小日向服部坂上の深見新左衛門と申すお屋敷へ廻つて参ります。この深見新左衛門というのは、小普請組で、奉公人も少ない、至つて貧乏なお屋敷で、殿様は毎日御酒ばかりあがつて居るから、畳などは縁がズタ／＼になつて居り、畳はたゞみばかりでたは無いような訳でございます。

宗「お頼み申します〜」

新「おい誰か取次が有りますぜ、奥方、取次がありますよ」

奥「どうれ」

と云うので、奉公人が少ないから奥様が取次をなさる。

二

奥「おや、よくお出でだ、さア上んな、久しくお出でなかつたねえ」

宗「へエこれは奥様お出向いで恐れ入ります」

奥「さアお上り、丁度殿様もお在宅で、今御酒をあがつてる、さア通りな、燈光を出しても無駄だから手を取ろう、さア」

宗「これは恐入ります、何か足に引掛りましたから一寸」

奥「なにね畳がズタ〜になつてるから足に引掛るのだよ……殿様宗悦が」

新「いや是は何うも珍らしい、よく来た、誠に久しく逢わなかつたな、この寒いのによく尋ねてくれた」

宗「へエ殿様御機嫌好う、誠に其の後は御無沙汰を致しましてございます、何うも追々月迫致しまして、お寒さが強うございますが何もお変わりもございませんで、宗悦身に取りまして恐悦に存じます」

新「先頃は折角尋ねてくれた処が生憎不在で逢わなかったが何うも遠いからのう、なか／＼尋ねるたつて容易でない、よくそれでも心に掛けて尋ねてくれた、余り寒いから今一人で一杯始めて相手欲しやと思つて居た処、遠慮は入らぬ、別懇の間ださア」

宗「へエ有難い事で、家内のお兼が御奉公を致した縁合で、盲人が上りましても、直々殿様がお逢い遊ばして下さると云うのは、誠に有難いことでございますが、へエ、なに何う致しまして」

奥「宗悦やお茶を此処に置くよ」

宗「へエ是は何うも恐れ入ります」

新「奥方宗悦が久振で来たから何でも有合で一つ、随分飲めるから飲まして遣りましよう、エ、奥方勘藏は居らぬかえ、エ、ナニ何か一寸、少しは有ろう、まア／＼宗悦此方へ来な、却つて鯛ぐらいの方が好い、随分酔うものだよ、さアずっと側へ来な、奥方頼みます」

奥「宗悦ゆるりと」

と云うので、別に奉公人が有りませんから、奥様が台所で拵こしらえるのでございます。

新「宗悦よく来た、さア一つ」

宗「へエ是は恐れ入ります、頂戴致します、へエもう…おツと溢こぼれます」

新「これは感心、何うもその猪口ちよくの中へ指を突込んで加減をはかると云うのは其処そこは盲人でも感服なもの、まア宗悦よく来たな、何なんと心得て来た」

宗「へエ何と云つて殿様申し上げるのはお気の毒ですが、先年御用達ごようだつて置いたあの金子の事でございます、外ほかとは違ちがひまして、兼が御奉公を致しましたお屋敷の事でござい
ますから、外よりは利分りぶんをお廉やすく致しまして、十五兩一分で御用達したのは僅わずか三十金で
ございますが、あれ切り何ぎとも御沙汰がございませんから、再度参りました所が、何分なにぶん
御不都合の御様子でございましてから遠慮致して居おるうちに、もう丁度足掛け三年になりま
す、工誠に今年は不手廻ふてまわりで融通が悪うございます、へエ余り延引になりますから、へエ
何どうか今日こんにちは御返金を願ねがいたく出ましてございます、へエ何うか今日は是非半金でも戴
きませんでは誠に困りますから」

新「そりゃア何うもいかん、誠に不都合だがのう、当家も続いて不如意でのう、何うも

返したくは心得て居るが、種々その何うも入用が有つて何分差支えるからもうちつと待てえ」

宗「殿様え、貴方はいつ上つても都合が悪いから待てと仰しやいますかね、何時上れば御返金になるという事を確かり伺いませんで困ります、へ工慥かに何時幾日と仰しやいませんで、私は斯ういう不自由な身体で根津から小日向まで、杖を引張つて山坂を越して来るのでげすから、只出来ぬとばかり仰しやつては困ります。三年越しになつてもまだ出来ぬと云うのは、余り馬鹿々々しい、今日は是非半分でも頂戴して帰らんければ帰られませぬ、何ぼ何でも余り我儘でげすからなア」

新「我儘と云つても返せぬから致し方がない、エ、いくら振ろうとしても無い袖は振れぬという譬の通りで、返せぬというものを無理に取ろうという道理はあるまい、返せなければ如何いたした」

宗「返せぬと仰しやるが、人の物を借りて返さぬという事はありません、天下の直参の方が盲人の金を借りて居て出来ないから返せぬと仰しやつては甚だ迷惑を致します、そのうえ義理が重なつて居りますから遠慮して催促も致しません、大抵四月縛か長くて五月という所を、べん／＼と廉い利で御用達申して置いたのでげすから、へ工何う

か今こんにち日御返金を願います、馬鹿々々しい、幾度来たつて果しが付きませんからなア」

新「これ、何だなん大声を致すな、何だ、瘦せても枯れても天下の直參が、長らく奉公をした縁合を以て、此の通り直々に目通りを許して、盃でも取らすわけだから、少しは遠慮という事が無ければならぬ、然るを何だ、余り馬鹿々々しいとは何ういう主意を以て斯かくの如く悪口あつこうを申すか、この呆漢たわけめ、何だ、無礼の事を申さば切捨てたつてもよい訳だ」

宗「やア是は籠棒べらぼうらしゆうございます、こりやアきつと承りましょう、余りと云えば馬鹿々々しい、何なんでげすか、金を借りて置きながら催促に来ると、切捨てゝもよいと仰しやるか、又金が返せぬから斬つて仕舞うとは、余り理不尽じゃアありませんか、いくら旗は下たもとでも素町人すちやうにんでも、理に二つは有りません、さア切るなら斬つて見ろ、旗下も犬の糞くそもあるものか」

と宗悦たけが猛たけり立つて突つかゝると、此方こちらは元来御酒の上が悪いから、

新「ナニ不埒ふちちな事を」

と立上ろうとして、よろける途端に刀かたな掛かけの刀に手がかゝると、切る気ではありませんが、無我夢中でスラリと引抜き、

新「この糞たわけめが」

と浴せかけましたから、肩先深く切込みました。

三

新左衛門は少しもそれが目に入らぬと見えて、

新「何だこのたわけめ、これ此処を何処と心得て居る、天下の直参の宅へ参つて何だ此の馬鹿者め、奥方、宗悦が飲酔つて参つて兎や角う申して困るから歸して下さい、よう奥方」

と云われて奥方は少しも御存じごさいませんから手燭を点けて殿様の処へ行つて見ると、腕は冴え刃物は利し、サツという機に肩から乳の辺まで斬込まれて居る死骸を見て、奥方は只べた／＼と畳の上にすわつて、

奥「殿様、貴方何を遊ばしたのでございます、仮令宗悦が何の様な悪い事がありましたも別懇な間でごさいますのに、何でお手打に遊ばした、え、殿様」

新「ナニたゞ背打に」

と云つて、見ると、持つて居る一刀が真赤に鮮血に染みて居るので、ハツとお驚きにな

ると酔えいが少し醒さめまして、

新「奥方心配せんでも宜よろしい、何も驚く事はありません、宗悦これが無礼を云い悪口たら／＼申して捨置き難がたいから、一打ひとつちに致したのであるから、其の趣を一寸頭かしらへ届ければ宜しい」

ナ二人を殺してよい事があるものか、とは云うものゝ、此の事が表向になれば家にも障ると思ひますから、自身に宗悦の死骸を油あぶら紙かみに包んで、すつぽり封印を附けて居りますと、何なんにも知りませんから田舎者の下男が、

男「へエ葛籠つづらを買つて参りました」

新「何なんだ」

男「へエ只今帰りました」

新「ウム三右衛門さんえもんか、さア此処こゝへ這入れ」

三「へエ、お申付の葛籠つづらを買とつて参りましたが何方どちらへ持つて参ります」

新「あゝこれ三右衛門、幸い貴様に頼むがな実は貴様も存じて居る通り、宗悦から少しばかり借りて居おる、所が其の金の催促に来て、今日は出来ぬと云つたら不埒な悪口を云うから、捨置き難いによつて一刀両断に斬つたのだ」

三「へエ、それは何うも驚きました」

新「叱つ、何も仔細はない、頭へ届けさえすれば仔細はない事だが、段々物入りが続いて居る上に又物入りでは実に迷惑を致す、殊には一時面倒と云うのは、もう追々月迫致して居ると云う訳で、手前は長く正当に勤めてくれたから誠に暇を出すのも厭だけれども、何うか此の死骸を、人知れず、丁度宜しい其の葛籠へ入れて何処かへ棄て、然うして貴様は在処の下総へ歸つてくれよ」

三「へエ、誠に、それはまあ困ります」

新「困るつたつて、多分に手当を遣りたいが、何うも多分にはないから十金遣ろうが、決して口外をしてはならぬぞ、若し口外すると、己の懐から十両貰った廉が有るから、貴様も同罪になるから然う思つて居ろ、万一この事が漏れたら貴様の口から漏れたものと思うから、何処までも草を分けて尋ね出しても手打にせんければならぬ」

三「へエ棄てまするのはそれは棄ても致しましょうし、又人に知れぬ様にも致しますが、私は臆病で、仏の入った葛籠を、一人で脊負つて行くのは気味が悪うございますから、誰かと差担いで」

新「万一にも此の事が世間へ流布してはならぬから貴様に頼むのだ、若し脊負えぬと云

えばよんどころない貴様も斬らんければならぬ」

三「エ、脊負います〜」

と云うので十両貰いました。只今では何でもございませませんが、其の頃十両と申すと中々大した金でございますから、死人を脊負つて三右衛門がこの屋敷を出るは出ましたが、何うしても是を棄てる事が出来ません、と申すは、臆病でございますから少し淋しい処を歩くと云うと、死人が脊中に有る事を思い出して身の毛が立つ程こわいから、なるたけ賑やかな処ばかり歩いて居るから、何うしても棄てる事が出来ません、其の中に何処へ棄てたか葛籠を棄て、三右衛門は下総の在所へ歸つて仕舞うと、根津七軒町の喜連川様のお屋敷の手前に、秋葉の原があつて、その原の側に自身番がござります。それから附いて廻つて四五間参りますると、幅広の路次がありまして、その裏に住つて居りますのは上方の人でござりますが、此の人は長屋中でも狡猾者の大慾張と云うくらいの人、此の上方が家主の処へ参りまして、

上「ハイ今日は、お早うござります」

家主女房「おや、お出なさい何か御用かえ」

上「へエ今日は、旦那はんはお留守でござりますか、へエ、それは何方へ、左様でござ

りますか、実はなア私は昨夜盗賊に出逢いましたによつて、お届けをしようと思いましたが、何分届をするのは心配でナア、世間へ知れてはよくあるまいから、どうもナア、その荷物が出さえすればよいと思うて居りました、実は私の嬢の妹がお屋敷奉公をしたところが、奥さんの気に入られて、お暇を戴く時に途方もない結構な物を品々戴いて、葛籠に一杯あるを、何処か行く処の定まるまで預かつてくれえというのを預けられて、家に置くと、盗賊に出逢うて、その葛籠が無くなつたによつて、私はえらい心配を致しまして、もし、これからその義理ある妹へ何うしようと、実は嬢に相談して居りますと、秋葉の傍に葛籠を捨て、有りますから、あれを引取つて参りとうござりますが、旦那はんが居やはらんければ、引取られぬでござりましょうか」

女房「おや、然うかえ、それじゃアね、亭主は居りませんが、總助さんに頼んで引取つてお出なさい」

上「ハイ有難うござります、それでは總助はんに頼んで引取りを入れまして」

と横着者で、これから總助と云う町代を頼んで、引取りを入れて、とうとう脊負つて歸つて来ました。

四

上「へエ只今總助はんにお頼み申して此の通り脊負うて参りました」

家主女房「おや大層立派な葛籠ですねえ」

上「へエ、これが無うなつてはならんと大層心配して居りました、へエ有難うござりませう」

女房「何うして其処に棄て、行つたのでしよう」

上「それは私が不動の鉄縛と云うのを遣りましたによって、身体が痺れて動かれないので、置いて行つたのでござりませう、エ、へイ誠に有難いもので、旦那がお帰りになつたら宜しゅうお礼の処を願います、へエ左様なら」

とこれから路次の角から四軒目に住んで居りますから、水口の処を明けて、

上「おい一寸手を掛けてくれえ」

妻「あい、おや立派な葛籠じゃアないか」

上「どうじゃ、ちゃんと引取りを入れて脊負うて来たのじゃから、何処からも尻も宮も来やへん、ヤ何でもこれは屋敷から盗んで来た物に違いないが、屋敷で取られたと云うて

は、家事不取締になるによつて容易に届けまへん、又置いていった泥坊は私の葛籠だと云つて訴える事は出来まへん、して見ればどこからも尻宮の来る氣遣はないによつて、私が引取りを入れて引取つたのじや、中にはえらい金目の縫模様や紋付もあるか知れんから、何様にも売捌が付いたら、多分の金を持って、ずっと上方へ二人で走つてしまえば決して知れる氣遣はなしじや」

妻「そうかえ、まあ一寸明けて御覽な」

上「それでも葛籠を明けて中から出る品物がえらい紋付や熨斗目や縫の襦襦でもあると、斯う云う貧乏長屋に有る物でないと云う処から、偶然して足を附けられてはならんから、夜さり夜中に窃と明けて汝と二人で代物を分けるが宜ワ」

妻「然うだねえ嬉しいこと、お屋敷から出た物じやア其様な物はないか知らぬが、若し花色裏の着物が有つたら一つ取つて置いてお呉れよ」

上「それは取つて置くとも」

妻「若しちよいと私に挿せそうな櫛笄があつたら」

上「それも承知や」

妻「漸々運が向いて来たねえ」

上「まあ酒を買うて」

と云うので是からたのしみさげ樂酒を飲んで喜んで寝ます。すると一番奥の長屋に一人者があつて其処そこに一人の食いそろう客が居りましたが、これは其の頃遊あそび人と云つて天下禁制の裸くすぶで燻つて居る奴、

○「おい甚太じんたく」

甚「ア、ア、ア、ハア、ン、ア、アもう食べねえ」

○「おい寝惚けちやアいけねえ、おい、起きねえか、エ、静かにしろ、もう時刻は好いぜ」

甚「何を」

○「何をじやアねえ忘れちやア仕様がねえなア、だから獸もくんじい肉を奢おごつたじやアねえか」
 甚「彼の肉あを食うと綿衣どてら一枚違いちめえうというから半纏はんてんを質はに置いてしまったが、オウ、滅法寒めつぽうくなつたから当てにやアならねえぜ、本当に冗談じやうたんじやアねえ」

○「おい上方者の葛籠くわらごを盗ぬすむんだぜ」

甚「ウン、違ちがえねえ、そうだつて、忘れてしまった、コウ彼奴あいつア太ふえ奴やつだなア、畜生誰ちくせいも引取人ひきとりてが無ねえと思つてずうくしく引取りやアがつて、中の代物よを捌さばいて好い正月しんげつを

しようと言う了簡だが、本当に何処まで太えか知れねえなア」

○「ウン、彼奴は今丁度食い酔つて寝て居やアがる中に窃と持つて来て中を発いて遣ろうじやアねえか、後で気が附いて騒いだってもとく彼奴の物でねえから、自分の身が劍呑で大きく云う事出来ねえのさ」

甚「だがひよつと目を覚してキヤアバアと云つた時にやア一つ長屋の者で面を知つてるぜ」

○「十二そりやア真黒に面を塗つて頬冠をしてナ、丹波の国から生獲りましたと云う荒熊の様な妙な面になつて往きやア仮令面を見られたつて分りやアしねえから、手前と二人で面を塗つて行つて取つて遣ろう」

甚「こりやア宜いや、サア遣ろう、墨を塗るかえ」

○「墨の欠ぐれえは有るけれども墨を摺つてちやア遅いから鍋煤か何か塗つて行こう」
甚「そりやア宜かろう、何だつて分りやアしねえ」

○「釜の下へ手を突込んで釜の煤を塗ろう、十二知れやアしねえ」
と云うので釜の煤を真黒に塗つて、すつと冠りを致しまして、

○「何うだ是じやア分るめえ」

甚「ウン」

○「ハ、ハ、ハ、妙な面だぜ」

甚「オイ、笑いなさんな、気味が悪いや、目がピカ、光って歯が白くって何とも云えねえ面だぜ」

○「ナニ手前だつて然うだあナ」

とこれから窃と出掛けて上方者の家の水口の戸を明けてとうとう盗んで来ました。人が取つたのを又盗み出すと云う太い奴でございます。

甚「コウ、グウ、グウ、寝て居やアがったなア、可笑しいじやアねえか、寝て居る面は余り慾張つた面でも無えぜ」

○「オイ、表を締めねえ、人が見るとばつがわりいからよ、ソレ行燈を其方へ遣つちまつちやア見る事が出来やあしねえ、本当にこんな金目の物を一時に取つた程楽みな事アねえぜ、コウ余り明る過ぎらア、行燈へ何か掛けねえ」

甚「何を掛けよう」

○「着物でも何でも宜いから早く掛けやナ」

甚「着物だつて着る物がありやア何も心配しやアしねえ」

○「何でも薄ッ暗くなるようにその檻樓ぼろを引掛ひっかける、何でも暗くせえなれば宜いや、オ、封印が附いてらア、エ、面を出すな、手前てめえは食いそ客ろうだから主人あるじが見てそれから後で見やアがれ」

甚「ウン、ナニ食客でも主人でも露頭ろけんをして縛られるのは同罪だよ」

○「そりやア云わなくつても定きまつてゐるわ」

と云うので是から封印を切つて、

○「何だか暗くつて知れねえ」

甚「どれ見せや」

○「しッしッ」

五

甚「兄い何を考かんえてるんだ」

○「何どうも妙だなア、中あふに油紙ツかみがあるぜ」

甚「ナニ、油紙がある、そりやア模様物や友禪ゆうぜんの染物へえが入つてゐるから雨が掛つてもいゝ

様に手当がして有んだ」

○「敷紙が二重になつてゐるぜ」

と云いながら、四方が油紙の掛つて居る此方の片隅を明けて楽みそうに手を入れると、グニヤリ、

○「おや」

甚「何だ〜」

○「変だなア」

甚「何だえ」

○「ふん、どうも変だ」

甚「然う一人でぐず〜楽まずに些と見せやな」

○「エ、黙つてろ、何だか坊主の天窓みた様な物があるぞ」

甚「ウン、ナニ些とも驚く事アねえ、結構じゃアねえか」

○「何が結構だ」

甚「そりやアおめえ踊の衣裳だろう、御殿の狂言の衣裳の上に坊主の髻が載つてゐるんだ、それをお前が押えたんだアナ」

○「でも芝居で遣う坊主の髭はすべくくしてるが、此の坊主の髭はざらくくしてるぜ」
 甚「ナニざらくくしてるならもじがふらと云うのがある、きっとそれだろう」

○「ウン然うか」

甚「だから己おれに見せやと云うんだ」

○「でも坊主の天窓の有る道理はねえからなア、まアく待ちねえ己が見るから」とまた二度目に手を入れると今度はヒヤリ、

○「ウワ、ウワ、ウワ」

甚「おい何なんだ」

○「何どうも変だよ冷てえ人間の面アみた様な物がある」

甚「ナニ些とも驚くこたアねえやア、二十五座の衣裳で面めんが這入へえってるんだ、そりやア大變に価値ねうちのある物で、一個ひとつでもつて二百両ぐれえのがあるよ」

○「ウン、二十五座の面か」

甚「兄い、だから己に見せやと云うんだ」

と云われたから、今度は思い切つて手を突込むとグシヤリ、

○「ウワア」

と云うなり土間へ飛下りて無茶苦茶にしんばりを外して戸外へ逃出しますから、

甚「オイ兄い、何処へ行く、人に相談もしねえで、無暗に驚いて逃出しやアがる、此の金目のある物を知らずに」

と手を入れて見ると驚いたの驚かないの、

甚「ウア、」

と此奴も同じく戸外へ逃出しました。すると其の途端に上方者が目を覚して、

上「さアお鶴起んかえ時刻は宜いがナ、起んか」

と云うとお鶴と云う女房が、

鶴「お止しよ眠いよ」

上「おい、これ、起んかえ」

鶴「お止しよ、酒を飲むと本当にひちつくどい、気色が悪いから厭だよ、些とお慎し

み」

上「何をいうのじや葛籠を」

鶴「葛籠、おや然う」

と慾張つて居りますから直ぐに目を覚して、

鶴「おや無いよ、葛籠が無いじゃアないか」

上「ア、彼の水口が明いとるのは泥坊が這入ったのじゃ、お長屋の衆〜」

と嘸鳴りますから、長屋の者は何事か分りませんが、吊提燈を点けて出て参りますと、

上「貴方御存じか知りまへんが最前總助はんを頼んで引取りました葛籠を盗まれました、あの葛籠は妹から預かつて置いた大事の物で、盜賊に取られたのを漸う取り遂せたら又泥坊が這入って持つて行きましたによつて、同じお長屋の衆は掛り合で御座りますナア」

△「ナニ掛り合の訳は有りません、路次の締りは固いのだがねえ、でも源八さん葛籠を取られたと云うのだがどうしましょう」

源「どうしましょうつて彼奴は長屋の交際が悪くつて、此方から物を遣つても向から返したこたア無いくらいだから、其様に氣を揉むこたア無いけれども、仕方がねえから大屋さんを起すが宜い」

●「アノ奥の一人者の内に食客が居るから、彼処へ行つて彼の人に行つて貰うが宜うございましょう」

△「じゃア連れて来ましょう」

と吊提燈を提げて奥へ行くと、戸袋の脇から真黒な面で目ばかりピカ／＼光る奴が二人

這出したから、

△「ウワア、何だこれおどかしちゃアいけない」

と云う中に、二人とも一生懸命で路次の戸を打碎して逃出しました。

△「ア、何だ、本当にモウ何うも胸を痛くした、こりやア彼奴が泥坊だ、私は大きな犬が出たと思つて恟りした、あゝこれだゝこれだから一人者を置いてはならないと云うのだが、家主が人が善いから、追出すと意趣返しをすると云うので怖がつて置くのだが宜くない、此処にちゃんと葛籠があるわ、上方者だと思つて馬鹿にして図々しい奴だ、一つ長屋に居て斯んな事をするのは頭隠して尻隠さず、葛籠を置いて行くから直ぐに知れて仕舞うんだ、何か代物が残つて居るかも知れねえから見てやろう、ウワアお長屋の衆」

と云うから驚いて外の者が来て見ると、葛籠が有るから、

●「お、彼処に葛籠がある、好い塩梅だ、おや、中に、ウワア、お長屋の衆」

と来る奴もく、皆お長屋の衆と云う大騒ぎ。すると二つ長屋の事でございませうから義理合に宗悦の娘お園が来て見ると恟りして、

園「是は私のお父さんの死骸何うしたのでございませう、昨日家を出て帰りませんから心配して居りましたが」

△「イヤそれは何うもとんだ事」

というので是から訴えになりましたが、葛籠しるしに記号しるしも無い事でございませうから頼とんと何者の仕業しわざとも知れず、大屋さんが親切に世話を致しまして、谷中やなかにつぼり日暮里の青雲寺せいうんじへ野辺送りのべんりを致しました。これが怪談の発端でござります。

六

引続きまして申上げます。深見新左衛門が宗悦を殺しました事は誰有たれつて知る者はござりません。葛籠しるしに記号しるしもござりませんから、只つまらないのは盲人宗悦で、娘二人はいかに愁傷致しまして泣いて居る様子が憫然ふびんだと云つて、長屋の者が親切に世話を致します混雑まじりの紛れに逃げました賭博ばくちうち打二人は、遂に足が付きまして直すくに繩に掛つて引かれまして御町おまちの調べになり、賭博ばくち兇状ようじょうと強迫ゆすり兇状ようじょうがありました故其の者は二人とも佃つくだしま島へ徒刑になりました。上方者は自分の物だと言つて他人の物を引入れました廉かどは重罪でございませうけれども格別のお慈悲を以て所払いを仰せ付けられました其の一件ことは相済みました、深見新左衛門の奥方は、あゝ宗悦は憫然かわいそうな事をした、何うも実に情ないお殿

様がお手打に遊ばさなくても宜いものを、別に怨がある訳でもないに、御酒の上とは云いながら気の毒な事をしたと絶えず奥方が思います処から、所謂只今申す神経病で、何となく塞いで少しも気が機みません事でございます。翌年になりまして安永三年二月あたりから奥方がぶら／＼塩梅が悪くなり、乳が出なくなりましたから、門番の勘藏がとつてから奥方がぶら／＼塩梅が悪くなり、乳が出なくなりましたから、門番の勘藏がとつて二歳になる新吉様と云う御次男を自分の懐へ入れて前町へ乳を貰いに往きます。と云うものは乳母を置く程の手当がない程に窮して居るお屋敷、手が足りないからと云うので、市ヶ谷に一刀流の剣術の先生がありまして、後に仙台侯の御抱えになりました黒坂一齋と云う先生の処に、内弟子に参つて居る惣領の新五郎と云う者を家へ呼寄せて、病人の撫擦りをさせたり、或は藥其の外の手当もさせます。其の頃新五郎は年は十九歳でございますが、よく母の枕辺に附添つて親切に看病を致しますなれども、小児はあり手が足りません。殿様はやつぱり相変らず寢酒を飲んで、奥方が呻ると、

新「そうヒイ／＼呻つてはいけません」

などと酔つた紛れにわからんことを仰しやる。手少なで困ると云つて、中働の女を置きました。是は深川網打場の者でお熊と云う、年二十九歳で、美女ではないが、色の白いぼつちやりした少し丸形のまことに気の利いた、苦勞人の果と見え、万事届

きます。殿様の御酒の相手をすれば、

新「熊が酌をすれば旨い」

などと酔った紛れに冗談を仰しやると、此方はなかく、それ者の果と見えてとう／＼殿様にしなだれ寄りましてお手が付く。表おもてむき向むき届届けけは出来ませんがお妾と成つて居る。す

るともと／＼狡猾な女でございますから、奥方の纒訴ざんそを致し、又若様の纒訴ざんそを致すので、何となく斯こう家かがもめます。いくら言つても殿様はお熊にまかれて、煩わづらひつて居る奥様を非道な事をしてぶち打ちやうちやく擲ちやくを致します。もう十九にもなる若様をも煙管きせるを持つて打ぶつ様な事ことでございますから、

新五郎「あゝ親父おやじは愚ぐな者である、こんな処とこには逆とても出世は出来ぬ」

と若氣の至りで新五郎と云う惣領の若様はふいと家出を致しますと、お熊はもう此の上は奥様さえ死ねば自分が十分此こゝ処とこの奥様になれると思ひ、

熊「わたしは何どうも懐妊した様でございます、四月から見るものを見ませぬ酸すっぱい物が食くべたい」

何なんのと云うから殿様は猶なほ更さらでれすけにおなり遊あそばします。追々其の年も冬になりました、十一月十二月となりますと、奥様の御病氣だんくが漸だん々く悪わるくなり、その上寒さになりました

からキヤ／＼さしこみが起り、またお熊は、漸々お腹が大きくなつて身体が思う様にきませんと云つて、勝手に寝てばかり居るので、殿様は奥方に薬一服も煎じて飲ませません。只勘藏ばかりあてにして、

新「これ／＼勘藏」

勘「へエ、殿様貴方御酒ばかり召上つて居て何うも困りますなア奥様は御不快で余程御様子が悪いし、殊には又お熊様はあゝやつて懷妊だからごろ／＼して居り、折々奥様は差込むと仰しやるから、少しは手伝つて頂きませんじゃア、手が足りません、私は若様のお乳を貰いに往くにも困ります」

新「困つても仕方がない、何か、さしこみには近辺の鍼医を呼べ、鍼医を」

と云うと、丁度戸外にピー、と按摩の笛、

新「おゝ／＼丁度按摩が通るようだ、素人療治ではいかんから彼れを呼べ／＼」

勘「へエ」

と按摩を呼入れて見ると、怪し気なる黒の羽織を着て、

按摩「宜しゆう私が鍼をいたしましょう、鍼はお癩気には宜しゆうございます」

というので鍼を致しますと、

奥方「誠に好い心持に治まりがついたから何卒明日の晩も来て呉れ」

と戸外を通る揉療治ではありますが、一時凌ぎに其の後五日ばかり続いて参ります。すると一番しまいの日に一本打ちました鍼が、何う云うことかひどく痛いことのございでしたが、是は鍼に動ずると云うので、

奥方「あゝ痛、アいたタ」

按摩「大層お痛みでございますか」

奥方「はいあゝ甚く痛い、今迄斯んなに痛いと思つた事は無かつたが、誠に此の鳩尾の所に打たれたのが立割られたようで」

按摩「ナニそれはお動じでございます、鍼が験ましたのでございますから御心配はございません、イエマア又明晩も参りましょうか」

奥方「はい、もう二三日鍼は止めましよう、鍼はひどく痛いから」

按摩「直き癒ります、鍼が折れ込んだ訳でもないので、少しお動じですからナ、左様なら御機嫌よろしゆう」

と僅の療治代を貰つて帰りました。すると奥方は鍼を致した鳩尾の所が段々痛み出し、遂には爛れて鍼を打つた口からジク／＼と水が出るようで、猶更苦しみが増します。

七

新左衛門様は立腹して、

新「どうも怪しからん鍼医だ、鍼を打つてその穴から水が出るなんという事は無い訳で、堀抜井戸じゃア有るまいし、痴呆た話だ、全体何う云うものかあれ限り来ませんナ」

勘「奥方がもう来ないで宜いと仰しやいましたから」

新「間が悪いから来ないに違いない、不埒至極な奴だ、今夜でも見たら呼べ」

と云われたから待つて居りましたが、それぎり鍼医は参りません。すると十二月の二十日の夜に、ピーーく、と戸外を通ります。

新「ア、あれく、笛が聞える、あれを呼べ、勘藏呼んで来い」

勘「ハイ」

と駈出して按摩の手を取つて連れて来て見ると、前の按摩とは違い、年をとつて瘦こけた按摩。

新「何だこれじゃア有るまい、勘藏違つて居るぞ」

按摩「へエお療治を致しますか」

新「何だ汝てまえではなかつた、違つた」

按摩「左様で、それはお生あいにく憎様でございませすが何卒じどうぞお療治を」

新「これく、貴様鍼をいたすか」

按摩「私わたくしにわかめくらは俄盲人でございまして鍼は出来ません」

新「じゃア致いたしかた方が無い、按腹あんぶくは」

按摩「療治も馴れません事で中々上手に揉みます事は出来ませんが、丈夫な方ならば少しは揉めます」

新「何の事だ病人を揉む事はいかぬか、それは何にもならぬナ、でも呼んだものだから、勘藏、これ、何処どこへ行つて居るかナ、じゃア、まア折角呼んだものだからおれの肩を少し揉め」

按摩「へエ誠に馴れませんから、何処が悪いと仰しやつて下さい、経絡けいらくが分りませんから、こゝを揉めと仰しやれば揉みます」

と後へ廻つて探り療治を致しまするうち、奥方が側に居て、

奥方「ア、痛いた、ア、痛」

新「そう何うもヒイ／＼云つては困りますね、お前我慢が出来ませんか、武士の家に生れた者にも似合わぬ、痛い／＼と云つて我慢が出来ませんか、ウン／＼然う悶えては却つて病に負けるから我慢して居なさい、ア、痛、これ／＼按摩待て、少し待て、ア、痛い、成程此奴は何うもひどい下手だナ、汝は、エ、骨の上などを揉む奴が有るものか、少しは考えて遣れ、酷く痛いワ、ア、痛い堪らなく痛かった」

按摩「へエお痛みでござりますか、痛いと仰しやるがまだ／＼中々斯んな事ではございませんからナ」

新「何を、こんな事でないとは、是より痛くつては堪らん、筋骨に響く程痛かった」

按摩「どうして貴方、まだ手の先で揉むのでございますから、痛いと云つてもたかか知れておりますが、貴方のお脇差でこの左の肩から乳の処まで斯う斬下げられました時の苦しみはこんな事では有りませんからナ」

新「エ、ナニ」

と振返つて見ると、先年手打にした盲人宗悦が、骨と皮許りに瘦せた手を膝にして、恨めしそうに見えぬ眼を斑に開いて、斯う乗出した時は、深見新左衛門は酒の酔も醒め、ゾツと総毛だつて、怖い紛れに側にあつた一刀をとつて、

新「己おのれ参まつたか」

と力まかに任まかして斬きりつけると、

按摩「アツ」

と云うその声に驚おどきまして、門番の勘藏かんざうが駈か出して来て見ると、宗悦しゆえつと思おもいの外ほか奥方おくかたの肩先かた深く斬きりつけましたから、奥方おくかたは七転八倒しちてんぱつたうの苦くるしみしみ、

新「ア、彼あの按摩あんまは」

と見るともう按摩あんまの影かげはありません。

新「宗悦しゆえつめ執しゆねくもこれへ化くわけて参まつたなと思おもつて、思おもわず知らず斬きりましたが、奥方おくかただつたか」

奥「あ、誰たれを怨うらみましよう、私わたくしは宗悦しゆえつに殺ころされるだろうと思おもつて居ゐりましたが、貴方あなた御ご酒さけをお磨やめなさいませんと遂ついには家いへが潰つぶれます」

と一二度虚空こくうをつかんで苦くるしみしましたが、奥方おくかたはそのまゝ息いきは絶とえましたから如何いかんとも致いたし方がございませませんが、この事は表向へうむかひにも出来こません。殊ことには年とし末すえの事ことでございすから、これから頭かしらの宅たくわへ内々うちうち参まつてだん／＼歎なげ願ねがをいたしまして、極ごく内ない分ぶんの沙汰さたにして病死びやうびのつもりにいたしました。昔むかしは能よく変死へんじが有あつても屏風びやうぶを立て、置おいて、お頭かぶが来

て屏風の外で「遺言を」なんど、申しますが、もう当人は夙に死んでゐるから遺言も何もありようはずはございませぬ。この伝で病氣にして置くことも往々有りましたから、病の体にいたして漸くの事で野辺送りをいたしました。流石の新左衛門も此の一事には大きに閉口いたして居りました。すると其の年も明けまして、一陽来復、春を迎えましても、まことに屋敷は陰々といたして居りますが、別にお話もなく、夏も行き秋も過ぎて、冬のとりつきになりました。すると本所北割下水に、座光寺源三郎と云う旗下が有つて、これが女太夫のおこよと云う者を見初め、浅草竜泉寺前の梶井主膳と云う売卜者を頼み、其の家を里方にいたして奥方に入れた事が露見して、御不審がかゝり、家来共も召捕吟味中、深見新左衛門、諏訪部三十郎と云う旗下の両家は宅番を仰せつけられたから、隔番の勤めでございます。すると十一月の二十日の晩には、深見新左衛門は自分はお出ぬ事になりましたから、

新「熊や今晚は一杯飲んでらくらく休める」

と云うので御酒を召上つたが、少し飲過ぎて心持がわるいと小用場へ往つてから、

新「水を持って、嗽をしなければならん」

と云うので手水鉢のそばで手を洗つて居りますと、庭の植込の処に、はつきりと

は見えませんが、頬骨の尖った小鼻の落ちました、眼の所がポコンと凹んだ頬から頤へ胡麻塩交の髻が生えて、頭はまだらに禿げている瘦せかれた坊主が、

坊「殿様く」

と云う。

新「エ、」

と見るやいなや其の儘トン／＼／＼と奥へ駈込んで来て、刀掛に有った一刀を引抜いて、

新「狸の所為か」

と斬りつけますと、パツと立ちます一団の陰火が、髻髯として生垣を越えて隣の諏訪部三十郎様のお屋敷へ落ちました。

八

新左衛門はハテ狐狸の所為かと思いました。すると其の翌日から諏訪部三十郎様が御病気で、何をしてもお勤が出来ませんから、二人して勤めべき所、お一方が病氣故、新左

衛門お一方で座光寺源三郎の屋敷へ宅番に附いて居ると、或夜彼の梶井主膳と云う者が同類を集めて駕籠を釣らせ、抜身の鎗で押寄せて、おこよ、源三郎を連れて行こうと致しますから深見新左衛門は役柄で捨置かれず、直に一刀を取って斬掛けましたが、多勢に無勢で、とう／＼深見を突殺し、おこよ源三郎を引きさらって遠く逃げられました故、深見新左衛門は情なくも売卜者の為に殺されてお屋敷は改易でございませぬ。諏訪部三十郎は病気で御出役が無かつたのだが公辺のお首尾が悪く、百日の間閉門仰付けられますると云う騒ぎ、座光寺源三郎は勿論深見の家も改易に相成りまして、致し方がないから産落した女の児を連れて、お熊は深川の網打場へ引込み、門番の勘藏は新左衛門の若様新吉と云うのを抱いて、自分の知己の者が大門町にございませぬから、それへ参って若様に貰い乳をして育て、居るといふ情ない成行、此の通り無茶苦茶に屋敷の潰れた跡へ、帰つて来たのは新五郎と云う惣領でございませぬが、是は下総の三右衛門の処へ参って少しの間厄介に成つて居りましたが、素より若気の余りに家を飛出したので淋しい田舎には中々居られないから、故郷忘じがたく詫言をして帰ろうと江戸へ参つて自分の屋敷へ来て見ると、改易と聞いて途方に暮れ、爰と云う縁類も無いから何うしたらよかろうと菩提所へ行つて聞くと、親父は突殺され、母親は親父が斬殺したと聞きました少しのぼせたものか、

新五「これは怪しからん事、何たる因果因縁か屋敷は改易になり、両親は非業の死を遂げ、今更世間の人に顔を見られるも恥かしい、もう逆も武家奉公も出来ぬから寧ろ切腹致そう」

と、青松院の墓所で腹を切ろうとする処へ、墓参りに来たのは、谷中七面前の下総屋惣兵衛と云う質屋の主人で、これを見ると驚いて刃物をもぎとつて何う云う次第と聞くと、

新五「これくの訳」

というから、

惣「それなら何も心配なさるな、若い者が死ぬなんと云う心得違ひをしてはいけぬ、無分別な事、独身なれば何うでもなりますから私の家へ入らっしゃい」

と親切に勞わつて家へ連れて来て見ると、人柄もよし、年二十一歳で手も書け算盤も出来るから質店へ置いて使つて見るとじつめで應對が本當なり、苦勞した果で柔和で人交際がよいから、

甲「あなたの処では良い若い者を置当てなすつた」

惣「いゝえ彼は少し訳があつて」

と云つて、内の奉公人にもその実を言わず、

惣「少し身寄から頼まれたのだと云つてあるから、あなたも本名を明してはなりません」と云うので、誠に親切な人だから、新五郎もこゝに厄介になつて居ると、この家にお園という中なかばたらき働の女中が居ります。これは宗悦の妹娘で、三年あとから奉公して、誠に眞実に能く働きますから、主人の氣に入られて居る。併ししか新五郎とは、敵かたき同士が此処へ寄合つたので有りますが、互にそういう事とは知りません。

園「新どん」

新「お園どん」

と呼合います。新五郎は二十一歳で、誠に何うも水の出端てばなでございます。又お園は柔和よな好よい女、

新「あゝいう女を女房に持ちたい」

と思うと何うどいう因果因縁か、新五郎がお園に死ぬほど惚れたので、お園の事という、能く氣を付けて手伝つて親切にするから、男おとこ振ぶりは好よし応対も上手、其の上柔和で主人に氣に入られて居るから、お園はあゝ優しい人だと、新どんに惚れそうなものだが、敵同士とはいいながら虫が知らせるか、お園は新五郎に側へ来られると身毛立みのけだつほど厭に思う

が、それを知らずに、新五郎は無暗むやみに親切を尽しても、片方かたは碌ろくに口もききません。主人もその様子を見て、

惣「お園はまことに希代きたいだ、あれは感心な堅い娘だ、あれは女中のうちでも違つて居る、姉は何だか、稽古きこの師匠ししやうで豊志賀とよしがというが、姉きやうだい妹いとも堅い気象で、あの新五郎しんごは頻りとお園に優しくするようだが」

と気は附いたけれども、なに両人ふたりとも堅いから大丈夫と思つて居りまするくらいで、なか／＼新五郎はお園の側へ寄付よりつく事も出来ませんが、ふとお園が感冒ひきかぜの様子で寝ました。すると新五郎は寝ずにお園の看病をいたします。薬を取りに行つたついでに氷砂糖を買つて来たり、葛湯くずゆをしてくれたり、蜜柑みかんを買つて来る、九年母くねんぼを買つて来たりしてやります。主人も心配いたして、

惣「おきわ」

きわ「はい」

惣「お園は何も大した病氣でもないから宿へ下げる程でもなし、あれも長く勤めておることだから、少しの病氣なれば、医者いしやは此方こちで、山田さんが不都合なら、幸庵こうあんさんを頼んでもいいが、何なんだね、誠にその、看病人が無くつて困るね」

九

きわ「私が折わたくしおりに園の部屋へ見舞に参りますと、直ぐ布団の上へ起きなおりまして、もうなに大きおおに宜しゆうございますなど、云つて、まことに快よい振ふりをして居るから、お前無理をしてはいけないから寝ておいでと申しまして、心配しんぱいか家かでございますから私も誠に案じられます」

惣「そりやア誠に困つたものだ、誰たれか看病人が無ければならん、成程おれ己も時に行つて見ると、ひよいと跳はねお起おきるが、あれでは却かえつてぶり返すといかんから看病人に姉でも呼ぼうか」

きわ「でも仕合せに新五郎が参つては寝ずに感心に看病致します、あれは誠に感心な男で、店がひけると葉を煎じたり何か買かいに行つたり、何も彼かも一人で致します」

惣「なに新五郎がお園の部屋へ這入ると、それはいかん、それは女部屋のことはお前が気を附けて小言を云わなければなりません、それは何事も有りはしまいが」

きわ「有りはしまいたつて新五郎はあの通りの堅かたじん人じんですし、お園も変人ですから、変

人同士で大丈夫何事もありません」

惣「それはいかん、猫に鰹節で、何事がなくつても、店の者や出入でいりの者がおかしく噂でも立てると店の為にならぬから、きつと小言を云わんければならぬ」

きわ「それじゃア女中部屋へ出入を止めとます」

と云つて居る所へ、何事も存じません新五郎が帰つて来て、

新「へエ只今帰りました」

惣「何処どこへ往つた」

新「番頭さんがそう仰しやいますから、上野町うえのまちの越後屋えちごやさんの久七きゆうしちどんに流れの

相談を致しまして、帰りにお薬を取つて参りましたが、山田さんがそう仰しやるには、お園さんは大分好よい塩梅だが、まだ中々大事にしなければならん、どうも少し傷しやうかん寒かんの性たちだから大事にするようにと仰しやつて、今日はお加減が違いましたからこれから煎じます」

惣「お前が看病致しますか」

新「へエ」

惣「お前の事だから何事もありませんまいがネけれどもその、お前もそれ廿一、ね、お園は十九だ、お互に堅いから何事も無かろうが、一体男なんによ女の道はそういうものでない、私

の家は極く堅い家であつたけれども、やつぱりこれにナ許嫁が有つたが、私がつい何して、貰うような事で」

きわ「何を仰しやる」

惣「だから堅いが堅いに立たぬのは男女の間柄、何事もありはしまいが、店の若い者がおかしく嫉妬をいうとか、出入の者がいやに難癖を附けるとか、却つて店の示しにならぬからよろしくないかにも取締りが悪い様だからそれだけはナ」

新「へエ薩張心付きませんかつたが、店の者が女部屋へ這入つては悪うございますか、もうこれからは決して構いませんように心づけます、決して構いません」

惣「決して構わんでは困ります、看病人が無いから決して構わんと云つてはお園が憫然だから、それはね、ま構つてもいゝがね、少しそこを何うか構わぬ様に」

何だか一向分りませんが少しは構つてもよいという題が出ましたから、新五郎は悦びながら女部屋へ往つて、

新「お園どん山田様へいつてお薬を戴いてきたが、今日はお加減が違つたから、生姜を買つてくるのを忘れたが今直に買つて来て煎じますが、水も只では悪いから氷砂糖を煎じて水で冷して上げよう、蜜柑も二つ買つて来たが雲州のいゝのだからむいて上げよ

う、袋をたべてはいけないから只露つゆを吸って吐出はきだしておしまい、筋をとって食べられるようにするから」

園「有難う、新どん後ごしよ生だから女部屋へ来ないようにはしておくなさい、今もおかみさんと旦那様とのお話もよく聞えましたが、店の者が女部屋へ這入ってきては世間体が悪いと云つておいでだから、誠に思おぼしめし召めいは有難いが、後生だから来ないようにして下さい」

新「だから私が来ないようにしよう構かまわぬと云つたら、旦那が来なくつちやア困る、お前さんが憫然かわいそうだから構かまつてやつてくれと仰おほしやつたくらい、人は何といつても訝おかしい事がなければ宜よろしいから、今薬を煎あじて上あげるから心配しないで、心配すると病気に障さるからね」

園「あゝだもの新どんには本当に困るよ、厭いとだと思おもうのにつかゝ這入どつて来てやれこれ彼あんな様に親切めいじやうにしてくれるが、どういう訳わけかぞつとするほど厭いとだが、何どうしてあの人が厭いとなのか、気の毒あはれな様ようだ」

と種いろく々く心に思おもつて居ゐると、杉戸すぎどを明あけて、

新「お園どんお薬くすりが出来たからお飲のみなさい、余あまり冷ひやすときかないから、丁度飲の加減かへんを持って来たが、後あとは二番にばんを」

園「新どん、お願いだから彼方あつちへ行いつて下さいな、病やま気に障さりますから」

新「へエ左様でげすか」

と締めて立つて行く。

園「どうも、来てはいけないと云うのに態わざと来るように思われる、何だか訝おかしい変な人だ」

と思つて居ると、がらり、

新「お園どんお粥が出来たからね、是は大変に好いでんぶを買つて来たから食べてごらん、一寸ちよつといゝよ」

園「まア新どんお粥は私一人で煮られますから彼方あつちへ行つて下さいよ、却つて心配で病気に障るから」

新「じゃア用があつたらお呼びよ」

園「あゝ」

というので抛よんどころなく出て行くかと思つと又来て、

新「お園どんく」

とのべつに這入つて来る。すると俗に申す一に看病二に薬で、新五郎の丹精が届きましたか、追々お園の病氣も全快して、もう行燈あんどんの影で夜なべ仕事が出来るようになりまし

た。丁度十一月十五日のことで、常でないこと、新五郎が何処で御馳走になったか真赤に酔って帰りますと、もう店は退けてしまった後で、何となく極りが悪いからそつと台所へ来て、大きい茶碗で瓶の水を汲んで二三杯飲んで酔をさまし、見ると、奥もしんとして退けた様子、女部屋へ来て明けて見ると、お園が一人行燈の下で仕事をしているから、

新「お園どん」

園「あらまア、新どん、何か御用」

十

新「ナニ、今日はね、あの伊勢茂さんへ、番頭さんに言付けられてお使にいつたら、伊勢茂の番頭さんは誠に親切な人で、お前は酒を飲まないから味淋がいゝ、丁度流山の
で甘いからお飲りでないかと云われて、つい口当りがいゝから飲過ぎて、大層酔って間が
わるいから、店へ知れては困りますが、真赤になつて居るかえ」

園「大変赤くなつて居ます。アノお店も退け奥も退けましたから、女部屋へお店の者が
這入つては、悪うございますから早くお店へ行つてお寝みなさい」

新「エ、寝ますが、まア一服呑みましょう」

園「早くお店へ行つて下さいよ」

新「今行きますが一服やりませう」

と真しんちゆう 鍬くわの潰れた煙管きせるを出して行燈の戸を上げて火をつけようと思うが、酔つて居て手が慄ふるえておりますから灯ひが消えそう、

園「消してはいけませんよ、彼方あつちへ行つてお呉んなさい」

新「ハイ行きますよ、なに火が附きました、時にお園どん、お前の病氣は大変に案じたが、本当にこう早く癒なおろうとは思わなかつた、山田さんも丹精なすつたし私も心配致しましたが、実に有難い、私は一生懸命に池の端はたの弁天様へ願掛がんがけをしました」

園「有難うございます、お前さんのお蔭で助かりました、もうお店が退けましたから早くお出でよ、新どん」

新「行きますよ、此の間ね、お前さんの姉あねさん様豊志賀さんが来てね、たった一人の妹でございませうから大事に思うが、こんな稼しょうばい業ぎやうをして居り、家うちも離れているから看病も届きませんでした、お前さんが丹精して下すつて本当に有難い、その御親切は忘れません、お前さんの様な優しい人を園の亭主に持もたし度たいと思ひますと云つてね、お前の姉あねさん

が、流石さすがは芸人だけあつて様子のいゝ事を云うと思つたが、余程よっぽど嬉しかったよ」

園「いけませんネ、奥も先刻さつきお退けになりましたからお店へお出でなさいよ」

新「行きますよ、お園どん誠に私は本当に案じたがね」

園「有難うございますよ」

新「弁天様へ一生懸命に二十一日の間私が精進して山田様も本当に親切にしてくれたがね、私は真赤に酔つていますか」

園「真赤でございますよ、彼方あっちへお出でなさいよ」

新「そんなに追出さんでもいゝやね、お園どん、伊勢茂の番頭さんが、流山の滅法よい味淋をお前にと云うので私は口当りがいゝから恐ろしく酔つた、私はこんなに酔つた事は初めて、私の顔は真赤でしょう」

園「真赤ですよ、先刻さつきお店も退けましたから早くお出でなさいよ」

新「そんなに追出さなくてもいゝやね、お園どん」

園「何なんですよ」

新「だがお園どん、本当にお前さんは大病で、随分私は大変案じて一時ひとときは六ヶ《むずか》しかつたから、私は夜も寝なかつたよ」

園「有難うございますが、そんなに恩にかけると折角の御親切も水の泡になりますから、余り諄く仰しやると、その位なら世話をして下さらんければいゝにと濟まないが思いますよ」

新「そう思つても私の方で勝手にしたのだからいゝが、ねえお園どんく」

園「何ですよ」

新「私の心持はお前さん些とも分らぬのだね、お園どん、本当に私は間が悪いけれどもね、お前さんに私は本当に惚れて居ますよ」

園「アラ、嫌な、あんな事をいうのなもの、お内儀に言告ますよ」

新「言告るたつて……そんなことを云うもんじゃアない、お前は私があると出て行けよと、泥坊猫みた様に追出すから、逆もどう想つてもむだだとは思ふが、寝ても覚めてもお前の事は忘れられないが、もう是からは因果と思つてふツつり女部屋へは来ませんが、けれども私を憫然と思つて、一晩お前の床の中へ寝かしておくんなさいよ、エお園どん」

園「アラ厭なネ、私とお前さんと寝れば、人が色だと申します」

新「イ、エ私もそれが知れゝば失敗つて此家には居られないから、唯一寸並んで寝るだけ、肌を一寸触てすうつと出ればそれで断念める、唯ごろツと寝て直ぐに出て行くから」

園「そんな事を云つてごろりと寝て直ぐに出て行くつたつて、仕様がないなえ、行つて下さいよ」

新「そんな事を云わずに」

園「いやだよ、新どん」

新「お願いだから」

園「お願いだつて」

新「ごろり一寸寝るばかりだ、永らく寝る目も寝ずに看病したろうじやアないか、其の義理にも一寸枕を並べて、直ぐに出て行くから」

園「仕様がございませぬね」

と云うが、永らく看病してくれた義理があつてみれば無下に振払う事も出来ず、

園「新どん唯一寸寝る許りにしておくんさいよ」

新「ア、一寸一度寝るばかりでも結構、半分でもよろしい」

と云うのでお園の床へ這入りますと、お園は厭だからぐるりと脊中を向けて固くなつているから、此方も床へ這入りは這入つたが、ぎこちなくって布団の外へはみ出す様、お園はウンともスンとも云わないから、何だか極りが悪いので酔も醒ても、

新「お園どん、誠に有難う、お前がそんなに厭がるものを無理無体に私がこんな事をし
て済まないが、其の代り人には決して云わない、私は是程惚れたからお前の肌に触れ一寸
でも並んで寝れば私の想いも届いたのだから宜しいが、此家こゝに居ては面めん目ぼくなくて顔かほが合
せられず、又顔を合せては猶なほ更さら忘れられないし、こんな心では御恩を受けた旦那様にも
済まないから、私は此家を今夜にも明日あすにも出てしまつて、私の行方ゆくえが知れなくなつたら、
私の出た日を命日と思つて下され、もう私は思い遺のこす事もないから死しんでしまいます」

とすうツと出に掛る。口説くしき上手のどんづまりは大抵死ぬと云うから、今新五郎は死ぬと
云つたら、まア新どんお待ちと来るかと思つと、お園は死ぬ程新五郎が厭だから何とも申
しませんで、猶かいま小ま衾きを額の上までずうツと揺ゆり上げて被かつたなり口もきゝませんから、
新五郎は手持無沙汰にお園の部屋を出しましたが、是が因果はしまの始はりまりで、猶更お園に念ねんがかゝ
り、敵かたき同士とは知らずして、遂に又お園に恋慕れんぼを云いかけまするといふ怪談のお話、一寸
一息吐ひといききまして、

深見新五郎がお園に惚れまするは物の因果で、敵同士の因縁という事は仏教の方では御出家様が御説教をなさるが、どういふ訳か因縁と云うと大概の事は諦めがつきます。

甲「どうしてあの人はあんな死しにやま様をしただらうか」

乙「因縁でげすね」

甲「あの人はどうしてあア夫婦中がいゝか知らん、あの不器量だが」

乙「あれはナニ因縁だね」

甲「なぜかあの人はあアいう酷ひどい事をして仕出したねえ」

乙「因縁が善いいのだ」

と大概は皆因縁に押附おっつけて、善いも悪いも因縁として諦めをつけますが、其の因縁が有るので幽霊というものが出て来ます。その眼に見えない処を仏教では説とぎつく尽してございませう、外国には幽霊は無いかと存じて居りました処が、先達せんだつて私わたくしの宅へさる外国人が婦人と通弁が附いて三人でお出いでになりました、それは粹いぎな外国人で、靴を穿いて来ましたが、其の靴をぬいで隠かくしから帛紗ふくさを取出しましたから何なんの風呂敷包かと思ひますと、其の中から上靴を出してはきまして、畳の上へ其の上靴で坐布団の上へ横ッ倒しに坐りまして、

外「お前の家に百幅幽霊の掛物があるという事で疾より見たいと思つて居たが、何卒見せて下さい」

という事。是は私がふと怪談会と云う事を致した時に、諸先生方が画いて下さった百幅の幽霊の軸がございますから、是を御覧に入れますと、外国人の事でございませぬから、一々は何と云う名で何という人が画いたのかと云う事を、通弁に聞いて手帖に写し、是れは巧い、彼れは拙いと評します所を見ると、中々眼の利いたもので、丁度其の中で眼に着きましたのは菊池容齋先生と柴田是真先生の画いたので、是は別して賞められました。そのあとで茶を点れて四方八方の話から、幽霊の有無の話をしました、

外「私は日本の語にうといから通弁から聞いて呉れ」

と云う。私も洋語は知りませぬから通弁さんに聞くと、通弁さんの云うに、

通「お前の宅にこれだけの幽霊の掛物を聚めるには、幽霊というものが有るか無いかを確と知つての上でかように聚めたのでございませぬよう」

と云う問でございませぬ。所が有るか無いかと外国人に尋ねられて、私も当惑して、早速に答も出来ませぬから、

圓「日本の国には昔から有るとのみ存じていますから、日本人には有るようで、貴方の

お国には無いと云うことが学問上決して居るそうですから無いので、詰り無い人には無い
有る人には有るのでございましょう」

と、仕方なしに答えましたが、此の答は固もとよりよろしくない様でございしますが、何分無
いとも有るとも定めはつきません。せんだつて先達ある博識ものしり先生に聞きますと

「幽霊は有るに違い無い、現在僕は蛇の幽霊を見たよ」

と仰しやるから、

圓「どういう訳か」

と聞くと、蛇を壘びんの中へ入れてアルコールをつぎ込むと、蛇は苦しがつて、出ようく
と思つて口の所へ頭を上げて来るところを、グツとコロップを詰めると、出ようと云う念
をびつたりおさえてしまう。アルコール漬だから形は残つて居ても息は絶えて死んで居る
のだが、それを二年許ばかり経つて壘の口をポンと抜いたら、中から蛇がずうツと飛出して、
栓を抜いた方の手頸てくびへ喰付いたから、ハツと思うと蛇の形は水になつて、ダラ／＼と落おち
消えたが、是は蛇の幽霊と云うものじゃ。と仰しやりました。併しかし博識ものしりの仰しやる事に
は、随分拵こしらへごと事も有つて、ことごとく尽く当あてにはなりません、出ようく／＼と云う気を止めて置き
ますと、其の氣というものが早晩いつかきつと屹度出るといふお話、又お寺様で聞いて見ますと氣息いき

が絶えて後形のちは無いが、靈魂と云うものは何処どこへ行くか分らぬと申すこと、天国へ行くとか地獄極楽とか云う説はあつても、まだ地獄から郵便の届いた試しもなし、又極楽の写真を見た事もございませぬから当にはなりません、併し悪い事をするおんねんと怨念おんねんが取付くから悪事はするな、死んで地獄へ行くゆと画えの如く牛頭馬頭の鬼ごずめずに責められて実にどうも苦くるみをする、此の有様ありさまは如何どうじや、何と怖い事じやアないか、と云うので、盆の十六日はお閻魔様えんまさまへ参詣致しますると、地獄の画が掛けてあるから、此の画を見て子供はお、怖い、悪い事はしまいと思う。昔は私わたくしども共も彼の画あを見ると、もう決して悪い事はしまいと思ひまして、女は子が出来ないちようちんと血の池地獄へ落ちて燈心で竹の根を掘らせられ、男は子が出来ないちようちんと提灯ちようちんで餅を搗かせられると云う、皆恐ろしい話で、実に悪い事は出来ませんものでございます。又因縁しやうで性を引きますというは仏説でございしますが、深見新左衛門せがれが斬殺きりころした宗悦の娘お園に、新左衛門の悴せがれ新五郎が惚れると云うはどういう訳でございましょうか、寝ても覚めても夢にも現うつにも忘れる事が出来ませんで、其の時は諦めますと云つて出にかゝつたが、お園が何とも云わぬから仕方がない、杉戸すぎどを閉たて、店へ往つて寝てしまいましたやっぱりが翌日になつて見ると、まさか死ぬにも死なれず、矢張やっぱり顔を見合せて居ります。其の中うちに土蔵くちらの塗直しが始まり、質屋さんでは土蔵を大事にあそばすので、土蔵

の塗直しには冬が一番持がいゝと云うので、職人が這入つてどしどし日の暮れるまで仕事をして、早出居残りはやでと云うのでございます。職人方が帰り際には台所で夕飯時ゆうめしどきには主人が飯を喫たべさせ、寒い時分の事だから葱鮪ねぎまなどは上等で、或は油揚あらいに昆布などを入れたのがお商人あきんど衆の惣菜でございます。よく気をつけてくれますから、台所で職人がどん／＼這入つて御膳を食べ、香の物が無いといつて、襷たすきを掛けて日の暮々々々にお園が物置へ香の物を出しにゆきました。此の奥に土蔵が有つてその土蔵の脇は物置があり、其の此方こちらには職人が這入つて居るから荒木田あらかたがあり、其の脇には藁わらが切つてあり、藁などが散ちばつて居る間をうねつて物置へ往つて、今香の物を出そうとすると、新五郎が追つかけて来たから、見ると少し顔色も變つて何だか気違きちがひじみて居る。もつとも惚ぼれると云うと、馬鹿ばか気げて見えるものでございますが、

新「お園どん／＼」

園「アラ、びつくりした、新どん、何なんでございます」

新「アノお園さん、私はね、此の間お前と枕を並べて一度でも寝れば、死んでも宜い、諦めますと云いました」

園「そんなことは存じませんよ」

新「存じませんと云ったつて覚えてお居でだろう、だがネ私はきつと諦めようと思つて無理に頼んでお前の床へ這入つて酔つた紛れに一寸枕を並べたばかりだが、私はお前と一つ床の中へ這入つたから、猶諦めが付かなく成つたがね、お園どん、是程思つて居るのだから唯一度ぐらいは云う事を聴いてもいゝじやアないか」

園「何だネ新どん、氣違ひみて、お前さんも私も奉公して居る身の上でそんな事をして御主人に済みますか、其の事が知れたらお前さんは此の家を出ても行処が無いじやアありませんか、若し間違があつたならば、私は身寄も親類も無い行処の無いという事は何時でも然う云つておいでなのに、大恩のある御主人に済みませんよ」

新「済まないのは知つて居るが、唯一度で諦めて是ツ切り猥らしい事は云う氣遣ないから」

園「アラおよしよ」

新「お前こんなと思つて居るのに」

と夢中になりお園の手を取つてグツと引寄せる。

園「アレお止し」

と云ううち帯を取つて後へ引倒しますから、

園「アレ新どんが」

と高^{たか}声^{こゑ}を出して人を呼ぼうと思つたが、そこは病氣の時に看病を受けました事があるから、其の親切に羈^{ほだ}されて、若^もし私が呶^{どな}鳴れば御主人に知れて、此の人が追出されたら何^ど処^こへも行く処^ゆも無し氣の毒と思ひますから、唯小声で、

園「新どんお止しよ〜」

と声を出すようで出さぬが、声を立てられてはならんと、袂^{たもと}を口に当てがって、

新「此方^{こつち}へお出で」

と藁の上へ押倒して上へ乗^{のり}掛^かるから、

園「アレ新どん、お前氣違じみた、お前も私もしくじつたら何^どうなさる、新どん、新どん」

ともがくのを、無理無体に口を押え、夢中になつて上へ乗掛ろうとすると、

園「アレ新どん〜」

ともがいているうちに、お園がウーンと身を慄ふるわして苦しみ、パツと息が止つたから恟びつくりして新五郎が見ると、今はどつぷり日が暮れた時で、定かには分りませんが、側にあるすき劔が真赤に血だらけ、

新「何うしたのか」

と思つて起上ろうとすると、苦し紛れに新五郎の袖に手をかけ、しがみ付いたなりに、新五郎と共にずうツと起おきたのを見ると真赤、

新「お園どん何うしたのだけ」

と襟えりに手をかけて抱だき起おこすと、情なさけないかな下にあつたのは劔すきを切る押切おしきりと云うもの、是は畳屋さんの庖丁を仰あおむけ向にした様な実よに能く切れるものでございませうが、此の上へお園の乗つた事を知らずに、男の力で、大声を立てさせまいと思ひ、口を押えてグツクと押すから、お園はお止しよくと身体もがを蹴もくので、着物の上からゾクゾクあばらへかけて切り込みましたから、お園は七転八倒の苦しみ、其の儘息の絶えたのを見て、新五郎は、

新「ア、南無阿弥陀仏くく、お園どん堪忍しておくれ、全くお前と私は何たる悪縁か、お前が厭いやがるのを知りながら私が無理無体な事を云いかけて、怖ろしい刃物のあるを知らずにお前を此所こゝへ押倒して殺してしまつたから、もう私は生きてはいられない、お園

どん確しつかりしておくれ、私が死んでもお前まへを助けるから」

と無理むりに抱だき起おこして見ましたが、もう事が切れて居る。

新「ハア、もう是は迎むかもいかぬな」

と夢の覚めた様な心持で只茫然として居りましたが、もう迎むかも此こゝ処ちの家には居られぬ、
 といつて今更何ど処こといつて行くゆ処こも無い新五郎、エ、毒喰ねわば皿わまで舐ねれ、もう是までと
 いうので、尿くそやけになる。若い中うちにはあることで、新五郎は暗やみに紛まれてこつそり店へ這入
 った、此の家へ来る時差して来た大小を取出し、店ありあわせに有合の百金を盗み取って逐電あいたし
 ましたが、さて行くゆ処こがないから、遙はる々々、奥おうしゅう州の仙台へ参り、仙台様のお抱かゝえ
 て居る、劍客けんかくしや者黒坂一齋と云う、元劍術の指南を受けた師匠の処へ参つて塾とんに這入り、
 劍術しゅうぎようの修業しゅうぎようをして身を潜めて居りましたが、城中に居りましたから、頓とんと跡が付きま
 せん。なれども故郷忘じ難く、黒坂一齋の相果てゝからは、何どうも朋輩ほうばいの交際つきあいが悪う
 ございますから、もう二三年も経つたから知れやしまいと思つて、又奥州仙台から、江戸
 表へ出て来たのは、十一月の丁度二十日でございます。先まず浅草の観音様へ参つて礼拝らいはい
 を致し、是から何ど処こへ行くゆか、何どうしたらよかろうと考える中うちに、ふと胸むねに浮んだのは勇
 治うじと云う元屋敷の下男で、我が十二歳ぐらいの頃まで居たが、其の者は本所辺ほんじよに居ると云

う事で、慥か松倉町と聞いたから、兎も角も此の者を尋ねて見ようと思ひ、吾妻橋を渡つて、松倉町へ行きます。菅の深い三度笠を冠りまして、半合羽に柄袋のかゝつた大小を帯し、脚半甲がけ草鞋穿で、いかにも旅馴れて居りまする扮装、行李を肩にかけ急いで松倉町から、斯う細い横町へ曲りに掛ると、跡からバラ／＼と五六人の人が駈けて来るから、是は手が廻つたか、しくじつたと思ひ、振返つて見ると、案の如く小田原提灯が見えて、紺足袋に雪駄穿で捕者の様子だから、あわてゝ其処にある荒物屋の店の障子をがらりと明けて、飛上つたから、荒物屋さんでは驚きました。

女房「何ですなえ、恠りしますね」

と云うと、

新「ハイ／＼／＼」

と云つてブル／＼慄えながら、ぴったり後を締めて障子の破れから戸外を覗いて居ります。

女「まあ何処どこの方です、突いきなり然なり人の家うちへ這入こつて、草鞋をはいたなりで坐どつてサ、何どうしたんだえ」

新「是はく、何うも誠に相済まぬが、今間違で詰らぬ奴に喧嘩を仕掛けられ、私は田舎武士ざむらいで様子が知れぬから、面倒と思つて、逃ると追掛おっかけたから、是は堪たまらんと思つて当家へ駈込みお店を荒して済みませんが、今覗いて見れば追掛けたのではない酒屋の御用が犬を嚇けしかけたのだ、私は只怖いと思つたものだから追掛けられたと心得たので、誠に相済みません」

女「困りますね、草鞋を脱いで下さい、泥だらけになつて仕様がございませぬね、アレ塩煎餅しおせんべいの壺へ足を踏みかけて、まあお前さん大變樽たるがき柿を潰したよ」

新「誠に済まないが、ツイ踏んで二つ潰したから、是は私が買つて、あとは元の様に積んで置きます、あの出刃庖丁なんは何でげすな」

女「あれは柿の皮を剥むくのでございますよ、何うも困りますね、だが買つて下さればそれで宜ようございしますが、けれども貴方草鞋をおとんなさいナ」

新「何どうか、樽柿は幾個いくつでも買いますが、何うかお茶でも水でも下さい」

女「お茶は冷つめとうございしますが、ナニ沢山買つて下さらないでも、潰れただけの代を下さ

ればようございます」

新「え、御家内此処は何と云う処でございますえ」

女「此処は本所松倉町でございます」

新「あ、左様かえ、少しお聞き申すが、前々小日向服部坂の屋敷に奉公を致して

居った勇治と云う者が此の近処に居りませんか、年は今年で五十八九になりましょうか、
慥か娘が一人あつて其の娘の夫は* 搔と聞きましたか」

*「壁下地の小竹をとりつける職人」

女「貴方は、なんでございますか、深見新左衛門様の若様でございますか」

新「え、何あのお前は勇治を御存知かえ」

女「ハイ私は勇治の娘でございますよ、春と申しまして」

新「はあ然う」

春「私はね、もうねお屋敷へ一度参った事がございしますがね、其の時分は幼少の時で、
まあお見違申しました、まだ貴方のお小さい時分でございましたからさっぱり存じませ
んで、大層お立派におなり遊ばした事、お幾才におなり遊ばした」

新「今年二十三になります」

春「まあお屋敷もね、何だか不祥な事になりました、昨年私の親父も亡くなりましたが、お屋敷はあゝなつたが、若様は何うなされたかお行方が知れぬが、ひよつとして尋ねていらつしやつたら、永々御恩を受けたお屋敷の若様だから何んなにもして上げなければならん、と死際に遺言して亡くなりましたが、貴方が若様なれば何うか此方へ一晩でもお泊め申さんでは済みせんから」

新「やれくははく左様かね、凶らず勇治の処へ来たのは何より幸で、拙者は深見新五郎であるが、仔細あつて暫く遠方へ参つて居たが、今度此方へ出て参つても何処と云つて頼る処も無し、何処か知れぬ処へ奉公住を致したいが、請人がなければならんから当家で世話をして請人になつてくれんか」

春「お世話どころじゃアございません、是非ともお世話を為なければ済みません、まあ能く入らつしやいました、貴方それじゃアまあ脚半や草鞋をお取りなすつて、なに御心配はございません、今水を汲んで来ます、ナニその汚れた処は雑巾で拭きますから、まあ合羽などはお取りなさいまし」

と云うから新五郎はホツト息を吐きます。すると、

春「まあ此方へ」

と云うので何か親切に手当を致し、大小は風呂敷に包み箆笥たんすの抽斗ひきだしへ入れてピンと錠おろを卸し、

春「貴方これとお着かえなさいましな」

新「イヤ着換は持つて居るから」

と包の中から出して着物を着かえ、

新「何うか空腹であるから御飯を」

春「ハイ宜しゆうございます、貴方御酒を召上るならば取つて参りましょう、此の辺は田舎同様場でございますから何なんにもよいものはありませんが、貴方鰻を召上りますなら鰻でも」

新「鰻は結構、私が代を出すから何か買つて貰どうしたい」

春「そんなら跡を願いますよ」

と是からガラリ障子を明けて戸外そとへ出ました。すると此の女房は、実は深見新五郎が来たら是々と、亭主に言付けられているから、亭主の行つて居る処へ行つて話をする。此の亭主は石河伴作いしかわばんさくと云う旦那衆しゅの手先で、森田の金太郎と云う捕者の上手、かねて網を張つて待つていた処だから、それは丁度好いと、それ／＼手配てくぱりをしたが、併しかし劍客者てしやと

聞いているから刃物を取上げなければならんが、何うしたものだろうと云うと女房が聞いて、刃物は是々してちやんと箆筒の抽斗へ入れて錠を卸して仕舞つて、鰻を誂えに行くつもりにして来たと云う。

金「そんなら宜しい」

と云つて直に鰻屋の半纏を引掛けて若者の姿で金太郎が遣つて来て、

金「エ、鰻屋でございます」

と云うと、此方は気が付きませんから、

新「ハイ大きに御苦労」

金「お誂えが出来ました、あゝ山椒の袋を忘れた」

と云いながら新五郎の受取に来る処を飛上つて、

金「御用だ神妙にしろ」

と手を取つて逆に捻伏せられたから起る事が出来ません。

十四

金「手前は深見新五郎だろう、谷中の下總屋でお園を殺し、主人の金を百両盗んで逐電した大泥坊め」

新「イヤ手前は左様なものではござらん」

とは云つたが、あゝ残念なことをした、それでは此処の女房もぐるであつたと見える、刃物を仕舞われたからはもう逆も遁れぬ。と思ひました。いゝ悪党なれば、斯う云う時の為に懐にどすといつて一本ヒ首をのんで居るが、それ程商売人の泥的ではありませんから、用意をいたしておりません。もう天命究まつたと思つと、一寸指の先へ障りましたのは、先刻ふと女房に聞いた柿の皮を剥く庖丁と云う鱒切の様な物が、これが手に障つたのを幸と、

新「左様な覚はない、人違でござる」

と云つて、起上りながらズンと金太郎の額へ突掛けたから、

金「アツ」

と後へ下つて傷口を押えると、額から血がダラ／＼流れて真赤になり、真実の金太郎の様になります。続いて逃たらと隠れていた捕者の上手な富藏と云う者が、

富「神妙にしろ、御用だ」

と十手を振上げて打って掛るやつを取って扱ったから、ヒヨロ／＼とひよろついで台所へついで竈でボツカリ膝を打って、裏口へ蹠踉出したから、しめたと裏口の戸をしめ、辛張をかかって置いて表を覗くと人が居る様子だから、確り鑰を掛けて燈光を消し、庖丁の先で箆笥の錠をガチ／＼やって漸く錠を明け、取出した衣類を身に纏い、大小を差して、サア出ようと思つたが、逆も表からは出られませんか、屋根伝いにして逃げようと、階子を上つて裏手の小窓を開けて見ると、ずうつと棟割長屋になつて物干が繋がつて居て、一軒毎に一間ばかりの丸太がありそれへ小割が打つて物干竿の掛る様になつて居るから、此の物干伝いに伝わって行けば、何処へか逃げられるとは思つたが、なか／＼油断は出来ませんから、長物を抜いて新五郎が度胸をすえ、小窓から物干へ這出して来ます。すると捕手の方も手当は十分に附いているから、もし此の窓から逃出したら頭脳を打破ろうと、勝藏と云う者が木太刀を振上げて待つて居る所へ、新五郎は斯う腹這になつて頸をそつと出した。すると、

勝「御用だ」

ピユツと来るやつを、身を退き身体を逆に反して、肋の所へ斬込んだから、勝藏は捕者は上手だが物干から致してガラ／＼／＼どうと転がり落ちる。其の間に飛下りようとす

る。所が下には十分手当が届いているから下りる事が出来ません。すると丁度隣の土蔵が塗直して足場が掛けてあつて筈が掛つていいるから、それを潜つて段々参ると、下の方ではワア／＼と云う人声、もう然うなると、人が十人居ても五十人も居る様に思われますから、新五郎は窃と音のしない様に筈を潜り抜けて、段々横へ廻つて参り、此の空地へ飛下り、彼方の板塀を毀して、向の寺へ出れば逃れられようと思ひ、足場を段々に下りまして、もう宜かろう、と下を見ると藁がある。しめたと思つてドンと其処へ飛下りると、

新「ア痛タ……」

と臀餅をつく筈です、其の下にあつたのは押切と云う物で、土踏まずの処を深く切込みましたから、新五郎ももう是までと覚悟しました。跛になつては、逆も遁れる事も出来ませんから、到頭繩に掛つて引かれます。

新「あゝ因縁は恐しいもの、三年跡にお園を殺したも押切、今又押切へ踏掛けてそのために己が繩に掛つて引かれるとは、お園の怨が身に纏つて斯の如くなること」

と実に新五郎も夢の覚めた様になりましたが、是が丁度三年目の十一月二十日、お園の三回忌の祥月命日に、遂に新五郎が縄目に掛つて南の御役宅へ引かれると云う、是より追々怪談のお話に相成ります。

十五

引続きまして真景累が淵、前回よりは十九年経ちましてのお話に相成りますが、根津七軒町の富とみもと本の師匠豊志賀とよしがは、年卅九歳で、誠に堅い師匠でございまして、先年妹お園を谷中七面前の下總屋と云う質屋へ奉公に遣やつて置きました処、凶らぬ災難で押切の上へ押倒され、新五郎の為に非業の死を遂げましたが、それからは稽古をする気もなく、きようだ同

胞い、思いの豊志賀ねんごろは懇ねんごろに妹お園の追福を営み、追々月日も経ちまするので気を取直し、又矢張やっぱり稽古をする方が気が紛れていゝから、と世間の人も勧めまするので、押張つて富本の稽古を致す様になりましたが、女の師匠と云う者は、堅くないとお弟子がつきません。彼処あそこの師匠は娘を遣つて置いても行儀もよし、言葉遣いもよし、真まことに堅いから、あの師匠なら遣るが宜いい、実に堅い人だ、と云うので大家たいけの娘も稽古に参ります。すると、男嫌いで堅いと云うから、男は来そうもないものでございしますが、堅い師匠だと云うと、妙に男が稽古に参ります。

「師匠是は妙な手桶で、台所で遣つかうのには手で持つ処が小さくって軽くって、師匠などが

水を汲むにいゝから、私が一つ桶屋に拵えさして持つて来た」

とか、又朝早く行つて、瓶へ水を汲んで流しを掃除しようなどと手伝いに参ります。中には内々張子連などと申しまして、師匠が何かしてお世辞の一言も云うと、それに附込んで口説落そうなどと云う連中、経師屋連だの、或は狼連などと云う、転んだら喰おうと云う連中が来るのでありますから、種々親切に世話を致します。時々浚いや何か致しますと、皆此の男の弟子が手伝いに参りますが、ふと手伝いに来た男は、下谷大門町に烟草屋を致して居る勘藏と云う人の甥、新吉と云うのでございますが、ぶらぶら遊んで居るから本石町四丁目の松田と云う貸本屋へ奉公に遣りましたが、松田が微禄いたして、伯父の処へ帰つて遊んで居るから、少し烟草を売るがいと云うので、搦烟草を風呂敷に包み、処々売つて歩きますが、素より稽古が好きで、閑の時は、水を汲みましようお湯を沸しませうなどと、へエ〜云つてまめに働きます。年二十一でございますが、一寸子柄の好い愛敬のあると云うので、大層師匠の気に入り、其の中に手少などから私の家に居て手伝つてと云うと、新吉も伯父の処に居るよりは、芸人の家に居るのは粹で面白いから楽しみも楽しみだし、芸を覚えるにも都合がいゝから、豊志賀の処へ来て手伝いをして居ります。其の年十一月二十日の晩には、霰がバラ〜降つて参りまして、

極ごく寒いから、新吉は食い客そろうの悲しさで二階あがへ上あがつて寝ますが、五布蒲団いつのぶとんの柏かしわもち餅もちでもまだ寒いと、肩の処ところへ股引ひきずりこなどを引摺ひきずりこ込んで寝ますが、霰あられはざあ〜と窓へ当ります。其の内に少し寒さが緩ゆるみましたかして、夜よが更けてから雨になりまして、どつとど降ふつて参ります。師匠は堅いから下に一人で寝て居りますが、何なんだか此の晩は鼠ねずみがガタ〜して豊志賀は寝られません。

豊「新吉さん〜」

新「へエ何なんでげすね」

豊「お前まだ眼まなこが覚めていますかえ」

新「へエ、私はまだ覚めて居ります」

豊「そうかえ私も今夜は何だか雨の音が気になって少しも寝られないよ」

新「私も気になって些ちっとも寝られません」

豊「何だか誠に訝おかししく淋さびしい晩だね」

新「へエー訝おかししく淋さびしい晩でげすね」

豊「寒いじゃアないか」

新「何だかひどく寒うございますね」

豊「なんだね同じ様なことばかり云つて、誠に淋しくつていけない、お前さん下へ下りて寝ておくれな、どうも気になつていけないから」

新「そうですか、私も淋しいから下へ下りましょう」

と五布蒲団と枕を抱えて、危い階子を下りて来ました。

豊「お前、新吉さん其方へ行つて柏餅では寒くないかえ」

新「へエ、柏餅が一番宜いんです、布団の両端を取つて巻付けて両足を束に立つて向の方に枕を据えて、これなりにドンと寝ると、好い塩梅に枕の処へ参りますが、そのかわり寝像が悪いと餡がはみ出します」

豊「お前寒くつていけまい、斯うしておくれな、私も淋しくつていけないから、私のネこの上掛の四布蒲団を下に敷いて、私の掻巻の中へお前一緒に這入つて、其の上へ五布蒲団を掛けると温かいから、一緒にお寝な」

新「それはいけません、どうして勿体ない、お師匠さんの中へ這入つて、お師匠さんの身体から御光が射すと大変ですからな」

豊「御光だつて、寒いからサ」

新「寒うございますがね、明日の朝お弟子が早く来ましよう、然うするとお師匠さんの

中へ這入つて寝てえれば、新吉はお師匠さんと色だなどと云いますからねえ」

豊「宜いわね、私の堅い氣象は皆が知つて居るし、私とお前と年を比べると、私は阿母さんみた様で、お前の様な若い子みたいな者と何う斯う云う訳は有りませんから一緒に寝よ」

新「そうでげすか、でも極りが悪いから、中に仕切を入れて寝ましようか」

豊「仕切を入れたつて痛くつていけませんよ、お前間がわるければ脊中合にして寝ましよう」

と到頭同衾をしましたが、決して男女同衾はするものでございませぬ。

十六

日頃堅いと云う評判の豊志賀が、どう云う悪縁か新吉と同衾をしてから、不図深い中になりましたが、三十九歳になる者が、二十一歳になる若い男と訳があつて見ると、息子のよな、亭主のよな、情夫の様な、弟の様な情が合併して、さあ新吉が段々かわいから、無茶苦茶新吉へ自分の着物を直して着せたり何か致します、もと食客だから新

吉が先へ起きて 飯 拵 えをしましたが、此の頃は豊志賀が先へ起きてお飯を炊くようになり、枕元で一服つけて

豊 「さア一服お上りよ」

新 「へエ有難う」

豊 「何だよへエなんて、もうお起きよ」

新 「あいよ」

などと追々増長して、師匠の布子を着て大胡坐をかい、師匠が楊枝箱をあてがうと坐つて、楊枝を遣い嗽をするなどと、どんな紙屑買が見ても情夫としか見えません。誠に中よく致し、新吉も別に行く処も無い事でございますから、少し年をとった女房を持つた心持でいましたが、此家へ稽古に参ります娘が一人ありまして、名をお久と云つて、総門口の小間物屋の娘でございます。羽生屋三五郎と云う田舎堅気の家でございますが、母親が死んで、継母に育てられているから、娘は家に居るより師匠の処に居る方がいゝと云うので、能く精出して稽古に参ります。すると隠す事程結句は自然と人に知れるもので、何うも訝しい様子だが、新吉と師匠と訳がありやアしないかと云う噂が立つと、堅気の家では、其の様な師匠では娘の為にならんと云つて、好い弟子はばら／＼下つてし

まい、追々お座敷も無くなります。そうすると、張子連は憤り出して、

「分らねえじやアねえか、師匠は何の事だ、新吉などと云う青二歳を、了簡違いな、また新吉の野郎もいやに亭主ぶりやアがつて、銜煙管でもつてハイお出で、なんと云つてやる、本当に呆れけえらア、下れく」

と。ばら／＼張子連は下ります。其の他の弟子も追々其の事を聞いて下りますと、詰つて来るのは師匠に新吉。けれどもお久ばかりは相変らず稽古に来る、と云うものは家に居ると、継母に苛められるからで、此のお久は愛嬌のある娘で、年は十八でございしますが、一寸笑うと口の脇へ鬨と云つて穴があきます。何もずぬけて美女ではないが、一寸男

惚のする愛らしい娘。新吉の顔を見てはにこ／＼笑うから、新吉も嬉しいからニヤリと笑う。其の互に笑うのを師匠が見ると外面へは頭わきないが、何か訳が有るかと思つて心では妬きます。この心で妬くのは一番毒で、むやく／＼修羅を燃して胸に燃火の絶える間がございせんから、逆上せて頭痛がするとか、血の道が起るとか云う事のみでございませうと云つて外に意趣返し仕様がなから稽古の時にお久を苛めます。

豊「本当に此の娘は何てえ物、覚が悪い娘だろう、其処がいけないよ、此様なじれつたい娘はないよ」

と無暗むやみに捻つねるけれども、お久は何も知らぬから、芸あがが上ると思ひまして、幾ら捻つねられてもせつせと来ます。それは来る訳で、家うちに居ると継母に捻つねられるから、お母つかさんよりはお師匠さんの方が数が少いと思つて近く来ると、猶なほ師匠は修羅しゆらを燃もして、わく／＼悋りん氣きの焰ほむらは絶える間は無く、益々逆上して、眼の下へポツリと訝おかしな腫物できものが出来て、其の腫物が段々腫はれあが上あがつて来ると、紫色に少し赤味がかつて、爛たぐれて膿うみがジク／＼出ます、眼は一方腫はれふさ塞ふさがつて、其の顔の醜いひやな事と云うものは何とも云いようが無い。一体少し師匠は額の処ぬけあがが抜ぬ上あがつて居る性たちで、毛が薄い上に鬢びんが腫上はれあがつて居るのだから、実に芝居で致かさねす累かさねとかお岩とか云うような顔付でございませう。医者いしやが来て脈を取つて見る。豊志賀が、是は氣こりの凝こりでございませうか、と云うと、イヤ然そうでない是は面めん疔ちように相違ちがないなど、云いうが、それは全く見立みたち違ちがいで、只今の様に上手なお医者いしやはございませぬ時分ときぶんで、只今いまなら佐藤先生の処ゆへ行いけば、切断きつだんして毒を取つて跡は他人の肉で継合つぎあわせると云う、飴細工あめこの様ような事も出来るから造作ぞうさくはないが、其の頃は医術いじゆつが開ひらけませんから、十分に療治りやうぢも届ときません。それ故段々痛いたが烈はげしくなり、随したがつて気分きぶんも悪わるくなり、終ついにはどつと寝ねました。ところが食しょくは固もより咽喉のどへ通とりませぬし、湯水とうすいも通とらぬ様ようになりましたから、師匠ししやうは益々瘦やせるばかり、けれども顔かほの腫物できものは段々に腫上はれあがつて来まするが、新吉しんきちはもと師匠ししやうの世話せわにな

つた事を思つて、能く親切に看病致します。

新「師匠、あのね、薬の二番が出来たから飲んで、それから少し腫物の先へ布ひきぐす薬を為よう、え、おい、寝て居るのかえ」

豊「あい」

と膝に手を突いて起上りますと、鼠小紋ねずみこもんの常着ふだんぎを寝着ねまきにおろして居るのが、汚れツけ気が来ており、お納戸色なんどいろの下メ《したじめ》を乳の下に堅くメ《し》め、溢くびれたように瘦せて居ります。骨と皮ばかりの手を膝に突いて漸ようやくの事で薬を服のみ、

豊「ほッ、ほッ」

と息を吐く処を、新吉は横眼でじろりと見ると、もう、二眼ふためと見られない醜いやな顔。

新「些ちつとは快かえ」

豊「あい、新吉さん、私はね何どうも死度しにたいよ、私のような斯こんなお婆さんを、お前が能く看病をしておくれで、私はお前の様な若い奇麗きれいな人に看病されるのは気の毒だ、と思つと、猶病なほ気が重おもつて来る、ね、私が死んだら嘸さぞお前が楽々らくらくすると思つから、本当に私いちじは一時も早く楽に死度いと思つが、何なんうも死切しにきれないね」

新「詰らない事を云うもんじゃアない、お前が死んだら私が楽をしようなど、そんなこ

とで看病が出来るものではない、わくわくそんな事を思うから上せるんだ、腫物さえ癒つて仕舞やア宜いのだ」

豊「でもお前が厭だろうと思つて、私はお前唯の病人なら仕方ないけれども、私は斯んな顔になつて居るのだもの」

新「斯んな顔だつて腫物だから癒れば元の通りになるから」

豊「癒ればあとが引釣になると思つてね」

新「そんなに気を揉んではいけない、少しは腫が退いたようだよ」

豊「嘘をお吐きよ、私は鏡で毎日見て居るよ、お前は口と心と違つて居るよ」

新「なに違うものか、私は心配して居るのだ」

豊「あゝもう私は早く死度い」

新「お廢しよ、死たいくつて気がひけるじゃアないか、些とは看病する身になつて御覧、何だつてそんなに死度いのだえ」

豊「私が早く死んだら、お前の真底から惚れているお久さんとも逢われるだろうと思つうからサ」

十七

新「あゝ、いう事を云う、お前は何ぞと云うとお久さんを疑つて、ばんごと云うがね、私とお久さんと何か訳があると思つて居るのかえ」

豊「それはないわね」

新「ないものを兎や角云わなくつても宜いじゃアないか」

豊「ないからつたつても、私と云うものがあるから、お前が惚れているという事を、口にも出さず、情夫にもなれぬと思うと、私は本当に気の毒だから私は早く死んで上げて、そうして二人を夫婦にして上げたいよ」

新「およしな、そんな詰らぬ事を、仕様がないな、本当にお前も分らないね、お久さんだつて一人娘で、婿を取ろうと云う大事な娘なのに、そんな訳もない事を云つて疵を附けては、向の親父さんの耳にでも入ると悪いやね、あの娘のお母さんは継母で喧しいから可愛そうだわね」

豊「可愛そうでございましょう、お前はお久さんの事ばかりかわいそうで案じられるだろうが、私が死んでもお前は可愛そうだと思ふ氣遣はないよ」

新「あ、あゝいう事を、お前仕様がないね、よく考えて御覧な、全体私は家の者じゃアないか、仮令訳があつても隠すが当然だろう、それを訳のない者を疑つて、あるくと云うと、世間の人まで有ると思つて私が困るよ」

豊「御尤でございますよ、でも何うせあるのはあるのだね、私が死ねば添われるから、何卒添わして上げたいから云うのだよ、新吉さん本当に私は因果だよ、私は何うも死切れないよ」

新「あゝ云う事を云う、何を証拠に…えゝそれはね…彼様な事を…又あゝいう事を…お前そう疑るからいけない、此の頃来たお弟子ではなし、家の為になるからそれはお前、お天気がいゝとか、寒うございますとか、芝居へおいでなすつたか位のお世辞は云わなければならぬやね、それも家の為だと思ふから云おうじやアないか、あれサ仕様がないね、別に何も…此の間も見舞物を持つて来たから台所へ行つて蓋物を明けて返す、あれサそれを、あゝいう分らぬ事を云う仕様がねえなア」

とこぼして居る所へ這入つて来たのは何も知らないお久でございます。何か三組の蓋物へおいしいものを入れて、

久「新吉さん、今日日は」

新「へエ、お出なさい、此方へお這入りなすつて、へエ有難う、まア大きに落付ました様で」

久「あのお母さんが上るのですが、つい店が明けられませんで御無沙汰を致しますが、慥かお師匠さんがお好でございませうから、よくは出来ませんが何卒召上つて」

新「有難うございませう、毎度お前さんの処から心にかけて持つて来て下さつて有難う、錦手の佳い蓋物ですね、是は師匠が大好でげす、煎豆腐の中へ鶏卵が入つて黄色くなつたの、誠に有難う、師匠が大好、おい師匠くあのねお久さんの処からお前の好きな物を煮て持つて来ておくんすつたよ、お久さんが来たよ」

豊「あい」

とお久と云う声を聞くと、こくり起上つて手を膝について、お久の顔を見詰めて居ります。

久「お師匠さんいけませんね、お母さんがお見舞に上るのですが、つい店が明けられませんで、些とはお快ゆうございませうか」

豊「はい、お久さん度々、御親切に有難うございませう。お久さん、お前と私とは何んだえ」

新「何を詰らない事を云うのだよ」

豊「黙つておいでなさい、お前の知った事じゃアない、お久さんに云いたい事があるのだよ、お久さん私とお前とは弟子師匠の間じゃアないか、何故お見舞にお出でゞない」

新「何を云うのだよ、お久さんは毎日お見舞に來たり、何うかすると日に二度ぐらいも來るのに」

豊「黙つておいで、其様そんなにお久さんの鼻ひいき痕ばかりおしでない、それは私が斯こうしているから案じられて來るのじゃア無い、お久さんはお前の顔を見たいから度々來るので」

新「仕様がないナ詰らぬ事を云つて、お久さん堪忍してね、師匠は逆上して居るのだから」

久「誠にいけませんね」

とお久は少し怖くなりましたから、こそくと台所から歸つてしまいました。

新「困るね、えゝ、おい師匠何うしたんだ、冗談すじゃアねえ、顔から火が出たぜ、生娘このうぶな娘あんに彼様な事を云つて、面目めんぼく無つて居られやアしない」

豊「居られますまいよ、顔が見たけりやア早く追駈おつかけてお出で」

新「あゝ、いう事を云うのだもの」

豊「私の顔は斯んな顔になったからって、お前がそういう不人情な心とは私は知りませんだつたよ」

新「何を云うのだね、誠に仕様がねえな、些と落付いてお寝よ」

豊「はい寝ましようよ」

新吉は仕方がないから足を摩つて居りますと、すやく疲れて寝た様子だから、いゝ塩梅だ、此の間に御飯でも喫べようと膳立をしていると這出して、

豊「新吉さん」

新「何だい、肝を潰したねえ」

豊「私が斯んな顔で」

新「仕様がねえな冷るといけないからお這入りよ」

と云う塩梅、よる夜中でも、いゝ塩梅に寝附いたから疲れを休めようと思つて、ごろりと寝ようとすると、

豊「新吉さんく」

と揺り起すから新吉が眼を覺すと、ヒョイと起上つて胸倉を取つて、

豊「新吉さん、お前は私が死ぬとねえ」

と云うから、新吉は二十一二で何を見ても怖がつて尻餅をつくと言ふ臆病な性でござい
ますから、是は不人情のようだが、逆も此処には居られない、大門町へ行つて伯父と相談を
して、いつその事下総の羽生村に知つて居る者があるから、其処へ行つてしまおうかと、
種々考へて居る中に、師匠は寝付いた様子だから、その間に新吉はふらりと戸外へ出ま
したが、若い時分には氣の変わりやすいもので、茅町へ出て片側町までかゝると、向
から提灯を点けて来たのは羽生屋の娘お久と云う別嬪、

久「おや新吉さん」

十八

新「これはお久さん何処へ」

久「あの日野屋へ買物に」

新「思いがけない処でお目にかゝりましたね」

久「新吉さん何方へ」

新「私は一寸大門町まで」

久「お師匠さんは」

新「誠にいけません、此の間はお気の毒でね、あんな事を云つて何うもお前さんにはお気の毒様で」

久「何う致しまして、丁度好処でお目に掛けて嬉しいこと」

新「お久さん何処へ」

久「日野屋へ買物に」

新「本当にあんな事を云われると厭なものでね、私は男だから構いませんが、お前さんは嘸腹が立つたろうが、お母さんには黙つて」

久「何ういたしまして、私の方ではあゝ云われると、冥加に余つて嬉しいと思ひますが、お前さんの方で、外聞がわるかろうと思つて、誠にお気の毒様」

新「うまく云つて、お久さん何処へ」

久「日野屋へ買物に」

新「あの師匠の枕元でお飯を喫ると、おちく咽喉へ通りませんから、何処かへ往つてお飯を喫べようと思うが、一人では極りが悪いから一緒に往つておくんなさいませんか」

久「私の様な者をおつれなさると外聞が悪うございますよ」

新「まあ宜いからお出でなさい、蓮見鮎へ参りましょう」

久「ようございますか」

新「宜いからお出でなさい」

と下心があると見え、お久の手を取つて五目鮎へ引張り込むと、鮎屋でもさしで来たから訝しいと思つて、

鮎「いらつしやい、お二階へく、あの四畳半がいくよ」

と云うのでどんくくくと上つて見ると、天井が低くつて立つては歩かれません。

新「何だか極りが悪うございますね」

久「私は何うも思いません、お前さんと差向いでお茶を一つ頂く事も出来ぬと思つて居ましたが、今夜は嬉しゆうございますよ」

新「調子のいゝことを」

女「誠に今日はお生憎様、握鮎ばかりで何にも出来ません、お吸物も、なんでございます、詰らない種でございますから、海苔でも焼いて上げましょうか」

新「あゝ海苔で、吸物は何か一寸見計つて、あとは握鮎がいく、おいしく、お酒は、お前いけないねえ、しかし極りが悪いから、沢山は飲みませんが、五勺ばかり味醂でも

何でも」

女「畏まりました、御用がありましたらお呼びなすつて、此処は誠に暗うございますが」

新「何ようございます、其処をびつたりメ《し》めて」

女「ハイ御用があつたらお手を、此の開きは内から鎖鑰が掛りますから」

新「お前さんとさしで来たから、女がおかしいと思つて内から鎖鑰が掛るなんて、一寸

*たかいね、お久さん何処へ」

*「たかい目が高いの略」

久「日野屋へ来たの」

新「あ然う、此の間はお気の毒様で、お母さんのお耳へ這入つたら嘸怒りなさりや

アしないかと思つて大変心配しましたが、師匠は彼の通り仕様がないので」

久「何うも私共の母なども然う云つておりますよ、お師匠さんがあんな御病気になるの

も、やつぱり新吉さん故だから、新吉さんも仕方がない、何様にも看病しなければならな

いが、若いから嘸お厭だらうけれども、まアお年に比しては能く看病なさるつてお母さん

も誉めて居ますよ」

新「此方も一生懸命ですがね、只煩つて看病するばかりならいゝけれども、何うも夜中

に胸倉を取つて、醜な顔で変な事を云うには困ります、私は寝惚て度々悔りしますから、誠に濟まないがね、思い切つて斯うふいと何処かへ行つて仕舞うかと思つて、それには下総に些の知己が有りますから其処へ行こうかと思うので」

久「おやお前さんの田舎はあの下総なの」

新「下総と云う訳じやアないが些と知つて居る……伯母さんがあるので」

久「おやまあ。私の田舎も下総ですよ」

新「へエお前さんの田舎は下総ですか、世には似た事があるものですね、然う云えば成程お前さんの処の屋号は羽生屋と云うが、それじやア羽生村ですか」

久「私の伯父さんは三藏と云うので、親父は三九郎と云いますが、伯父さんが下総に行つて居るの、私は意気地なしだから逆も継母の氣に入る事は出来ないけれども、余りぶち打擲されると腹が立つから、私が伯父さんの処へ手紙を出したら、そんな処に居らんでも下総へ来てしまえと云うから、私は事によつたら下総へ参りたいと思います」

新「へエ然うでございますか、本当に二人が情夫か何かなれば、ずうつと行くが、何でもなくつては然うはいきませんが、下総と云えば、何んですね、累の出た処を羽生村と云うが、家の師匠などはまるで累も同様で、私をこづいたり腕を持って引張ったりして余程

変ですよ、それに二人の中は色でも何でもないのに、色の様に云うのだから困ります、何うせ云われるくらいなれば色になって、然うしてずうと、二人で下総へ逃ると云うような粹な世界なら、何と云われても云われ甲斐がありませんが」

久「うまく仰しやる、新吉さんは実があるから、お師匠さんを可愛いと思うからこそ辛い看病も出来るが、私のような意気地なしの者をつれて下総へ行きたいなんと、冗談にも然う仰しやつてはお師匠さんに済みませんよ」

新「済まないのは知ってるが、逆も家には居られませんもの」

久「居られなくつても貴方が下総へ行ってしまうとお師匠さんの看病人がありません、家のお母さんでも近所でも然う云つて居りますよ、あの新吉さんが逃出して、看病人が無ければ、お師匠さんは野倒死になると云つて居ります、それを知ってお師匠さんを置いて行つては義理が済みません」

新「そりやア義理は済みませんがね、お前さんが逃げると云えば、義理にも何にも構わず無茶苦茶に逃げるね」

久「え、新吉さん、お前さんほんとうに然う云つて下さるの」

新「ほんとうとも」

久「じゃアほんとうにお師匠さんが野倒死をしても私を連れて逃げて下さいますか」

新「お前が行くと云えば野倒死は平気だから」

久「本当に豊志賀さんが野倒死になつてもお前さん私を連れて行きますか」

新「本当に連れて行きます」

久「えゝ、お前さんと云う方は不実な方ですnee」

と胸倉を取られたから、フト見詰めて居ると、綺麗な此の娘の眼の下にポツリと一つ腫で物が出来たかと思うと、見る間に紫立つて膨れ上り、斯う新吉の胸倉を取つた時には、新吉が怖いとも怖くないともグツと息が止るとまようまで、唯だ無茶苦茶に三尺の開戸ひらぎとを打うちこ毀わして駈出したが、階子段はしごだんを下りたのか転がり落たのか些ちつとも分りません。夢中で鯨屋を駈出し、トツトと大門町の伯父の処へ来て見ると、ぴつたり閉しまつて居るからトンくくく、

新「伯父さんくくく」

勘「オイ騒々しいなア、新吉か」

新「え、一寸早く明けて、早く明けておくんなさい」

勘「今明ける、戸が毀れるワ、箆棒べらぼうな、少し待ちな、え、仕様がねえ、さあ這入んな」

新「跡をピツタリ締めて、南無阿弥陀仏」

勘「何なんだつて己おれを拜む」

新「お前さんを拜むのではない、ハア何どうも驚きましたネ」

勘「お前のように子供みたくにあどけなくつちやア困るね、え、オイ何故師匠が彼あれほ程どの大病で居るのを一人置いて、ヒョコ〜看病人が外へ出て歩くよ、済まねえじゃア

ないか」

新「済まねえが迎とても家うちには居られねえ、お前さんは知らぬからだが其の様子を見せたいや」

勘「様子だつて、何どんな事があつても、己おれが貧乏して居るのに、汝てめえは師匠の家うちへ手伝いに往いつてから、羽織でも着る様になつて、新吉さん〜と云われるのは皆みんな豊志賀さんのお蔭だ、その恩義を忘れて、看病をするお前がヒョコ〜出歩いては師匠に気の毒で仕様がねえ、全体師匠の云う事はよく筋がわかつているよ、伯父さん誠に面目ないが、打明けて

お話を致しまするが、新吉さんと去年から訝おかししなわけになつて、何なんだか私も何どう云う縁ゆかりだか新吉さんが可愛いから、それで詰つらん事に氣を揉みまして、斯こんな煩わづらいになりました、就つては段々弟子も無くなり、座敷も無くなつて、実ほんにこんな貧乏になりましたも皆みんな私の心柄で、新吉さんも嘸さぞこんな姿で愒りんき氣らしい事を云われたら厭いやでございましょう、それで新吉さんが駈出かしてしまつたのでございいますから、私はもうプツ、リ新吉さんの事は思い切りまして、元の通り、尼になつた心持で堅氣の師匠を遣やりさえすれば、お弟子も振よりを戻して来てくれましようから、新吉さんには何どんな処へでも世帯しよたいを持たせて、自分の好すいた女房を持たせ、それには沢山のことも出来ませんが、病氣が癒なれば世帯を持つだけは手伝いをする積り、又新吉さんが煙草屋をして居ては足りなからうから、月々二両や三兩位はすけるから、何卒どうぞ伯父さん立たち会あいの上、話はなし合あひで、表おもて向むきプツ、リと縁を切る様ようにしたいから何卒どうぞ願ねがひます、と云うのだが、氣の毒でならねえ、あの利かねえ身体で、*四つ手校注に乗のつて広袖びとらを着て、きつとお前が此家こゝに居ると思つて、奥に先刻さつきから師匠は来て待つて居るから、行つて逢あいな、氣の毒だあナ」

*「四つ手かこの略。戸はまれに引戸ものあれど多くは垂れなり。」

新「冗談云つちやアいけない、伯父さんからかつちやアいけません」

勘「からかいも何もしねえ、師匠、今新吉が来ましたよ」

豊「おやマア大層遅く何処へ行つておいでだった」

勘「新吉、此方へ来なよ」

新「へエ、逢つちやアいけねえ」

と怖々、奥の障子を明けると、寝衣の上へ広袖を羽織つたなり、片手を突いて坐つて

居て、

豊「新吉さんお出なすつたの」

新「エ、ド何うして来た」

豊「何うして来たつてね、私が眼を覚して見るとお前がいなから、是は新吉さんは愛想が尽きて、私が種々な事を云つて困らせるから、お前が逃げたのだと思つて気が付くと、ホツと夢の覚めたようであゝ悪い事をして嘸新吉さんも困つたらう、厭だつたらうと思つて、それから伯父さんにね、打明けて話をして、私も今迄の心得違ひは伯父さんに種々詫言をしたが、お前とは年も違ひ、お弟子は下り、世間の評判になつてお座敷もなく、仮令二人で中よくして居ても食方に困るから、お前はお前で年頃の女房を持てば、私は妹だと思つて月々沢山は出来ないが、元の様に二両や三両ずつはすける積り、伯父さ

んの前でフツ、リ縁を切るつもりで私が来たんだよ、利かない身体で漸と来たのでございます、何卒私が今までの簡違どうぞいをした事は、お前腹も立つだろうが堪忍して、元の通りあかの他人とも、又姉きょうだい弟とも思つて、未長くねえ、私も別に血縁たよりがないから、塩梅の悪い時はお前と、お前のお内儀かみさんが出来たら、夫婦で看病でもしておくれ、死水しにみずだけは取つて貰いたいと思つて」

勘「師匠、此の通り誠に子供同様で、私も誠に心配して居る、またお前さんに恩になつた事は私が知つて居る、おい新吉冗談じやアねえ、お師匠さんに義理が悪いよ、本当にお前めえには困るナ」

新「なア二師匠お前が種々な事を云いさえしなければいゝけれども：お前さつきど先刻何処かの二階へ来やアしないかえ」

豊「何処へ」

新「鮎屋の二階へ」

豊「いゝえ」

新「なんだ、そうすると矢張りあれは気のせえかしらん」

勘「何をぐずぐず云うのだ、お前めえ附いて早く送つて行きな、ね、師匠そこはお前さんの

病気が癒なおつてからの話だ、今其の塩梅の悪い中で別れると云ったって仕様がねえ、私も見舞に行きたいが、一人の身体で、つまらねえ店でも斯こうして張はつてるから、店を明ける事も出来ねえから、病気の癒る間新吉を上げて置くから、ゆっくり養生して、全快の上で何どうとも話合をする事にね、師匠……：ナニお前めえ送ゆつて行きねえ、師匠、お前さん四つ手でお出いでなすつたが、彼あれじやア乗りにくいと思つて今*あんぽつをそう言いつたから、あんぽつでお帰かえりなさいよ、エ、何なんだい」

*「町人の用うるかこの一種四つ手より上等にして戸は引戸」

駕籠屋「此方こつちから這入りますか駕籠屋でげすが」

勘「ア駕籠屋さんか、アノ裏へ廻まわつて、二軒目だよ、其の材木が立掛けて有る処から漬物屋の裏へ這入まつて、右へ附ついて井戸端を廻まわつてネ、少し……：二間けんばかり真直まっすぐに這入ると、己おれの家の裏口へ出るから、エ、なに、知れるよ、あんぽつぐらいは這入るよ」

駕「へエ」

勘「じやア師匠、私が送りたいが今云う通り明ける事が出来ないから、新吉が附ついて帰るから、ね、師匠、新吉の届かねえ処は、年もいかねえから勘弁して、ね、私が附ついてるからもう不実な事はさせません、今迄の事は私が詫わびるから……：冗談じやアねえ……：新吉、

お送り申しな、オイ今明るよ、裏口へ駕籠屋が来たから明けて遣りな、おい御苦労、さア師匠、広袖を羽織つていゝかえ」

豊「ハイ伯父さんとんだ事をお耳に入れて誠に」

勘「宜いからさア掴まって、いゝかえ、おい若衆お頼申すよ、病人だから静かに上げておくれ、いゝかえ緩くりと、此の引戸を立てるからね、いいかえ」

と云うので引戸をメ《し》めてしまうと、

新「じゃア伯父さん提灯を一つ貸して下さいな、弓張でもぶらでも何でも宜いから、え、蠟燭が無けりやア三ツばかりつないで、え、箸を入れてはいけませんよ、焙ればようございます」

男「御免なさい」

トンく。

勘「へエ、何方でげす」

男「新吉さんは此方ですか、新吉さんの声の様ですね、え、新吉さんかえ」

勘「へエ何方でげすえ、へエ…ねえ新吉、誰かお前の名を云って逢いたいと云ってるから明けねえ」

新「おやお出でなさい」

男「おやお出でじやアねえ、新吉さん困りますね、病人を置いて出て歩いては困りますね、本当に何様に搜したか知れない、時にお気の毒様なこと、お前さんの留守に師匠はおめでたくなつてしまつたが、何うも質の悪い腫物だねえ」

二十

新「何を詰らない事を、善六さん極りを云つてらア」

善「極りじやアねえ」

新「そんな冗談云つて、いやに気味が悪いなア」

善「冗談じやアねえ、家内がお見舞に往つた処が、お師匠さんが寝てえると思つて呼んで見ても答がねえので、驚いて知らせて来たから私も行き彦六さんも皆来て、何う斯うと云つた処が何うしても仕ようがねえ、新吉さん、お前が肝腎の当人だから漸く搜して来たんだが、あのくらいな大病人を置いて出歩いちやアいけませんぜ」

新「ウー、ナン、伯父さん〜」

勘「何だよお前、御挨拶もしねえで、お茶でも上げな」

新「お茶どころじゃアねえ、師匠が死んだって長屋の善六さんが知らせに来てくれたんだ」

勘「何を馬鹿な事を云うのだ、師匠は来て居るじゃアねえか」

新「あのね、御冗談仰しやっちゃアいけません、師匠は先刻から此方へ来て居て、是から私が送って帰ろうとする処、何の間違いでげしよう」

善「冗談を云っちゃアいけません」

彦「是は何だぜ、善六さんの前だが、師匠が新吉さんの跡を慕って来たかも知れないよ、南無阿弥陀仏〜」

新「そんな念仏などを云っちゃアいけないやねえ」

善「じゃアね新吉さん、彦六さんの云う通りお前の跡を慕って師匠が来たかも知れねえ」
新「伯父さん〜」

勘「うるさいな、ナニ稀代だつて、師匠は来てえるに違えねえ、今連れて行くんじやアねえか」

と云いながらも、なんだか訝しいと思うから裏へ廻って、

勘「若衆少し待つておくんなさい」

新「長屋の彦六さんがからかうのだから」

勘「師匠く」

新「伯父さんく」

勘「え、よく呼ぶな、何だえ」

新「若衆少し待つておくれ、師匠く」

と云いながら駕籠の引戸を明けて見ると、今乗ったばかりの豊志賀の姿が見えないので、新吉はゾツと肩から水を掛けられる様な心持で、ブルく慄えながら引戸をバタリと立て、

台所へ這上りました。

勘「何んて真似をして居るのだ、ぐずくして何だ」

新「伯父さん、駕籠の中に師匠は居ないよ」

勘「エ、居ねえか本当か」

新「今明けて見たら居ねえ、南無阿弥陀仏く」

勘「厭だな、本当に涙をこぼして師匠が己に頼んだが、お前が家を出なければ斯んな事にはならねえ、お前が出て歩くから斯んな事に、オイ表に人が待つて居るじゃアねいか己

れが出よう」

と云うので店へ出て参りまして、

勘「お長屋の衆、大きに御苦労様で、実は新吉は、私よんどころに扱あつかない用事があつて、此方こちらへ参つて居る留守中に師匠が亡なりました、皆さん方が態々わざわざ知らして下すつて有難うござい
ます、生憎あいにくしにめ死目に逢あいませんで、貴方がたも誠にお困こまりでございましょう、実に新吉も残の
惜こりおしく思います、何れいず只今私も新吉と同道で参りますから、へエ有難う、誠に御苦労様
で」

長屋の者「左様で、じゃアお早くお出いでなすつて」

勘「只今私が連れて参ります、誠に御苦労様、馬鹿」

新「其様そんなに叱おこつちやアいけません、怖おそい中で叱おこられて堪たまるものか」

勘「己おれだつて怖いや、若衆大きに御苦労だつたが、待まち賃ちんは上げるがもう宜よろしいから帰
つておくんなさい」

駕籠屋「へエ、何方どなたかお乗りなすつたが、駕籠は何処どこへ参ります」

勘「駕籠はもう宜よろしいからお帰りよ」

駕「でも何方かお女中が一人お召しなすつたが」

勘「エ、ナニ乗つたと見せてそれで乗らぬのだ、種々いろく訳があるから帰っておくれ」

駕「左様でげすか、ナ、オイ駕籠はもう宜いと仰しやるぜ」

駕「いゝつたつて今明けてお這入んなすつた様だった、女中がネ、然うでないのですか、何だか訝しいな、じゃア行こうよ」

と駕籠を上げに掛ると、

駕「若しく、お女中が中に這入つて居るに違いございません、駕籠が重うございますから」

新「エ、南無阿弥陀仏」

勘「オイ駕籠屋さん、戸を明けて見な」

駕「左様でげすか、オヤくく成程居ない、氣の故で重てえと思つたと見える、成程何方も入らつしやいません、左様なら」

勘「これ新吉、表を締めなよ手前のお蔭で本当に此の年になって初めて斯んな怖い目に遇つた、家は閉めて行くから一緒に行きな」

新「伯父さんく」

勘「何だよ、いやに続けて呼ぶな、跡の始末を附けなければならねえ」

と云うので是から家の戸締りをして弓張を点けて隣へ頼んで置いて大門町から出かけて行きます。新吉は小さくなつて慄えながら仕方なしに提灯を持って行く、

勘「さア新吉、然う後へ退つては暗くつて仕様がねえ、提灯持は先へ出なよ」

新「伯父さんく」

勘「なぜ然う続けて呼ぶよ」

新「伯父さん、師匠は全く私を怨んで来たのに違いございませんね」

勘「怨んで出るとも、手前考えて見ろ、彼までお前が世話になつて、表向亭主では

ねえが、大事にしてくれたから、どんな無理な事があつても看病しなければならねえ、それをお前が置いて出りやア、口惜いと思つて死んだから、其の念が来たのだ、死んで念の来る事は昔から幾らも聞いている」

新「伯父さん私は師匠が死んだとは思いません、先刻逢つたら、矢張平常着て居る小紋の寝衣を着て、涙をボロく翻して、私が悪いのだから元の様に綺麗さっぱりとあかの他人になつて交際います、又月々幾ら送りますから姉だと思つてくれと、師匠が膝へ手を突いて云つたぜ、ワア」

勘「ア、何だく、エ、胆を潰した」

新「ナニ白犬が飛出しました」

勘「ア、胆を潰した、其の声は何だ、本当に魂消るね、胸が痛くなる」

と慄ふるえながら新吉は伯父と同道で七軒町へ帰りまして、是れこから先まず早桶あつらゆかんを誂あつらえ湯灌ゆかんをする事になつて、蒲団を上げ様とすると、蒲団の間に挿はさんであつたのは豊志賀かきおきの書置かきおきで、此の書置を見て新吉は身の毛もよだつ程驚きましたが、此の書置は事細かに書遺かきのこしました一通では何なんと書いてございますか、此の次に申し上げます。

二十一

ちと模様違いの怪談話を筆記致しまする事になりまして、怪談話には取わけ小相こあいさんがよかろうと云うのでございますが、傍聴筆記でも、怪談のお話は早く致しますと大きに不都合でもあり、又怪談はネンバリくと、静かにお話をするかえと、却かえつて怖いものでござい
ますが、話を早く致しますと、怖みを消すと云う事を仰しやる方がございます。処わたくしが私わたくしは至つて不弁で、ネト／＼話を致す所から、怪談話がよかろうと云う社中のお思い付あきらでござ
います。只今では大抵の事は神経病と云つてしまつて少しも怪しい事はござりませぬ。明

かな世の中でございりますが、昔は幽霊が出るのは祟りがあるからだ怨の一念三世に伝わる
と申す因縁話を度々承まわりました事がございませぬ。豊志賀は実に執念深い女で、前
申上げた通り皆川宗悦の惣領娘でございませぬ。此処に食客に参つていて夫婦同様にな
つて居た新吉と云うのは、深見新左衛門の二男、是も敵同士の因縁で斯様な事に相成り
ます。豊志賀は深く新吉を怨んで相果てましたから、其の書遺した一通を新吉が一人で
開いて見ますると、病人のことで筆も思う様には廻りませんから、慄える手で漸々書き
ましたと見え、その文には『心得違ひにも、弟か息子の様な年下の男と深い中になり、是
まで親切を尽したが、其の男に実意が有ればの事、私が大病で看病人も無いものを振捨て、
出る様なる不実意な新吉と知らずに、是まで亭主と思ひ真実を尽したのは、実に口惜しい
から、仮令此の儘死ねばとて、この怨は新吉の身体に纏つて、此の後女房を持つてば七人ま
ではきつと取殺すから然う思え』と云う書置で、新吉は是を見てゾツとする程驚きました
が、斯様な書置を他人に見せる事も出来ませぬ、さればと申して、懐へ入れて居ても何だ
か怖くつて気味が悪いし、何うする事も出来ませぬから、湯灌の時に窃とごまかして棺桶
の中へ入れて、小石川戸崎町清松院と云う寺へ葬りました。伯父は、何でも法事供
養をよく為なければいかなから、墓参りに往けよくと云うけれども、新吉は墓所へ

行くのは怖いから、成なるたけ昼間往ゆこうと思つて、昼ばかり墓参りに往ゆきます。八月二十六日が丁度みなのか三七日で、其の日には都合が悪く墓参りが遅くなり、申まう刻下りに墓参りをするものでないと其の頃申しましたが、其の日は空が少し曇つて居るから、急ぎ足で参つたのは、只今の三時少し廻つた時刻、寺の前でお花を買つて、あの辺は井戸が深いから、漸ようやくの事で二つの手桶へ水を汲んで、両方の手に提さげ、お花を抱あえて石坂を上あつて、豊志賀の墓場へ来ると、誰たれか先に一人押おんで居る者が在あるから誰たれかと思つてヒヨイと見ると、羽生屋の娘お久、

久「おや〜新吉さん」

新「おや〜お久さん、誠に何どうも、何どうしてお出でなすつた、恟びつくしました」

久「私はね、アノお師匠さんのお墓参りをして上げたいと心に掛けて、間まさえあれば七日〜には屹きつ度参ります」

新「そうですね、それは御親切に有難う」

久「お師匠さんは可哀相な事のちでして、其の後お目に掛りませんが、貴方は嘸さぞお力落しでいましよう」

新「へエ、もう何どうも落胆がっかりしました、是は大層結構なお花を有難う、何どうも弱よりまし

たよお久さん」

久「アノお前さん此の間蓮見鮪の二階で、私を置おきつ放ばなしにして帰ってお仕まいなすつて」

新「え、ナ二急に用が出来ましてそれから私が慌あわて、帰ったので、つい御挨拶もしないで」

久「何なんだか私は悔なげりましたよ、私をポンと突飛ばして二階からドン／＼駈かけ下りて、私はまあ何どうなすつたかと思つて居りましたら、それ切りでお帰りも無し、私は本当に鮪屋へ間まが悪わるうございますから、急に御用が出来て帰つたと云いましたが、それから一人ですから、お鮪が出来て来たのを折おりへ入れて提あげて帰りました」

新「それは誠にお気の毒様で、然そう見えたので……気の故せいで見えたのだね……眼まなこに付いて居て眼の前に見えたのだナ彼あれは……斯こんな綺麗な顔を」

久「何を」

新「エ、何サ宜ようございます」

久「新吉さんいゝ処でお目に掛りました、私は疾とつからお前さんにお話をしようと思つて居りましたが、私の処のお母つかさんは継母ま、は、でございませうから、お前さんと私なんと、何でも訊

があるように云つて責折檻せめせつかんをします、何でも屹度きつと新吉さんと訳が有るだろう、何にも訳がなくつて、お師匠さんが彼様あんなに悻氣りんきらしい事を云つて死ぬ氣遣いは無い、屹度訳があるのだろうから云えと云うから、いゝえお母さんそんな事があつては済みませんから、決して然そう云う事はありませんと云うのも聴かずに、此の頃はぶち打ちようちやく擲ちやくするので、私は誠に辛いから、いつそ家を駈出して、淵川ふちかわへでも身を沈めて、死のうと思ふ事が度々たび／＼ございますが、それも余あんなり無分別だから、下総の伯父さんの処へ逃げて行きたいが、まさかに女一人で行かれもしませんからね」

二十二

新「それじゃア下総へ一緒に行きましようか」

と又怖いのも忘れて行く氣になると、

久「新吉さん本当に私を連れて行って下さるなら、私は何様どのようにも致します、屹度、お前さん未始終すえ然そう云う心なら、彼方あつちへ行けば、伯父さんに頼んで、お前さん一人位何どうにでも致しますから、何卒どうぞ連れて行って」

と若い同士とは云いながら、そんなら逃げよう、と直に墓場から駈落をして、其の晩は遅いから松戸へ泊り、翌日宿屋を立つて、あれから古賀崎の堤へかゝり、流山から花輪村鱒ヶ崎へ出て、鱒ヶ崎の渡を越えて水街道へかゝり、少し遅くはなりましたが、もう直に羽生村だと云う事だから、行くことにしよう、併し彼方で直に御飯をたべるも極りが悪いから、此方で夜食をして行こうと云うので、麴屋と云う家で夜食をして道を聞くと、これくで渡しを渡れば羽生村だ、土手に付いて行くと近いと云うので親切に教えてくれたから、お久の手を引いて此処を出ましたのが八月二十七日の晩で、鼻を撮まれるのも知れませんが云う真の闇、殊に風が吹いて、顔へポツリと雨がかゝります。あの辺は筑波山から雲が出ますので、是からダラくと河原へ下りまして、渡しを渡って横曾根村へ着き、土手伝いに廻って行くと羽生村へ出ますが、其所は只今以て累ヶ淵と申します。何う云う訳かと彼方で聞きましたら、累が殺された所で、與右衛門が鎌で殺したのだと申しますが、それはうそだと云う事、全くは麴衆を沢山脊負わして置いて、累を突飛ばし、砂の中へ顔の滅込むようにして、上から與右衛門が乗掛つて、砂で息を窒めて殺したと云うが本説だと申す事、また祐天和尚が其の頃脩行中の事でございますから、頼まれて、累が淵へ莖を敷いて鉦を叩いて念仏供養を致した、其の功力に依つて累が成仏得

脱くだつしたと云う、累つらが死んで後のち絶えず絹川ほとりのの辺には鉦かねの音が聞えたと云う事でございませう。これは祐天和尚すけあまがカン／＼／＼／＼叩たたいて居たのでございませう。それから土手伝どてでんいで参ると、左りへ下りるダラ／＼下り口があつて、此処こゝに用水みづべりがあり、其の用水みづべり辺にボサツカと云うものがあります。是は何どう云う訳か、田舎ではボサツカと云つて、樹きか草くさか分りません物が生えて何なんだかボサツカ／＼致して居る。其所そこは入いり合あひになつて居る。丁度土手伝どてでんいにダラ／＼下おりに掛ると、雨はポツリ／＼降つて来て、少したつとハラ／＼／＼と烈はげしく降出しそうな気色けしきでございませう。すると遠くでゴロ／＼と云う雷鳴かみなりで、ピカリノ／＼と時々電いなびかり光ひかりが致します。

久「新吉さん／＼」

新「え、」

久「怖いじゃアないか、雷かみなり様が鳴つてね」

新「ナニ先刻さつき聞いたには、土手を廻まわつて下りさえすれば直すぐに羽生村はねむらだと云うから、早く行つて伯父おぢいさんに能よく話をしてね」

久「行きさえすれば大丈夫、伯父おぢいさんに話をするから宜いいが、暗くくつて怖こくつて些ちつとも歩あけやしません」

新「サ此方だよ」

久「はい」

と下りようとすると、土手の上からツルくと滑つて、お久が膝を突くと、

久「ア痛タ、」

新「何うした」

久「新吉さん、今石の上か何かへ膝を突いて痛いから早く見ておくんないよ」

新「どう／＼、お、く、く大層血が出る、何うしたんだ、何の上へ転んだ、石かえ」

と手を遣ると草苳鎌。田舎では、草苳に小さい子や何かゞ秣を苳りに出て、帰り掛に草の中へ標に鎌を突込んで置いて帰り、翌日来て、其処から其の鎌を出して草を苳る事があるもので、大かた草苳が置いて行つた鎌でございましょう。お久は其の上へ転んで、ズブリ膝の下へ鎌の先が這入つたから、夥しく血が流れる。

二十二

新「こりやア、困つたものですね、今お待ち手拭で縛るから」

久「何うも痛くつて耐らないこと」

新「痛いたつて真暗で些とも分らない、まアお待ち、此の手拭で縛つて上げるから又一つ斯う縛るから」

久「あゝ大きに痛みも去つた様でございますよ」

新「我慢してお出でよ、私が負い度いが、包を脊負つてるから負う事が出来ないが、私の肩へ確り攫まつてお出でな」

と、びっこ引きながら、

久「あい有難う、新吉さん、私はまア本当に願いが届いて、お前さんと二人で斯う遣つて斯んな田舎へ逃げて来ましたが、是から世帯を持つて夫婦中能く暮せれば、是程嬉しい事はないけれども、お前さんは男振は好し、浮気者と云う事も知つて居るから、ひよつとして外の女と浮気をして、お前さんが私に愛想が尽きて見捨てられたら其の時は何うしようと思つと、今から苦勞でなりませんわ」

新「何だね、見捨てるの見捨てないのと、昨夜初めて松戸へ泊つたばかりで、見捨てるも何も無いじゃアないか、訝しく疑るね」

久「いゝえ貴方は見捨てるよ、見捨てるような人だもの」

新「何でそんな、お前の伯父さんを使つて厄介になろうと云うのだから、決して見捨てる氣遣はないわね、見捨てれば此方が困るからね」

久「旨く云つて、見捨てるよ」

新「何故そう思うんだね」

久「何故だつて、新吉さん私は斯んな顔になつたよ」

新「えゝ」

と新吉が見ると、お久の綺麗な顔の、眼の下にポツリと一つの腫物が出来たかと思つと、
忽ち腫れ上つてまるで死んだ豊志賀の通りの顔になり、膝に手を突いて居る所が、鼻を撮
まれるも知れない真の闇に、顔ばかりありくと見えた時は、新吉は怖い三昧、一生懸
命無茶苦茶に鎌で打ちましたが、はずみとは云いながら、逃げて掛りましたお久の咽喉へ
掛りましたから、

久「あつ」

と前へのめる途端に、研澄ました鎌で咽喉を斬られたことでごぎいますから、お久は前
へのめつて、草を掴んで七転八倒の苦しみ、

久「うゝン恨めしい」

と云う一声で息は絶えました。新吉は鎌を持ったなり

新「南無阿弥陀仏くくく」

と一生懸命に口の中で念仏を唱えまする途端に、ドウくくと云う車軸を流すような大雨、ガラくくくくと云う雷鳴頻りに轟き渡るから、知らぬ土地で人を殺し、殊に大雨に雷鳴ゆえ、新吉は怖い一三昧、早く逃げようと包を脊負つて、ひよつと人に見られずにはならぬと慄える足を踏締めながらあせります。すると雨で粘土が滑るから、ズルリ滑つて落ちると、ボサツカの脇の処へズデンドウと臀餅を搗きます、とボサツカの中から頼冠をした奴がニヨコリと立った。此の時は新吉が驚きましたの驚きませんのではな

新「ア」

と息が止るようで、後へ退つて向を見透すと、向の奴も怖かったと見えて此方を覗く、互に見合いましたが、何様真の闇で、互に睨みあつた処が何方も顔を見る事が出来ません。新吉は電光の時に顔を見られないようにすると、其の野郎も雷が嫌いだと見えて能く見る事も致しません。電光の後で聞くなると、

男「この泥坊」

と云うので新吉の襟を掴みましたが、是は土手下の甚藏と云う悪漢、只今小博奕をして居る処へ突然手が這入り、其処を潜り抜けたが、烈しく追手が掛りますから、用水の中を潜り抜けてボサツカの中へ小さくなつて居る処へ、新吉が落ちたから、驚いてニコリと此の野郎が立つたから、新吉は又怪物が出たかと思つて驚きましたが、新吉は襟がみを取られた時は、もう天命極まつたとは思つたが、死物狂いで無茶苦茶に掻きむしら、此の土手の甚藏が手を放すと、新吉は逃げに掛る途端、腹這に倒れました。すると甚藏は是を追駈けようとして新吉に躓つき向の方へコロコロと転がつて、甚藏はボサツカの用水の中へ転がり落ちたから、此の間に逃げようとする。又後から、

甚「此の野郎」

と足を取つてすぐわれたから仰向に倒れる処へ、甚藏が乗掛つて掴まえようとする処を、新吉が足を挙げて股を蹴たのが鞞丸に当たつたから、

甚「ア痛々」

と倒れる処を新吉が掴み付こうと思つたが、イヤ／＼荷物を脇へ落したからと荷物を探す途端に、甚藏の面へ筆り付いたから、

甚「此の野郎」

と組付いた処を其の手を取つて逆に捻ると、ズル／＼ズデンと滑つて転げると云う騒ぎで、二人とも泥ぼつけになると、三町ばかり先へ落雷でガラ／＼／＼／＼／＼ビューと火の棒の様なる物が下ると、丁度浄禅寺ヶ淵辺りへピシーリと落雷、其の響に驚いて、土手の甚藏は、体は大兵で度胸も好い男だが、虫が嫌うと見え、落雷に驚いてボサツカの中へ倒れました。すると新吉は雷よりも甚藏が怖いから、此の間に包を抱えて土手へ這上り、無茶苦茶に何処を何う逃げたか覚え無しに、畑の中や堤を越して無法に逃げて行く、と一軒茅葺の家の中で焚物をすると見え、戸外へ火光が映すから、何卒助けて呉れと叩き起しましたが、其の家は土手の甚藏の家、間拔な奴で、新吉再び土手の甚藏に取つて押えられると云う。是から追々怪談になります。一寸一息つきまして。

二十四

一席引続きましてお聞に入れまはすは、累が淵のお話でございます。新吉は土手の甚藏に引留められ、既に危い処へ、浄禅寺ヶ淵へ落雷した音に驚き、甚藏が手を放したのを幸い、其の紛れに逃延びましたが、何分にも初めて参つた田舎道、勝手を心得ませんから、たゞ

畑の中でも田の中でも、無茶苦茶に泥だらけになって逃げ出しまして、土手伝いでなだれを^お下り、鼻を撮^{つま}まれるも知れませんが、透^{すか}して見ると一軒茅草屋根の棟^{むね}が見えましたから、是は好^いい塩梅だ、此^{こゝ}処に人家があつたと云うので、駈下りて覗くと、チラ／＼^{たきび}焚火の明^{あかり}が見えます。

新「へエ、御免なさい、少し御免なさい、お願いでございませう」

男「誰^だか」

新「へい、私^{わたくし}は江戸の者でございませうが、御当地へ参りまして、此の大雨に雷^{かみなり}鳴りで、

誠に道も分りませんで難儀を致しますが、少しの間お置きなすつて下さる訳には参りませうまいか、雨の晴れます間^までございませう」

男「ハア大雨に雷鳴で困るてえ、それだら明^{あけ}けて這入りなせい、明^{あけ}る戸^{かど}だに」

新「へエ左様でございませう、御免なさい、慌^{あわ}てゝ居りますから戸^{かど}が隙^すいて居りますのも夢中でね、へい何^どうも初めて参りましたが、泊^{とまり}で聞^きき／＼参りました者で、勝手^{かたて}を知りませうから難儀致しまして、もう川へ落ちたり田の中へ落ちましたりして、漸^{よう}々の事^{こと}で此^{こゝ}方^ちま^まで参りましたが、何^どうか一晩お泊^{とまり}めなすつて下^{くだ}されませうれば有難^{ありがた}い事^{こと}で」

男「泊^{とまり}めるたつて泊^{とまり}めねえたつて己^{おれ}の家^{うち}じゃアねえ、己^{おれ}も通^{とほ}り掛^かつて雷^{かみなり}鳴^なが嫌^{きら}いで、大

雨は降るし、仕様が無えが、此処十家へ駈込んで、主は留守だが雨止みをする間、火の気が無えから些とばかり籠柴を突燵て燃して居るだが、己が家でなえから泊める訳にはいきませんが、今主が帰るかも知んねえ、困るなれば、此処へ来て、囲炉裡の傍で濡れた着物を炙つて、煙草でも呑んで緩り休みなさえ」

新「へ工貴方の家でないので」

男「私が家では無えが、同村の者だが雨で仕様がねえから来ただ」

新「左様で、此方の御主人様は御用でも有つてお出掛になつたので」

男「なアに主は十日も廿日も帰らぬ事もある、まア上りなさえ」

新「有難うございますが泥だらけになりました」

男「泥だらけだつて己も泥足で駈込んだ、此方へ上りなさえ、江戸の者が在郷へ来ては泊る処に困る、宿を取るには水街道へ行がねえば無えからよ」

新「はい水街道の方から参つたので、有難うございます、実に驚きました、酷い雨で、此様に降ろうとは思いませんでした、実に雨は一番困りますな」

男「今雨が降らんですは作の為によく無えから、私の方じゃア降も些とはよいちやア」

新「成程そうですねえ、雷鳴には実に驚きまして、此地は筑波近いので雷鳴は酷

うございますね」

男「雷も鳴る時に鳴らぬと作の為によく無えから鳴るもえゝだよ」

新「へエー、然うでげすか、此方の旦那様は何時頃帰りましょうか」

男「何時帰るか知れぬが、まア、何時帰ると私等に断つて出た訳で無えから受合えねえが、明けると大概七八日ぐれえ帰らぬ男で」

新「へエ、困りますな、何う云う御商売で」

男「何うだつて遊人だ、彼方此方二晩三晩と何処から何処へ行くか知れねえ男で、

やくざ野郎サ」

新「左様で、道楽なお方でございますので」

男「道楽だつて村じやア蝮と云う男だけれども、又用に立つ男さ」

と悪口をきいて居る処へ、ガラリと戸を明けて帰つて来たが、ずぶ濡れで、

甚「あゝ酷かつた」

男「帰つたか」

甚「ム、今帰つた、誰だ清さんか、今帰つたが、松が賀で詰らねえ小博奕へ手を出して

打つて居ると、突然に手が這入つて、一生懸命に逃げたが、仕様がねえから用水の中へ這

入つて、ボサツカの中へ隠れて居た」

清「己おれは今通り掛かつて雨に遇あつて逃げる処ところがねえのに、雷らいさま様が鳴つて来たから魂たまげ消けてお前めえらが家うちへ駈か込んで、今囲い炉ろ裡うちへ籠かご朶た一ひとつくべ燻くしたゞ」

甚と「いゝや何なにうせ開あけ放はなしの家うちだアから、是どこは何なに処ところの者ものだ、何なんだいお前めえは」

清「此ここ家あな主人あるじで、挨あ拶じさつせえ、是こゝは江戸あの者ものだが雨あが降ふつて雷かみなり鳴なりに驚おどき泊とめてくれと云いうが、己おれが家うちでねえからと話わして居ゐる処ところだ、是こゝが主人あるじだ」

新「左様さやうで、初はめまして、私わたくしは江戸あの者もので、小こ商あきなを致いたします新吉しんきちと申ます不調ふてう法ぽう者もの、此こち地ちへ参まりましたが、雷かみなり鳴なりが嫌きらいで此こち方ら様さまへ駈か込んだ処ところが、お留と守し様さまでござごいますか
ら泊とめとる訳わけにはいかぬと仰おしやつて、お話わをして居ゐる処ところで、よくお帰かりで、何なん卒そつ今いま晩ばん一いつ晩ばんお泊とめ下くだされば有あ難なんい事ことで、追お々と夜よが更あげますから、何なん卒そつ一いつ晩ばん何なん様さまな処ところでも寝ねかして下くだされば宜よろしいので」

甚と「好いい若わけ者もんだ、いゝや、まア泊とつて行いきねえ、何なんうせ着きて寝ねる物ものはねえ、留と守し勝かつだから食く物ものもねえ、鍋なべは脇わきへ預あけてしまつたしするから、コロリと寝ねて明日あした行いきねえ、己おれと一いつ緒しょに寝ねねえ」

新「へエ、有あ難なんう存ぞんじます」

清 「己おらア帰けえるよ」

甚 「まア〜宜いいやな」

清 「己おらア帰けえるべい、何か、手が這へ入えったか」

甚 「困こったからボサツカの中へ隠かくれて居ゐたので、お前めまへ帰かえるならううつかり往いつちやアいけねえ、今夜ボサツカの脇わきに人殺ころしが有あった」

清 「何ど処こに」

甚 「己おらがボサツカの中に隠かくれて居ゐると、暗くつて分わらぬが、きやアと云いう声こゑがノウ女の殺ころされる声こゑだねえ、まア本ほん当とうに殺ころされる声こゑは今迄知しらねえが、劇しばい場ばで女おんなが切き殺ころされる時とき、きやアとかあれイとか云いうが、そんな事ことを云いったつてお前めまへには分わらねえが、凄すこいものだ、己おらも怖おそかった」

清 「怖おそかねえ、女おんなをまア、何なんてエ、人ひとを殺ころすつたつて村むら方かたの土手どてじやアねえか、ウうン怖おそかなかんべえ、ウうン何なんうした」

甚 「何なんうしたつて凄すこいやア、ううつかり通とつて怪けが我がでもするといけねえから、其そのの野郎やろうは刀やや何かで殺ころす程ほどの者ものでもねえ奴やつで、鎌かで殺ころしやアががつたのよ、女おんなの死骸しかいは川かわへ投ほうり込こんだ様子ようす、忌いめえま々ましい畜ちきしやう生しょうだ、此このの村むらへも盗ぬす人ひとに這へ入りやアがるだだらうと思おもうから、

其の野郎の襟首えりくびを取つて引摺り倒した、すると雷ひきずが落ちて、己はどんな事にも驚きやアしねえが雷には驚く、きやアと云つて田の畔くろへ転げると、其の機はずみに逃げられたが、忌々しい事をした」

二十五

清「怖おつかねえナ、然そうか怖おつかなくて通れねえ」

甚「氣を付けて行きねえ」

清「まだ居るかなア」

甚「もう居やアしめえ、大丈夫でえじょうぶだ、美い人おんななら殺すだろうが、お前めえのような爺さん

を殺す氣遣いはねえ」

清「じゃア己おねえ帰る、エ、じゃア又ちつ些とべえ畑の物が出来たらくれべえ」

甚「何か持つて来て呉れても煮て食う間まがねえから、左様なら、ピッタリ締めて行つてくれ、若わけえの者もつと此方こつちへ来きねえ」

新「へエ」

甚「お前江戸から来るにやア水街道から来たか、船でか」

新「へ工渡を越して、弘教寺と云うお寺の脇から土手へ掛つて参りました」

甚「此方へ来る土手で能く人殺しに出会さなかつたな」

新「私は運よく出会しませんでした」

甚「まあ斯う、見ねえ、是はノ、其の女を殺した奴が投げ出した鎌を拾つて来たが、見

ねえ」

と鎌の刃に巻付けてあつた手拭をぐるぐると取つて、

甚「此の鎌で殺しやアがつた、酷い雨で段々血は無くなつたが、見ねえ、血が減多に落

ねえ物とみえて染込んで居らア、磨澄した鎌で殺しやアがつた、是で遣りやアがつた」

新「へエー誠に何うも怖ない事ですナ」

甚「ナニ」

新「へ工怖い事ですねえ」

甚「怖いたつて、此の鎌で是れで遣りやアがつた」

新「へエ」

と鎌と甚藏を見ると、先刻襟首を取つて引摺り倒した奴は此奴だな、と思うと、身体が

慄ふるえて顔がん色しよくが違ちがうから、甚し藏ざうは物ものをも言いわず新しん吉きちの顔がんを見み詰つめて居いりましたが、鎌かまをだしぬけに前まへへ投ほうり付つけたから、新しん吉きちは恟びつりした。

甚し「おい／＼余あんり薄うす気つき味みがよくねえ、今いま夜よは泊とつて行いきねえ」

新しん「ハイ大きおほきに雨あめが小こ降ふりになりました様よう子こで、是こゝで私わたくしはお暇いとまを致いたそうと存ぞんじます」

甚し「是こゝから行いつたつて泊とめる処ところもねえ小こ村むらだから、水みづ街まち道みちへ行いかなけりやア泊とる旅はたご籠やはねえ、まア宜いいやナ、江え戸ど子こなれば懐なつかしいや、己おれも本ほん郷ごう菊きく坂さか生なれで、無む懶らんでぐずツかして居いるが、小こ博はく奕やくが出で来るから此こゝ処ところに居いるのだが、お前めえも子こ柄がらはよし、今いまの若わか氣きでここな片かた田た舎しゃへ来きて、儲ところかる処ところか苦くる勞らうするな、些ちつとは訳わけがあつて来きたろうが、お前めえが此こゝ処ところで小こ商あきなでも仕しようと云いうなら己おれが家うちて居いに貫ぬいてえ、江え戸ど子こて工く者しやは、田た舎しゃへ来きて江え戸ど子こに遇あうと、親おや類ぐみにでも逢あつた心こゝろ持もがして懐なつかしいから、江え戸どと云いうと、肩かた書かばかりで、身み寄よでも親おや類ぐみでもねえが其そこ処ところア情じやう合あいだ、己おれは遊あそんで歩あくから、家いへはまるで留と守しじやアああるし、お前めえ此こゝ処ところに居いて留と守し居いをして荒あ物ものや駄だ菓か子こでも并ならべて居いりやア、此こゝ処ところは花はな売うや野せんざ菜さい物ものを売うる者ものが来きて休やすむ処ところで、何なんでもポカ／＼捌はけるが、おいお前めえ留と守し居いをしながら商あきな売うして居いてくれ／＼己おれも安やす心こゝろして家いへをお前めえに預あけて明あけるが、何なんも盗ぬまれる物ものはねえが、一いっ軒けんの主あるじだから、おいお前めえ此こゝ処ところでそうして留と守し居いをしてくれ／＼己おれが帰かえつて来きても火かは

有るし、茶は沸いて居るし、帰つて来ても心持がいゝ、己ア土手の甚藏と云う者だが、村の者に憎まれて居るのよ、それがノ口をきくのが江戸子同士でなけりやア何うしても話が合わねえ、己は兄弟も身寄もねえし、江戸を喰詰めて帰れる訳でもねえから、己と兄弟分になつてくんねえ」

新「有難う存じますな、私も身寄兄弟も無い者で、少し訳があつて参りました者でございませう、少し頼る処が有つて参りました者で、此方へ参つてから、だしぬけに亡なりましたので」

甚「死んだのかえ」

新「へエ其処が、へエ何で、変になりましたので、へエ、何処へも参る処は無いのでございませうから、お宅を貸して下さつて商いでもさして下されば有難い事で、私は新吉と申す者で、何分親分御贔屓にお引立を願います」

甚「話は早いがいゝが、其処は江戸子だからのう、兄弟分の固めを仕なければならねえが、おいお前田舎は堅えから、己の弟分だと云えば、何様間違が有つたつてもお前他人にけじめを食う氣遣ねえ、己の事を云やア他人が嫌がつて居るくれえだからナ、其方の強身よ、さア兄弟分の固めをして、お互にのう」

新「ハイ有難うございます、何分どうか、其の替り身体で働きます事は厭いませんから、どんな事でも仰しやり付けて下さればお役には立ちませんでも骨を折ります」

甚「お前幾才だ」

新「へエ二十二でございます」

甚「色の白え好男だね、女が惚れるたちだね、酒が無えから兄弟分の固めには、先刻一燻したばかりだから、微温になつて居るが、此の番茶を替りに、己が先へ飲むから是を半分飲みな」

新「へエー有難うございます、恰ど咽喉も乾いて居りますから、エ、有難うございます、誠に私も力を得ました」

甚「おい兄弟分だよ、いゝかえ」

新「へエ」

甚「兄弟分に成つたから兄に物を隠しちやアいけねえぜ」

新「へエ」

甚「お互に悪い事も善い事も打明けて話し合うのが兄弟分だ、いゝか」

新「へエ」

甚「今夜土手で女を殺したのはお前だのう」

新「イ、エ」

甚「とぼけやアがるなエ 此畜生、云いねえ、云えよ」

新「な、何を被仰ので」

甚「とぼけやアがつて此畜生め、先刻鎌を出したら手前の面付は変つたぜ、殺したら殺したと云えよ」

新「何うもト、飛んでもない事を仰しやる、私は何うもそんな、外の事と違い人を殺すなぞと、苟にも私は、どうも此方様には居られません、へエ」

甚「居られなければ出て行け、さア居られなければ出て行きや、無理に置こうとは云わねえ、兄弟分になれば善い悪いを明しあうのが兄弟分だ、兄分の己の口から縛らせる氣遣ねえ、殺したから殺したと云えと云うに」

新「何うもそれは困りますね、何もそんな事を、何うも是は、何うも外の事と違いますがねエ、何うもへエ、人を殺すなぞと、そんな私ども、へエ何うも」

甚「此畜生分らねえ才槌だな、間拔め、殺したに相違ねえ、そんな奴を置くと村の難儀になるから、手前を追出す代りに、己の口から訴人して、踏縛つて代官所へでも役所

へでも引くから然う思え」

二十六

新「何うも私わたくしはもうお暇いとま致します」

甚「行きねえ、己が踏ふんじ縛ばるからいゝか」

新「そんな、何うも、無理を仰しやつて、私わたくしが何なんで、何うも」

甚「分らねえ畜生ちくせいだナ、手前てまえ殺したと打明けて云えよ、手前の悪事を、己は兄あにぶん分ぶんだから云う氣遣きづけはねえ、お互たがへに、悪事を云つてくれるなど隠し合かひあうのが兄きょうだい弟だい分ぶんのよしみだから、是つばかりも云わねえから云えよ、云わなければ代官所ひつぱへ引張ひっぱつて行くぞ、さア云え」

新「ヘエ、何うも、ち…些ちつとばかり、こ…殺ころしました」

甚「些とばかり殺す奴があるものかえ、女を殺して手前てまえ金を幾ら取つた」

新「幾らにも何も取りは致しません」

甚「分らねえ事を云うな、金を取らねえで何なんで殺した、金があるから殺して取つたらう、懐ふところに有つたらう」

新「金も何も無いので」

甚「有ると思つたのが無ねえのか」

新「ナニ然そうじやアございません、あれは私わたくしの女房でございます」

甚「分らねえ事を云う、ナニ此こ畜生ちきしよう、女房かゝあを何なんで殺した、外ほかに浮気な事でもして

邪魔になるから殺したのか」

新「ナニ然そうじやア無いので」

甚「何どう云う訳だ」

新「困りますナ、じやア私わたくしが打明けてお話致しますが、貴方決して口外して下さるな」

甚「なに、口外しねえから云えよ」

新「本当でげすか」

甚「為しないよ」

新「じやア申しますが実は私わたくしはその、殺す気も何もなく彼あそこ処へ参りますと、あれがその、

お化ばけでな」

甚「何がお化だ」

新「私わたくしの身体へ附つきま纏とうので」

甚「薄気味の悪い事を云うな、何が附纏うのだ」

新「詳しい事を申しますが、私は根津七軒町の富本豊志賀と申す師匠の処へ食客に居りますと、豊志賀が年は三十を越した女でげすが、堅い師匠で、評判もよかつたが、私が食客になりました、豊志賀が私の様な者に一寸岡惚をしたのでな」

甚「いやな畜生だ惚気を聞くんじやアねえ、女を殺した訳を云えよ」

新「それから私も心得違ひをして、表向は師匠と食客ですが、内所は夫婦同様で只ぶらくと一緒に居りました、そうすると此処へ稽古に参ります根津の総門内の羽生屋と申す小間物屋の娘がその、私に何だか惚れた様に師匠に見えますので」

甚「うん、それから」

新「それを師匠が嫉妬をやきまして、何も怪しい事も無いのにワク／＼して、眼の縁へポツリと腫物が出来まして、それが斯う膨れまして、こんな顔になり其の顔で私の胸倉を取つて惚気をしますから居られませんで、私が豊志賀の家を駈出した跡で師匠が狂い死に死にましたので、死ぬ時の書置に、新吉と夫婦になる女は七人まで取殺すと云う書置がありましたので」

甚「ふうん 執念深え女だな、成程ふうん」

新「それで、師匠が亡なくなりましたから、お久と云う土手で殺した娘が、連れて逃げてくれと云い、伯父が羽生村に居るから伯父を尋ねて世帯しよたいを持つと云うので、それなら田舎へ行つて、俱ともに夫婦になろうと云う約束で出て参つたので」

甚「出て来てそれから」

新「先刻さつぎあすこ彼処へ掛ると雨は降出します、土手を下りるにも、鼻を撮つままれるも知れませんが、真の闇で、すると、お久の眼の下へポツリと腫物できものみたような物が出来たかと思うと、見て居るうちに急に腫れ上りましてねえ、へエ、貴方死んだ師匠の通りの顔になりました、膝に手を付きまして私の顔わたくしをじいツと見詰めて居ました時は私は慄ぞつと致しましたので、へエ怖い一生懸命に私が斯こう鎌で殺す気も何もなんになく殺してしまつて見ると、其様そんな顔でも何なんでもないのです、私がしよつちゆう師匠の事ばかり夢に見るくらいでございますから、顔が眼に付いて居るので、殺す気もなくお久と云う娘を殺しましたが、綺麗な顔の娘そが然そう云うように見えたので、見えたから師匠が化けたと思つて、鎌でやつたので、へエ、やつぱり死んだ豊志賀たぐが崇たつて居りますので、七人まで取殺すと云うのだから私の手をもつて殺さしたと思うと、実に身の毛がよだちまして、怖かつたの何なんのと、其の時お前さんが来て泥坊、と襟首を掴んだから一生懸命に身を振払つて逃げ、まア宜いいと思うと、一軒家いっけんや

が有つたから来たら、やっぱり貴方の家へ来たから、泡をくつたのでねえ」

甚「ふうんそれじゃア其の師匠は手前に惚れて、狂死に死んで、外の女を女房にすれば取殺すと云う書置の通り崇つて居るのだな」

新「崇つて居るつたつて私の身体は幽霊が離れないのでへエ」

甚「気味の悪い奴が飛込んで来たな、薄気味の悪い、鎌を手前が持つて居るから悪いのだ」

新「鎌も其処に落ちて有つたので、其処へお久が転んだので、膝の処へ少し疵が付き、介抱して居るうち然う見えたので、それで無茶苦茶にやつたので、拾つた鎌です」

甚「そうか、此の鎌は村の者の鎌だ、そんならそれで宜いや、宜いが、おい幾ら金を取つたよう」

新「金は取りは致しません」

甚「女を連れて逃げる時、お前の云うにア小間物屋の娘だお嬢さんだと云うのだ、連れて逃げるにやア、路銀がなければいかねえから幾らか持出せと智慧を付けて盗ましたろう」

新「金も何も、私は卵塔場から逃げたので」

甚「気味の悪い事ばかり云やアがつて、何んで」

新「私は師匠の墓詣りに参りますと、お久も墓詣りに参つて居りまして、墓場でおやお久さんおや新吉さんかと云う訳で」

甚「そんな事は何うでもいゝやア」

新「それから逃げて私は一分三朱と二百五十六文、女は三朱と四十八文ばかり有つたので、其の外にはお花と線香を持つて居るばかり、それから松戸で一晩泊りましたから、些とばかり残つて居ります」

甚「一文なしか」

新「へエー」

二十七

甚「詰らねえ奴が飛込みやアがつたな、仕方がねえ、じゃアまア居ろ」

新「へエ何うぞ置いておくんなすつて、其の事は何うか仰しやつてはいけませんから」
甚「厄介な奴だ、畜生め、銭が無くて幽霊を脊負つて来やアがつて仕様がねえ、其処へ寝ろ」

と仕方が無いから其の夜は寝ましたが、翌朝から土鍋で飯は焚きまして、お菜は外から買つて来まして喰いますような事で、此処に居ます。甚藏はぶらく遊び歩きます。すると、此処から村までは彼是れ四五丁程もある土手下で、花や野菜物を担いで来たり、肥桶なぞをおろして百姓衆の休所で、

農夫「太左衛門何処へ行くだ」

太「今帰りよ」

農「そうか」

太「此間勘右衛門の所へ頼んで置いた、些とベエ午房種を貰うベエと思つてノウ」

農「然うか、何とハア此の村でも段々人氣が悪くなつて、人の心も變つたが、徳野郎あれはあのくれえ太え奴はねえノ」

太「あの野郎何でも口の先で他人を瞞して錢を借る事は上手だが、大けえ声では云えねえが、此処な甚藏は蝮野郎でよくねえ怖かねえ野郎でノウ」

太「今日は大分婆ア様を通るが何処へ行くだ」

農夫「三藏どんの処で法事があるで、此間此処に女が殺されて川へ投げ込まれて有つて、引揚げて見たら、守の中に名前書が這入つて居たので、段々調べたら三藏どんが家

の姪めいに当る女子おんなこで、母か様が継母まで、苛められて居られなくって尋ねて来ただが、些ちつとは小遣こづかいも持つて居ただが、泥坊どろぼうが附ついて来て突落つきおとして逃げたと云う訳で、三藏さんざうどんは親切な人で、引揚げて届ける所へ届けて、漸ようやく事済んで、葬りも済んで、今日は七日なぬかでお寺様へ婆ア様達を聘まじつて御馳走するてえので、久し振で米の飯が食えると云つて悦んで往きやしツけ、法藏ほうざうじ寺様へ葬りに成つただ」

太「然そうか、それで婆ア様ア悦んで行くのだ、久しく尋ねねえだが秋口は用が多えで此の間買った馬は二両五粒だが、高たけえ馬だ、見毛みけは宜いいが、何どうも膝ひざ頭こ突く馬で下り坂は危ねえの、噓くしゃみばかりして屁へベエたれ通して肉おっぴり出す程だによ、婆ア様に宜しく云つて下せえ、左様だら」

新吉は内で此の話はなしを聞いて居りましたが、お久を葬くわむつたと云うから参詣さんげいしなければ悪わるいと思おもひ、

新「もし〜」

農「あゝ魂たまげ消た、何処どこから出ただ」

新「私わたしは此処こゝに居いるので」

農「誰たれも居ねえと思つたが何なんだか」

新「只今お聞き申しましたが土手の脇で殺されました女の死骸は、何と云うお寺へ葬りになりました、三藏さんてえお方が追福なされると聞きました、何と云うお寺へ葬りしましたか」

農「法藏寺様てえ寺で、累の葬つてある寺と聞けば直に知れます」

新「へエー成程」

農「何だね、なに其様な事を聞くのか」

新「私は無尽のまじないに、なにそう云う仏様に線香を上げると無尽が当ると云うので、へエ有難う存じます」

と、是から段々尋ねて、花と線香を持つて墓場へ参りました。寺で聞けば宜しいに、己が殺した女の墓所、事によつたら、咎められはしないか、と脚疵で、手桶を提げて墓場でまご／＼して居る。

新「これだろう、これに違いない、是だ／＼、花を挿して置きさえすれば宜しい、何処へ葬つても同じだが、因縁とか何とか云うので、お久の伯父さんを便つて二人で逃げて来て、師匠の崇りで殺したくもねえ可愛い女房を殺したのだが、お久は此処へ葬りになり、己は、逃げれば甚藏が訴人するから、やっぱり羽生村に足を止めて墓詣に来られる。是も

やっぱり因縁の深いのだ。南無阿弥陀仏く、エ、と法ほう月げつ童どう女にょと、何なんだ是こゝは子供の戒名だ」

と、頻しきりにまご／＼して居る処へ、這入つて来ました娘は、二十才はたちを一つも越したかと言う年頃、まだ元服前の大島田、色の白い鼻筋の通つた二重ふたえまぶち瞼まぶちの、大柄ではございますが人柄の好い、衣装なりは常ふだん着ぎだから好よくはございせんが、なれども村方でも大だい尽しんの娘むすめと思おぼう拵こしらえ、一人付添つて来たのは肩の張つたお臀しりの大きな下婢おんな、肥ふとつちようで赤ら顔、手織ておりの单衣ひとえに紫むらさき中ちゆう形がたの腹はら合あの帯おビ、手桶てぶくろを提あげてヒヨコ／＼遣やつて来て、

下女こしら「お嬢様此方こしらへお出でなさえまし、此処こゝだよ、貴方あんたヨ待ちなさえヨ、私わし能よく洗せんうだからねえ、本ほん当とうに可あ哀い想そうだつて、己おらア且かつ那な様さま泣ないた事ことはないけれど、お久ひさ様さまが尋たずねて来て、顔かほも見みねえでおツ死ちんでしまつて憫あはれだつて泣ないただ、本ほん当とうに可あ哀い想そうに、南無阿弥陀なんむあみだ仏ぶつく／＼」

新あらた「これだ、え、少々物が承りとうございます」

下女こしら「何なんだかい」

新あらた「へエ」

下女こしら「何なんだかい」

新「真中ですとえ」

下女「イ、ヤ何だか聞くのは何だかというのよ」

新「へエと成程、この何ですかお墓は慥か川端で殺されて此の間お検死が済んで葬りになりました娘子様の御墓所でございますか」

下女「御墓所てえ何だか」

新「このお墓は」

下女「へエ此の間川端で殺されたお久さんと云うのを葬った墓場で」

新「へエ左様で、私にお花を上げさして拝まして下さいませんか」

下女「お前様知つて居る人か」

新「イ、エ無尽の呪咀に櫛の葉を三枚盗むと当るので」

下女「そう云う鬮引が当るのか、沢山花ア上げて下さえ」

新「へエく、有難う、戒名は分りませんが、あとでお寺様で承りましょう、大きに有難う」

と、ヒヨイと後へ下りそうにすると、娘が側に立って居りまして、ジロリと横目で見ると、新吉は二十二でも小造りの性で、色白の可愛気のある何処となく好い男、悪縁とは云

いながら、此の娘も、何うしてこんな片田舎にこんな好い男が来たろうと思うと、恥かしくなりましたから、顔を横にしながらか横眼で見る。新吉も美しい女だと思つて立止つて見て居りました。

二十八

新「もしお嬢さん、このお墓へお葬りになりました仏様の貴方はお身内でございますかえ」

娘「はい私の身寄でございます」

新「へエ道理でよく似ていらつしやると思いました、イエ何、あのよく似たこともあるもので、江戸にも此様事が有りましたから」

下女「あんた、何処に居るお方だい」

新「私はあの直き近処の者でげす、へエ土手の少し変な処に一寸這入つて居ります」
下女「土手の変な処でえ蒲鉾小屋かえ」

新「乞食ではございませぬ、其処に懇意な者が有つて厄介になつて居るので」

下女「そうかね、それだから些と遊びにお出でなさえ、直き此の先の三藏と云うと知れま
すよ、質屋の三藏てえば直き知れやす」

娘は頻りに新吉の顔を横眼で見惚れて居ると、何う云う事でございますか、お久の墓場
の櫛の挿して有る間から一匹出ました蛇の、長さ彼れ是れ三二尺ばかりもあるくちなわ
が、鎌首を立てゝズーツと娘の足元まで這つて来た時は、田舎に馴れません娘で、

娘「あツ」

と飛び退いて新吉の手へすがりつくと、新吉も恟りしたが、蛇はまた元の様に、墓の周
圍を廻つて草の茂りし間へ這入りました。娘は怖いと思ひましたから、思はず知らず飛退
く機みで、新吉の手へ縋りましたが、蛇が居なくなりましたから手を放せばよいのだが、
其の手が何時迄も放れません。思ひ内に有れば色外に躰われて、ジロリ、と互に横眼で見
合いながら、ニヤリと笑う情と云うものは、何とも申されません。女中は何も知りませ
んから、

下女「お前さん、在郷の人には珍らしい人だ、些とまた遊びに来て、何処に居るだえ、
エ、甚藏が処に、彼の野郎評判の悪い奴で、彼処に、そうかえ些と遊びにお出でなさえ、
嬢様お屋敷奉公に江戸へ行つてゝ、此の頃帰つても友達がねえで、話しても言葉が分んね

えて工、食物くいものが違つて淋しくつてなんねえテ、長く屋敷奉公したから種々いろくな芸事がある、三味さみイおつ引びいたり、それに本や錦絵があるから見にお出でなさえ、此の間見たが、本の間まに役者の人相書の絵が有るからね：雨が降つて来た」

新そこ「其処そこまで御一緒に」

娘「何どうせお帰り遊ばすなれば私わたくしの屋敷の横をお通りになりますから御一緒に、あの傘を一本お寺様で借りてお出でよ」

下女「ハイ」

と下女がお寺で番傘を借りて、是から相合傘あいぐがさで帰りましたが、娘は新吉の顔が眼先を離れず、くよくよして、兄に悟られまいと思つて部屋へ這入つて居ります。新吉の居場いばしよ処も聞いたがうつかり逢う訳に参りません、段々だんく日数ひかずも重ると娘はくよくよ鬱ふさぎ始めました。すると或夜日暮から降出した雨に、少し風が荒く降っかけましたが、門かど口ぐちから、

甚「御免なさいく」

三「誰だい」

甚「へエ旦那御無沙汰致しました」

三「お、甚藏か」

甚「へエ、からもう酷く降出しまして」

三「傘なしか」

甚「へエ傘の無いのでびしょ濡になりました、何うも悪い日和で、日和癡で時々だしぬけに降出して困ります…エ、お母様御機嫌よう」

三「コウ甚藏、お前もう能い加減に馬鹿も廃めてナ、大分評判が悪いぜ、何とかにも釣方で、お前の事も案じるよ、大勢に悪まれちやア仕方がねえ、名主様も睨んで居るよ」

甚「怖かねえ、からもう憎まれ口を利くから村の者は誰も私をかまっつて呉れませぬ、へエ、御免なすつて、え、此の間一寸嬢さんを見ましたが、え、彼はあのお妹御様で、器量で大柄で人柄の好いお嬢でげすね、お前さんが時々異見を云つて下さるから、何うか止してえと思うが、資本は無し借金は有るし何うする事も出来ねえ、此の二三日は何うにも斯うにも仕様がねえから、些と許り質を取つて貰いてえと思つて、此方様は質屋さんで、価値だけの物を借りるのは当然だ、然だが、些とくどいから上手を遣わなければならねえが、質を取つてお貰え申してえので」

三「取つても宜い何だい」

甚「詰らねえ此様な物で」

と三「尺の間へ挿んで来た物に巻いて有る手拭をくるくると取り、前へ突付けたのは百姓の持つ利鎌の錆の付いたのでございます。」

三「是か、是か」

甚「へえ是で」

三「此様な物を持って来たって仕様がねえ、買ったって百か二百で買える物を持って来て、是で幾許ばかり欲しいのだ」

甚「二十両なくつては追附かねえので、何うか二十両にね」

三「極りを云つて居るぜ、戯けるナ、お前はそれだからいけねえ、評判が悪い、五十か百で買える物を持って来て二十両貸せなんて工強迫騙りみた様な事を云つては困る、此様な鎌は幾許もある、冗談じゃアねえ、だから村にも居られなくなるのだよ」

甚「旦那、只の鎌と思つてはいけねえ、只の鎌ではねえ、百姓の使うただの鎌とお前さん見てはいけねえ」

三「誰が見たつて百姓の使う鎌だ、錆だらけだア」

甚「錆びた処が価値で、能つく見て、錆びたところに価値が有るので」

三「何う」

と手に把つて見ると、鎌の柄に丸の中に三の字の焼印が捺してあるのを見て、
 三「甚藏、是は己の家の鎌だ、此の間與吉に持たして遣った、是は與吉の鎌だ」
 甚「だから與吉が持つてればお前さんの処の鎌でしょう」

三「左様」

甚「それだから」

三「何が」

甚「何がって、旦那此の鎌はね、奥に誰も居やアしませんか」

三「誰も居やアせん」

甚「此の鎌に就いて何うしてもお前さんが二十兩私にくれて宜い、私の親切をネ、鎌は
 詰らねえが私の親切を買って」

二十兩何うしてもくれても宜い訳を話を致しますが、一寸一息吐きまして。

二十九

引続きまして申上げました羽生村で三藏と申すは、質屋をして居りまして、田地の七八

十石も持つて居ります可^かなりの暮^かしで、斯^か様に良い暮^かしを致しますのは、三右衛門と云う親父^{おやじ}が屋敷奉公致して居るうち、深見新左衛門に二拾兩の金を貰^つつて、死骸の這入りました葛籠^{つづら}を捨てまして国へ帰り、是^{こゝ}が資本^{もして}で只今は可^かなりに暮^かして居る。一体三藏と云う人は信実^{しんじつ}な人で、江戸の谷中七面前の下總屋と云う質屋の番頭奉公致して、事柄^{わが}の解^わつた男でございますから、

三「コウお前^{まえ}そう極^{きま}りで其様^{そん}な分らねえ事を云うが、己だから云うが、いゝか、何が親切^{せつてい}で何^どう云う訳^{わけ}が有^あつたつて草苅鎌^{くさぎり}を持つて来て二十兩金を貸せなどと云つて、村の者もお前^{まえ}を置いては為^{ため}にならねえと云う、此の間何^{なん}と云つた、私は此の村を離れましては何^ど処^{どこ}でも鼻撮^{はなつま}みで居^い処^{どころ}もございせんから、元の如く此の村に居られる様にして呉^{くれ}れと云うから、名主へ行つて話を^わして、彼^あれは外面^{うわべ}は瓦落^{がら}くして、鼻先^{はな}ばかり悪徒^{あくどう}じみて居^いりますが、腹の中はそれほど巧^{たくみ}のある奴^{やつ}では無いと、斯^こう己^{おれ}が執成^{とりな}して置いたから居^いられる、云はゞ恩人^{おんじん}だ、それを背^{そむ}くかお前^{まえ}、何^{なん}で鎌^{かま}を、何^どう云う訳^{わけ}で親切^{せつてい}などと下^{くだ}らぬ事を云^いうんだえ」

甚^お「それなら打明^{うちあ}けてお話^わ申^ましますが此の間松村^{まつむら}で一寸^{ちよつと}小博奕^{こぼやくち}へ手^てを出して居るとだしぬけに御用^{ごよう}と云うのでバラ／＼逃^にげて入江^{いりえ}の用水^{ようすい}の中へ這^は入^いつて、水^{みづ}の中を潜^{くぐ}り込んで

土手下のボサツカの中へ隠れて居ると、其処で人殺しがあり、キアツと云う女の声で、私も薄気味が悪いから首を上げて見たが暗くつて訳が分らず、土砂降だが、稲光がピカ／＼する度時々斯う様子が見えると、女を殺して金を盗んだ奴がある、宜うがすか、判然分りませんが、其の跡へ私が来て見ると、此の鎌が落ちて居る、此の鎌で殺したか、柄にベツタリ黒いものが付いて有るのは血じみサ、取上げて見ると丸に三の字の焼印が捺して有る、宜うがすか、旦那の家の鎌、ひよつとして他の奴が、此の鎌が女を殺した処に落ちて有るからにやア此の鎌で殺したと、もしやお前さんが何様な係り合になるめえ物でもねえと思ひ、幸い旦那の御恩返しと思つて、私が拾つて家へ歸つて今迄隠して居た、宜うがすか、お前さんの処で死骸を引取つて己の家の姪と云うので法事も有つたのだから、お前さんの処で女を殺して物を取つた訳はねえが、悪い奴が拾いでもすると、お前さんは善い人と思つては居るが、そう村中みんなお前さんを誉める者ばかりじゃアねえ、其の中には五人や八人は彼様になれる訳はねえと、工面が良いと憎まれる事も有りましたよ、それから中には悪く云う奴もある私と斯う中好く、お前さんは江戸に奉公して江戸子同様と云うので、甚藏や悪い事はするナ、と番毎に斯う云つてお呉んなさるは有難えと思つて居るが、私がお前さんに平生お世話に成つて居りますから、娘を殺して金を取るような人でね

え事は知つて居りますが、宜うがすか、お前さんと若し私が中が悪くつて、忌々しい奴だ、何うかしてと思つて居れば、私が鎌を持つて、斯うだ此の鎌が落ちて有つた是は三藏の処の鎌だと振廻して役所へでも持出せば、お前さんの腰へ否でも縄が付く、然うでないまでも、十日でも二十日でも身動きが出来ねえ、然うすりやア年をとつたお母様はじめ妹も心配だ、其の心配を掛けさせ度くねえからねえ、然う云う馬鹿があるめえもので、御も心配だ、其の心配を掛けさせ度くねえからねえ、然う云う馬鹿があるめえもので、もねえのサ、私などは随分遣り兼ねえ性質だ、忌々しいと思えば遣る性質だけれども、御恩になつて居るから、旦那が殺したと思う氣遣もねえけれども、理屈を付ければまア何うでもなるのサ、彼様に身代のよくなるのも、些とは悪い事をして居るだろうぐらいの話をして居る奴もあるから、殺した跡で世間体が悪いから、死骸でも引取つて、姪とか何とか名を付けて、とい巾いをしなければ成るめえと、さ、訝しく勘繰るといかねえから、他人に拾われねえ様に持つて来たのだから、十日でも二十日でも留められて、引出され、ば入費が掛ると思つて、只私の親切を二十両に買つておくんなさりやア、是で博奕は止るから、ねえモシ旦那

三「コレ、甚藏、然う汝が云うと己が殺して死骸を引取つて、葬りでもした様に疑つて、訝しくそんな事を云うのか」

甚「お前さんめえ私が然わう思うくれえなら、鎌は振廻して仕舞わア、大きな声じやア云えねえが、是は旦那世間の人に知れねえように、私が黙もつて持つて居るその親切を買かつて二十両、ね、もし、鎌は詰つらねえが宜いうがすか、お前さんめえと中ちゆうが悪わるければ、酷ひどい畜ちきしやう生なまだなんて遣やり兼ねえ性質たぢだが、旦那にやア時々小遣こづけえを貰もらつてる私だから、何なんとも思おもやアしねえがネ、厭いやに世間の人が思うから鎌を拾ひろつて持つて来た、其の親切を買かつて、え、旦那、お前さんめえ否いやと云いえば無理にやア頼たのまねえが、私は草苜鎌を二十両に売ろうと云う訳ではねえのサ、親切めいずくだからネ、達たつてとは云いわねえ、そうじやアねえか、此の村に居いてお前めえの呼い吸きが掛からなけりやア村にも居いられねえ、其の時はいやに悪わるい仕事をして逃にげる、そうなりやア何どうでも宜いいやア、ねえ、否いやでげすか、え、もし」

と厭からに絡かんで云いいが、りますも、蝮まむしと緋名あだなをさされる甚藏しんざうでございますから、うつかりすれば喰く付けかれますゆえ、仕方なく、

三「詰つらぬ口を利きかぬが宜いいぜ、金は遣やるから辛抱しんぱうをしねえよ」

とただ取とられると知しりながら、二十両の金を遣やりまして甚藏しんざうを帰かへりますと、其の夜よ三藏さんざうの妹あなお累るいが寝ねて居いります座敷へ、二尺余りもある蛇へびがな出でました。九月中旬ななかばになりましたは田舎でも余り蛇は出でぬものでございますが、二度程出でましたので、墓場むらばで驚おどきましたから

何が出てても蛇と思ひ只今申す神経病、

累「アレー」

と駈出して逃る途端母親が止め様とした機、田舎では大きな囲炉裏が切つてあります、上からは自在が掛つて葉罐の湯が沸つて居た処へ双に反りまして、片面から肩へ熱湯を浴びました。

三十

お累が熱湯を浴びましたので、家中大騒ぎで、医者を呼びまして種々と手当を致しましたが何うしてもいかんもので、火傷の痕が出来ました。追々全快も致しましょうが、二十一二になる色盛の娘、顔にポツリと腫物が出来ましても、何うしたら宜かろうなどと大騒ぎを致すものでございますのに、お累は半面紫色に黒み掛りました上、片鬢など大騒ぎを致すものから、当人は素より母親も心配して居ります。兀るようになりましたから、

累「あゝ情ない、この顔では此の間法蔵寺で逢つた新吉さんにもう再び逢う事も出来ぬ」と思ひますと是が氣病になり、食も進まず、奥へ引籠つたきり出ません、母親は心

配するが、兄三藏は中々分つた人でございますから、

三「お母様、えーお累は何様な塩梅でございますねえ」

母「はアただ胸が支えて飯が喰えねえつて幾ら勧めても喰えねえ〜と云う、疲れるとかねえから些と食つたら宜かんべえと勧めるが、涙ア翻して己ア此様な顔に成つたから駄目だ、何うせ此様な顔になつた位えなら、おツ死んだ方が宜え。と其様な事べえ云つてハア手におえねえのサ、もつと大え負傷アして片輪になる者さえあるだに、左様心配しねえが宜えと云うが、彼は幼つけえ時から内気だから、ハア、泣ことばかりで何うしべえと思つてよ」

三「困りますね私も心配するなど云い聞せて置きますが、何う云うものか彼処へ引籠つた切りで、気が霽れぬから庭でも見たら宜かろうと云うと、彼処は薄暗くつて病気に宜うございますからと云いますが詰らん事を気に病むから何うも困ります」

と話をして居ります。折から、お累は次の間の処へ参りましたから、

母「お、此方へ出るとよう、出な」

三「あ、漸と出て来た」

母「此方へ来てナ、畑の花でも見て居たら些たア気が霽れようと、今兄どんと相談して

居たゞ、えゝ、さア此処へ坐つてヨウ、よく出て来いッけナ、心配してはいけぬ、気を晴らさなければいかねえヨウ、兄どんの云うのにも、火傷しても火の中へ坐燻つたではねえ、湯気だから段々癒るとよ、少しぐれえ薄く痕が付くべえけれども、平常の白粉を着ければ知れねえ様になり段々薄くなるから心配しねえがえゝよ」

三「お前お母さんに斯う心配を掛けて、お母様がお食を勧めるのにお前は何故喫べない、段々疲れるよ、詰らん事をくよくよしてはいけませんよ、お前と私と是れから只た一人のお母様だから孝行を尽さなければならぬのに、お前がお母様に心配を掛けちやア孝行に成りません、顔は何様なに成つたつて構わぬ、それならば片輪女には亭主がないと云うものでも有るまい、何様な跛でもてんぼうでも皆な亭主を持つて居ります、えゝ火傷したくらいで気落して、お飯も喫べられないなんて、氣落してはなりません、お母様が勧めるからお食いなさい、喫べられないなんて其様な事はありませんよ」

母「喫べなせえヨウ、久右衛門どんが、是なれば宜かろうつて水街道へ行つて生魚を買つて来たゞ、随分旨い物だ常なら食べるだけけれど、やア食えよウ」

三「お喫りなさい何う云う様子だ、容体を云いなさい、えゝ、何か云うとお前は下を向いてホロ／＼泣いてばかり居て、お母様に御心配かけて仕様がなないじやアありませんか、

え、十二三の小娘じやアあるまいし、よウ、え、何う云うものだ」

母「そんなに小言云わねえが宜えつてに、其処が病えだからハア手におえねえだよ、兄
どの側に居ると小言を云われるから己が側へ来い、さア此方へ来い、く」

と手を引いて病間へ参ります。三藏も是は一通りの病気ではないと思ひますから。

三「おせな」

下女せな「ヒえー」

三「何の事た、立つて居て返辞をする奴が有るものか」

せな「何だか」

三「坐りな」

せな「何だか、呼るのは何だかてえに」

三「コレ家のお累の病気は何うも火傷をした許りでねえ、心に思う処が有るのでそれが
気になつてからの煩いと思つて居るが、汝お久の寺詣に行つた帰りは遅かつたが、年
頃で無理じやアねえから他処へ寄つたか、隠さずと云いな」

せな「ナアニ寄りは為ません、お寺様へ行つてお花上げて拜んで、雨降つて来たからお
寺様で借べえつて法藏寺様で傘借りて帰つて来ただ」

三「汝てめえなぜ隠す」

せな「隠すにも隠さねえにも知んねえノ」

三「主人に物を隠すような者は奉公さしては置きません、なぜ隠す、云いなよ」

せな「隠しも何どうもしねえ、知んねえのに無理な事を云って、知って居れば知って居るって云うが、知んねえから知んねえと云うんだ」

三「コレ段々お累を責めて聞くに、実は兄にいさん様濟まないが是々と云うから、なぜ早く云わんのだ、年頃で当あたりまえ然さの事だ、と云って残らず打明けて己に話した、其の時はおせなが一緒に行つて斯こうくと残らず話した、お累が云うのに汝てめえは隠して居る、汝はなぜ然そうだ、幼ちいさうちい中から面倒を見て遣やつたのに」

せな「アレまア、何なんて云うたろうか、ようお累様ア云つたか」

三「皆みんなな云つた」

せな「アレまア、汝われせえ云わなければ知れる氣遣きづけえねえから云うじやアねえよと、己おらを口止くちどめして、自分からおツ饒舌ちやべるつて、何なんてえこつた」

三「皆みんなないいな、有ありてい体に云いな」

せな「有体ありていツたつて別に無ねえだ、墓参りに行つて年頃二十三になる好いいい男が来て居て、

お前めえさん何処どこの者だと云つたら江戸の者だと云つて、近処きんじよに居る者だがお墓参りして無
 尽くじびき引まじねの呪まじねえにするつて、エー、雨降つて来たから傘借りてお累さんと二人手え引きな
 がら帰けえつて来て、お累さんが云うにやア、おせな彼様あんな好いいい男おとこは無ねいやア、彼様あんな柔やさしげ
 な人はねえ、己おれがに亭主ていしを持たせるなれば彼あア云う人を亭主ていしに持度もちたいと云つて、内所で云
 う事が有つたけえ、其うちの中に火傷やけどしてからもう駄目めだ彼あの人ひとに逢あいたくもこんな顔になつ
 ては駄目めだつて、それから飯いひも喰くえねえだ」

三「然そうか何どうも訝おかしいと思つた、様子がナ、汝てめえに云われて漸ようやく分つた」

せな「あれ、横着者よこぢきものめ、お累様お累様云わねえのか」

三「なにお累お累が云うものか」

せな「彼あれだアもの、累お累も云つたから汝てめえも云えつてえ、己おれに云わして己おれ云つたで事が分つ
 たてえ、そんな事があるもんだ」

三「騒々さわさわしい、早く彼方あつちへ往いけよ」

とこれから村方に作右衛門と云う口利くちぎが有ります、これを頼んで土手の甚藏しんざうの処へ掛
 合あいに遣やりました。

三十一

作「御免なせえ」

甚「イヤお出でなせえ」

作「ハイ少し相談ぶちに参りましたがなア」

甚「能くお出なせえました」

作「私頼まれて少し相談ぶちに参つたが、お前等の家に此の頃年齢二十二三の若色の白え江戸者が来て居ると云う話、それに就いて少し訳あつて参つた」

甚「左様で、出ちやアいけねえ引込んで居ねえ」

新吉は薄気味が悪いから蒲団の積んで有る蔭へ潜り込んで仕舞いました。

甚「へエ、な、何です」

作「エ、今日少しな、訳が有つて三藏どんが己が処え頭を下げた来て、儲作右衛門どん、何うも他の者に話をしては迎も埒が明かねえ、一人一人は大事な者なれども、何うも是非がねえから無理にも始末を着けなければなんねえから、お前等をば頼むと云うまア一づ訳になつて見れば、己も頼まれ、ば後へも退けねえ訳だから、己が五十石の田地をぶち放

つても此の話を着けねばなんねえ訳に成ったが其の男の事に付いて参つただ」

甚「へエーそれで、其の男と云うなア身寄でも親類でもねえ奴ですが、困るてえから私の処に食客だけけれども、何を不調法しましたか、旦那堪忍しておくんえ、田舎珍らしいから、柿なんぞをピヨコく取って喰いかね、え奴だが、何でしょうか生理にするなどというと、私も人情として誠に困りますがねえ、何を悪い事をしたか、何云う訳ですえ」

作「誰が柿イ取つたて」

甚「食客が柿を盗んだんでしよう」

作「柿など盗んだ何のと云う訳でねえ、それでねえ、それ、お前知って居るが、三藏どの妹娘は屋敷奉公して帰つて来て居た処、お前等家のノウ、其の若え男を見て、何処かで一緒になつたで口でもきく合つた訳だんべえ、それでまア娘が気に、彼ア云う人を何卒亭主に為たいとか内儀になりてえとか云う訳で、心に思つても兄さまが堅えから八釜しい事云うので、処から段々胸へ詰つて、飯も食はずに泣いてばかり居るから、医者どもも見放し、大切の一人娘だから金えぶつ積んでも好いた男なら貰つて遣りてえが、他の者では頼まれねえが、作右衛門どん行つてくれと云う訳で、己が媒人役しなければな

んねえてえ訳で来ただ」

甚「そんなら早くそう云つてくれ、ば宜いに、胆を潰した、私は柿でも盗んだかと思つて、そうか、それは有難え、じゃア何だね、妹娘が思い染めて恋煩いで、医者も見放すくれえで、何うでも聃に貰おうと云うのかね、是は有難え、新吉出や、ア此処へ出る、ごうぎな事をしやアがった、此処へ来や、旦那是は私の弟分、分で新吉てえます、是は作右衛門さんと云うお方だな、名主様から三番目に坐る方だ、此の方に頭を押えられちやア村に居憎いやア、旦那に親昵になつて置きねえ」

新「へエ初めまして、私は新吉と申す不調法者で、お見知り置かれまして御鼻貞に願います」

作「是はまずく、お手をお上げなすつて、まずく、それでは何うも、エ、石田作右衛門と申して至つて不調法者で、お見知り置かれやして、此の後も御別懇に願えます」

甚「旦那、其様な町、寧な事を云つちやアいけねえ、マア早い話が宜い、新吉、三藏さんと云つてな、小質を取つて居る家の一人娘、江戸で屋敷奉公して十一二年も勤めたから、江戸子も同じ事で、器量は滅法好い娘だ、宜いか、其のお嬢さんが手前を見てからくよ、と恋煩いだ、冗談じゃアねえ、此畜生め、え、こう、其の娘が塩梅が悪いんで、

手前に逢わねえじやア病に障るから貰もれえてえと云う訳だ、有ありがて難え、好か、あい女房を持つのだ、手前運が向いて来たのだ」

新「成程、三藏さんの妹娘で、成程、存じて居ります、一度お目に掛りました、然そう云つて来るだろうと思つて居た」

甚「此畜生、生意気な事を云やアがる、増長して居やアがる、旦那腹てめえうぬぼれア立つちやアいけねえ、若わけえからうっかり云うので、大層を云つて居やアがらア、手前てめえうぬぼれ己惚るな、男が好いたつて田舎だから目に立つのだ、江戸へ行けば手前の様な面はいけえ事有らア、此様こんな田舎だから少し色が白いと目に立つのだ、田舎には此様な色の黒い人ばかりだから、イヤサお前めえさんは年をとつて居るから色は黒いがね、此様な有ありがて難え事はねえ、冗談じやアねえ」

新「誠に有難い事でございます」

作「私わしもヤアぶち出し悪にくかつたが、お前様めえさまが承知なら頼まれげえが有つて有ありがて難えだ、然そうなれば私わしイ及おばずながら媒なこうど灼する了簡だ、それじやア大丈夫だろうネ、仔細しせえね無えね」
甚「へエ仔細しせえ有りません、有りませんが困る事には此の野郎の身体に少し借金が有るね」
作「なに借財が」

甚「へエ誠に何うもね、これが向が堅氣でなければ宜いが、彼ア云う三藏さん、此の野郎が行きそうく方々から借金取が来て、新吉にくくと居催促でもされちやア、此の野郎も行った当坐極りが悪く、居たたまらねえで駈出す風な奴だから、行かねえ前に綺麗薩張借金を片付けければ私も宜し、宜うがすか、私が請人になつて居るからね、其の借金だけは向で払つてくれましようか」

作「でかく有れば困るが何のくれえ」

甚「何のくれえたつて、なア新吉、彼方へ縁付いてから借金取が方々から来られちやア極りが悪いやア、其の極りを付けて貰うのだから借金の高を云いねえよ、さ、借金をよう」

新「へエ借金は有りません」

甚「何を云うのだ」

新「へエ」

甚「隠すな、え借金をよう」

新「借金はありません」

甚「分らねえ事を云うな、此の間もゴタく来るじゃアねえか」

三十二

甚「手前てめえこゝ此処に居るのたア違わア、三藏さんの親類になるのだ、それに可愛いお嬢さんが塩梅が悪くつて可哀想だから貰うと云うのだ、手前を貰わなければ命に障るでえし大事な娘の貰うのだから、借金が有るなれば有ると云つて、借金を片付けて貰えるからよ、然そうして仕度したくして行かなければならねえ、借金が有ると云え、エ、おい」

新「ヘエ、成程、ヘエ、成程、それは気が付きませんでした、成程是は、随分借金は有るので、是で中々有るので」

甚「有るなれば有ると云え、よう幾らある」

新「左様五両ばかり」

甚「カラ何どうも云う事は子供でげすねえ、幾らア五拾両、けれども、エ、と、二拾両ばかり私わっちが目の出た時けえ返して、三拾両あります」

作「ほう、三拾両、巨でけえなア、まア相談ぶつて見ましよう」とこれから帰つて話をする、

三「相手が甚藏だから其の位の事は云うに違いない、宜よろしい、其の代り、土手の甚藏が

親類のような気になつて出這入ではいりされては困るから、甚藏とは縁切えんきりで貰おう」

と云い、甚藏は縁切でも何でも金さえ取ればいゝ、と話が付き、先まず作右衛門が媒妁人なこうどで、十一月三日に婚礼致しました。田舎では妙なもので、婚礼の時は餅を搗つく、村方の者は皆来て手伝をいたします。媒妁人が三々九度の盃をさして、それから、村で年重としかさな婆アさんが二人来て麦搗むぎつきうた唄を唄います。「目出度めでたいものは芋いもの種」と申す文句でございませぬ。「目出度めでたいものは芋の種葉あまた広く茎長く子供夥多あまたにエ、」と詰らん唄で、それを婆アさんが二人並んで大きな声で唄い、目出度祝めでたくゆくして帰る。これから新吉が花婿の床入とこいりになる。ところが何時いつまでたつても嫁お累が出て来ませんので、極りが悪いから嫌われたかと思ひまして、

新「もう来そうなもの」

と見ると屏風びょうぶの外あんどうに行燈あんどうが有ります。その行燈の側に、鬻ふぎいで向むこうを向いて居るから、新「何なんだね、其処そこに居るのかえ、冗談じやアない、極りが悪いねえ、何どうしたのだえ、間まが悪いね、其処そこに引込ひっこんで居ては極りが悪い、此方こつちへ来て、よう、私は来たばかりで極りが悪い、お前まへばかり便たよりに思うのに、初めてじやアなし、法藏寺で逢つて知つて居るか、先刻さつきお前まへさんが白い綿帽子かぶを冠かぶつて居たが、田舎は堅いと思つて、顔みを見度たいと思つ

ても、綿を冠つて居るから顔も見られず、間違じやアねえかと思ひ、心配して居た、早く来て顔を見せて、よう、此方へ来ておくれな」

累「こんな処へ来て下すつて、誠に私はお気の毒様で先刻から種々考へて居りました」
 新「気の毒も何もない、土手の甚藏の云うのだから、訳も分らねえ借金まで払つて、お兄さんが私の様な者を貰つて下すつて有難いと思つて、私はこれから辛抱して身を堅める了簡で居るからね、よう、傍へ来てお寝な」

累「作右衛門さんを頼んで、お嫌ながらいらして下すつても、私の様な者だから、もう三日もいらつしやると、愛想が尽きて直きお見捨なさろうと思つて、そればかり私は心に掛つて、悲しくつて先刻から泣いてばかり居りました」

新「見捨てるにも見捨てないにも、今来たばかりで、其様な詰らんことを云つて、私は身寄便もないから、お前の方で可愛がつてくれ、ば何処へも行きます、見捨てるなどと此方が云う事で」

累「だつて私はね、貴方、斯んな顔になりましたもの」

新「エ、あの私はね、此様な顔と云う口上は大嫌いなので、ド、何んな顔に」

累「はい此の間火傷を致しましてね」

と恥かしそうに行燈あんどうの処へ顔を出すのを、新吉が熟々つく／＼見ると、此の間法蔵寺で見たとは大違い、半面火傷の傷、額ひたえから頬へ片鬢かたびん拔上りぬけあがまして相が變つたのだから、あつと新吉は身の毛立ちました。

新「何うして、お前まへまア恐ろしい怪我をして、エ、なに何なんだか判然はつきりと云わなければ、もつと傍へ来て、え、囲炉裡いろりへ落ちて、何うも火傷するたつて、何うも恐ろしい怪我じゃアないか、まアえ、」

と云いながら新吉は熟々と考えて見れば、累が淵で殺したお久の為には、伯母に當るお累の処へ私が、養子に来る事になり、此の間まで美しい娘が、急に私と縁組をする時になり、此様な顔形かおかたちになると云うのも、やつぱり豊志賀たし、しようが崇り性を引いて、飽くまでも己おれを怨む事か、ア、飛んだ処へ縁付いて来た、と新吉が思いますと、途端に、ざら／＼と云う、屋根裏で厭いやな音が致しますから、ヒヨイと見ると、縁側の障子が明いて居ります、と其の外は縁側で、茅葺かやぶき屋根の裏に弁慶と云うものが釣つてある。それへずぶりと斜はすに挿さして有るは草薙鎌、甚藏が二十両に売付けた鎌を與助と云う下男が磨澄とぎすまして、弁慶へ挿して置いたので、其の鎌の処へ、屋根裏を伝わって来た蛇まとが纏まとい付き、二三度搦からまりました、すると不思議なのは蛇がポツリと二つに切れて、縁側へ落ると、蛇の頭は胴から切

れたなりに、床の処へ這入って来た時は、お累は驚きまして、

累「アレ蛇が」

と云う。新吉もぞつとする程身の毛立つたから、煙管を持って蛇の頭を無暗に撲つと、蛇の形は見えませんでした。怖い紛れにお累は新吉に縋り付く、その手を取って新枕、悪縁とは云いながら、たった一晚でお累が身重になります。これが怪談の始でございます。

三十三

新吉とお累は悪縁でございますが、夫婦になりましたからは、新吉が改心致しました、と申すのは、熟々考えれば唯不思議な事で、十月からは蛇が穴に入ると云うに、十一月に成つて大きな蛇が出たり、又先頃墓場で見た時、身の毛立つ程驚いたのも、是は皆心の迷で有つたか、あゝ見えたのは怖い〜と思う私が氣から引出したのか、お累も見たと云い殊に此の家は累が淵で手に掛けたお久の縁合、其の家へ養子に来ると云うは、如何なる深き因縁の、今まで数々罪を作つた此の新吉、是からは改心して、此家を出れば外に身寄便も無い身の上、お累が彼様な怪我をすると云うのも皆私故、これは女房お累を可愛

がり、三藏親子に孝行を尽したならば、是までの罪も消えるであろうと云うので、新吉は薩張さつぱりと改心致しました。それからは誠に親切に致すから、三藏も、

三「新吉は感心な男だ、年のいかんに似合わぬ、何なんにしる夫婦中さえ宜よければ何より安心、殊に片輪のお累を能く目よを掛けて愛してくれる」

と、家内は睦むつましく、翌年になりますと、八月が産月うみつきと云うのでございますから、先高ますい処へ手を上げてはいかぬ、井戸端へ出てはならぬとか、食物しょくもつを大事に為しなければならんと、初子ういごだから母も心配致します。と江戸から早飛脚はやびきやくで、下谷大門町の伯父勘藏が九死一生で是非新吉に逢いたいと云うのでございますが、只今の郵便の様には早く参りませんから、新吉も心配して、兄三藏と相談致しますと、たった一人の伯父さん、年が年だから死水しにみずを取るが宜いいと、三藏は気の付く人だから、多分の手当をくれましたから、暇いとまを告げ出しゅったつ立たを致しまして、江戸へ着いたのは丁度八月の十六日の事でございます。長屋の人が皆寄り集つて看病致します。身寄便もない、女房はなし、歳は六十六になります爺おやじで、一人で寝て居りますが、長屋に久しく居る者で有りますから、近所の者の丹精で、漸よ々うくに生延びて居ります処、

男「オヤ新吉さんか、さア〜何卒どうぞお上りあがなすつて、おかね、盥たらひへ水いを汲んで、足をお

洗わし申して、荷や何かは此方へ置いて、能くお出なすつた、お待申しておりました、さア此方へ」

新「へエ何うも誠に久しく御無沙汰致しました、御機嫌宜しゆう、田舎へ引込みましてからは手紙ばかりが頼りで、頓と出る事も出来ません、養子の身の上でございませぬから、此の度は伯父が大病でございまして、さぞお長屋の衆の御厄介だろうと思ひ、実は彼方の兄とも申し暮しておりました、急いで参る積でございませぬが何分にも道路が悪うございまして、撈取りませんで遅う成りました」

男「何う致しまして、大層お見違え申す様に立派にお成りなすつて、お噂ばかりでね、伯父さんも悦んでね、彼も身が定まり、田舎だけれども良い処へ縁付き、子供も出来たつてお噂ばかりして、実に何うも一番古くお長屋にお住いなさるから、看病だつて届かぬながら、お長屋の者が替りく来て見ても、あゝ云う気性だから、お前さんばかり案じて、能くマア早くお出なすつた、さア此方へ」

新「へエ、是はお婆さん、其の後は御無沙汰致しました」

婆「おやまあ誠に暫く、まあ、めつきり尤らしくおなりなすつたね、勘藏さんも然う云つて居なすつた、彼も女房を持ちまして、児が出来て、何月が産月だつて、指を折つて楽

みにして、病氣中もお前さんの事ばかり云つて、外ほかに身寄親類はなし、手許てもとへ置いて育てたから、新吉はたった一人の甥おいだし、子も同じだと云つて、今もお前さんの噂をして、樂みにしておいでなさるからね、此度こんどばかりはもう年が年だから、大した事はない様だが、長屋の者も相談してね、だけでも養子では有るし、お呼び申して出て来て、何だなん是つばかりの病氣に、遠い処から呼んでくれなくも宜よさそうなもんだなどと云つて、長屋の者も余りだと、新吉さんに思われても、何だなんと云つて、長屋の者、行事の衆と種々いろく相談してね、私の夫うちの云うには、然そうでない、年が年だからもしもの事が有つた日にやア、長屋の者も付いて居ながら知らして呉れそうなもの、又新吉さんに思われても成らんとか何なんとか云つて、長屋の者も心配して居て、能よくねえ、何どうも、然ううだつて、大層だつてね、勘藏さんがねえ、彼あれもマア田舎へ行つて結構な暮しをして、然ううだつて、前の川へ往いけば顔も洗え鍋釜も洗えるつてねえ、噂を聞いて何みうか見度みいと思つて、あの畑へ何か蒔まいて置けば出来るつてねえ、然ううだつて、まアお前さんの氣性で鍬くわを把とつて、と云つたら、なアに鍬は把むらない、向むこは質屋そこで其その処この旦那様に成つたつてね、と云うからおやそう田舎にもそう云う処こが有るのかねえなんてね、お噂をして居ましたよそれにね」

男「コレサお前一人しやべで喋しゃべつて居ちやアいけねえ、病人に逢あわせねえな」

婆「さア此方へ」

新「へエ有難う」

と寝て居る病間へ通つて見ると、木綿の薄ッペらな五布布団いつのぶとんが二つに折つて敷いて有り
ます上に、勘藏は横になり、枕に坐布団をぐるぐる巻いて、胴中どうなかから独楽こまの紐で縛つて、
括り枕くくの代りにして、寝衣ねまきの単物ひとえものにぼろ裕あわせを重ね、三尺帯を締めまして、少し頭痛が
する事もあると見えて鉢巻はちまきとしては居るが、禿頭かぶで時々すべ辻つては輪なりの形で抜けますから手
で嵌はめて置おきますが、箆たがの様でございます。

新「伯父さんく」

勘「あい」

新「私だよ」

男「勘藏さん、新吉さんが来たよ」

勘「有難ありがてえく、あゝ待つて居た、能よく来た」

新「伯父さんもう大丈夫だよ、大きに遅くなつたがお長屋の方が親切に手紙よこを遣して下
すつたから取敢とりあえず来たがねえ、もう私が来たから案じずに、お前氣丈夫にしなければな
らねえ、もう一遍丈夫に成つてお前に樂をさせなければ濟まないよ」

勘「能く来た、病気はそう呼びに遣る程悪いんじやアねえが、年が年だから何卒呼んでおくんせえと云うと、呼んじやア悪かろうの何だの彼だのと云って、評議の方が長えのよ、長屋の奴等ア気が利かねえ」

新「これサ、其様な事を云うもんじやアねえ、お長屋の衆も親切にして下すつて、遠くの親類より近くの他人だ、お長屋の衆で助かったに、其様な事を云うもんじやアねえ」

三十四

勘「お前はそう云うが、ただ枕元で喋るばかりで些とも手が届かねえ、奥の肥つたお金さんと云うかみさんは、己を引立つて、虎子へしなせえつてコウ引立つて居てズンと下すから、虎子で臀を打つので痛えやな、あゝ人情がねえからな」

新「其様な事を云うもんじやアねえ、何でもお前の好きな物を食べるが宜い」

勘「有難え、もうねえ、新吉が来たから長屋の衆は帰ってくれ」

新「其様な事を云うもんじやアねえ」

長屋の者「じやア、マア新吉さんが来たからお暇致します、左様なら」

新「左様ですか、何うも有難うございます、お金さん有難うお婆さん有難う、へエ大丈夫で、又何うか願います、へエ、なにお締めなさらんでも宜しゆう、伯父さん長屋の人がねエ、親切にしてくれるのに、彼様な事を云うと心持を悪くするといかねえよ」

勘「ナアニ心持を悪くしたつて構うものか、己の頑固は知って居るしなあ、能く来た、一昨日から逢いたくつてく堪らねえ、何卒して逢いてえと思つて、もう逢えば死んでも宜いやア、もう死んでも宜い」

新「其様な事を云わずに確かりして、よう、もう一遍丈夫になつて駕籠にでも乗せて田舎へ連れて行つて、暢気な処へ隠居さしてえと思ふのだ、随分寿命も延々するから彼方へお引込みよう」

勘「独身で煙草を刻んで居るも、骨が折れてもう出来ねえ、ア、お前嫁に子供が出来たてえが、男か女か」

新「何だか知れねえ是から生れるのだ」

勘「初めては女の児が宜い、お前の顔を見たら形見を遣ろうと思つてねえ、己は枕元へ出したり引込ましたりして、他人に見られねえ様に布団の間へ挿込んだり、種々な事をして見付からねえように、懐で手拭で包んだりして居た」

新「まだく大丈夫だよ伯父さん、だけれども形見は生きているうち貰って置く方が宜い、形見だつて何をお前がくれるのだから知れねえが、何だい、大事にして持つよ」

勘「是を見てくんねえ」

と布団の間から漸く引摺出したは汚れた風呂敷包。

勘「これだ」

新「何だい」

と新吉は僅少の金でも溜めて置いて呉れるのかと思ひまして、手に取上げて見ると迷子札。

新「何だ是は迷子札だ」

勘「迷子札を今迄肌身離さず持つて居たよ、是が形見だ」

新「是はいゝやア、今度生れる子が男だと丁度いゝ、若し女の子か知らないが、今度生れる坊のに仕よう」

勘「坊なぞと云わねえでお前着けねえ」

新「少し※がゆるんだね、大きな形をしてお守を下げた歩けやアしねえ」

勘「まア読んで見ねえ」

新「エ、読んで」

と手に取上げて熟々よくよく見ると、唐真鍮とうしんちゆうの金色かねいろは錆びて見えませぬ。が、深彫ふかぼりで、

小日向服部坂深見新左衛門二男新吉、と彫付けてある故、

新「伯父おぢさんは何なんだねえ私の名だね」

勘「アイ、そのねえ、汚れたね其の布団の上へ坐つておくれ」

新「いゝよう」

勘「イ、エ坐つてお呉れ、お願いだから」

新「はいくゝさア私が坐りました」

勘「それから私は布団おりから下るよ」

新「ア、下りないでも宜いよ、冷ひえるといけねえよ」

勘「何卒どうかお前に逢つてねえ、一言ひとこと此の事を云つて死にてえと思つて心に掛けて居たが

ねえ、お前まえ様は、小日向服部坂上で三百五十石取つた、深見新左衛門様と云う、天下のお

旗下のお前は若様だよ」

新「へエ、私がかえ」

勘「ウムお前の兄様あにさまは新五郎様と云つてね、親父様おとつさまはもうお酒好でねえ、お前が生れ

ると間もなく、奥様は深い訳が有つてお逝去かくれになり、其の以前から、お熊と云うなかばたらぎ中働の下婢おんなにお手が付いて、此の女が悪い奴で、それで揉めて十八九の時兄様は行方知れず、するとねえ、本所北割下水に、座光寺源三郎と云う、矢張旗下が有つて、其の旗下が女お太夫んなだゆうを奥方にした事が露あらわれて、お宅番が付き、そのお宅番が諏訪部三十郎様にお前の親父様おとっさんの深見深左衛門様だ、すると梶井主膳と云う竜泉寺前の売うらな卜者いしやがねえ、諏訪部様が病気で退ひいて居て、親父様が一人で宅番して居るを附込んで、駕籠を釣らして来て源三郎とおよと云う女太夫を引ひ攫さらつて逃げようとする、遣やるめえとする、争つて鎗で突かれて親父様はお逝去かくれだから、お家は改易になり、座光寺の家も潰つぶれたがね、其の時にお熊は何なんでもお胤たねを孕はらんで居たがね、屋敷は潰れたから、仕方がねえので深川へ引取ひきとり、跡は御家督ごかどくもねえお前さんばかり、ちようどお前が三歳みつつの時だが、私が下谷大門町へ連れて来て貰い乳して丹精して育てたのさ、手前てまえの親父おやしや母親おふくろは小さいうち死んで、己おれが育てたと云つて、刻煙草ききみたばこをする中で丹精して、本石町四丁目の松田と云う貸本屋へ奉公に遣りましたが実は、己はお前の処に居た門番の勘藏と申す、旧来御恩を頂いた者で、家来で居ながら、お前さんはお旗下の若様だと※なましい若い人に知らせると、己は世が世なら殿様だが、と自暴やけになつて道楽をされると困るから、新吉々と使い廻して、馬鹿野郎、間拔野

郎と、御主人様の若様に悪たい吐いて、実の伯父甥の様にしてお前さんを育てたから、心こ安やす立たが過ぎてお前さんを打ぶつた事も有りましたが、誠に済まない事を致しました、私わたしはもう死にますから此の事だけお知らせ申して死し度たいと思おもい、殊ことにお前さんは親類縁者みよりたよりは無ないけれども、たゞ新五郎様と云いう御惣領ごそうりょうの若様が有ったが、今居れば三十八九になつたろうけれども行方知れず覚えて居て下さい、鼻の高い色の白い好いい男子おとこだ、目の下に大きな黒痣ほくろが有ったよ、其の方に逢うにも、お前さんがこの迷子札を証拠に云えば知れず、ア、もう何も云う事は有りませんが、唯馬鹿野郎などと悪態を吐つきました事は何卒真平どうぞまっぴら御免なすつて、仏ほとけさま壇だんにお前様まえさんの親父様おとつあまの位牌いはいを小さくして飾かざつて有ります、新光院しんこういん様と云つて其の戒名だけ覚えて居ります、其の位牌を持つて往つて下さい」

三十五

新そ「然さうかい、私は初めて伯父さん聞いたがねえ、だがねえ、私が旗下の二男でも、家が潰みつて三歳みつの時から育て、くれ、ば親よりは大事な伯父さんだから、もう一度ひとたび快よくなつて恩報おんがえしに、お前を親の様に、尚な更さら私わたしが楽たのしみをさしてから見送り度たいから、もう一

二年達者になつてねえ、決して家来とは思わない、我儘をすれば殴打擲は当然で、貰い乳をして能く育てくれた、有難い、其の恩は忘れませんよ、決して家来とは思いません、真実の伯父さんよりは大事でございます」

勘「はいく、有難えく、それを聞けば直に死んでも宜い、ヤア、有難えねえ、サア死にましようか、唯死度くもねえが、松魚の刺身で暖けえ炊立の飯を喫べてえ」

新「さアく、何でも」

と云う。当人も安心したか間もなく眠る様にして臨終致しました。それからはず小石川の菩提所へ野辺送りをして、長く居たいが養子の身の上殊には女房は懐妊、早く帰ろうと、長屋の者に引留められました、初七日までも居りませんで、精進物で馳走をして初七日を取越して供養をいたし、伯父が住いました其の家は他人に譲りましたから、早々立ちまして、せめて今夜は遅くも亀有まで行きたいと出かけます。折悪しく降出して来ましたが、どう降で、車軸を流す様で、菊屋橋の際まで来て蕎麦屋で雨止をしておりましたが、更に止む気色がございせんから、仕方がなしに其の頃だから駕籠を一挺雇い、四ツ手駕籠に桐油をかけて、

新「何卒亀有まで遣つて、亀有の渡を越して新宿泊りとしますから、四ツ木通りへ

出る方が近いから、吾妻橋を渡つて小梅へ遣つてくんねえ」

駕籠屋「畏まりました」

と駕籠屋はビショ／＼出かける。雨は横降りでどう／＼と云う。往来が止りますくらい。其の降る中をビショ／＼担がれて行くうち、新吉は看病疲れか、トロ／＼眠気ざし、遂には大躰になり、駕籠の中でグウ／＼と眠て居る。

駕籠屋「押ちやアいけねえ、歩けやアしねえ」

新「ア、若衆もう来たのか」

駕「へエ」

新吉「もう来たのか」

駕「へエ、まだ参りません」

新「あ、トロ／＼と中で寝た様だ、何処だか薩張分らねえが何処だい」

駕「何処だか些とも分りませんが、鼻を撮まれるも知れませんが、たゞ妙な事には、なア棒組、妙だなア、此方の左りに見える燈火は何うしてもあれは吉原土手の何だ、茶屋の燈火に違えねえ、そうして見れば此方にこの森が見えるのは橋場の総泉寺馬場の森だろう、して見ると此処は小塚ッ原かしらん」

新「若衆く、妙な方へ担いで来たナ、吾妻橋を渡つてと話したじやアねえか」

駕「それは然う云うつもりで参りましたが、ひとりでに此処へ来たので」

新「吾妻橋を渡つたか何だか分りそうなものだ」

駕「渡つたつもりでございませがね、今夜は何だか変な晩で、何うも、変で、なア棒組、
変だなア」

駕「些ちツとも足が運べねえ様だな」

駕「妙ですねえ旦那」

新「妙だつてお前めえたち達は訝おかしいぜ、何うかして居るぜ急いで遣やつてくんねえ、小塚ツ原
などへ来て仕様がねえ、千住へでも泊るから本ほん宿じゆくまで遣つておくれ」

駕「へエく」

と又ビショく担ぎ出した。新吉はまた中でトロくと眠気ざします。

駕「ア、恟びっくりすらア、棒組そう急いだつて先が一寸ちよつとも見えねえ」

新「あゝ大きな声だナア、もう来たのか若衆」

駕「それが、些ちつとも何処どこだか分りませんので」

新「何処だ」

駕「何処どこだか少しも見当みあてが付きませんが、おい／＼、先刻さつき左に見えた土手の燈火あかりが、此度こんどア右手こちに見える様になつた、おや／＼右の方の森が左になつたが、そうすると突当りが山谷の燈火か」

新「若衆、何うども変だぜ、跡へ歸つて来たな」

駕「歸けえる気も何もねえが、何うも変でございます」

新「戯ふざけちゃア困るぜ冗談じやアねえ、お前めえたち達は訝おかしいぜ」

駕「旦那、お前さん何か腥なまぐさい物を持つておいでなさりやアしませんか、此処こゝア狐が出ますからねえ」

新「腥どじろい物処どか仏の精進日だよ、しつかりしねえな、もう雨は上つたな」

駕「ヘエ、上りました」

新「下おろしておくれよ」

駕「何うもお氣の毒で」

新「冗談じやアねえ、お前めえたち達は変だぜ」

駕「ヘエ何うも、此こ様な事は、今迄長く渡しやうべえ世よしますが、今夜のような変な駕籠を担いだ事がねえ、行くと思つて歩いてても後あとへ歸けえる様な心持がするがねえ」

新「戯けなさんな、包を出して」

と駕籠から出て包を脊負い、

新「好い塩梅に星が出たな」

駕「へエ奴蛇の目の傘はこゝにございます」

新「いゝやア、まア路を拾いながら跣足でも何でも構わねえ行こう」

駕「低い下駄なれば飛々行かれましょう」

新「まアいゝや、さつくと行きねえ」

駕「へエ左様なら」

新「仕様がねえな、何処だか些とも分りやアしねえ」

と云いながら出かけて見ると、更けましたから人の往来はございませぬ。路を拾い

参りますと、此方の藪垣の側に一人人が立って居りまして、新吉が行き過ると、

男「おい若えの、其処へ行く若えの」

新「ソリヤ、此処は何でも何か出るに違えねえと思つた、畜生く彼方へ行け畜生

く

男「おい若えのくコレ若えの」

新「へエ、へエ」

と怖々、其の人を透すかして見ると、藪の処に立つて居るは年の頃三十八九の、色の白い鼻筋の通つて眉毛の濃い、月代さかやきが斯こう森のように生えて、左右へつやくしく割り、今御牢内から出たろうと云うお仕着せなりの姿で、跛びっこを引きながらヒヨコこく遣つて来たから、新吉は驚きまして、

新「へエく御免なさい」

男「何を仰しやる、これは貴公が駕籠から出る時落したのだ、是は貴公様のか」

新「へエく、恟びつくり致しました何なんだかと思ひました、へエ」

と見ると迷子札。

新「おや是は迷子札、是は有難う存じます、駕籠の中でトロくくと寝まして落しましたか、御親切に有難う存じます、是は私わたくしの大事な物で、伯父の形見で、伯父が丹精してくれたので、何どうも有難うございます」

男「其の迷子札に深見新吉と有るが、貴公様のお名前は何なんと申します」

新「手前が新吉と申します」

男「貴公様が新吉か、深見新左衛門の二男新吉はお前だの」

新「へエ私わたくしで」

男「イヤ何どうも凶らざる処で懐かしい、何うも是は」

と新吉の手を取った時は驚きまして、

新「真ま平つ何びらうか、私わたくしは金も何もございませぬ」

男「コレ、私をお前は知らぬは尤もつとも、お前が生れると間もなく別れた、私はお前の兄の新五郎だ、何卒どうかして其方そちに逢い度たいと思ひ居りしが、これも逢われる時節兄弟縁の尽きぬので、斯か様な処よで逢うのは実に不思議な事ことで有った、私は深見の惣領新五郎と申す者ものでな」

三十六

新「へエ、成程鼻の高い好いい男子おとこだ、眼の下に黒痣ほくろが有りますか、お、成程、だが新五郎様と云う証拠しやうこが何か有りますか」

新五郎「証拠と云つて別にないが、此の迷子札はお前伯父に貰ったと云うが、それは伯父ではない勘藏と云う門番で、それが私わしの弟を抱いて散り散りちぢになつたと云う事を仄ほかに聞きました、其の門番の勘藏を伯父と云うが、それを知つて居るより外ほかに証拠はない、尤

も外に証拠物もあつたが、永らく牢屋の住居にして、実に斯様な身の上に成つたから」

新「それじゃアお兄様、顔は知りませんが、勘藏が亡なります前、枕元へ呼んで遺言して、是を形見として貴方の物語り、此処でお目に掛れましたのは勘藏が草葉の影で守つて居たのでしよう、それに付いても貴方のお身形は何う云う訳で」

新五郎「イヤ面目ないが、若氣の至り、実は一人の女を殺めて駈落したれど露頭して追手がかゝり、片足斯くのごとく怪我をした故逃げ遂せず、遂々お繩にかゝつて、永い間牢に居て、いかなる責に逢うと云えど飽くまでも白状せずに居たれど、迎も免るゝ道はないが、一度娑婆を見度いと思つて、牢を破つて、隠れ遂せて丁度二年越し、実は手前に逢うとは図らざる事で有つた、手前は只今何処に居るぞ」

新「私はねえ、只今は百姓の家へ養子に往きました、先は下総の羽生村で、三藏と云う者の妹、娘を女房にして居ります、三藏と申すのは百姓もしますが質屋もし、中々の身代、殊に江戸に奉公をした者で氣の利いた者ですが、貴方は牢を破つたなどゝとんだ悪事をなさいました、知れたら大事で、早く改心なすつて頭を剃つて衣に着替え、姿を変えて私と一緒に国へお連れ申しましょう、貴方何様なにもお世話を致しましょうから、悪い心を止めてください、えゝ」

新五郎「下総の羽生村で三藏と云うは、何かえ、それは前に谷中七面前の下總屋へ番頭奉公した三藏ではないか」

新「え、能く貴方は御存知で」

新五郎「飛んだ処へ手前縁付いたな、其の三藏と云うは前々朋輩で、私が下總屋に居るうち、お園という女を若氣の至りで殺し、それを訴人したは三藏、それから斯様な身上に成つたるも三藏故、白洲でも幾度も争つた憎い奴で其の憎い念は今だに忘れん、始終憎い奴と眼を付けて居るが、そういう処へ其の方が縁付くとは如何にも残念、其の方もそういう処へは拙者が遣らぬ、決して行くな、是から一緒に逃去つて、永え浮世に短けえ命、己と一緒に賊を働き、栄耀栄華の仕放題を致すがよい、心を広く持つて盜賊になれ」

新「これは驚きました、兄上考えて御覧なさい、世が世なれば旗下の家督相続もする貴方が、盜賊をしろなぞと弟に勧めるという事が有りましょうか、マア其様な事を言つたつて、貴方が悪いから訴人されたので、三藏は中々其様な者ではございませぬ」

新五郎「手前女房の縁に引かされて三藏の鼻屑をするが、其の家を相続して己を仇に思ふか、サア然うなれば免さぬぞ」

新「免さぬつてえ、お前さんそれは無理で、それだから一遍牢へ這入ると人間が猶々

悪くなるというのはこれだな、手前の居る処は田舎ではありますませんが不自由はさせませんから一緒に来て下さい」

新五郎「手前は兄の言葉を背き居るな、よし／＼有つて甲斐なき弟故殺してしまふ覚悟しろ」

新「其様な理不尽な事を云つて」

新五郎「なに」

と懐に隠し持つたる短刀を引抜きましたから、新吉は「アレー」と逃げましたが、雨降揚句で、ビシヨ／＼頭まではねの上りますのに、後から新五郎は跛を引きながら、ピヨコ／＼追駈けますが、足が悪いだけに駈るのも遅いから、新吉は逃げようとするが、何分にも道路がぬかつて歩けません。滑つてズーンと横に転がると、後から新五郎は跛で駈けて来て、新吉の前の処へポンと転がりましたはずみに新吉を取つて押え付ける。

新五郎「不埒至極の奴殺してしまふ」

と云うに、新吉は一生懸命、無理に跳ね起きようとして足を抄うと、新五郎は仰向に倒れる、新吉は其の間に逃げようとする、新五郎は新吉の帯を取つて引くと、仰向に倒れる、新吉も死物狂いで組付く、ベツタリ泥田の中へ転がり込む、なれども新五郎は柔術も習つ

た腕前、力に任して引倒し、

新五郎「不埒至極な、女房の縁に引かれて真実の兄が言葉を背く奴」と押伏せて咽喉笛のどぶえをズブリツと刺した。

新「情ない兄さん…」

駕籠屋「モシ〜旦那〜大そう覽うなされて居なさるが、雨はもう上りましたから桐油を上げましょう」

新「エ、ア、危うい処だ、ア、ハア、此処は何処どこだえ」

駕「ちようど小塚ツ原の土手でござえやす」

新「えい、じゃア夢ではねえか、吾妻橋を渡つて四ツ木通りと頼んだじゃアねえか」

駕「へエ、然そう仰しやつたが、乗出してちようど門跡前へ来たら、雨が降るから千住へ行つて泊るからと仰しやるので、それから此方こちへ参めえりました」

新「なんだ、エ、長ながえ夢を見るもんだ、迷子札は、お、有る〜、何なんだなア、え、おい若衆わかいしゆ〜、咽喉は何なんともねえか」

駕「へエ、何どうか夢でも御覽でござえましたか、覽うなされておいでなせえました」

新「小用こしようがたしてえが」

駕「へエ」

新「星が出たな」

駕「へエ、好い塩梅星が出ました」

新「じやア下駄を出しねえ」

駕「是で天気は定まりますねえ」

新「好い塩梅だねえ、おや此処はお仕置場だな」

と見ると二ツ足の捨札に獄門の次第が書いて有りますが、始めに当時無宿新五郎と書いて有るを見て、恟りして、新吉が、段々怖々ながら細かに読下すと、今夢に見た通り、谷中七面前、下總屋の中働お園に懸想して、無理無体に殺害して、百両を盗んで逃げ、後お捕方に手向いして、重々不屈至極に付獄門に行うものなりとあり。新吉はこれぞ正夢なり、妙な事も有るものだと、兄新五郎の顔が眼に残りしは不思議なれど、勘藏の話で想ったから然う見えたか、何にしても稀有な事が有れば有るものだ、と身の毛だちて、気味悪く思いますから、是より千住へ参つて一晩泊り、翌日早々下総へ帰る。新吉の顔を見ると女房お累が虫気付きまして、オギヤア〜と産落したは男の子でございます。此の子が不思議な事には、新吉が夢に見た兄新五郎の顔に生写しで、鼻の高い眼の細い、気味

の悪い小児こどもが生れると云う怪談の始めてございます。

三十七

引続きまして真景累が淵と外題げだいを附しまして怪談話でございます。新吉は旅駕籠ゆらに揺れて帰りましたが、駕籠の中で怪しい夢を見まして、何彼なにかと心に掛る事のみ、取急いで宅うちへ帰りますると、新吉の顔を見ると女房お累は虫気付き、産落したは玉のような男の児ことはいかない、小児こどもの癖に鼻がいやにツンと高く、眼は細いくせにいやに斯こう大きな眼で、頬肉が落ちまして瘡やせおとろ衰えた骨と皮ばかりの男の児こが生れました。其の顔を新吉が熟々つく／＼見ると夢に見ました兄新五郎の顔に生写いきうつしで、新吉はぞつとする程身の毛立って、新「然そうなれば此うちの家は敵同士かたきどうしと、夢にも兄貴が怨みたらしく云ったが、兄貴がお仕置に成りながらも、三藏に怨みを懸けたと見えて、その仇あだの家いえへ私が養子に來たと夢で其の事を知らせ、早く縁を切らなければ三藏の家うちへ崇たると云ったが、扱さては兄貴が生れ變つて來たのか、但たゞしは又崇たりで斯こう云う小児こどもが生れた事か、何どうも不思議な事だ」と其の頃は怨み崇たりと云う事があるの或あるいは生れ變ると云う事も有るなどと、人が迷いを

生じまして、種々に心配を致したり、除を致すような事が有りました時分の事で、所謂只今申す神経病でございますから、新吉は唯だ其の事がよく心に掛りまして、

新「あゝもう悪い事は出来ぬ、ふつつり今迄の念を断つて、改心致して正道に稼ぐより外に致し方はない、始終女房の身の上小児の上まで、斯う云う崇りのあるのは、皆是も己の因果が報う事で有るか」

と様々の事を思うから猶更気分が悪うございまして、宅に居りましても食も進みません。女房お累は心配して、

累「御酒でもお飲みなすつたらお気晴しになりましょう」

と云うが、何うも宅に居れば居る程気分が悪いから、寺参りにでも行く方が宜かろうと云うので、寺参りに出掛けます。三藏も心配して、

三「一緒に居ると気が晴れぬ、姑などと云う者は誠に気詰りな者だと云うから、一軒家を別にしたら宜かろう」

と羽生村の北坂と云う処へ一軒新たに建てまして、三藏方で何も不足なく仕送つてくれます。新吉は別に稼もなく、殊には塩梅が悪いので、少しずつ酒でも飲んでばぶらゝ土手でも歩いたり、また大宝の八幡様へ参詣に行くとか、今日は水街道、或は大生

郷の天神様へ行くなどと、諸方を歩いて居りますが、まア寺まいりの方へ自然行く気になりません。翌年寛政八年恰ど二月三日の事でございましたが、法蔵寺へ参詣に来ると、和尚が熟々、新吉を見まして、

和尚「お前は死霊の祟りのある人で、病気は癒らぬ」

新「へエ何うしたら癒りましょう」

和尚「無縁墓の掃除をして香花を手向けるのは大功德なもので、これを行ったら宜からう」

新「癒りますれば何様な事でも致しますが、無縁の墓が有りましょうか」

和尚「無縁の墓は幾らも有るから、能く掃除をして水を上げ、香花を手向けるのはよい功德になると仏の教えにもある、昔から譬えにも、千本の石塔を磨くと忍術が行えるとも云うから、其様な事も有るまいが功德になるから参詣なさい」

と和尚さんが有難く説きつけるから、新吉は是から願に掛けて、法蔵寺へ行つては無縁の墓を掃除して水を上げ香花を手向けます。と其処が氣の故か、神経病だから段々数を掃除するに従つて気分も快くなつて参ります。三月の二十七日に新吉が例の通り墓参りをして出に掛ると、這入つて来ました婦人は年の頃二十一二にもなりましょうか、達摩返し

と云う結髪むすびがみで、一寸ちよつといたした藍あゐの万筋まんすじの小袖こそでに黒の唐繻子とうじゆすの帯おびで、上に葡萄ぶどう鼠ずみに小さい一紋ひとつもんを付けました縮緬ちりめんの半纏はんてん羽織はおりを着きまして、其の頃流行はやつた吾妻わづめ下駄げだを穿きいて這入こつて来る。跡あとからついて参まゐるのが馬方うまがたの作藏さくざうと申まをす男おとこで、

作「お賤しずさんは累かさねの墓かぶだ」

賤「おやまあ累かさねの墓かぶと云うと、名高ないからもつと大きいと思おもつたら大層おほい小さいね」

作「小さいつて、是こゝが何なんうも何なんと二十六年にじゅうに崇たかつたからねえ、執念しゅうねん深ふかえ阿魔あまも有あるもので、此こゝの前まえに助すけと書かいてあるが、是こゝは何なんう云いう訳わけか累かさねの子こだと云いうが、子こでねえてねえ、助すけと云いうのは先代せんだいの與右衛門ゑいゑもんの子こで、是こゝが継母まははに虐いじめられ川がはの中なかへ打流ぶちながされたんだと云いう、それが崇たかつて累かさねが出来できたと云いうが、何なんだか判然はつきりしねえが、村むらの者ものも墓参かぶらみりに来きれば、是こゝが累かさねの墓かぶだと云いつて皆線香みななの一本いっぴんも上あげるだ、それそれに願掛がんかけが利きくだねえ、亭主ていしゆが道楽みちがくぶつて他の女おんなに耽はまつて家うちへ帰かへらぬ時は、女房にようばうが心配しんぱえして、何なんうか手ての切きれる様ように願ねえますと願掛がんかけすると利きくてえ、妙たぎなものだ」

賤「そうかね、私はまあ斯こうやつて羽生村はやせむらへ来て、旦那だんなの女房にようばうさんに、私わたしの手てが切きれる様ように願掛がんかけをされて、旦那だんなに見捨みすてられては困こまるねえ」

作「なに心配しんぱえしねえが宜いいだ、大丈夫だいじゆうぶ、内儀おかみさんは分わつた者もので、それそれに若旦那わがだんなが彼あ

ア遣つて堅くするし、それに小さいけれども惣吉様も居るから其様な事はねえ、旦那は年
い取つて居るから、たゞ氣に入つたで連れて来て、別に夢中になるてえ訳でもねえから、そ
れに己連れて来たゞと云つて話して、本家でも知つて居るから心配ねえ、家も旦那どの
何で、貴方が斯うしてと云つて、旦那の誂えだから家も立派に出来たゞのう」

賤「何だか茅草で、妙な尖つた屋根なぞ、其様な広い事はいらなといったんだが、
一寸離れて寝る座敷がないといけないからつてねえ、土手から川の見える処は景色が好
いよ」

作「好うがすね。ヤア新吉さん」

新「おや作さん久しくお目に掛りませんで」

作「塩梅が悪いてえが何うかえ」

新「何うも快くなくつて困ります」

作「はア然うかえ能くまア心に掛けて寺参りするてえ、お前の様な若え人に似合わねえ
て、然う云つて居る、えゝなアに彼は名主様の妾よ」

新「ウン、ア、江戸者か」

三十八

作「深川の櫓やぐらの下したに居たつて、名前はおしずさんと云つて如才じよさいねえ女子あまつこよ、年は二十二だと云うが、口の利き様は旨うめえもんだ、旦那様が連れて来たうちが、家にも置かれねえから若旦那や御新造様と話合で別に土手下へ小さく一軒家いへえ造つて江戸風うゑに出来ただ、まア旦那が行かない晩は淋しくつていけねえから遊びあそびに来うと云うから、己が詰らねえ馬子唄うたアやつたり麦搗唄むぎつきうたは斯こう云うもんだつて唄つて相手あたいをすると、面白がつて、それえ己がに教えてくれるなどと云つてなア、妙に馬士唄まごうたを覚えるだ、三味線さんみせん弾いて踊りを踊るなア、食物くいものア江戸口で、お前塩めえの甘たつけえのを、江戸では斯こう云う旨うめえ物喰もんつて居るかあらつて、食物くいものア大変やかま八釜やかましい、鯉節かつぶしなどを山の様に搔かいて、煮汁にじるを取つて、後は勿体あどないと云うのに打棄うつちやつて仕まうだ、己淋しくねえように、行つて三味線弾いては踊りを踊つたり何かするのだがね彼処あそこは淋しい土手下で、余あんなり三味線弾いて騒さわぐから、狸ねこが浮れて腹太鼓はらたぶを敲たたきやアがつて夜が明けて戸を明けて見ると、三匹位ぐれえ腹ア敲き破つてひっくり返かえつて居る」

新「嘘うそばつかり」

作「本当だよ」

賤「一寸く作さん、何にも見る処が無いから、もう行こう」

作「え、参りましょう」

賤「一寸作さん今話をして居た人は何所の人」

作「彼れは村の新吉さんてえので」

賤「私は見たような人だよ」

作「見たかも知んねえ江戸者だよ」

賤「おや然うかい、一寸気の利いたおつな人だね」

作「え、極柔和しい人で、墓参りばかりして居てね、身体が悪いから墓参りして、何

でも無縁様の墓了磨けば幻術が使えとか何とか云つてね、願掛えして」

賤「おや気味の悪い、幻術使いかえ」

作「今是から幻術使いになるべえと云うのだろう」

賤「然うかえ妙な事が田舎には有るものだねえ、何かえ江戸の者で此方へ来たのかえ」

作「へエ上の三藏さんてえ人の妹娘お累てえが、お前さん、新吉が此方へ来たので

娘心に惚れたゞ、何うか聲に貰えてえつて恋煩いして塩梅が悪くなつて、兄様も母親様

も見兼ねて金出した恋智よ」

賤「然うかえ、新吉様と、おや新吉さんというので思い出したが、見た訳だよ私がね櫓下に下地子に成つて紅葉屋に居る時分、彼の人は本石町の松田とか榊田とか云う貸本屋の家に奉公して居て、貸本を脊負つて来たから、私は年のいかない頃だけでも、度々見て知つて居るよ、大層芸者衆もヤレコレ云つて可愛がつて、そうく中々愛敬者で、知つて居るよ」

作「ア、マア新吉さんく、おい此方へ来なせえ、アノ御新造様がお前を知つて居るてねえ」

新「何方様でげすえ」

賤「ちよいと新吉さんですか、私は誠にお見違れ申しましたよ、慥か深川櫓下の紅葉屋へ貸本を脊負つてお出でなすつた新吉さんでは有りませんか」

新「へエ、私もねえ先刻からお見掛け申したような方と思つたが、若も間違つてはいけねえと思つて言葉を掛けませんでしたでしたが、慥かお賤さんで」

作「それだから知つて居るだ何処で何様な人に逢うか知んねえ、嘘は吐けねえもんだ」
賤「私は此の頃此方へ来て、斯ういう処にいるけれども、馴染はなし、洒落を云つたつ

て向に通じもしないし、些とも面白くないから、作藏さんが毎晩来て遊んでくれるので、些とは気晴しになるんだが、新吉さん本当に好い処で、些とお出でなさいな、ちようど旦那が遊びに来て居るから、変な淋しい処だけれども、閑静で好いから一寸お寄りな」

新「へエ有難うございます、私はね此方へ参りまして未だ名主様へ染々お近付にもなりません、兄貴が連れてお近付に参ると云つて居りますが、何だか気が詰ると思つてツイ御無沙汰をして参りませんので」

賤「なに気が詰る所じやア無い、さつくり能く解つた人だよ、私を娘の様に可愛がつて呉れるから一寸お寄りな、ねえ作さん」

作「それが好い、新吉さんお出でよ、何でもお出で」

と勧められるから新吉は、幸い名主に逢おうと行きましたが、少し田甫を離れて庭があつて、囲は生垣になつて、一寸した門の形が有る中に花壇などがある。

賤「さア新吉さん此方へ」

惣「大層遅かつたな」

賤「遅いつたつて見る処がないから累の墓を見て来ましたが、気味が悪くて面白くないから帰つて来たの」

作「只今」

惣「大きに作藏御苦勞、誰か一緒か」

賤「彼の人は新吉さんと云つて私が櫓下に居る時分、貸本屋の小僧さんで居て、その時分に本を脊負つて来て馴染なので、思い掛けなく逢いましたら、まだ旦那様にお目に掛らないから、何卒お目通りがしたいと云うから、それは丁度好い、旦那様は家に来て居らっしゃるからと云つて、無理に連れて来たので」

惣「おやく／＼そうか、さア此方へ」

新「へエ初めまして、私はえゝ三藏の家へ養子に参りました新吉と申す不調法者で、何卒一遍は旦那様にお目通りしたいと思いましたが、掛違いましたとお目通りを致しません、今日は好い折柄お賤さんにお目に掛けて出ましたが、ついお土産も持参致しませんで」

惣「いゝえ、話には聞いたが、大層心掛の善い人だつて、お前さん墓参りに能く行くつてね」

新「へエ身体が悪いので法蔵寺の和尚様が、無縁の墓へ香花を上げると、身体が丈夫になると云うから、初めは貶しましたが、それでも親切な勧めだと思つて参りますが、妙なもので此の頃は其の功德かして大きに丈夫に成りました」

惣「うん成程然うかえ、能く墓参りをする、中々温順やかな実銘な男だと云つて、村でも評判が好い」

賤「本当に極くおとなしい人で、貸本屋に居て本を脊負ってくる時分にも、一寸来ても、新吉さん手伝つておくれなんて云うと、冬などは障子を張替えたり、水を汲んだり、外を掃除したり、誠に一寸人柄は好しねえ、若い芸者衆は大騒ぎやったので、新吉さん遠慮しないで、窮屈になると却つて旦那は困るから、ねえ旦那、初めてですからお土産などと云つただけでも止めましたが、初めてですからお金を一寸少しばかり遣つて下さいな」

惣「お金を、幾ら」

賤「幾らだつて少しばかりは見つともないし、貴方は名主だからへエ〜あやまつてるし、初めてですから三両もお遣んなさいよ」

惣「三両、余り多いや一両で宜かろう」

賤「お遣りなさいよ、向は目下だから、それに、旦那あの博多の帯はお前さんに似合いませんから彼の帯もお遣りなさいよう」

惣「帯を、種々な物を取られるなア」

と是が^{はじま}始り^はで新吉は近しく来ます。

三十九

お賤は調子が宜し、酒が出ると一寸小声で「^{いっちゆうぶし}中節でもやるから、新吉は面白いから猶^{なほ}近しく来る。其の中に悪縁とは申しながら、新吉とお賤と深い中に成りましたのは、誰れ有つて知る者はございせんけれども、自然と様子がおかしいので村の者も勘付いて来ました。新吉は家へ帰ると女房が、火傷の痕^{あと}で片鬢^{かたびん}兀^{はげ}ちよろになつて居り、真黒な痣^{あざ}の中からピカリと眼が光るお化^{ばけ}の様な顔に、赤ん坊は獄門の首に似て居るから、新吉は家へ帰り度^たい事はない。又それに打つて代つて、お賤の処へ来ると弁天様か乙姫の様な別嬪^{べっぴん}がチャホヤ云うから、新吉はこそく抜けては旦那の来ない晩には近くしけ込んで、作藏に少し錢を遣れば自由に媾^{あいびき}曳^ひが出来ますが、偕^{さて}悪い事は出来ぬもので、兄貴は心配しても、新吉に意見を云う事は出来せんから、お累に内^{ないく}々意見を云わせませぬ、意見を云わないと為にならぬ向^{むこう}が名主様だから知れてはならぬという、それを思うから、女房お累が少し意見がましい事をいうと、新吉は腹を立て、打ち打^{ちようちやく}擲致^{ちやく}しまするので、今迄と

違つて実に荒々しい事を致しては家を出て行きますような事なれども、人が善いから、お累は心配する所から段々病気に成りまして、遂には頭が破られる様に痛いとか、胸が裂ける様だとか、癩しかくという事を覚えて、只おろ／＼泣いてばかりおります。兄貴は改つて枕元へ来て、

三「段々村方の者の耳に這入り、今日は老母の耳にも這入つて、捨てゝは置かれず、私が附ついて居て名主様に濟まない、殊ことに家の物を洗いざらい持出して質に置き、水街道の方で遊んで、家へ帰らずに、夜になればお賤の処へしけ込んでおり、お前が塩梅が悪くつても、子供が虫が発おこつても薬一服吞ませる了りようけん簡かんもない不人情な新吉、金を遣やれば手が切れるから手を切つてしまえ」

と兄が申します。所がお累は

「何どうも相済みませんが、仮令親や兄弟に見捨てられても夫に附くが女の道、殊には子供も有りますから、お母様やお兄様には不孝で有りますが、私は何うも新吉さんの事は思い断きられません」

と、びつたり云い切つたから、

三「然そうなれば兄妹の縁を切るぞ」

と云渡して、纏めて三十両の金を出すと、新吉は幸い金が欲しいから、兄と縁を切つて仕舞つて、行通いなし。新吉は此の金を持つて遊び歩いて家へ帰らぬから、自分は却つて面白いが、只憫然なのは女房お累、次第に胸の焔は沸え返る様になります。殊に子供は虫が出て、パイ〜泣立てられ、糸の様に痩せても薬一服吞ませません。なれども三藏の手が切れたから村方の者も見舞に来る人もござりません。新吉は能い気になりまして、種々な物を持出しては売払い、布団どころではない、遂には根太板まで剥して持出すよな事でございますから、お累は泣入つておりますが、三藏は兄妹の情で、縁を切つても片時も忘れる暇は有りません故、或日用達に参つて帰りがけ、旧来居ります與助と云う奉公人を連れて、窃つと忍んで参り、お累の家の軒下に立つて、

三「與助や」

與「へエ」

三「新吉が居る様なれば寄らねえが、新吉が居なければ一寸逢つて行きたいから窃と覗いて様子を見て、新吉が居ては迎も顔出しは出来ぬ」

與「マア大概留守勝だと云うから、寄つて上げておくんなさえ、ねえ、憫然で、貴方の手が切れてから誰も見舞にも行かぬ、仮令貴方の手が切れても、塩梅が悪いから村の者

は見舞みめえに行つたつても宜ええが、それを行かぬてえから大てえげえ概人の不人情も分つていまさア、
何どうか寄つて顔を見て遣やつておくんなさえ、私わしもお累さんが小せえうちから居りやすから、
訪ねてえと思うが、訪ねる事が出来ねえが、表で逢つても、新吉さんお累さんの塩梅あんべえは何
うで、と云うと、何なんだ汝われは縁の切れた所ところの奉公人だ、くたばろうと何うしようと世話には
ならねえ、と斯こう云うので、彼あの野郎彼様あんなな奴ではなかつたが、魔がさしたのか、始終は
ハア碌ろくな事はねえ、お累さんに咎とがはねえけれどもそれえ聞くと遂つい足遠くなる訳で」
三「何なんたる因果でお累は彼様な悪党の不人情な奴を思い断きれないというのは何かの業ごうだ、
よ、覗いて見なよ」

與「覗けませんよ」

三「なぜ」

與「何どうも檐のきざき先へ顔を出すと蚊が舞つて来て、鼻はなめど孔から這へ入つて口から飛出しそ
うな蚊で、ア、何どうもえれえ蚊だ、誰も居ねえようで」

三「然そうか、じゃア這入つて見よう」

と日暮方で薄暗いから土間の所から探りく上つて参ると、煎餅せんべいの様な薄つぺらの布
団を一枚敷いて、其の上へ赤ん坊を抱いてゴロリと寝ております。蚊の多いに蚊帳かやもなし、

蚊燻しもなし、暗くつて薩張り分りません。

三「ハイ御免よ、おツ、此処に寝て居る、えゝお累く私だよ…三藏だよ」
累「は……はい」

四十

三「ア、危ない、起きなくつてもいゝよ、そうしていなよ、然うしてね、お前とは縁切に成つて仕舞つたから、私が出這入りをする訳じゃアないが、縁は断れても血筋は断れぬと云う譬えで何となく、お前の迷から此様な難儀をする、何うかしてお前の迷が晴れて新吉と手が切れて家へ帰る様にしたと思つて居るから、もう一応お前の胸を聞きに来たので、新吉も居ない様子だから話に来た、エ、ちようど與助が供でね、あれもお前が小さい時分からの馴染だから、何うぞ一目逢つて来度いと云つて、與助此方へ這入りな」

與「ヘエ有難う、お累さん與助でござえますよ、お訪ね申してえけれども、旦那にも云う通り、新吉さんが憎まれ口イきくので、つい足イ遠くなつて訪ねませんで、長え間塩梅が悪くつてお困りだろう、何様な塩梅で、エ、暗くつて薩張分りませんが、些とお擦

り申しましよう、おゝおゝ其様なに瘦もしねえ」

三「それは己だよ」

與「然うかえお前さんか、暗くつて分らねえから」

三「何しろ暗くつて仕様がな、灯を点けなければならん、新吉は何処へ行つたえ」

累「はい有難う、兄さん能く入らして下さいました、お目に掛られた義理ではありませんが、何卒もう私も長い事はございますまいから、一眼お目に掛つて死にたいと存じましても、心からでお招び申す事も出来ない身の上に成りましたも、皆お兄様やお母様の罰でございますが、心に掛けておりました願いが届きまして、能く入らして下さいました、與助能く来てお呉れだね」

與「へエ、来てえけれどもねえ、何うも来られねえだ、新吉が憎まれ口きくでなア、実にはア仕様がねえだ、蚊が多いなア、まア」

三「新吉は何処へ行つた、なに友達に誘われて遊びに行つたと、作藏と云う馬方と一緒に遊んで居やアがる、忌々しい奴だ、蚊帳は何処にある、蚊帳を釣りましょう、なに無いのかえ」

累「はい蚊帳どころではございません、着ております物を引剥いて持出しまして、売り

ますか質に入れますか、もう蚊帳も持出して売りました様子で」

三「呆れますな何うも、蚊帳を持出して売って仕舞ったと、この蚊の多いのによ」

與「だから鬼だつて、自分は勝手三昧して居るから痒くもねえが、それはお累様了憎いたつて、現在赤ん坊が蚊に喰殺されても構わねえて云うなア心が鬼だねえ」

三「與助や家へ行つて蚊帳を取つて来て呉んな、家の六畳で釣る蚊帳が丁度宜い、あれは六七の蚊帳だから、あれで丁度よからう、若しあれでなければ七八の大きいので宜い病人の中へ這入つて擦る者も広い方が宜いから」

與「直き往つて来ましよう」

三「早く往つて」

與「へエ、お累様直往つて参りますよ」

と親切な男で、飛ぶようにして蚊帳を取りに行きました。

三「暗くつていかぬから灯を点けましよう、何処に火打箱はあるのだえ、何所に、え、竈を持出して売つたア、呆れます何うも、家ではお飯も喰わねえ了簡、左様云う悪い奴だ」

と段々手探りで台所の隅へ行つて、

三「ア、茲に在つた〜」

と漸く火打箱を取出しましてカチ／＼打ちまするが、石は丸くなって火が出ない、漸く
の事で火を附木に移し、破れ行燈を引出して灯を点け、善々お累の顔を見ると、実に今
にも死のうかと思うほど瘦衰えて、見る影はありませんから、兄三藏は驚きまして、

三「あゝお累、お前は一通りの病気ではない余程の大病だよ、此の前に来た時は此様
なに瘡てはいなかったが、何も食べさせせず、薬一服煎じて吞ませる了簡もなく、出歩
いてばかり居る奴だから、自分には煮炊も出来ずお前が此様な病気でも見舞に来る人も
ないから知らせる人もなし、物を食べなけりやア力が附かないから、是では仮令病気でな
くとも死にます、見れば畳も持出して売りやアがったと見えて、根太が処々剥がれて、
まア縁の下から草が出ているぜ、実に何うも酷いじゃアないか、えゝおい、彼の非道な新
吉を何処までもお前亭主と思つて慕う了簡かえ、お前は罰があたつて居るのだよ、私がお
母様にお氣の毒だと思つて種々云うと、お母様は私への義理だから、何の親同胞
を捨て、出る様な者は娘とは思わぬ、敵同士だ、病氣見舞にも行つてくれるな、彼様な奴
は早く死ねばいゝ、と口では仰しやるけれども、朝晩如来様に向つて看經の末には、お
累は大病でございます、何卒お累の病氣全快を願います、新吉と手を切りまして、一つ処
へ親子三人寄つて笑顔を私に見て私も死度うございます、何卒お護りなすつて下さいまし、

と神様や仏様に無理な願掛がんかけをなさるも、お前が可愛いからで、親の心子知らずと云うのはお前の事で、さア今日は新吉とフツ、リ縁を切ります諦めますとお前が云えば、彼様な奴だから三十両か四十両の端はした金がねで手を切つて、お前を家うちへ連れて行つて、身体さえ丈夫になれば立派な処へ縁附ける、左も無ければ別家べっけをしても宜いい、彼奴あいつに面当つらあてだからな、え、今日は諦めますと云わなければなりませんよ、さア諦めたと云いなさい、え、おい、云えないかえ、今日諦めなければ私はもう二度と再び顔は見ません、もう決して足あしぶ踏みは致しません、もう兄妹の是が別れだ、外ほかに兄弟があるじゃアなし、お前と私ばかり、お前亭主を持たないうち何なんと云つた、私わがが他わきへ縁付きましても、子こというは兄あにさんと私わがきりだから、二人でお母様に孝行しようと云つたじゃアないか、して見れば親の有難い事も知っているだろう、さア、お前の身が大事だからいふのだよ、返答が出来ませんかよ、え、お累、返答しなければ私は二度と再び来ませんよ」

四十一

累「はいく」

と利かない手を漸と突いてガツクリ起上り、兄三藏の膝の上へ手を載せて兄の顔を見る眼に溜る涙の雨はらくくと膝に翻れるのを、

三「これ／＼たゞ泣いていては却つて病に障るよ」

累「はいお兄様どうも重々々の不孝でございました、まア是迄御丹精を受けました私
が、お兄様のお言葉を背きましたは、お母様へ猶々不孝を重ねまする因果者、此の節の
ように新吉が打つて變つて邪慳では、逆も側には居られません、少しばかり意見がましい
事を申せば、手にあたる物でぶち打擲致しますから、小児が可愛くないかと膝の上へ此の
坊を載せますと、エ、うるせえ、とこんな病身の小児を畳の上へ放り出します、それほど
気に入らぬ女房なれば離縁して下さい、兄の方へ帰りましようと申しますと、男の子は男
に付くものだから、此の與之助は置いて行けと申します、彼様な鬼の様な人の側へ此の坊
を置きましては、見す／＼見殺しに致しまするようなものと、つい此の小僧に心が引かさ
れて、お兄様やお母様に不孝を致します、せめて此の與之助が四歳か五歳に成ります迄何
卒お待ち遊ばして」

三「其様な分らぬ事を云つては困りますよ、お前何うも、四歳か五歳になる迄お前の身
体が保ちやアしませんよ、能く考えて御覽、子を捨てる藪はあるが身を捨てる藪はないと

云う譬たとえの通りだ、置いて行いけと云うなら置いて行いつて御覽、乳はなし、困るからやつぱりお前の方へ歸つて来るよ、エ、私の云う事を聴かれませんか、是程に訳を云つてもお前は聴かれませんか、悪魔が魅入つたのだ、お前そんな心ではなかつたが情なさけない了簡だ、私はもう二度と再び来ません、思えばお前は馬鹿になつて了しまつたのだ、呆れます」

と腹が立つのでは有りませんが、妹いもが可愛い紛れに荒い意見をいうと、お累は取詰めて来しやくまして癩しやくを起し、

累「ウーン」

と虚空を掴んで横にぱつたり倒れましたから、三藏は驚きまして、

三「エ、困つたなア、少し小言を云うと癩いんを起すような小さい心でありながら、何どう云うもので、此こ様なに強情を張るのだらう、新吉の野郎め、困つたな、水はねえかな、何どうかこれ、お累しやく確しやくかりしてくれよ、心を慥たしかに持たなければならんよ、此の大病の中で差込さこが来たまては堪たまらん、確しやくかりして」

と一人で手に余る処へ、歸つて来たは與助、風呂敷包に蚊帳の大きなのを持って、與「旦那取つて来ました」

三「蚊帳を取つて来たか、今お累が癩いんを起して氣絶してしまつた」

與「えゝまア、そりや、お累さんく何うしただ、これお累さん、あゝまア齒ア喰いしばつて、えらい顔になつて、是はまア死んだに違えねえ、骨と皮ばかりで」

三「死んだのじやアねえ今塞じて来たのだが、ア、これつ切りに成るかしたら、あゝもうとても助かるまい」

與「助からねえツてえ可哀そうに、これマア逆も駄目だねえ、お累さん私イ小せえうちから馴染ではござえませんか、私イ今ア蚊帳取りに行く間待つても宜かんべえがそれにマア死んでしまふとは情ねえ、彼様な悪徒野郎が側に附いて居るから、近所の者も見舞にも来ず、薬一服煎じて飲ませる看病人も無い、此様なになつて死ぬのは誠に情ねえ訳で、何うして死んだかなア」

三「其様に泣いたつて仕様があるものか、命数が尽きれば仕方がねえ、其様に女々しく泣くな、男らしくもねえ、腹一杯親同胞に不孝をして苦勞を掛けて是で先立つたア此様な憎い奴はねえ、憫然とは思わない、悪いと思え、泣く事はねえ、泣くな」

與「泣くなつて、泣いたつて宜かんべえ、死んだ時でも泣かなきゃ泣く時はねえ、私憫然でなんねえだよ、斯んな立派な兄さんがあつても、薬一服煎じて飲ませねえで憫然だと思ふから泣くのだ、お前さんも我慢せずに泣くが宜え」

三「まア水でも飲まして見ようか」

與「まだ水も何も飲ませねえのかえ」

三「オイ己が水を飲ませるから其処そこを押えて、首を斯こうやって、固く成つて居るからの、力一ぱい、なに腕が折れると、死んで居るから構やアしねえ、宜いいか、今水を飲ませるか、ウグくくくく」

與「何だか云う事が分んねえ」

三「いけねえ、己が飲んでしまった」

與「仕様がねえな、含くんで、喋れば飲込むだ、喋らずに」

と漸ようやく三藏が口移しにすると、水が通つたと見えて、

累「ウム」

という。

三「ア、與助、漸く水が通つた」

與「通つたか、通れば助かります、お累様ア、確しつかりして、水が通つたから確かりして、お累さんく」

三「お累確かりしろ、兄あにさんが此処こゝに附いて居るから確かりしろよ」

與「お累様確かりおしなさえよ、與助が此処へ参つて居りますから、お累様、確かりおしなさえよ」

累「ア……………」

三「其方へ退きなさい、頭を出すから、ア、痛い」

與「大丈夫己来たからよう、ア、好い塩梅だ気が付いた、ア……………」

三「何だ手前気が付きやアそれで好いや、気が付いて泣く奴があるものか」

與「嬉し涙で、もう大丈夫だ」

三「もう一杯飲むかえ、さアく水を飲みなさい」

四十二

累「ハイ……………気が付きました、何卒御免なされて下さい」

三「私が余り小言を云つたのは悪うございました、ついお前の身の上を思うばかりに愚痴が出て、病人に小言を云つて、病に障る様な事をして、兄さんが思い切りが悪いのだから、皆定まる約束と思つて、もう何にも云いますまい、小言を云つたのは悪かった、堪

忍して」

與「誰工小言云った、能くねえ事た、貴方正直だから悪い、此の大病人に小言を云うつてえ、此の馬鹿野郎め」

三「何だ馬鹿野郎とは」

與「けれども小言を云ったつて、旦那様もお前様の身を案じてねえ、新吉さんと手が切れて家へ帰れるようにしたいと思うから意見を云うので、悪く思わねえ様に、ようく」

三「蚊帳を持つて来たから釣りましょう、恐ろしく蚊に喰われた、釣手があるかえ」
累「釣手は売られないから掛つて居ります」

三「そうか」

と漸く二人で蚊帳を釣つて病人の枕元を広くして、

三「あのね、今帰り掛けて持合せが少ないが、三両許りあるからは是を小遣に置いて行きましょう、私も諦らめてもう何も云いません、若し小遣が無くなったら誰か頼んで取りによこしなよう、大事にしなよう、蚊帳を釣つたから、もういゝ、何も、もう其様な事を云うなえ、サ、行きましようく」

與「へエ参りましよう、じゃアねえ、お累さん行きますよ、旦那様が帰るといふから私

も帰るが、大事にしてお呉んなさえよ、よう、くよく思わなえが宜え、エ、何うも仕様がねえ、帰りますよ」

三「ぐずぐず云わずに先へ出なよ、出なつたら出なよ、先へ出なてえに」

と兄が立ちに掛ると、利かない手を突いて漸くに這出して、蚊帳を斯う捲つてお累が出まして、行きに掛る兄の裾を押えたなり、声を振わして泣倒れまする。

三「其様にお前泣いたり何かすると毒だよ、さア蚊帳の中へ這入りな、坊が泣くよ、さア泣いているから這入んな」

累「お兄様只今まで重々の不孝を致しました、先立つて済みませんが、逆も私は助かりません、何卒御立腹でもございませうがお母様に只た一目お目に掛けて、お詫をして死にとう存じますが、お母様にお出下さる様に貴方からお詫をなすつて下さいませんか」

三「もうそんな事をおいいでないよ、お母様もまた是非来たがって居るのだからお連れ申す様にしましょう、其様な事をいわずにくよくよせず、さア蚊帳の中へ這入って居なよ」

與「大丈夫だよ、お母様ア己が連れて来るよ、其様な事を云うと悲しくつて帰れねえから這入つてお呉んなさえよ、ア、赤ん坊が泣くよ、憫然に本当に泣けねえ」

三「ア、鼻血が出た、與助、男の鼻血だから仔細はあるまいけれども、盆ぼんのくぼの毛を一本抜いて、ちり毛を抜くのは呪まじねえだから、ア、痛いてえ、其様そんなに沢山抜く奴があるか、一ひとつか拵み抜いて」

與「沢山たんと抜けば沢山き駿きくと思つて」

三「え、痛いワ、さあ、行きますよ」

と名残なごりおし惜おしいが、二人とも外へ出ると生憎あいにく気になる事ばかり。

三「ア、痛」

與「何どうかしましたかえ」

三「下駄の鼻緒が切れた」

與「横鼻緒が切れましたか、へエ」

三「與助何うも気になるなア、お累の病気はとても助かるまいよ」

與「へエ助かりませんか、憫然かわいそうにねえ、早くお母様アおよこし申す様にしましょうか」

三「何しろ早く帰ろう」

と三藏が帰ると、入違えて帰つて来たのは深見新吉。酒の機嫌で作藏を連れてヒョロノ、跟ようけながら帰つて来て、

新「オイ作藏、今夜行かなければ悪かろうなア」

作「悪いって悪くねえって行かねば己叱られるだ、行つて遣つて下せえ、出掛に己ア肩叩えてなア、作さん今夜新吉さんを連れて来ないと打敲くよ、と云つて斯う脊中ア打つたから、なに大丈夫だ、一杯飲んで日が暮れると来るから大丈夫だと云つて、声掛けて来ただ」

新「いつも行く度に向で散財して、酒肴を取つて貰つて、余り気が利かねえ、些とは旨え物でも買つて行こうと思うが、金がねえから仕方がねえ」

作「金工なくつたつて、向でもつて小遣も己に呉れて、何うもハア新吉さんなら命までも入れ上げる積りだよ、と姉御が云つてるから、行つて逢つてお遣りなせえよ」

新「明日はまた大生郷辺で一杯遣つて日を暮さなければ成らねえ、仕方がねえから今日は家に寝ようと思つて」

作「家に寝るつて、己が困るから行つてよう」

新「コウく見ねえく」

作「何だか」

新「妙な事がある、己の家に蚊帳が釣つてある」

作「ハテ是は珍らしいなア、是は評判すべえ」

四十二

新「其様な余計な憎まれ口をきくなえ、今行違つたなア三藏だ、己が留守に来やアがつて蚊帳ア釣つて行きやアがったのだな、斯んな大きな蚊帳が入るもんじやアねえ、蚊帳を窃と畳んで、離れた処え持つて行つて質に入れ、ば、二両や三両は貸すから、病人に知れねえ様に持出そう」

作「だから金と云うものは何処から来るか知れねえなア、取るべえ」

新「手前ひよろくして置いていけねえ、病人が眼を覺すといけねえから」

と云うが、酔つておりますから階子に打突つて、ドタリバタリ。是では誰にでも知れませんが、新吉が病人の頭の上からソツクリ蚊帳を取つて持出そうとすると、お累は存じて居りますから、

累「旦那様お帰り遊ばせ」

新「ア、眼が覺めたか」

累「はい、貴方此の蚊帳を何うなさいます」

新「何うするたつて暑ッ苦しいよ、今友達を連れて来たが、狭い家にだゞっ広い大きな蚊帳を引摺り引廻して、風が這入らねえのか、暑くつて仕様がねえから取るのだ」

累「坊が蚊に螫われて憫然でございますから、何卒それだけはお釣り遊ばして」

新「少し金が入用だからよ、これを持って行つて金を借りるんだ、友達の交際で仕様がねえから持つて行くよ」

累「はい、それをお持遊ばしては困りますから何卒お願いで」

新「お願いだつて誰がこんな狭い家へ大きな蚊帳を引摺り引廻せと云つた、茲は己の家だ、誰が蚊帳を釣つた」

累「はい今兄が通り掛りまして、手前は憎い奴だが如何にも坊が憫然だ、蚊ッ喰だらけになるから釣つて遣ろうと申して家から取寄せて釣つてくれましたので」

新「それが己の氣に入らねえのだ、よ、兄と己は縁が切れて居る、手前は己の女房だ、親同胞を捨て、も亭主に附くと手前云つた廉があるだろう、然うじやアねえか、え、

おい、縁の切れた兄を何故敷居を跨がせて入れた、それが己の氣に入らねえ、兄の釣つた蚊帳なれば猶氣に入らねえ、氣色が悪いから是を売つて他の蚊帳にするのだ」

累「何卒お金子がお入用なれば兄が金を三両程置いて参りましたから、是をお持ち遊ばして、蚊帳だけは何卒」

新「金を置いて行つた、そうか、どれ見せろ」

作「だから金は何処から出るか知んねえ、富貴天にあり牡丹餅棚にありと神道者が云う通りだ、おいサア行くべえ」

新「行くつたつて三両許りじやア、塩噌に足りねえといけねえ、蚊帳も序に持つて行つて質に入れ様じやアねえか」

作「マア蚊帳は止せよ、子供が蚊に喰われるからと姉御が云うから、三両取つたら堪忍して遣つて、子供が憫然だから蚊帳は止せよ」

新「何だ弱え事を云うな」

作「弱えたつて人間だから、お内儀さんが塩梅の悪いのに憫然ぐれえ知つて居らア、止せよ」

新「憫然も何も有るもんか、何を云やアがるのだ此ン畜生、蚊帳を放さねえか」

累「それは旦那様お情のうございます、金をお持ち遊ばして其の上蚊帳までも持つて行つては私は構いませんが坊が憫然で」

新「何だ坊は己の餓鬼だ、何だ放さねえかよう、此畜生め」

と拳を固めて病人の頬をポカリ／＼撲つから、是を見て居る作藏も身の毛立つようで、作「止せよ兄貴、己酒の酔も何も醒めて仕舞った、兄貴止せよ、姉御、見込んだら放さねえ男だから、なア、仕方がねえから放しなさえ、だが、敲くのは止せよ」

新「なに、此畜生め、オイ頭の兀てる所を打つと、手が粘つて変な心持がするから、棒か何か無えか、其処に麁朶があらア、其の麁朶を取つてくんな」

作「止せよ／＼、麁朶はお願いだから止せよ」

新「なに此畜生撲るぞ」

作「姉御麁朶を取つて出さねえと己を撲るから、放すが宜え、見込まれたら蚊帳は助からねえからよ」

新「サア出せ、出さねえと撲るぞ、厭でも撲るぞ、此度ア手じやアねえ薪だぞ、放さねえか」

累「ア、お情ない、新吉さん此の蚊帳は私が死んでも放しません」

と縫りつくのを五つ六つ続け打にする。泣転がる処を無理に取ろうとするから、ピリ／＼と蚊帳が裂ける生爪が剥がれる。作藏は、

作「南無阿弥陀仏く、酷い事をするなア、顔は綺麗だが、怖かねえ事をする、怖えなア」

新「サア此の蚊帳持つて行こう」

作「アレく」

新「なに」

作「爪がよう」

新「どう、違えねえ継り付きやアがるから生爪が剥がれた、厭な色だな、血が付いて居らア、作藏舐めろ」

作「厭だ、よせ、虫持じやア有るめえし、爪え喰う奴があるもんか」

新「此の蚊帳持つて往つたら三両か五両も貸すか」

作「貸くもんか」

新「爪を込んで借りよう」

作「琴の爪じやアあるめえし」

とずうくしい奴で、其の蚊帳を肩に引掛けて出て行きます。お累は出口へ斯う這出したが、口惜しいと見えて、

累「エ、新吉さん」

と云うと、

新「何をいやがる」

とツカ／＼と立ち戻つて来て、脇に掛つて有つた薬罐やかんを取つて沸湯にえゆを口から掛けると、

現在我が子與之助の顔へ掛つたから、子供は、

子供「ヒー」

と二ふた声こえ三み声こえ泣入つたのが此の世のなごり。

累「鬼の様なるお前さん」

新「何をいやがるのだ」

と持つて居た薬罐を投げると、双もろに頭から肩へ沸湯あびを浴せたからお累は泣倒れる。新吉は構わずに作藏を連れて出て参りましたが、斯う憎くなると云うのは、仏説かようでいう悪因縁で、心から鬼は有りませんが、憎い／＼と思つて居る処から自然と斯様かような事になります。

四十四

新吉は蚊帳を持つて出まして、是を金にして作藏と二人でお賤の宅へしけ込み、こつそり酒宴さかもりを致して居ります、其の内に段々と作藏が酔つて来ると、馬方でございますから、野良で話を為しつて居りますから、つい声が大きくなる。

新「おい作、手前酔うと大きな声を出して困る、些ちつと静かにしろ」

作「静かにたつて、大丈夫でえじようぶだ人子ひとっこ一人通らねえ土手下の一軒家田や畑かへだで懸隔かへだつて誰も通りやアしねえから心配しんぺえねえよ」

賤「いゝよ、私はまた作さんの酔つたのは可笑しいよ余念が無くつて、お前さん慾ねの無い人だよ」

作「慾ねが無い事ことアねえ、是で慾張つて居るだが、何方どっちかという足癖わりの悪い馬うまア曳張ひっぱつて、下り坂を歩くより、兄いと二人で此処こけえ来て、斯う遣つて酔つて居れば好いいからね、先刻さつきは己おらア酔えいが醒めたね」

新「止せえ、先刻の話は止せよ」

作「止せたつてお賤さん、お前めえマア新吉さんは可愛いゝ人だと思つて居るから、首尾しんべえして、他人ひとにも知んねえように白しらぶつて寄せるけれども、新吉さんが此処こけえ来るつてえ心配しんぺえは是りこア己おれが魂消たまげた事がある、今日ね」

新「そんな詰らねえ事をいうな手前は酔うとお喋りをしていけねえ」

作「お喋りつたつて、一杯飲んで図に乗つていうのだ、エ、おい、それでねえ、マア一杯飲んで帰つた処が、銭いなえと云うから、無くつたつて好いや、何でもお賤さんの処へ行つてお呉んなせえというのと、いつも行つて馳走になつて小遣貰つて帰るべえ能でもねえじゃアねえか、何卒己も偶にア旨え物でも買つて行つて、お賤に食わしてえつて、其処はソレ情合だからそんな事を云つたゞが、いゝや旨え物持つて行きたつて無えものはハア駄目だ、お賤さんの方が、旨え物拵れえて待つて居るから今夜呼んで来てくんねえよと、己が頼まれたから構わねえじゃアねえかと云つても、金が無ければえので家へ帰ると、家に蚊帳が釣つて有るだ」

新「よせく、そんな話は止せよ」

作「話したつて宜かんべえ、それで其の蚊帳質屋へ持つて行こうつて取りに掛ると、女房は塩梅が悪いし赤ん坊は寝て居るし」

新「コレよせ、よさねえか」

作「云つたつて宜え、そんなに小言云わねえが宜え、蚊帳へ縫り付いて、己ア宜えが子供が蚊に喰われて憫然だから何卒よう、と云つてハア蚊帳に縫り付くだ、それを無理に引

張つたから、お前生爪工剥したゞ」

新「おい冗談じゃアねえ、折角の興が醒めら了、止せ、撥ぐるぞ」

作「撥ぐツちやアいけねえ」

新「お喋りはよせ」

作「宜えやな」

新「冗談云うな、喋ると口を押えるぞ」

作「よせ、口を押えちやアいけねえ、エ、おいお賤さん、其の爪を己がに喰えつて、誰が爪工食う奴が有るもんかてえと、己が口へおツペし込んだゞ、そりやアまア宜えが、お前葉鐘を」

新「冗談はよせ」

作「いゝや、よせよ撥ぐつてえ」

新「寝ツちまいなく」

と無理に欺して部屋へ連れて行つて寝かしてしまいました。それから二人も寝る仕度になりますと、何う云う事か其の晩は酒の機嫌でお賤がすやく能く寝ます。雨はどうどと車軸を流す様に降つて来ました。彼是八ツ時でもあろうと云う時刻に、表の戸をトンく。

「御免なさい〜」

新「お賤〜誰か表を叩くよ、能く寝るなア、お賤〜」

賤「あいよ、あゝ眠い、何うしたのか今夜の様に眠いと思つた事はないよ」

新「誰か表を叩いて居る」

賤「はい、何方」

「一寸御免なすつて、私でございます」

新「何だ庭の方から来たようだぜ」

賤「今明けますよ、何方でございますか名を云つて下さらないでは困りますが」

「へい新吉の家内、累でございます」

賤「え、お内儀が来たときア、はい只今」

新「よしねえ、来る訳はねえ、病人で居るのだもの」

賤「お前逢つて」

新「来る気遣ねえよ」

賤「気遣がないつたつて、お内儀が迎いに来たのだから嬉しそうな顔付をしてさ」

新「冗談じゃアねえ、嬉しい事も何もあるもんか、来る気遣ねえよ」

賤「只今開けますよ、大事な御亭主を引留めて済みませんねえ」

と仇あだぐち口をきゝながら、がらりと明けますと、どん／＼降る中をびしよ濡になつて、利かない身体で赤ん坊を抱いて漸々よう／＼と縁側から、

累「御免なさい」

と這入つたから、

新「何なんだつて此の降る中を来たのだなア何うしたのだ」

累「貴方がお賤さんでございますか、駈かけちが違つてお目に掛りませんが、毎度新吉が上り

まして、御厄介様になりますから、何卒どうか一度はお目に掛つてお礼を申し度いと存じており

まして、何分にも子供はございますし、私わたくしも疾とうより不快でございました故、御無沙汰を

致しました」

賤「誠にまア何うも降る中を夜やちゆう中にお出なすつて、そんな事を仰しやつては困ります

ねえ、新吉さんも江戸からのお馴染でございますから、私は此方こちへ参つても馴染も無いも

んでございますから、遊びにお出なすつて下さいと、私が申しました、それから旦那も誠

に眞ひしき眞にして、斯こうやつてお出なさるが、御亭主を引留めて遊ばしたと云えば、お前さん

も心持が快よくは有りますまいけれども、是に付いては種々いっ／＼深い訳がある事でございます

が、それは只今何も云いません、新吉さん折角迎いにお出でなすつたからお帰りよ」

新「帰ることはねえ、おい、お前冗談じゃアねえ、そんな形をして来て見つとも無い、亭主の恥を晒しに来る様なものだ、エ何だなア、おい、此の降る中を、お前なんだ逆上せて居るぜ、*たじれて居るなア」

*「のぼせて気が変になる。むちゆうになつて気持ちがいじみる」

四十五

累「はい、たじれたか知りませんが、私は何うなつても宜しゆうございますが、貴方の兎だから殺とすも何共勝手になさいだが、表向には出来ませんから、此の坊やアだけは今夜が明けないうち法蔵寺様へでも願つて埋葬を致したいと存じます、誰も宅へ参り人はなし、私が此の病人では何う致す事も出来ませんから、何卒一寸お帰りなすつて、お埋葬だけをなすつて、然うして又此方へ遊びに入らして下さい、お賤さん、私が申しますと宅が立腹致しますから、何卒あなたから、今夜だけ帰つて子供の始末を付けてやれと仰しやつて」

賤「はい、お帰りよ新吉さんよう」

新「帰れたつて夜中に仕様がねえ」

賤「夜中だつて用があつて迎いに来たのだからお帰りよ、旨く云つて居ても本木に優る梢木は無うらぎいという事だからねえ、お内儀かみさんに迎いに来られ、ば心持が宜いいねえ、旨く云つたつてにこゝ顔付に見えるよ」

新「何がにこゝ、冗談じゃアねえ、帰らねえ、おい」

累「はい、何卒どうかお前さん坊の始末を」

新「始末も何もねえ、行かゆねえか」

賤「其様そんなに云わずにお前お帰りよ、折角お迎いでいにお出なすつたに誠にお氣の毒様、大事な御亭主を引留めてね、さアお帰りよ、手を引かれてよ」

新「何を云うのだ、帰らけえねえか」

と、さア癩癩に障つたから新吉は、突いきなり然利かない身体いの女房お累の胸倉を取るが早いか、どんと突くと縁側から赤ん坊を抱いたなりコロくと転がり落ち、

累「あゝ情ない、新吉さん、今夜帰つて下さらんと此の児この始末が出来ません」

と泥だらけの姿で這上るところを突飛ばすと仰向に倒れる、と構わずピタリと戸たを閉て

、下し棧おろざんをして仕舞ったから、表ではお累がワツと泣き倒れます。此の時雨は愈々いよく烈はげしくドウドツと降出します。

新「エ、気色けしきが悪いわり、酒を出しねえ」

賤「酒をつたつて私は困るよ、彼あんな様な酷ひどいことをして、一寸帰つてお遣やりよ」

新「うまく云つてやアがる、酒を出しねえ、冷たくつても宜いいや」

と爛かんざま冷めえしの酒を湯呑に八分目ばかりも酌ついで飲み、

新「お前めえも飲みねえ」

と互に飲んで床につくと、何どういう訳か其の晩は、お賤が枕を付けると、常になくすや
く能く寝ます。小川から雨の落込んで来る音がどうくといひます。夜は深ふけて一ひと際ときわ
しんと致しますと、新吉は何うも寝付かれませぬ。もう小こ一いつ時ときも経たつたかと思うと、二
畳の部屋に寝て居りました馬方の作藏うなざが甍なげれる声こゑが、

作「ウーン、アア……」

新「忌いましい奴やつだな、此こん畜ちき生しょう、作藏くおい作や、甍なげれて居るぜ、作藏、眼を覚

まさねえかよ、作藏、夢を見て居るのだ」

作「エ、ウウ、ウンア」

新「忌えましい畜生だ、やい」

作「へエ、あゝ」

新「胆きもを潰つぶさア、冗談じやアねえ寝惚けるな、お賤しづめが眼を覚ささア」

作「寝惚けたのじやアねえよ」

新「何うした」

作「己おれが彼処あそこに寝て居るとお前めえ、裏の方の竹を打付けた窓がある、彼処のお前雨戸を明けて、何うして這入へえったかを見ると、お前の処の姉御、お累さんが赤ん坊を抱いて、ずぶ濡れで、瘦せた手を己の胸の上へ載せて、よう新吉さんを帰けえしておくんなさいよ、新吉さんを帰けえしておくんなさいよと云つて、己が胸をおっべしよ押おっべしよ 圧おっべしよれる時の、怖こええの怖こえくねえのつて、己はせつなくつて口イ利けなかつた」

新「夢を見たのだよ、種いろん々な事ことで氣を揉むから然そう云う夢を見るのだ、夢だよ」

作「夢で無ねえよ、あゝ彼処の二畳の隅に樽があるだろう」

新「ウン」

作「樽の上に簀みのが掛けてある」

新「ウン、ある」

作「簀の掛けてある処に赤ん坊を抱いて立つて居るよう」

新「よせ畜生、氣の故だせい」

作「氣の故じやア無え、あゝ怖おっかねえ、あれ〜」

新「おい潜り込んで己の処へ這入へえつて来ちやアいけねえ、仕様がねえなア」
とん〜、

「御免なさい〜」

新「誰だい」

作「また来た、あゝ怖おっかねえ〜」

新「誰だい」

男「えゝ新吉さんは此方こつちにお出いでなさいますか、ちよつくら帰けえつて、家は騒うちぎが出来まし
た、お累さんが飛んだ事になりましたから方々ほう／＼、搜して居たんだ、直すぐに帰けえつて下せえ」

作「誰だか」

新「誰だか見な」

作「怖おっくつて外へは出られねえ、皆みんな此処こゝに居るだけでも、中々歩あく訳わけにいかねえ、足
イすくんで歩あかれねえ」

四十六

新「何方どなたでございます」

とガラリと明けて見ると村の者。

男「やア新吉さん、居たか、あゝ好よかつた、さア帰けえつて、氣の毒とも何なんとも姉御の始末が付かねえ、何どうも搜したの搜さねえのつて直ぐ帰けえらないではいけねえ、届ける所へ届けて、名主様へも話わしてね、困るから、さア帰けえつて」

と云われ、新吉は何なんの事だかといふ分りませんが、致し方なく夜明け方に帰りますると、情ないかな、女房お累は、草薙鎌くさなぎの研澄とぎすましたので咽喉のどぶえ笛かきを搔切かきつて、片手に子供を抱かかいたなり死んで居るから、ぞつとする程凄しかつたが、仕方がないから氣が狂ちがつてなどと云立て、先まず名主へも届けて野辺送りをする事になりました。それから懲ありて三藏も中々容易に寄り付きません。新吉もお累が死んで仕舞あつた後は、三藏から内所で金を送る事もなし、別みに見当あてがないから宿替やどがえをしようとして、欲ほしがる人に悉そつくり皆家を譲ゆつて、時々お賤せんの処へしけ込みます。其の間は仕方がないから、水街道へ参まつて宿屋へ泊り、大生郷の宇治の里

へ参つて泊りなどして、惣右衛門が留守だと近々しけ込みます。世間でもかんづいて居るから新吉は憎まれ者で、誰も付合う人がない。横曾根辺の者は新吉に逢つても挨拶もせぬようになりました。新吉はどん／＼降る中を潜つと忍んでお賤の処へ来しました。

新「おい／＼お賤さん」

賤「あい新吉さんかえ」

新「あゝ明けておくれな」

賤「あい能くお出だね、傘なしかえ」

新「傘は有つたが借傘で、柄漏がして、差しても差さねえでも同じ事ですぶ濡だ、且

那の病気は何うだえ」

賤「お前がちよい／＼見舞に来てくれるので、新吉は親切な者だ心に掛けてちよく／＼来て呉れるが感心だつて、悦んで居るが、年が年だからねえ、何だつて五十五だもの、病氣疲れですつかり寝付いて居るからお上りよ」

新「そうかえ夜来るのも極りが悪い様だが、実は少し小遣が無くなって、外へ泊る訳にいかねえから、看病かた／＼来たのだが、能く御新造さんが承知で旦那を此方へよこして置くね」

賤「なに碌な看病もしないけれども、お宅では気に入らないと云つてね、気に入つた処で看病をして貰う方がよいと人が来ると憎まれ口を利くから、お内儀さんも若旦那も此の二三日来ないから、私一人で看病するのだから実は困るよ、困るけれども其の代りには首尾がよくつて、種々旦那に話して置いた事もあるのだからね、遺言状まで私は頼んで書いて貰つて置いたから、今能く寝付いて居るし、遊んでおいでな、揺ぶつても病氣疲れで能く寝て居るから、茲で何を云つても旦那に聞える氣遣は無し、他に誰も居ないから、真に差向いで話するがね、私は旦那に受出されて此処へ来て、お前とは江戸に居る時分から、まあ心易いが、私の方で彼様事を云出してから、お前も厭々ながらお内儀まであゝ云う訳になつて苦労された事も忘れやアしないから、私は何処迄もお前に厭がられても縋りつく了簡だが、若しお前に厭がられ、見捨てられると困るが、見捨てないというお前の証拠が見度いわ」

新「見捨てるも見捨てないも実はお前己だつて身寄頼りもない身体、今は斯うなつて誰も鼻撮みで新吉と云うと他人は恐氣を振つて居るのだ、長く此処に居る気もないから、寧ろ土地を変えて常陸の方へでも行こうか、上州の方へ行こうか、それとも江戸へ帰ろうかと思う事も有るが、お前が此処に居る中は何うしても離れる事は出来ないが、村中

で憎まれてるから土手に待伏でもして居て向むこう臆おそでも引ひ払はらわれやアしねえかと心配で
のう」

賤「私も一緒に行つて仕舞い度たいが、今旦那が死掛つて居るから、旦那が死んで仕舞え
ば行いかれるが、今直すくには行けない、大きな声では云えないけれども、私は形かた見み分の事も
遺言状に書かして置いたし、お前の事も書かしてね、其処そこは旨く行つて居るけれども、旦那が癒なればまだ五十五だもの、其様そんにお爺おやさんでもないから、達者になりやア何時いつ迄も一
緒に居て、ベン／＼とおん爺じいの機嫌を取らなければならぬが、新吉さん無理な事を頼む
様だが、お前私を見捨てないと云う証拠を見せるならば今夜見せてお呉れ」

新「何どうしよう」

賤「うちの旦那を殺してお呉れな」

四十七

新「殺せつて其様そんな事は出来ねえ」

賤「なぜ／＼なぜ出来ないの」

新「人情として出来ねえ、お前の執成とりなしが宜いから、旦那は己が来ると、新吉手前てめえの様に親切な者はねえ、小遣こづけえを持って行け、独身ひとりみでは困るだろう、此の帯は手前に遣やる物も遣ると、仮令たしえ着古した物でも真に親切にして呉れて、旦那の顔を見ては何うしても殺せないよ」

賤「殺せませす、だから新吉さん、私はお前が可愛いと云う情じょうのない事を知って居るよ」

新「情がないとは」

賤「情有るなら殺してお呉れよ」

新「情有るから殺せないのだ」

賤「何を云うのだね、じれつたいよ、お出でつたらお出でよ」

然そうなると婦人の方が度胸よの能いもので、新吉の手を引いて病間そへ窺そつと忍んで参りますと、惣右衛門は病氣疲れてグツスリと寝入端ねいりばなでございます。ブル／＼ふると居る新吉に構わず、細引ほそびきを取つて向の柱むこうへ結び付け、惣右衛門の側へ来て寢息うかを窺うかがって、起るか起きぬか試ためしに小声で、

賤「旦那／＼」

と二三声ふたこえみこえ呼んでみたが、グウ／＼と躰いびきが途断とぎれませんか、窃そつと襟の間へ細引を

挟み、また此方へ綾こぢらに取つて、お賤は新吉に眼くばせをするから、新吉ももう仕方がない
と度胸を据すえて、細引を手に捲まき付けて足を踏張ふんばる。お賤は枕を押えて、

賤「旦那えく」

と云いながら、枕を引く途端、新吉は力に任まかして、

新「うーム」

と引くと仰向に寝たなり虚空を掴んで、

惣「ウーン」

賤「じれつたいね新吉さん、グツと斯こうお引きよ、もう一つお引きよ」

新「うむ」

と又引く途端新吉は滑つて後の柱うしろで頭をコツン。

新「アイタ」

賤「ア、じれつたいね」

と有合せた小杉紙ありあわを台こすぎがみ処だいどころで二三帖さんじょうばかり濡して来て、ピツタリと惣右衛門の顔

へ当てがって暫く置いた。新吉はそれ程の悪党でもないからブルくふる慄ふるえて居ります。

濡紙を取つて呼吸を見るとパツタリ息は絶えた様子細引を取つて見ると、咽喉のどくび頸びに細引で

縊くりました痕きずが二本付いて居りますから、手の掌ひらで水を付けては頻しきりに揉療治を始めました。すると此の痕は少し消えた様な塩梅。

賤「さアもう大丈夫だ、新吉さんお前は今夜帰つて、そうしてこれ〜にするのだから、明日あしたお前悟られない様に度胸すを据すえて来てお呉れよ」

といつて新吉を帰して、すっぱり跡方の始末を付けて、直すぐに自分は本家へ跣足はだしで駈ゆ込んで行ゆきました

賤「旦那様がむずかしくなりましたからお出いでなすつて、まだ息は有りますが御様子が變つたから」

というと驚きまして、本家では悴惣せがれぞうじろう二郎から弟息子の惣吉そうきちにお内儀かみさん村の年寄が駈けて来て見ると間に合いません間に合わない訳で、殺した奴が知らしたのでございます。是非なく是から遺言状をというので出して見ると、其の書置かき置きに、私は老年の病氣だから明日あすが日も知れん、若し私もが亡ない後は家督相続は惣二郎、又弟惣吉は相当の処へ惣二郎の眼識めがねを以て養子に遣つて呉れ、形見分かたみわけは是々、何事も年寄作右衛門と相談の上事を謀はかる様、お賤は身寄頼りもない者、無理無体に身請をして連れて来た者であるから、私はが死ねば皆みんなに憎まれて此の土地にいられまいから、元々の通り江戸へ帰して遣つてくれ、

帰る時は必ず金を五十両付けて帰してくれ、形見分はお賤に是々、新吉は折々見舞に来る親切な男なれども、お賤と中がよいから、村方の者は密通でもしている様に思うが、彼は江戸からの親しい男で、左様な訳はない、親切な者で有る事は見抜いているから、己が葬式は、本葬は後でしても、遺骸を埋めるのは内葬にして、湯灌は新吉一人に申し付ける、外の者は親類でも手を付ける事は相成らぬ。という妙な書置でございしますが、田舎は堅いから、其の通りに先ずお寺様へ知らせに遣り、夜に入り内葬だから湯灌に成りましても新吉一人、湯灌は一人では出来ぬもので、早桶を湯灌場に置いて、誰も手を付けては成らぬというのだから、

新「皆さん入らしつては困りますよ、遺言に背きますから」

「実にお前は仕合せだ」

と年寄から親類の者も本堂に控えて居る。是から早桶の蓋を取ると合掌を組んだなり、惣右衛門の仏様は斯う首を垂れて居るのを見ると、新吉は現在自分が殺したと思うとおどくとして手が附けられません。殊に一人では出来ないがと思つて居る処へ、土手の甚藏という男、是は新吉と一旦兄弟分に成りました悪漢。

甚「新吉く」

新「兄いか」

甚「一寸顔出しをしたのだが、本家へ行つたらお内儀かみさんが泣いているし、誠にお愁傷いでのう、惜しい旦那を殺した、え、此の位くれえ物の解わかつたあんな名主は近村きんそんにねえ善いい人だが、新吉、手前てまえ仕合せだな、一人で湯灌を言付けられて、形見分もたんまりと、エおい、おつう遣つてゐるぜ」

新「却かえつて有難迷惑で一人で困つてるのだ」

甚「困るたつて新吉、一人で湯灌は馴れなくつては出来ねえ、おい、それじゃアいかねえ、内所で己が手伝つて遣ろうか」

新「じゃア内所で遣つてくんねえ」

四十八

甚「弓張ゆみはりなぎア其方そつちの羽目へ指しねえな、提灯ちようちんをよ、盥たれえを伏せて置いて、仏様の腋わきの下へ手を入れて、ずうツと遣つて、盥きわの際きわで早桶を横にするとずうツと足が出る、足を盥の上へ載せて、胡坐あぐらをかゝせて膝おせで押えるのだ、自分の胸の処へ仏様の頭おつを押付けて、

肋あばら骨ほねまで洗うのだ」

新「一人じゃア出来ねえ」

甚「己は馴れていらア、手伝つて遣ろう」

新「何うど」

甚「何うだつて盥たれえを伏せるのだよ、提ちよう灯ちんを其方そつちへ、えゝ暗くれえ心しんを切りねえ、えゝ出しねえ、出たゝオ、冷てえなア、お手伝いでござえ、早桶をグツと引くのだ」

新「何う」

甚「何うたつてグツと力に任して、えゝ気味を悪がるな」

新「あゝ出たゝ」

甚「出たつて出したのだ、さア胡座あぐらをかゝせな、盥たれえの上へ、宜よしゝそりや来た水を、水だよ、湯灌をするのに水が汲んでねえのか、仕様がねえなア、早く水を持って来きねえ」と云うから新吉はブルふるゝ慄ふるえながら二つの手桶を提さげて井戸端へ行く。

甚「旦那お手伝でげすよ」

と抱上げて見ると、仏様の首がガツクリ垂れると、何どう云うものか惣右衛門の鼻からタラゝと鼻血が流れました。

甚「おや血が出た、身寄か親類が来ると血が出ると言うが己は身寄親類でもねえが、何うして血が出るか、おゝ恐ろしく片方かたつぽから出るなア」

と仰向にして仏様の首を見ると、時過たつたから前よりは判はつきり然と黒ずんだ紫色に細引の痕あとが二本有るから、甚藏はジーツと暫く見て居る処へ手桶を提げて新吉がヒョロ／＼遣つて来て、

新「兄い水を持つて来たよ」

甚「水を持つて来たか此方こつちへ入れて戸を締めなよ」

新「な何だ」

甚「此処こけへ来て見やア、仏様の顔を見やア」

新「見たつて仕様がねえ」

甚「見やア此の鼻血をよ」

新「いけねえなア、其様そんなものを見たつて仕様がねえ、悪い悪戯いたずらアするなア」

甚「悪いわりたつて己がしたのじゃアねえ、自然ひとりでに出たのだ新吉咽喉頸のどくびに筋が出て居るな、此の筋を見や」

新「エ、筋が有つたつても構わねえ、水を掛けて早く埋めよう、おい早く納めよう」

甚「納められるもんかえ、やい、是りやア旦那は病気で死んだのじやアねえ変死だ、咽喉に筋があり、鼻血が出れば何奴か縊り殺した奴が有るに違えねえ」

新「何だ人聴が悪いや、大きな声をしなさんな、仏様の為にならねえ」

甚「手前も己も旦那には御恩があらア、其の旦那の変死を此の儘に埋めちやア済まねえ、誰か此の村に居る奴が殺したに違えねえから、敵を捜して、手前も己も旦那の敵を取つて恩返しを仕なけりやア済まねえ、代官へでも何処へでも引張つて行くのだ、本堂に若旦那が居るから若旦那に一寸と云つて呼んで……」

新「何だな其様な事をして兄い困るよ、藪を突付いて蛇を出す様な事をいつちやア困らアな、今お経を誦げてるから、エーおい兄い、それはそれにして埋めて仕舞おう」

甚「埋められるもんかえ、それとも新吉、実は兄い私が殺したんだと一言云やア黙つて埋めて遣ろう」

新「何を詰らねえ事を、な何を、思い掛けねえ事をいうじやアねえか何だつて旦那を」

甚「手前が殺したんでなけりやア外に敵が有るのだから敵討しようじやアねえか、手前お賤と疾うから深え中で逢引するなア種が上つて居るが、手前は度胸がなくつても彼の女ア度胸が宜から殺してくれエといい兼ねゝえ、キユウと遣つたな」

新「何^どうも、な何^{なん}だつてそれは、何^どうも、エおい兄^{あんに}い外の事と違つて大恩人だもの、何^どういう訳で思い違^{ちげ}えて其様^{そん}な事を、え、おい兄^{あんに}い」

甚「何をいやアがるのだ、手前^{てめえ}が殺さなけりやア殺さねえで宜^いいやア、手前と己は兄弟分の誼^{よしみ}が有るから打明けて殺したと云やア黙つて口を拭^ふいて埋めるが、外に敵が有れば敵討だ、マア仏様を本堂へ持つて行こう」

新「これド、何^どうも困るナアおい兄^{あんに}い、え、兄い表向にすれば大変な事に成るよ」

甚「え、成つたつて宜^いいや、不人情な事をいうな、手前^{てめえ}が殺したなら黙^{うめ}つて埋^{うめ}るてえのだ、殺したら殺したと云いねえ、殺したか」

新「仕様がねえな、何^どうも己が殺したという訳じゃアねえが、それは、困つて仕舞つたなア、唯^ただ一寸手伝^{ちよいと}つたのだ」

甚「なに手伝つた、じゃアお賤^{せん}が遣つたか」

新「それには種^{いろく}々訳が有るので、唯繩を引張つたばかりで」

甚「それで宜しい、引張つたばかりで沢山だ、お賤^{せん}が引くなア女の力じゃア足りねえから、新吉さん此の繩を締めてなざア能く有る形だ、宜しい、よし／＼早く水を掛けやア」
とザブリ水を打掛^{ぶっか}けて其の儘^{なり}にお香^{こう}刺^{ざり}の真似をして、暗いうちに葬りに成りましたか

ら、誰有つて知る者はございませぬが、此の種を知っている者は土手の甚藏ばかり、七日が過ると土手の甚藏が賭博に負けて素っ裸体になり、寒いから犢鼻禪の上に馬の腹掛を引掛けて妙な形に成りまして、お賤の処へ参り、

甚「え、御免なせえ」

と是から強請になる処、一寸一息吐きまして。

四十九

土手の甚藏がお賤の宅へ参りましたのは、七日も過ぎましてから、ほとぼりの冷めた時分行くのは巧の深い奴でございます。丁度九月十一日で、余程寒いから素肌へ馬の腹掛を巻付けましたから、太輪に抱茗荷の紋が肩の処へ出て居ります、妙な姿を致して、

甚「へエ御免なせえ、へエ今日日は」

賤「ハイ何方え」

甚「へエお賤さん御免なせえ、今日は」

賤「おや、新吉さん土手の甚藏さんが来たよ」

新「え、土手の甚藏」

新吉は他人が来ると火鉢の側に食客の様な風をして居るが、人が帰って仕舞えば亭主振つて居りますが、甚藏と聞くと慄つとする程で、心の中で驚きましたが、眼をパチノとして火鉢の側に小さく成つて居りますと、

甚「誠に続いて好い塩梅にお天気で」

賤「はい、さア、まア一服お喫りなさいよ」

甚「へエ御免なさい、斯ういう始末でねえお賤さん、御本家へもお悔に上りましたが、旦那がお亡なりで嘸もう御愁傷でございましょう、へエ私も世話に成つた旦那で、平常優しくして甚藏や悪い事をする村へ置かねえぞと、親切に意見をいつて、喧しい事は喧しいけれども、時々小遣もおくんなすつてね、善い人で、惜まれる人は早く死ぬと云うが、五十五じゃア定命とは云われねえ位で嘸お前さんもお力落しで、新吉此処に居るのか手前、え、おい」

新「兄い此方へお上りなさい」

甚「お賤さん、新吉がお前さんの処へ来て御厄介で、家は彼様な塩梅に成つて此方より外に居る処が無えから、宜い事にして、新吉が寝泊りをして居るといふのだが、私も新吉

もお賤さんもお互に江戸子で、妙なもので、村の者じやア話しが合わねえから新吉と私は兄弟分になり、兄弟分の誼で、互に銭がねえといやア、ソレ持ってけというように腹の中をサツクリ割った間柄、新吉の事を悪くいう奴が有ると、何でえといつて喧嘩もする様な訳で、へエ有難う、カラもう何うも仕様がねえ、新吉、物がへマに行つてな、此の通り人間が馬の腹掛を借りて着て居る様に成つちやア意気地はねえ、馬の腹掛で寒さを凌ぐので、へエ有がとう、好いお宅でげすねえ、私は初めて来たので」

賤「然うですか、なに好い家を拵えて下すつても仕方がござりませんよ、斯う急に、旦那様がお逝去に成ろうとは思いませんでねえ、何時までも此処に住んで居る了簡で居りましたが、旦那が亡なられては仕方が有りません。他に行く処はなし、まア生れ故郷の江戸へ帰る様な事に成りますが、本当に夢の様な心持で、あゝ詰らないものだと考え出すと悲しく成つてね」

甚「そうでしょう、是は何うも実になア、新吉お賤さんは何の位え力落だか知れやアしねえ、ナア、へエ有難う良いお茶だねえ、此様な良い茶を村の奴に飲したつて分らねえ、へエ有難う、お賤さん誠に申し兼ねた訳でげすがねえ、旦那が達者でいらつしやれば黙つて御無心申すのだが、此の通りの始末で、からモウ仕様がねえ、何うかお願いでございま

すが些と許り小遣をお貰え申し度が、何うか些と許り借金を返して江戸へでも帰りてえ了
簡も有るのですが、何うか新吉誠に無理だがお賤さんに願つてねえ、姉さんお願いでげす
が些とばかり小遣をねえ」

賤「はい困りますねえ、旦那が亡なりまして私は小遣も何もないのですが、沢山の事
は出来ませんが、真の志ばかりで誠に少しばかりでございませうが」

甚「イ、エもう」

賤「真の少しばかりでお足しには成りますまいが、一杯召上つて」

甚「へエ有難う、へエ」

と開けて見ると二朱金で二個。

甚「是はお賤さんたつた一分で」

賤「はい」

甚「一分や二分じゃア借りたつて私の身の行立つ訳は有りませぬねえ、借金だらけだか
ら些と眼鼻を付けて私も何うか堅氣に成りてえと思つてお願い申すのだが、それを一分ば
かり貰つても法が付かねえから、少し眼鼻の付く様にモウ些とばかり何うかね」

賤「おや一分では少ないと仰しやるの、そう、お氣の毒様出来ませぬ、私どもは深川に

居ります時にも随分錢ぜにもら貫いは来ましたが、一分遣れば大概帰りました、一分より余計たんは上あける訳にやア参りません、はい女の身の上で有りますからねハイ、一分で少ないと仰しやれば、身寄親類ではなし上げる訳は有りませんが、そうして幾ほしら欲しいと仰しやるのでございますえ

甚「幾らカクラてえお強請ねだり申すのでげすから貰う方で限りはねえ、幾ら多くつても宜いいが、お賤たんさんの方は沢山たん遣りたくねえというのが当然あたりめえの話だが、借金の眼鼻を付けて身おつ立つ様にして貰うにやア、何様どんな事をしても三拾両貰わなけりやア追付おつかねえから、三拾両お借り申してえのさ、ねえ何うか」

賤「何なんだえ三拾両呆れ返つて仕舞うよ、女と思つて馬鹿にしてお呉れでないよ、何だエお前まへさんは、お前さんと私は何だエ、碌にお目に掛つた事も有りませんよ、女一人と思つて馬鹿にして三拾両、ハイ、そうですかと誰が貸しますえ、訝おかしな事をいつて、なん、なん、なん何をお前さんに三拾両お金を貸す縁がないでは有りませんか」

甚「それは縁はない、縁はないがね、縁を付けりやア付かねえ事も有りますめえ、ねえ
 新吉と私は兄弟分、ねえ其の新吉が此方様へ御厄介に成つて居るもの其の縁で来た私さ」
 賤「新吉さんは兄弟分か知りませんが、私はお前さんを知りません、新吉さん帰つてお
 呉んなさいヨウ、呆れらア馬鹿くしい、人を馬鹿にして三拾両なんて誰が貸す奴が有る
 ものか、三拾両貸す様な私はお前さんに弱い尻尾を見られて居れば仕方がないが、私の家
 で情交の仲宿をしたとか博奕の堂敷でも為たなら、怖いから貸す事も有るが、何もお
 前さん方に三拾両の大金を強請られる因縁は有りません、帰つてお呉れ、出来ませんよ、
 ハイ三文も出来ませんよ」

甚「然う腹を立つちやア仕様がねえ、え、おい、だがねえお賤さん、人間が馬の腹掛を
 着て来る位えの恥を明かしてお前さんに頼むのだ、私も此の大の野郎が両手を突いて斯ん
 な様アしてお頼み申すのだから能々の事、宜いかね、それにたった一分じやア法が付か
 ねえ、私の様な大きな野郎が手を突いてのお頼みだね、此の身体を打毀して薪にしても一
 分や二分のものはあらアね、馬の腹掛を着て頼むのだから、お前さん三拾両貸して呉れて
 も宜かろうと思う」

賤「何が宜いのだえ、何が宜いのだよ、何もお前さん方に三拾両の四拾両のと借りられ

る縁が有りません、悪い事をした覚えは有りません、博奕の宿や地獄の宿はしませんから貸されませんよ」

甚「じゃア何う有つてもいけねえのかえ」

賤「帰つてお呉んなさい」

甚「そうか無理にお借り申そうという訳じゃアねえ、じゃア帰りましょう、新吉黙つて引込んで居るなえ此処へ出ろ、借りて呉れ、ヤイ」

新「其様な大きな声をしてはいけねえやな兄い仕方がねえな、お賤さん仕方がねえ貸しねえ」

賤「何だえ、お前さんは心易いか知りませんが、私は存じませんが、何様な事が有つても出来ませんよ、帰つてお呉んなさい」

甚「何う有つても貸せねえつてもア無理にやア借りねえ、じゃア云つて聞かせるが、コレ女だと思ふから優しく出りやア宜い氣に成りやアがつて、太え事をしやアがつて、色の仲宿や博奕の堂敷が何程の罪だ、世の中に悪い事と云うなア人殺しに間男と盗賊だ」

賤「何をいうのだ」

甚「なに、何うしたも斯うしたもねえ、新吉此処へ出ろ、エ、おい、咽喉頭の筋が一本

拾両にしても二十両が物アあらア」

新「マア黙つて兄あんにい」

甚「何なんでえ籠べらぼう棒め、己おとが柔和なしくして居るのだから文句なしに出あたりめえ、手前等てめえらが此の村に居ると村が穢けがれらア、手前等を此こ処けえ置くもんか籠棒め、今さに逆さか磔はり刑つけにしよ
うと簀すま巻まきにして絹川ほへ投ほうり込こもうと己おとが口くち一つだから然そう思おもつてろえ」

新「おい、其そん様な事を人に」

甚「人に知れたつて構かまうもんかえ」

新「マアく待ちねえ、知らねえのだお賤せんさんは、一件の事を知らねえのだよ、だから己おとが何なんうか才覚さいかくして持もつて行いこう、今夜きょう屹度きつと三拾両持もつて行ゆくよ」

甚「間拔ひっこめ、黙もつて引込ひっこんで居る奴やつが有あるもんか、そんなら直すぐに出いせ」

新「今は無いから晩方ばんぱうまでに持もつて行ゆくよ」

甚「じゃア屹度持もつて来こい」

新「今いまに持もつて行ゆくから、ギヤアく騒さわがねえで、実は、己おとがまだお賤せんに喋しゃべらねえから
だよ、当人あたが知らねえのだからよ」

甚「コレ、博奕ばくあの仲宿なとは何なんだ、太ふえ女あまつちよだ」

新「そんな大きな声を」

甚「屹度持つて来い、来ねえと了簡が有るぞ」

新「何ごと置いても屹度金は持つて行くよ、驚いたねえ」

賤「おい新吉さん、何んだつて彼奴にへえつくもうつくするのだよ、お前がヘラ／＼すると猶増長すらアね」

新「何うしてもいけないよ、貸さなけりやア成らねえ」

賤「何で彼奴に貸すのだえ」

新「何だつて、いけねえ事に成つて仕舞つた、旦那の湯灌の時彼奴が来やアがつて、一人じゃア出来ねえから手伝うといつて、仏様を見ると、咽喉頸に筋が有るのを見付けやがつて、ア屹度殺したろう、殺したといやア黙つてるが云わなけりやア仏様を本堂へ持つて行つて詮議方するといふから、驚いて否応なしに種を明した」

賤「アレ／＼あれだもの、新吉さん、それだもの、本堂に仕方がないよ、彼までするにやア、旦那の達者の時分から丹精したに、彼の悪党に種を明して仕舞つて何うするのだよ、幾ら貸したつて役に立つものかね、側から借りに来るよ彼奴がさ」

新「だけれども隠すにも何も仕様がない、本堂へ持つて行かれりやア直に悪事が露れる

「じゃアねえか、黙つて埋めて遣るから云えといふので」

賤「本当に仕様がなないよ、何処へでも持つて行けど云えばいゝじゃアないか」

新「然ういと直に彼奴が持つて行くよ」

賤「持つて行つたつていゝじゃアないか、何処までも覚えは有りませんと私も云い張ろ
うじゃアないか」

新「云い張れないよ、彼奴ア中々の奴でそれに彼アいう時は口が利けないからねえ、脛
疵だからお前のいう様な訳にやアいかねえ、金で口止めするより外に仕方はなないよ」

賤「でも三拾両貸すと、ばんごとく来ては大きな声で呶鳴ると、何で甚藏が呶鳴るか
と他人の耳にも這入り、目明が居るから、おかしく勘付かれて、あいつが縛られて叩か
れると喋るから、何の道新吉さん仕方がない、土手の甚藏を何うかして殺してお仕舞いよ
う」

五十一

新「何うしてくゝ中々彼奴ア己より強い奴で、滅法力が有るから、彼奴は撲たれても痛

くねえつてえので、五人位掛らねえじやアおつ付かねえ」

賤「何うか工夫が有るだらうじやアないか」

新「工夫が中々いかないよ」

賤「ちよいとく新吉さん耳をお貸し」

新「エ、うんうん成程是は旨え」

賤「だからさア、それより外に仕方がないよ、悟られるといけない、悪党だから悟られない様に確かり男らしくよ」

と何か囁やき、新吉が得心して、且那の短い脇差をさして、新吉が日が暮れて少したつて土手の甚藏の家へ来て、土間口から、

新「はい御免」

甚「サア上りやア、マア下駄を穿いたなりで上りやア、草履か、構わねえ、畳がねえから掃除も何もしねえから其の儘上りや」

新「兄い、先刻の様に高声であんな事を云つてくれちやア困るじやアねえか、己はどうしようかと思つた、表に人でも立つて居たら」

甚「何故、いゝじやアねえか、己が面を出したら黙つて金を出すかと思つたら、まごノ

ゝして居やアがつて、手前お賤に惚れていやアがる、馬鹿、彼女めいゝ気に成りやアがつて、嘸鳴り付けるから仕方なしに云つたんだ、此畜生金え持つて来たか」

新「彼れから後でお賤に話をして実は是々で明したと云つたら、それは済まない事を云つた、知らなかつたから誠に悪い事を云つたが、甚藏さんに悪く思わねえ様に然ういつてくれというのだ」

甚「手前湯灌場の事を云つたか」

新「云つたよ、云つたら驚いてお賤は甚藏さんに済まなかつた、然ういう訳なら何故早く私に然う云わないで、だが土手の甚藏さんに茲で三拾や四拾や上げてても焼石に水で駄目だから、纏まつた金を上げようから、何うかそれで堅気になり、此方も江戸へ行つて小世帯を持つから、お互に此の事は云わねえという証拠の書付でも貰つて、たんとは上げられないが百両上げるから、百両で堅気に成つたら宜かろうと云うので、長く彼様な事をしていても甚藏さんも詰らねえじゃアないか、兄弟分の友誼で此の事はいわないと達引いて呉れるなら、生涯食える様に百両遣ろうというのだ、百両貰つて堅気に成りねえ」

甚「然うか、有難え、百両呉れゝば生涯お互えに堅気に成りてえ、己も馬鹿は廃めてえや」

新「然う極めてくんねえ」

甚「じゃアまア金さえ持つて来りやア」

新「今茲にはねえ」

甚「何をいうんだ馬鹿」

新「マア人のいう事を聞きねえ、旦那が達者のうちお賤に己が死んだら食方に困るだろうから、死んでも食方の付く様にといつて、実は根本の聖天山の手水鉢の根に金が埋めて有るから、それを以てと言付けて有るのだ、え、二百両あると思ひねえ、聖天山の左の手水鉢の側に二百両埋めて有るのだから、それを百両ずつ分けて江戸へ持つて行つて、お互に悪事は云わねえ云いますめえと約束して、堅気になつて、親類になろうじゃアねえか」

甚「然うか、新吉、旦那もお賤にやア惚れて居たなア、二百両という金を埋めて置いて是で食えよとなア、若旦那にもいわねえで金を埋めて置くてえのは金持は違わア」

新「早く堀らねえと彼処の山は自然薯を堀りに行く奴が有るから、無暗に遣られるといけねえ」

甚「じゃア早く」

新「鋤か鍬はねえか」

甚「丁度鋤が有るから」

と有合ありあいの鋤を担かついで是から二十丁もある根本の聖天山あがへ上つて見ると、四辺あたりは森々しんくと樹木が茂つて居り、裏手は絹川の流ながれはどうくと、此の頃ごろの雨氣あまけに水増して急おとに落す河水の音高く、月は皎々こうくと隈なく冴さえて流へ映る、誠に好よい景色だが、高い処は寒うごございますので、

甚「新吉此処こゝは滅法寒いナア」

新「なに穴を掘ると暖あつたかくなつて汗が出るよ、穴を掘りねえ」

甚「余計な事をいうな」

新「此処だく」

と差さし図を致しますから、

甚「よし〜」

といいながら新吉と土手の甚藏がポカ〜掘りまする、所が金は出ません、幾ら掘つても金は出ない訳もとで固もより無い金、びつしより汗をかいて、

甚「新吉金は無ねえぜ」

新「無いね」

甚「何をいうんだ、無駄つ骨を折しやアがつて金は有りやアしねえ」

五十二

新「左と云つたが、ひよつとしたら向つて左かしら」

甚「何を云うんだ仕様がねえな此畜生咽喉が渴いて仕様がねえ、斯んなにびつしよりに成つた」

新「己も咽喉が渴くから水を飲んでえと思つても、手水鉢は殻で柄杓はからくだが、誰もお参りに来ないと見えるな、うんそうく、此方へ来な、聖天山の裏手に清水の湧く処がある、社の裏手で崖の中段にちよろく、煙管の羅宇から出る様な清水が溜つて、月が映っている、兄い彼処の水は旨えな」

甚「旨えが怖くつて下りられねえ」

新「下りられねえつて何うかして下りられるだろう、待ちねえあの杉だか松だか柏だかの根方に成つて居る処に藤蔓に蔦や何か繩の様になつてあるから、兄い此奴に吊下つ

て行けば大丈夫だが己は行つた事がねえからお前行つてくんねえな」

甚「此奴ア旨え事を考えやアがった、新吉の智慧じやアねえ様だ、此奴ア旨え、柄杓は有るか」

と手水鉢の柄杓を口に啣えて、土手の甚藏が蔦蔓に掴まつて段々下りて行くと、ちようど松柏の根方の匍つている処に足掛りを拵えて、段々と谷間へ下りまして、

甚「ア、斯うやつて見ると高いナア、新吉ヤイ〜水は充分あらア」

新「早くお前飲んだら一杯持つて来て呉んねえ」

甚「手前下りやアな、持つて行く訳にアいかねえ、ポタ〜柄杓が漏らア、カラ〜になつていたからナア、ア、旨え〜甘露だ、いゝ水だ、ア、旨え、なに持つて行くのは騒ぎだよ」

新「後生だから、お願いだから少しでも手拭に浸して持つて来て呉んねえ咽喉が干つ付きそうだから」

甚「忌えましい奴だな、待ちヤア」

と一杯掬い上げて濡れない様に、平に柄杓の柄を啣えて蔦蔓に縋り、松柏の根方を足掛りにして、揺れても濡れない様にして段々登つて来る処を、足掛りの無い処を狙いすまし

て新吉が腰に帯したる小刀を引抜き、力一ぱいにプツリと藤蔓蔦蔓を切ると、ズル／＼ズーツと真逆さまに落ちましたが、何うして松柏の根方は張っているし、山石の角が出張っておりますから、頭を打破つて、落ちまするととても助かり様はございませんが、新吉は側にある石をごろ／＼谷間へ転がし落しました、其のうちむら／＼と雲が出て月が暗く成りましたから、それを幸いに新吉は脇差を鞘に納めて、さっさと帰つて来て、

新「お／＼お賤さん／＼明けてお呉れ／＼」

賤「誰だえ」

新「己らだよ」

賤「ア新吉さんかえ、能く帰つて来てお呉れだねえ、案じていたよさアお這入り」

新「ア、びしよ濡だ、何か斯う単物か何か着てえもんだ」

賤「袷と単物と重ねて置いたよ、さア是をお着、旨く行つたかえ」

新「すっぱり行つた」

賤「私の云つた通り後から石を投つたのかえ」

新「投つた／＼、気が付いたから後から石を二つばかり投つた、あれが頭へ当りやア直に阿陀仏だ」

賤「いゝね、今春中を拭くから一服おしよ、熱い湯で拭く方が好いから」

と銅盥かなだらへ湯を汲んで新吉の春中を拭いてやり、

賤「裕におなり」

新「大きにさばくした」

と其のうち此方こつちへ膳を持って来て酒の燗を付け、月を見ながら一猪口ひとちよく始めて、

賤「もう是で二人とも怖い者はないよ」

新「何うも実まことに旨うめえ事を考えて、一寸彼奴あいつも気が付かねえが、藤蔓に伝わって下りろと

いった時に、手前てまえの智慧じやアねえ様だといった時、胸がどきりとしたが、真逆まっさかさまに

なつて落おちる上から側あに在あつた石をごろく、あの石で頭ぶちわを打破ちげつたに違ちがえねえが、彼奴は

悪党あつちの罰うぬだ。己うぬが悪党の癖くせに」

是から二人で中好なかよく酒盛さかをしていゝうち空は段々雲が出て来て薄暗くなり、

賤「もう寝ようじやアないか」

というので戸締りをしに掛りましたが、

新「また曇つて来たぜ、早く仕ねえ」

賤「今お待ち」

と床を敷く間新吉は煙草を喫んでいると、戸外の処は細い土手に成つて下に生垣が有り、土手下の葭蘆が茂つております小溝の処をバリくくくという音。

新「何だか音がするぜ」

賤「お前様は臆病だよ、少し音がすると」

新「デモ何だかバリくく」

賤「なアに犬だよ」

新「何だか大変にバリ付くよ、何だろう」

と怖々庭を見る途端に、叢雲が断れて月がありくと照り渡り、映す月影で見ると、生垣を割つて出ましたのは、頭髮は乱れて肩に掛り、頭蓋は打裂けて面部から肩へ血だらけになり、素肌へ馬の腹掛を巻付けた形で、何処を何う助かったか土手の甚藏が庭に出た時は、驚きましたの驚きませんのではござりませぬ、是から悪事露見という処、一寸一息吐きまして。

引続きお聴きに入れました新吉お賤は、我罪を隠そうが為に、土手の甚藏を欺いて根本の聖天山の谷へ突落し、上から大石を突転がしましたから、もう甚藏の助かる氣遣は無いと安心して、二人差向いで、堤下の新家で一口飲んで、是れから寝ようと思つて雨戸を締めようという所へ、土手の生垣を破つて出たのは土手の甚藏、頭脳は破れて眉間から頤へ掛けて血は流れ、素肌に馬の腹掛を巻付けた姿で庭口の所へ斯う片足踏出して、小座敷の方を睨みました其の顔色は実に二夕眼とは見られぬ恐しい怖い姿でござりますから、新吉お賤は驚いたの驚かないの、ゾツと致しました。座敷へ上つてキャア〜騒がれては大変と思いましたが、新吉はもとよりそれ程悪徒という程でも有りませんから、たゞ甚藏の見相に驚きぶる〜慄えているから、

賤「新吉さんお前爰にいてはいけないよ、どんな事が有つても詮方がないから土手へ連れて行つて彼奴を斬払つておしまいよ」

新「斬払えたつて出れば殺される」

賤「大丈夫だよ、戸外へ連れて行つて堤の上で」

とぐず／＼云っているうちずか／＼と飛込んで縁側へ片足踏かけました甚藏は、出ようとする新吉の胸ぐらを把つて

甚「己うぬ、いけツ太え奴ぶて、能くも彼の谷へ突落しやアがったな、お賤も助けちやア置かねえ能くも己おれを騙だましやアがったな、サア出る、いけツ太え奴だ、お賤あまの女も今見ている」
と堤の上へ引摺ひきずって行ゆこうとする、此方こちらは出ようとする、向むこうは引くから、ずるゝと土手下へ落ちたから、

新「ウム、後生だから助けて、兄あい苦しい、己おれの持っている金は皆みんなお前に、これさ兄あい、何も彼かもみんなお前にやるから何どうか堪忍して、然そういう訳わけじやアねえ、行間ゆきま違ちがいだから」

甚「糞くでも喰くらえ、なに痛いたえと、ふざけやアがるな」

と力を入れて新吉の手を逆に把とつて捻ねじり、拳げんこ固こを振り上げてコツゝ撲ぶつたから痛いたいの痛くないのつて、眼まなこから火の出るようでございます。

新「兄あい助けて呉くれゝ」

と喚わめきますのを、

甚「うぬ助けるものか、お賤あまのあまつちよも今後あとからだ」

と腰こしから出刃庖丁でんぱうていを取出して新吉の胸むな下もとを目懸めくけて突つこうとすると、新吉は仰向おぼろに成なつて、

新「己が悪かつた堪忍して、兄い後生だから助けてよう」

というも大きな声を出しては事が露顕しようと思えますから、小声で助けて呉んねえと呼ぶばかりでございます。すると何処どこから飛んで来ましたかズドンと一発鉄砲の流丸それだまが、甚藏が今新吉を殺そうと出刃庖丁を振り翳かざしている胸元あたへ中りましたから、ぼったり前へのめりしましたが、片手に出刃庖丁を持ち、片手は土手の草に取つき、ずーと立上ったが爪つ立まだつてブル／＼と反身そりみに成る途端にがら／＼／＼と口から血反吐ちへどを吐きながらドンと前へ倒れた時は、新吉も鉄砲の音に驚き呆氣あつけに取られて一向訳が分らないから、身分が殺された心がしましてたゞ南無阿弥陀仏／＼と申しましたが、暫くして漸ようやくに気が付き起上りまして四辺あたりを見廻し、

新「ア、何処から飛んで来たか鉄砲の流丸それだま、お蔭で己は助かったが獵師が兎でも打とうと思つて弾丸たまが反それたか、ア、僥倖さいわい命いのち強つよかった、危あやない処がを遁のがれた、誰たれが鉄砲を打つたか有難いことだ」

併しかし獵かりゆうど夫おが此の様子を見て居りはせぬかと絹川の方を眺めますれど、只水音のみでございまして往來は絶えた真の夜中こちらでございます。此方の庭の生垣の方からちり／＼と火繩の火が見える様だから、油断をせず透すかして見ますると、寝衣帶ねまきおびの姿なりで小鳥を打ちま

する種が島を持つて漸くに草に縋^{すが}つて登つて来たのはお賤、

賤「新吉さんお前に怪我は無かつたかえ」

新「お賤、手前はマア何うした」

賤「私はモウ途方に暮れて仕舞つて、お前に怪我をさしてはならないから何うしようかと思つても、女が刃物三^{さん}味^{まい}しても彼奴^{あいつ}には敵^{かた}わないし、何うしようかと考えたら、ふいと気がついたんだよ、此の間ね旦那が鉄砲を出して小鳥をうつ時^{てまえ}手前もやつて見ろツてんでね、やつと引金に指を当^{あて}る事だけネ教わつて覚えたので、時々やつて見た事がある、今も丸^{たま}が込めて有る事を思い出したから、直^{すく}に旦那の手箱^{うち}の中から取出してね、思い切つて遣^やつて見たんだけれども、好^いい塩梅に近くで発^{はな}しただけに狙^やいも狂^やわらず行^やつて、お前に怪我さえ無ければ私はマア有難^こい斯^こんな嬉しい事は無いよ」

新「何しろ何^どうせ此の事が露^と顕^とせずにはいねえ、甚^{ぶつ}藏^{ころ}を撲^{ぶつ}殺^{ころ}して仕舞つてお前^{めえ}と己^こと一緒に成^なつていられる訳のものじゃアねえから、今のうち身を隠^{かく}してえものだ」

賤「ア、私もね茲^{こゝ}にいる気はさら／＼無いから、形^{かた}見^み分^{わけ}のお金も有るのだけれども、四十九日まで待つてはいられないから、少しは私の貯^{たくわ}えも有るから、それを持つて二人で直^{すく}に逃げようじゃアないか」

新「ウム、少しも早く今宵の内に」

というので、是から衣類や櫛笄貯えの金子までも一ト風呂敷として跡を暗まし、明近い頃に逐電して仕舞いました。また甚藏の死骸は絹川べりにありましたが、夜が明けて百姓が通り掛つて騒ぎ、名主へも届けたが、甚藏は平素悪まれもの、何うか死んで呉れ、ばい、と思つていた処、甚藏が絹川べりで鉄砲で撃殺されているというのを村の人達が聞込んで、ア、是からは安心だ、甚藏が死ねば村の者が助かるまでよと歎び、其の儘名主様へ届けて法藏寺に葬つたが、投込み同様、生きている中の悪事の罰で、勿論悪徒ですから誰の所業と詮議して呉れる者も有りません。新吉お賤の逃去りましたのは固より不義淫奔をしていて名主様が没ると、自分達は衣類や手廻りの小道具何や彼やを盗んでいなく成つたに相違ない。彼は素より浮気をしていた者の駈落だから左もあるべしと、是も尋ねる者もないので何事も有りませんが、名主惣右衛門の変死は誰有つて知る者は無い。肝腎の知っている甚藏が殺されましたから、惣右衛門は全く病死したのだと心得て居りますが、中には疑がつている者も有りまして、様々いうが、マア名主の跡目は忪惣次郎、誠に柔和温順の人でお父さんは道楽のみを致しましたが、それには引きかえ惣次郎は堅くつて内気ですから他に出たことも無い人ですが、或時村の友達に誘われまして水街道へ参つて、

麴屋こつじやという家うちで一猪口ひとちよこやりました、其の時、酌しやくに出た婦人すめが名をお隅すみと申しまして、齡としは廿歳はたちですが誠に人柄よの好い大人おとなしやかな婦人すめでございます。

五十四

水街道あたりでは皆枕まくらづき 附つきといひまして、働はたらき女むすめがお客きやくに身を任せるが多く有ります
が、此のお隅すみは唯無事に勤めを致し、余程人柄よの好い立振舞たてふりまから物の言ことい様、裾すそ 捌さばま
で一点の申分まごころのない女むすめですから、惣次郎そうじらうは麴屋こつじやの亭主ていしゆを呼んで、是は定めし出での宜よろしい者
だろうと聞合きこあせますと、元もとは谷出たにで羽守わのかみ様の御家ごけ来きで、神崎かみざき定右衛門さだえもんという人ひとの子こで、お
父とつさま様さまと一緒に浪人なみのりして此の水街道みづかどを通り、此の家いへに泊り合とせると定右衛門さだえもんが生憎あいにく病氣びやうき
で長く煩わづららつて没なくなり、後あとで薬くすり 代しろや葬式おくりあはせ料りょうに困まどつて居ゐります故ゆゑ、宿しゆくの主人あるじが金かねを出でし
て世話よちやを致いたしましたから恩報おんぱうじかた／＼此の家いへに奉公ほうこう致いたし、外ほかに身寄親類みよかけんるいもない心細こころこい
身みの上うへでございますから、何分願ねがひます、外ほかの女むすめとは違ちがひまして真面目まじめに奉公ほうこうを致いたして居ゐ
りますもの、鼻屑ひじきにして下くださいといふので、惣次郎そうじらうの氣きに入いりまして、度々たびたび遊あそびに来きる、
其その頃ころの名主なぬしと申まをしては中々幅ちやうちやうちの利きいた者ものですから、名主なぬし様の座敷ざしきへ出でる時は、働はたらき女むすめで

も芸妓げいしやでも、まア名主様に出たよなどと申して見得みえにしたものでございます。惣次郎もお隅には多分の祝義を遣わし折節は反物たんものなどを持つて来て遣る事も有るから、男振といきだてい気立といきだて柔和温順で親切な名主様と、お隅も大切に致し、何うも有難いと思どい、或日の事、

隅「私は外に参る処もない身の上でございますから、何分御鼻眞なすつて下さい」

というので、惣次郎も近ちか々／＼、来る中うちに、不図した縁で此のお隅と深くなりました事で、今迄堅い人が急に浮うかれ出すとは又格別でございますして、此の頃は家を外そとに致す様な事が度々でございますから、お母様つかさんも心配する、弟おとうと御もごございますが、是はまだ九歳で、何も役にたつ訳でもございませぬから、お母様も種々いっく心配なさるが、常に堅い人だから、うっかり意見がましい事もいわれませんので控えている。すると其の翌年寛政十年となり、大生郷村の天神様から左ひだりに曲ると法恩寺村という、其の法恩寺の境内に相撲が有ります。此の相撲場は細川越中守様御免の相撲場ということで、木村權六という人が只今もつ以て住んで居ります、縮緬ちりめんの幕張りを致して、田舎相撲でも立派な者で近郷からも随分見物が参ります、此処こゝに参っている関取は花車重吉はなぐるまじゆうきちという、先達私せんだわたくし古い番附を見ましたが、成程西の二段目の末から二番目に居ります。是は信州飯山いひやまの人で十一

の時初めて羽生村へ来て、名主方に二年ばかり奉公している其の中に、力もあり体格もいゝので、自分も好きの処から、法恩寺村の場所へ飛入りに這入ると、若いにしては強い、此の間は三段目の角力を投げたなど、賞められましたから、自分も一層相撲に成ろうと、其の頃の源氏山げんじやまという年寄の弟子となつたが、是より花車が来たといえば土地の者が鼻根にして見物に来る。惣次郎も何時も多分の祝義を遣わしましたが、今度もお隅を伴つて見物しようと思ひ、相撲は附けたり、お隅に逢いたいからそこへ支度を致しますと、母が心配して

母「アノ帰るなら今夜は些と早く帰つて貰へ度え、明日は少し用が有るからのう」

惣次郎「少しは遅く成るかも知れませんが、若し遅くなれば喜右衛門どんに何彼と頼んで置いたから御心配は無いが、万一して花車も一抔やり度いななど云うと、些とは私も遣り度い物も有りますから、又帰る迄に着物でも持たして遣りとうございますし、そんな事で種々又相談も致しますから、若し遅く成りましたら、何うかお先にお寝みなすつて下さいまし」

母「ハイ遅くならば先きに寝てもいゝだけれど、まア此の頃は他へ出ると泊つて来る事もあり、今迄旦那様が達者の時分にはお前が家を明けた事はねえ、あんな堅え若旦那様は

ねえ、今の世は逆さまだ、親が女郎を買って子が後生を願うと云う唄の通りだ、惣次郎様の様なあんな若旦那持ちながら、惣右衛門どんはいゝ年いして道楽するなど村の者がいうから、鼻が高えと思つたが、旦那殿が死んで仕舞つて見ると、今ではお前の身代だから、まあ家の為え思つてお前も今迄骨折つて呉れただが、去年あたりから大分泊りがけに出かけるものだから、村の者も今迄は堅え人だったが、何う言う訳だかな泊り歩くが、役柄もしながらハアよくねえ事たア年老つた親を置いて、なんて悪口を利く者もあるで、成だけ他人には能く云わしたいが、是は親の慾だからお前の事だから間違えはなかんべえが、成たけまあ帰れるだら帰つて貰えてえだ心配だからのう」

惣次郎「イエなに、然う御心配なれば参らんでも宜しゆう、是非参り度い訳ではありません、花車も来た事だから聊かでも祝義も遣り度いと思いましたが、そういう訳なら参らんでも宜しいので、新右衛門も同道する積りでしたが、左様なれば往かないでも先方で咎めるでもなし、怒りもしますまい、それでは止めましょう」

母「そういえばハア困るべえじやアねえか、行くなアとはいわねえが、出れば泊りがけの事も有るし、帰らねえ事も有るから、それで私が案じるからいうので、行くなアとはいわねえ、行つても能から早く帰つて来うというのだ、お前は今迄親に暴え言をいい掛けた

事はねえが、此の頃は様子が異^{ちが}つて意見らしい事をいえば顔色^{かおいろ}が違^{ちが}うからいうだ、私は段々年を取り惣吉はまだ子供なり、役には立たねえから、お前も堅^{かた}くつて今まで人に云^いわれる事もなかつただから、間違^{まちが}えはなからうけれども、若^わえ者の噂^{うわ}にあんなハア美^うくしい女^お子^{なご}があるから家^{うち}へ帰^けるは厭^{いや}だんべえ、婆^{ばあ}様の顔見^{かおみ}るも太儀^{たいぎ}だろ^うなどという者もあるから、そんな事を聞くと心配^{しんぱ}で成^なんねえもんだから、少しも能^よく思^{おも}わせてえのが親の慾^{きよ}でござらア、行^いくなという訳ではねえ往^いつてもいゝから帰^けれたら早く帰^けつて来^こうという^きと胆^きいてそんたら往^いくめえなどと、年寄ればハア然^そうお前^めにまでいわれて邪魔^{じま}になるかと思^{おも}つて早くおつ死^ち度^てえなどと愚痴^うも出るもの^{もの}のう」

五十五

惣次郎「イエ左様なれば早く帰^かつて参^まります、思^{おも}わず言^い過ぎて何^{なん}うも悪^{わる}いことを申^ましまして今夜^{こんや}は早く帰^かつて参^まります、大^おきに余計^{よけい}な御心配^{ごしんぱ}を懸^かけまして誠^{まこと}に濟^{たす}みません」

母^{はは}「然^そうなれば宜^{よろ}しい、機嫌^{きげん}を直^{ただ}して往^いくが^がいいよ、これ^{これ}く多^た助^{すけ}や」

多^た「ハイ」

母「汝行くか」

多「へエ、関取が出るてえから行つて見ようと思つて」

母「汝口が苛いから人中へ入つて詰らねえ口利いては旦那様の顔に障るから氣イ付けて能く柔和しく慎しんで往てこうよ」

多「へエ、畏りました、私が行けば大丈夫だ、そんなら往つて参ります、左様なら」

と、惣次郎は是から水街道の麴屋に行つて彼のお隅を連れて、法恩寺村の場所に行こうと思つたが、今日は大した入りだというから、それよりは花車を他へ招んで酒を飲ました方が宜しい、それに女連で雑沓の中で間違でも有つては成らぬ、殊にお隅を連れて行くは心配でもあり役柄をも考えたから、大生郷の天神前の宇治の里という料理屋へ上り、此処の奥で一猪口遣つていと、間が悪い時は仕方のないもので、彼のお隅にぞつこん惚れて口説いて弾かれた、安田一角という横曾根村の剣術家、自から道場を建て、近村の人達が稽古に参る、腕前は鈍くも田舎者を嚇かしている、見た処は強そうな、散髪を撫付けて、肩の幅が三尺もあり、腕などに毛が生えて筋骨逞しい男で、一寸見れば名人らしく見える先生でございます。無反の小長いのを帯し、襠高の袴をだゞツ広く穿き、大先生のように思われますが、賭博打のお手伝でもしようという浪人者を二人連れて、宇治

の里の下座敷で一口遣つていると、奥に惣次郎がお隅を連れて来ている事を聞くと、ぐツと癩に障り、何か有つたら 関係を付けようと思つている。此方では御飯が済んだから帰り掛に花車の家に向かうといふので急いで出る、お隅も安田が来ているのを認めましたから気味が悪く早く帰ろうと思ふので、奥から出て廊下へ来ると、何うしても其処を通らなければ出られないから、安田はわざと三人の刀の鑑を出して置きますと、長い刀の柄前にお隅が躓づきましたのを見ると、

安「コレ／＼待て、コレ其処へ行く者待て」

惣「へエ／＼私でございますか」

安「手前何処の者か知らんけれども、人の前を通る時に挨拶して通れ、殊にコレ武士の腰に帯して歩く腰の物の柄前に足をかけて、僞忽でござると一言の謝言も致さず、無暗に参ることが有るか、必決心有つてのことだろう」

惣「へい頓と心得ませんで：お前疎忽だからいけない、お武家様のお腰の物に足をかけて何のことだね、へい何うも相済みませんでございました、つい取急ぎまして飛んだ不調法を致しました、当人に成代りましてお詫を申し上げます、何分御勘弁を願います」

安「なに詫を申すなら何処の者か姓名も云わず、人に物を詫びるには姓名を申せ、白痴

め

惣「へエ、手前は羽生村の惣次郎と申す何も弁わきませぬ百姓でございます」

安「なに、羽生村の惣次郎、うむ名主だな、イ、ヤ名主だ、羽生村にて外ほかに惣次郎と云う名前の者は無い様だ、名主役をも勤むる者が人の前を通る時には御免なさいとかお先さききに参るとか何なんとか聊いさか礼儀会釈を知らぬ事も有るまい、小前こまえの分らぬ者などには理解をも云い聞けべき名主役では無いか、それが殊ことごとに武士の腰の物を足下そつかにかけて黙いつて行くいと云う法が有るか、咎とがめたらこそ詫わもするが、咎とがめずば此の儘ま行き過ゆぎるであろう、無礼至極の奴、左様ではござらんか仁にむらうじ村氏」

仁「是はお腹立の処いもつし御尤も是は何も横合から指出さしでて兎や角いうではないが、けれども斯こういう席だから、何も先生だつて大したお咎をなさる訳でもあるまいが、今仰せの如く名主役をも勤むる者が、少しは其の辺の心得がなくては勤まらぬ、小前の者が分らん事でもいう時は、呼寄せて理解をも云い聞けべきの役柄だ、然しかるにずん／＼行ゆくといふ法はない、是は、イヤ先生御立腹御尤も是は幾ら被仰おつしやつても宜しい、お腹立御尤もの次第で」

惣「重々御尤もで相済みません、御尤至極でござります、どうか御勘弁を願います」

安「只勘弁だけでは済かりません、苟かりにも武士の魂とも云う大切な物、手前達は何か武士が

腰たいに帯たいして居る物は人斬庖丁ひとぎりぼうちようなど、悪口あくこうをいうのは手前の様な者だろうが、人を無む暗やみに斬る刀でないわ、え、戦場の折には敵を断切たちきるから太刀たちとも云い、片手なぐ撲りにするか
ら片刀かたなともいい、又短いのを鎧通よろいしとも云う、武士たるものが功こうみやう名な手柄てを致す処の道具、太平の御代に、一事一点間違を致せば直すくにも切腹しなければならぬ大切の腰の物じゃ、それを人斬庖丁など悪口をいいおるから挨拶もせずに行つたのだ、それに違ちがいなかろう、
ナア」

連の男「是は先生至極御尤も、怪けしからんこと、何なんだ、え、何なんうもその、武士たるべき者の腰たいに帯たいするものを人斬庖丁など、は以もつての外ほかだ、太平なればこそよいが、若し戦場往来の時是をエ、太刀とも唱える、片刀ともいう、今一つ短いのは何なんでしたツけ、うむ鎧通よろいしともいう、一事一点間違があれば切腹致すべき尊とうとい処の腰の物、それを何なんだ無礼至極、どの様に仰しやつても宜しい」

惣「重々恐入りましたが何分御勘弁になります事なれば、どの様にお詫を致して宜しいか頓とんと心得こころえませんが」

安「刀やいばを浄きよめて返せ、浄きよまれば許ゆるして遣つかわす」

惣「どの様に致せば浄きよまります事か、百姓風情ひやくせいで何も存ぞんじませんで」

安「知らんという事が有るか、浄めて返さんうちは勘弁罷り相成らぬ」

惣次郎もつく／＼困りましたが、お隅は平素から一角は酒の上が悪く我儘なのを知つております、また女が出ると柔かになる事も存じているから、却つて斯う云う時は女の方が宜かろうと思つて、後の方からつか／＼と進み出まして、

隅「先生誠に暫く」

安「何んだ」

五十六

隅「麴屋の隅でございますが、只今私が旦那様のお供をして来て、つい例の麴忍者で駈出して躓きました、足で蹴たの踏んだのという訳ではありませんが、一寸足が触りましたので、貴方と知つていれば宜しいのに、うっかり足が出ましたので、それ故先生様の御立腹で誠に私がお供に来て済みませんから、不調法でございますが何卒御勘弁なすつて下さいな決して蹴たの踏んだのという訳でもなし、お供をして来て不調法が有つては、羽生村の旦那様に済みませんし、あの私の麴忍者の事は先生も御存じで入らっしゃいますか

ら、お馴染甲斐なじみに不調法の処は重々お詫を致しますから御勘弁を」

安「黙れ、なに馴染がどうした、馴染なら如何いかに無礼致しても済むと思うか、手前には聊いささか祝義を遣わした事も有るが、どれ程の馴染だ、又拙者は料理屋の働はたらき女おんなに馴染は持たん、無礼を働いても馴染なら許して貰えるところか、鼻を殺そぎ耳を斬つて馴染だから御免とそれで済むか無礼至極な奴、女の足に刀を踏まれては猶な更汚さらけれた、浄めて返せ」

仁「是は先生至極御尤、御尤もだが酒も何もまずくなつたなア、是はどう云う身分柄か知らんが馴染だから勘弁という詫の仕様はないが、誰かあゝお隅か妙な処で出会でしたなア、先生く々屋の隅でございます、能く来たなア、え隅か、是は何どうも詫あやまれく、重々何うも済まぬ、先生く々お隅でございます、貴公知らなんだ、あはく々どうも鹿相そそはねえ詫わびるより外に仕方がない、詫わびて勘弁ならんという事は無い、重々恐入つたと詫わびろ、能く来た、あの先生、先生く々勘弁してお遣りなさいお隅でございます」

安「な何を戯たわ言ごと、勘弁ならん」

と猶更額に筋を出して中々承知しませんから、惣次郎もまさか其の儘に逃出す訳には往ゆかず、困り果てゝおりますと、奥の離座敷の方に客人に連れられて参つて居たは花車重吉、客人は至急の用が出来て帰りましたから、花車は遥はるかに此の様子を聞いて、惣次郎とは固もとよ

り馴染なり兄弟分の契約かためを致した花車でございますから心配しております。

多「もし旦那様なん〜」

惣「何だなん」

多「関取がねえ奥に来ていた、大きに心配しているだが、ちよつくら旦那にお目に掛けてえというが」

惣「なに花車が、それは宜よかつた関取に詫をして貰おう、一寸」

安「これ〜逃出す事はならぬ」

惣「いえ逃げは致しません、主意を立てましてお詫を申上げます暫く御免を」

というのでこそ〜と後あとにさがる。此ひまの隙に宇治の里の亭主手代かわなども交かわる〜詫びますけれども一向に聞入れがありません。

惣「関取は此方こちらかえ」

花車「はい」

惣「誠にどうも此處こゝで逢うとは思わなかつた」

花「え、今皆聞きました、何しろ相手が悪いがねえ、何か是には仔細があつてだアと鑑定しているが、何しろ筋の悪い奴で、是は私わしがねえなり代つて詫びて見ましよう」

惣「何卒、関取なら愛敬を売るお前だから厭でもあるうが、先の機嫌を直す様に」

花「案じねえでもいゝよ」

多「私イ宿を出る時に間違えでも出かすとなんねえから、名前に掛るからってお内儀に言付かつて汝行つて詰らねえ口いい利いて間違え出かしてはなんねえと、氣い付けられたんだが、こうなつては私や出先で済まねえ事だから関取頼むぞえ」

花「心配しねえでもいゝよ、私が請合つた宜しい」

と落着払つて花車、齡は二十八でありますが至つて賢い男、大形の縮緬の単衣の上に黒縮緬の羽織を着て大きな鎖付の烟草入を握り、頭は櫓落しという髪、一体角力取の愛敬というものは大きい形で怖らしい姿で太い声の中に、何となく一寸愛敬のあるものでのさり／＼と歩いて参りまして、

花「はい御免なさい、先生今日は」

安「何だ、誰だい」

花「はい法恩寺の場所に来ております花車重吉という弱い角力取で、何卒お見知り置れて皆様御鼻眞に願います」

安「はい左様か、私は相撲は元来嫌いで遂ぞ見に往つた事も無いが、関取何ぞでござ

るかい」

花「はい只今承りますれば、羽生村の旦那が、貴君方あなたがたに対して飛んだ不調法をしたと申す事だが、何分にもお聞濟みがないので、私は馴染なじの事でもあるに由よつて、重吉手前は顔売る商売じゃ、なり代つて詫びてくれいつて頼まれました、見兼て中に這入りましたがねえ、重々御立腹でもございませうが、斯こういう料理屋で商売柄の処でござたくすれば、此家こつらも迷惑なり、お互に一杯ずつも飲もうと思ふに酒も旨しんうない、先しん生しんも旨しんうない訳だから、成り代つてお詫しますから、花車に花を持たせて御勘弁を願います」

安「誠にお氣の毒だが勘弁は致されんて、勘弁致し難がたい訳があるからで、勘弁しないと、いは武士の腰こし物ものを女の足下そつかに掛かけられては此の儘ままに所持しよもされぬから浄めて返せと先刻さつきから申して居おるのだ」

花「それは然そうでありますよ、併しかし出来でない処を無理に頼むので、出来難でいく処をするが勘弁だア、然そうじゃありませんか」

安「無理な事は聴かれませんが、お前が仲なつに這入つては尚な更さら勘弁は出来ぬではないか」
花「はア私わしが這入つて、なぜね」

安「花車重吉という有名なうての角力取かくりきが這入つては勘弁ならん、是こゝが七十八なな十じゅうになる水みづ」

鼻なを半分クツたら垂たして腰の曲まつた水呑百姓すいどんひやくしやうが、年に免めんじて何卒どうぞ堪かん忍にんして下くだされと頭あたまを下くだげれば堪忍かんにんする事も出来できようが、立派りっぺいな角力かくりき取とり、天下てんかに顔かほを売うる者ものに安田一角やすだいちかくが勘弁かんばんしたとあれば力士りきしに恐おそれて勘弁かんばんしたと云いわれては、今井田流いまいでりゆうの表札へうさに関かわるから猶更なほさら勘弁かんばんは出来できないからなあ」

花はな「それは困こまりますねえ、それじゃア物ものに角かくが立ちます、先しえん生しえい私わしは天下てんかの力士りきしでも何なんでもないわ、まア長袖ながそでの身みの上うへで、皆みなさんの鬘まげを受うけなければならん、裸はだか体かで、お前まへさん取とまわし一つでもつてから大勢おほし様の前まへに出て、まア勝かちつも負まけるも時の運次第うんじだいでござろ、砂すなの中なかへ転ころがつて着物きものを投なげて貰もらい勝かちつたとか負まけけたとかいう処ところが愛敬あいけいじゃア、然そうして見みれば皆みな様の御鬘みまげを受うけなければならん、貴方あなたが勘弁かんばんして下くだされば、それ花車あいつ彼奴あいつは愛敬あいけい者ものじゃア、先生せんせいが勘弁かんばん出来できない処ところを花車あいつを鬘まげなればこそ勘弁かんばんしたといえば、それで私わたしは先生せんせいのお蔭かげで又また売うちします、然そうじゃアございませんか、勘弁かんばんしておくんなさい」

安「堪忍かんにんは出来できぬ」

花「出来できぬでは困こまります」

安「イヤ勘弁かんばん出来できぬ、武士ぶしに二言ふたごはないわ」

五十七

花車「そんな事云うて対手が武士か劍術遣なれば兎も角も、高が女の事だからよ、大概にしろよ」

安田「大概にしろよとは何だ」

花「これは言損なつた、これは角力取はこういう口の利きようでうっかり云つた、勘弁しろよう」

安「勘弁しろよとは何だ」

花「ほいまた言損なつた」

安「勘弁しろよとは何だ、手前も大名高家の前に出てお盃を頂く力士では無いか、挨拶の仕様を存ぜぬ事はない、大概にしろの勘弁しろよという云い様があるか、猶更勘弁ならん、無礼至極不埒な奴だ」

と側にある飲冷しの大盃を把つてぽんと放ると、花車の顔から肩へ掛けてびっしり埃だらけの酒を浴せました。

花「先生お前さん酒を打掛けたね、じゃアどうあつても勘弁出来ないと極めたか、

それでは仕方がないが、先生私も花車とか何とか肩書のある力士の端くれ、人に頼まれ、中に這入って勘弁ならん、はアそうでございますかと指をくわえて引込む事は出来ぬ、私は馬鹿だ智慧が足りねえから挨拶の仕様を知らぬ、何卒こうせいと教えて下せえ、お前のいう通り行りましょう、ねえ、どうなとお顔を立てようから斯うしろと教えて下せえ」

安「これは面白い、予の顔を立てる、主意を立てるなれば勘弁致す、無礼を働いたお隅と云う女は不届至極だから、彼の婦人を惣次郎から貰い切つて予に引渡して下さい、道場に連れて参つて存じ寄り通りにする」

花「それは出来ない、彼は御存知の水街道の麴屋の女中で、高い給金で抱えて置く女だ、今日一日羽生村の名主様が借て来たんだ、それを無礼した勘弁出来ないといつて道場へ連れて行く、はいと云つて遣られぬ、私にしても然うです、道場へ引かれ、ば煮て喰うか焼いて喰うか頭から塩をつけて喰われるか知れねえものを、それは出来ぬ、出来ない相談、それじゃア仕様がねえわ」

安「それじゃアなぜ主意を立てるといった、お前は力士、たゞの男とは違ふ、一旦云つた事を反故にする事はない、武士に二言はない、刀に掛けても女を貰いましょう」

花「是は仕様がねえ、じゃア、まアお前さんが剣術遣だから刀に掛けても貰おうという

だら私は角力取だから力に掛けても遣る事は出来ぬと極めた、それより外は出来ませんわ」というと一角も額に青筋を張つて中々聴きません。此の家へお飯を喫べに這入つた人達も驚きましたが中には角力好で江戸の勇み肌の人も居りまして、

客「どうだもう帰ろうじやアねえか、因業な武士だ彼の畜生」

客「ウム己達が彌平どんの処へ来るたつて深い親類でもねえが、場所中関取が出るから来ているのだが、本当に好い関取だなア、体格が出来て愛敬相撲だ一寸手取で、

大概角力取が出れば勘弁するものだが、彼奴め酒を打掛けやアがって酷い事しやアがる」
客「相手の武士は三人だ、関取がどつと起つて暴れると根太が抜けるよ」

客「斯うしようじやアねえか、折を然ういつても間に合うめえし残して往つても無駄だから、此の生鮭と玉子焼とア持つて行こう」

など、横着な奴は手拭の上に紙を布いて徐々肴を包み始めた。

花「じやア先生、生こうしましょう、此処の家でございましたいたた処が此の家へ迷惑かけて、外に客があるから怪我でもさしてはなりません、戸外に出て広々とした天神前の田圃中でやりましょう、私も男だ逃げ隠れはしません」

安「面白い出る」

というので三人づんと起つた。

客「喧嘩だア〜」

と他の客はバラ〜逃げ出したが、代を払って行く者は一人もない、横着者は刺身皿を懐に隠して持つて行く者もあり、中には料理番の処へ駈込んで、生鮭を三本も持つて逃出す者もあり、宇治の里では驚きましたが、安田一角は二人の助けを頼みとして袴の股立ちを取つて、長いのを引抜き振鬨したから、二人の武士も義理で長いのを引抜き三人の武士が長い閃つくのを持つて立並んでいるから、近辺の者は驚きました。惣次郎は猶更心配でございますから、

惣「関取お前に怪我をさせては親方に済まぬから」

花「いゝよ、親方も何もない、お前さん彼方へ行つて下せえよ、己が引受けたからは世間へ顔出しが出来ませんから退く事は出来ない、何卒事なく遣る積りで、お前さんは心配をしねえでいゝよお隅さんを連れて構わず往つて下さい、多助さんも行つて下さい、旦那様が茲にいては悪いから帰つて下さい」

惣次郎は帰れたツて帰られませんし、此の儘にはされず、怖さは怖しどうしようかとおど〜して居ると、花車はスツと羽織と単物を脱ぎましたが、角力取の喧嘩は大抵裸

体だかのもので、花車は衣服を脱ぐと下には取り廻しをしめている、ウーンと腹を揺り上げると腹の大きさは斯こん様になり、飴細工の狸みた様で、取廻しの処へ銀ぎん拵ごしらえの銅金どうがねの刀を帯さし白地の手拭で向鉢むこうはちまき巻をして飛下りると、ズーンと地響とびおきがする、腕などは松の樹きの様で腹を立つたから力は満ちて居る、スーと飛出すと見物人は「ワアー関取しつかりしろ」という。安田一角は袴の股立を取つて、

安「サア来い」

と長いのを振上げている、此の中へ素裸すはだで、花車重吉が飛込むところ、一寸一ト息吐きまして。

五十八

引続きまして角力と剣術遣の喧嘩で、角力という者は愛敬を持ちました者でございまして、只今では開けた世の中でございすから、見識を取りませんが、関取衆しゅが芸者の中へ這入しんくつて甚句じんくを踊り、或は鑄あらい声さびごえで端唄はうたをやるなどと開けましたが、前から天下の力士という名があり、お大名の抱えでありますから、だんく承つて見ますると、菅原家けから系

図を引いて正しいもので、幕の内と称えるは、お大名がお軍の時、角力取を連れて入らして旗持にしたという事でございます、旗持には力が要りますので力士が出まする者で、お見附などの幕の内には角力取が五人ぐらいずつ勤めて居ります。其の幕の内に居たから幕の内という、お弁当を喫つて居るのが小結という、然ういう訳でもありませんが、見た処は見上げる様で、胸毛があつて膏藥の痕なぞがあつて怖らしい様であります、愛敬のあるものでございます。一寸起つて踊りますと、重い身体で軽く甚句などを踊りますと姉さん達は、綺麗じゃアないか可愛いじゃアないか、踊る姿が好い事、あれで角力を取らないと宜い事などと、それでは角力でも何でもありません。芝居でも稲川秋津島など、というとい、俳優が致します、極むかし二段目三段目ぐらいに立派な角力がありました、花車などは西の方二段目の慥か末から二三枚目におりました、其の頃愛敬角力で鼻屑もあります角力上手でございすから評判が宜い、今に幕の内に登るといふ噂がありました、花車重吉は誠に固い男、殊には羽生村の名主の家に三年も奉公して、角力になりました、してからは大して惣次郎も鼻屑にして小さい時分からの馴染で、兄弟分の約束をして酒を飲み合つた事もありますから恩返しというので割つて中へ這入りましたが、剣術遣は重ね厚の新刀を引抜いて三人が大生郷の鳥居前の所へびらつくのを提げて出ましたから、大概

な者は驚いて逃げるくらいであります、逃げなどは致しません、ズツと出て太い手をついて斯う拳を握り詰めますと、力瘤ちからこぶというのが腕一ぱいに満ちます、見物けんぶつは今角力と剣術遣との喧嘩が有るので近村の者まで喧嘩を見に参る、田甫たんぽの処畦道あぜみちに立つて伸上つて見ている。

花「先生しえんしえい、此処こゝは天神前で、私わしはお前めえさんと喧嘩する事は、斯うなつたから私は引に引かれぬから、お前さん方三人に掛かられた其の時は是非かねが無え事じやが、御朱印付の天神様境内で喧嘩してもお前さんも立派な先生、私も角力の端くれ、事こと訳わけ知らぬ奴じや、天神様の社内を穢けがした物を知らぬといわれてはお互に恥じや、ねエ死し恥はじかきたくねえから鳥居の外へ出なせえ」

是は理の当然で、

安「うん宜しい、よく覚悟して：鳥居外へ参ろう」

と三人出たから見物は段々後へ退る、抜刀ぬきみではどんな人でも退る、豆蔵が水を撒くのは違ちがう、怖おっかないからはらくと人が退のきます。

見物「何うだ本ほん当とうに力ちから士してえ者は感かん心しんじやアねえか、たつた一人に三人掛りやアがつて、大概たいていに彼奴あいつ勘かん弁べんしやアがるが宜いい、何なんだしと詫わび言ごとしたら恥はじじやアあるめえし畜ちき生しょう、

関取確しつかりやつて、己おらアお前めえの角力を見に来たので、お前が喧嘩けんかに負けると江戸へ帰けえれねえ、冗談じやアねえ剣術遣ふみころを踏殺ころせ」

安「何なんだ」

見物「危険けんげんだ、確しつかりやつて呉くれれ」

花「逃げも隠れもしねえ、長崎へ逃げようと仙台へ逃げようと花車重吉駈落は出来ぬから卑怯な事はしねえが、茲こゝでお前めえさんに切られて死ねばもう湯も茶も飲めません、喧嘩けんかは緩ゆるくから出来ますから一服やる間暫らく待つて」

安「なに、これ喧嘩する端はなに一服やるなどと、何なんだ愚弄ぐろうするな」

花「心配しんぱえありません末期まつごの煙草だ、死んだら吞めませんワ、一服やりましょう、誰たれか火を貸しておくんなせえ」

見物の中から煙草の火をあてがう奴がある。パクリ／＼脂やにさ下りに吞んで居る。

花「まあ緩ゆるくり行やりましょう、エ先しえん生逃しえいげ隠れはせぬぜ」

とパクリ／＼と吸やつて居る。見物は、

見物「気が長ながえじやアねえか、喧嘩けんかの中で煙草を吞んで沈おち着いて居る豪えれえじやアねえか」
見物「豪えれえばかりでねえ、己おれが考あえじやア関取は怜りこ惻うだから、対あ手は剣術けんじゆ者遣つかいで危

ねえから怪我アしても詰らねえ、関取が手間取っているうち、法恩寺村場所へ人を遣つたろうと思う、若し然うだと二拾人も角力取が押て来れば踏潰して了う、然うだろうよ」

花「サア先生喧嘩致しますが、私も一本帯しているから劍術は知らぬながらも切合を致すが、私が鞆を払つてからお前様方斬つてお出でなせえ」

安「尤も左様だ、卑怯はしない、サア出る」

花「へエ出ます、まア私も此の近辺で生立つた者じやアが、此の大生郷の天神様の鳥居といつたら大きな者じやア」

と見上げ

花「これまア私が抱えても一抱えある鳥居、此の鳥居も今日が見納めじやア」

と鳥居を抱えて、

花「大きな鳥居じやアないか」

と金剛力を出して一振すると恐ろしい力、鳥居は笠木と一文字が諸にドンと落ちた。

劍術遣が一刀を振上げて居る頭の処へ真一文字に倒れ落ちたから、驚きましたの驚きませんのと、胆を挫がれてパツと後へ退る。見物はわいゝゝいう。其の勢いに驚き何のくらの力かと安田は逆も敵わぬと思つて抜刀を持ってばらゝ逃ると、弥次馬に、農業を仕掛

けて居た百姓衆が各々鋤鋤を持って、

百姓「撲殺してしまえ」

とわい／＼騒ぐから、三人の剣客者は雲霞と林を潜つて逃げました。

五十九

花車「ハ、逃げやアがった弱え奴だ、サア案じはねえ、私が送って行きましょう」

と脱いだ衣服を着て煙草入を提げ、惣次郎を送つて自分は法恩寺村の場所へ歸つた。角力は五日間首尾能く打つて歸る時に、

花「鳥居の笠木を落したから、旦那様鳥居を上げて下さらんでは困る」

と云うので惣次郎が金を出して鳥居を以前の通りにしました、其の鳥居は只今では木なれども花車の納めました石の鳥居は天神山に今にあります。場所をしまつて花車は江戸へ歸らんければならんから、歸つてしまつた後は惣次郎は怖くつて他へは出られませんが、安田一角は喧嘩の遺恨、衆人の中で恥を搔いたから惣次郎は助けて置かぬ、などと嚇しに人に逢うと喋るから怖くつて惣次郎は頓と外出を致しません、力に思う花車がないから村

の者も心配しております。余り家に許り蟄しておりますから、母も心配して、惣次郎が深く言交した女故間違も出来、其の女の身の上はどうかと聞くに、元武士の娘で親父もろ共浪人して水街道へ来て、親の石塔料の為奉公していると聞き、其の頃は武士を尊ぶから母は感心して、然ういう者なれば金を出して、当人が気に適つたならどうせ嫁を貰わんではならんから貰い度いと、水街道の麴屋へ話してお隅を金で身受して家へ連れて来てまず様子を見るとしとやかで、器量といい、誠に母へもよく事えます故、母の気にも適つて村方のものを聘んで取極をして、内祝言だけを済まして内儀になり、翌年になりますと、丁度この真桑瓜時分下総瓜といつて彼方は早く出来ず。惣次郎の瓜畑を通り掛つた人は、山倉富五郎という座光寺源三郎の用人役であつて、放蕩無頼にして親には勘当され、其の中座光寺源三郎の家は潰れ、常陸の国に知己があるから金の無心に行つたが当は外れ、少しでも金があれば素より女郎でも買おうという質、一文なしで腹が空つて怪しい物を着て、小短いのを帯して、心の出た二重廻りの帯をしめて暑くて照り付くから頭へ置手拭をして時々流れ川の冷たい水で冷して載せ、日除に手を出せば手が熱くなり、腕組みをすれば腕が熱し、仕様がなくぶらりと参りました。

富「あゝ、進退茲に谷まつたなア、どうも世の中に何がせつないといつて腹の空るくら

いせつない事はないが、どうも鳥目ちようもくがなくなつて食えないと猶更空るねえ、天草の戦いくさでも、兵糧責では敵かなわぬから、高松の水責いせどと雖も彼も兵糧責、天草でも駒木根八兵衛、驚塚忠右衛門、天草玄札などという勇士がいても兵糧責には叶かなわぬあゝ大きな声をすると腹へ響ける、大層真桑瓜がなっているなあ、真桑瓜は腹の空すいた時の凌しのぎになる腹に溜たまる物だが、うっかり取る処を人に見られ、ば、野暴のあらしの刑で生埋いきうめにするか川に簀すまき巻まきにして投ほうり込まれるか知れんから、一個揉ひとつもぎつて食う事も出来ぬが、大層なつて熟うまっているけれども、真桑瓜を黙もくつて持つて行くはよろしくないというが、一寸此こゝ処で食くう位の事ことは何も野暴のあらししでもないからよかろう、一つ揉もぎつて食くおうか」

と怖こわ々／＼、四辺あたりを見ると、瓜番小屋に人もいない様だから、まア好いい塩梅と腹へが空くつて堪たまらぬから真桑瓜を食くいましたが、庖丁かじがないから皮ごと喫くり、空腹だから続けて五個いっつばかり喫くべ、それで往いけば宜いしいのに、先へ行いつて腹へが空くつてはならんから二つ三つ用意い持もつて行いこうと、右袂こちらへ二つ左袂こちらへ三つ懐ふちから背せ中へ突つ込こんだり何かして、盗ぬんだなりこう起たつと、向むの畑はたけの間から百姓ひやくしやうがによりと出た時は驚おどきました。

百姓「何なんだか、われは何なんだか」

富「へエ、誠にどうも厳いしい暑あつきでお暑あつい事ことで」

百「此の野郎め、まア生なまぞらつか空遣やアがつて、此処こゝを瓜の皮だらけにしやアがつた、汝われ瓜食たつたな」

富「どう致いたしまして、腹痛せきでございますから押おえて少し屈こんでおりましたが、暑しよき氣あち中あたつておりますので、先せんから瓜の皮はありますが、取りは致いたしませぬて」

百「此の野郎懐なへ入れやアがつて、生空せいつかやアがつて、瓜盗うんでお暑あつうございますな
どと此の野郎」

ポカリ撲はりたお倒たおしますと、

富「あ痛いたたゝ」

と躡よろける途端たもとに袂たもとや懐なから瓜が出る。其の内に又二三人百姓ひやくしやうが出て来て、忽たちまち山倉やまぐらは名主なぬしへ引かれ、間まが悪い事に名主の瓜畑うりだから八釜やかましく、庭にわへ引かれ、麻繩あしなで縛しばられますと、廃よせばよいに名主惣次郎そうじらうは情深こころい人だから縁側えんがわへ煙草盆えんそうぼんを持ち出して参まゐつて、

惣そう「此奴こいつかノ真桑瓜まごうを食たつたのは」

男おとこ「へエ此の野郎で、草むしりに出ておりますと、瓜畑うりの中なかからによりと起たちアがつたから、何なにするといつたら厳げんしいお暑あつさなんてこきアがつて、誰たれもいやすめえと思おもつて、瓜うりの皮かわがあるから盗ぬんだんべえと撲ぶつと懐なからも袂たもとからも瓜うりが出でたゝ何ど処どこの者ものか江戸えどらし

言葉だ」

惣「お前が真桑瓜を盗んだか」

六十

富「へエく、恥入りました事で、手前主名しゅめいは明あかし兼ねますが、胡乱うろんと思召おぼしめすなれば主名も申し上げますが、手前事は元千百五十石を取った天下の旗下はたもとの用人役をした山倉富右衛門の倅せがれ富五郎と申す者しゆか主家改易しゆかになり、常陸しるべに知己しるべがある為是へ金才覚しるべに参つて見るに、先方は行方知れず、余儀なく、旅費を遣い果してより、実は食事しじも致しませんで、空腹の余り悪い事とは知りながら二つ三つ瓜を盗みたべました処とがをお咎とがめで、何とも恥入りました事で、武士たる者が縄に掛り、此の上もない恥で、どうか憫然ふびんと思召おぼしめしてお許し下されば、此の後は慎ごみまする、どうかお情をもつてお許しを願いたく存じます」

惣「真桑瓜を盗んだからといって何も殺しはしない、真桑瓜と人間とは一つにはならん、殺しはせんが、茲こゝで助けても、是から何処どこへ行きなざる、当所あてどがありますかえ」

富「へエく、何処どこといつて当も何もないので、といつてすぐく江戸表へ立帰るる了簡

もございませぬ、空腹の余り悪いと知りながら斯様なる悪事をして恐れ入ります」

惣「じゃ茲で許して上げてても他へ行つて腹が空ると、また盗まなければならん、私の村で許しても外では許さぬ、今度は簞巻にして川へ投り込むか、生埋にするか知れぬから、私が茲で助けても親切が届かんでは詰らん、お前さんの言葉の様子では武家に相違ない様だが、私の処は秋口で書物などが忙がしいが、どうだね、許して上げますが、私の家に恩報しと思つて半年ばかり書物の手伝いをしていて貰い度いがどうだね」

富「へエどうも恐入りました事で、斯様なるどうも罪を犯した者をお助け下さるのみならず、半年も置いてお養い下さるとは、何ともどうも恐れ入りました、此の御恩は死んでも忘却は致しません、何の様なる事でも実に寝る眼も寝ずに致しますから、何卒お助けを願います」

惣「よろしい、繩を解け」

と解かしまして、

惣「お腹が空いたろう、サア御膳をお喫り」

とサア是から富五郎が食つたの食わないのつて山盛にして八杯ばかり食置をする気でもありませんが沢山食べました。書物を遣らして見ると帳面ぐらいはつけ、算盤も遣

り調法でべんちやらの男で、百姓を武家言葉で嚇おどしますから用が足りる、黒の羽織などを貰もらい、一本帯おびして居る、其のうち

富「古い袴はかまが欲しい、小前こまえの者を制しますには是でなければ」

などとべんちやらをいう。惣次郎の顔があるから富さんくと大事にする。段々しり臀しりが暖あたたかまると増長もつとして、素もとより好きな酒だから幾やら止めるといっても外そとで飲みます。すると或日あるひの事で、ずぶろくに酔よって帰ると、惣次郎はおりません。母は寺参りに往いつてお隅ぐもが一人奥しじで裁縫しじをしている。

富「只今帰りました」

隅「おやまあ早くお帰りで、今日は大層酔よって何処へ」

富「へエ、水街道から戸頭とがしらまで、早朝から出まして一寸帰りに水街道の麴屋へ寄りましてたら能く来たというので、彼の麴屋あの亭主あが一杯というので有物ありもので馳走ちしうになりまして大きおおに遅おそくなりました」

隅「大層真赤まがせに酔よつて、旦那様はまだお帰りはありますまい、お母様つかさまは寺参りに」

富「左様で、御老体になりますとどうもお墓参りより外たのし楽たのしみはないと見えて毎日いらつしやいます恐入ります、また旦那様の御様子ごようすてえなねえ、誠にド、どうも恐入りますね

え、あんたはお家うちで柔和おとなしやかに裁縫しごとをなすつていらつしやるは、どうも恐入りますねえ、
ド、どうも富五郎どうも頂きました」

隅「大層真赤あかになつて些ちつとお寝やすみな」

富「中々寝度ねたくない、一服頂戴、お母様はお寺参り、また和尚さんと長話し、和尚様は
べら／＼有難ありがたそうにいいますね、だが貴方あんたがお裁縫しごと姿の柔和おとなしやかなるは実に恐れ入りま
すねえ」

隅「少しお寝みよ、富さん」

富「へエ／＼寝度ねたくないので、貴方は段々承ると、然しかるべき処ところの、お高も沢山お取り遊
ばしたお武家の嬢様だが、御運悪く水街道へいらつしやいまして、御親父様ごしんぶさまがお歿かくれにな
つて、余儀なく斯こういう処へ入らつて、其の内彼あいう杜漏ずろうな商売の中にいて貴方あんたが正し
く私は武士さむらいの娘だがという行いいを、当家の主人がちゃんと見上げて、是こそ女房という訳
で、此方こちらへいらつしたのだが、貴方あなただつてもまあ、私の考わたくしえが間違まちがつたか知れんが、武士
たる者の娘が何も生涯しやうがいという訳ではなし、此の家うちは真ほんの腰掛こしで、詰らんといつては済みま
せんが、けれども貴方生涯しやうがい此家こゝにいる思おぼしめし召めいはありますまい、手前それを心得て居るが、
拙者も止むを得ず此処こゝにいる、致し方がないから、半年はんねんも助すけろ、来年迄らいねんいろよ、有難ありがたう

と御主命でね、長く居る気はありません、貴方も真ほんの当座の腰掛でいらつしやるが口に出
せんでも心中あに在るね、内祝ないしゅうげん言は済んでも別に貴方の披露ひろめもなし披露をなさる訳もな
い、貴方も故郷こきょう懐しゅうございませう、故郷忘じ難し、御府内で生れた者はねえ、然
うではございませんかね」

隅「それはお前江戸で生れた者は江戸の結構は知っているから、江戸は見度みたいし懐かし
いわね」

富「有難い、其のお言葉で私わたくしはすっかり安心してしまった、それがなければ詰らんで、
ねえ武士さむらいの娘、それそこが武士の娘、手前ども少禄しょうろく者ものだけれども、此処こゝにへえつくし
ているが世が世なればという訳だが：お母様はまだ：法蔵寺様へお参りに入いらったので：
ですがねえ貴方、此家こゝにこう遣つて腰掛けで居るは富五郎心得ております、故郷は忘じ難
し、江戸は懐かしゅうございませう」

隅「あいよ、懐かしいは当あたり然まえだわね」

富「ド何うも有難い、それさえ聞けば私は安心致すが、誰でも然うで私も早く江戸へ行き度いが、マアお隅さん私が少し道楽をして出まして、親類もあるけれども、私が道楽を行つたから私の身の上が定まらんでは世話は出来ぬというので、女房でも持つて、斯ういう女と夫婦になつたと身の上が定まれば、御家人の株位は買ってくれる親類もあるが、詰らん女を連れて行つては親類では得心しません、是はこうくうという武士の娘、こうう身柄で今は零落おちぶれて斯う、心底しんていも是々というので、私が貴方の様なる方と一緒に何すれば親類でも得心致します、お前さんの御心底から器量は好よし、こうう人を見立て、来る様になつたら富五郎も心底は定まつた、然うなれば力になつて遣やらうというので、名主株位買つてくれますよ、構わずズーツと」

隅「何処へ」

富「何処つて、だが、貴方ア腰掛で居る、故郷は何うしても懐かしゆうございましょう」

隅「何だか分りません、一つ言をいつて故郷の懐かしい事は知れて居ります」

富「まア、宜しい、それを聞けば宜しい一寸く」

隅「何だよ」

富「いゝじゃアありませんか二人でズーツと」

隅「いけないよ、其様な事をして」

富「それ、然ういうお堅いから二人で夫婦養子にどんな処へでも可なり高のある処へ行
けます、お隅さん」

と何と心得違いしたか富五郎、無闇にお隅の手を取って髻だらけの顔を押付ける処へ、
母が帰つて来て、此の体を見て驚きましたから、傍にある麴朶を取つて突然ポンと撲つ
た。

富「これは痛い」

母「呆れかえつた奴だ」

隅「よくお帰りでございました」

母「今帰つて来たゞが、彼の野郎ふざけ廻りやアがつて、富五郎茲へ出る」

富「ヘエ、これは恐入りました、どうも些ともお帰りを知らんで、前後忘却致し、どう
も何とも誠にどうも、何で御打擲ですか薩張分りません」

母「今見ていれば何だお隅にあの挙動は何だ、えゝ、厭がる者を無理にかじり付いて、
髻だらけの顔を擦り付けて、お隅をどうしようというだ、お隅は何だえ、惣次郎の女房と
いう事を知らずにいるか、汝知つているか、返答ぶて」

富「どうも、私前後忘却致し、酔っておりまして、はつというとお隅さんで、恐入りました、無暗に御打擲で血が出ます」

母「頭ア打砕いても構わねえだ、汝恩を忘れたか、此の夏の取付に瓜畑へ這入つて瓜イ盗んで、生理にされる処を、家の惣次郎が情け深えから助けて、行く処もねえ者に羽織イ着せたり、袴ア穿かして、脇へ出て富さんくといわれるは誰がお蔭か、皆惣次郎が情深えからだ、それを惣次郎の女房に対して調戲つて縄付いて、まア何とも呆れて物ういわれねえ、義理も恩も知らねえ、幾ら酔ばらつたつて親の腹へ乗る者ア無えぞ呆れた、酒は飲むなよ好くねえ酒癖だから廃せというに聴かねえで酔ばらつては帰つて来やアがつて、只た今逐出すから出るえ、怖ねえ、お前の様な者ア間違を出かします、こんな奴は只た今出て行け」

富「お腹立様では何ですが、お隅様に只今の様な事をしたは富五郎本心でしたと思召しての御立腹なれば御尤もでございます」

母「尤もと思うなら出て行け」

富「私は大変酔つてはおりますが富五郎も武士でげす、御当家の旦那様に助けられた事は忘却致しません、あゝ有難い事であゝ簀巻にして川へ投り込まれる処を助けられ、斯の

如く面倒を見て下すつて、江戸へ帰る時は是々すると仰しやつて、実に有難い事で、江戸へ行つても御当家の御恩報じお家の為になる様心得ております」

母「そう心得ておるなればなぜお隅にあゝいう挙動エする」

富「其処を申します、其処が旦那様のお為を思う処、旦那様は世間見ずの方、江戸へも余り入らした事も無い、殊にはあなた様は其の通り田舎氣質の結構な方、惣吉様は子供衆で仔細ないが、お隅様も結構な方でございますが、前々承れば、水街道の麴屋で客の相手に出た方、縁あつて御当家へいらつしやつたが、お隅様のまえで申しては済みませんが、若しお隅様が不実意な浮気心でもあつては惣次郎様のお為にもならぬと思つて、どういふ御心底か一寸只今気を引いた処、どうもお隅様の御心底には実に恐れ入りました、富五郎安心しましたが、処をどうも薪でもつてポンと頭をどうも情ない思召しと思つ」

母「あゝ云う言、抜を吐きやアがる、氣い引て見たなど、猶更置く事は出来ねえから出て行け」

隅「お母様お腹立でございましょう、御気性だから、富さん、お前は酒が悪いよ、お酒さえ慎めば宜しい、旦那様のお耳に入れないう様にするから」

富「エ、もう飲みませんとも」

母「まあお前そつち彼方ひきこへ引込んで、私が勘弁出来ぬ、本当なればお隅が先へ立って追出すと
 いうが当然あたりまいだが、こういう優しげな気性だから勘弁というお隅の心根工聞けば、一度は許
 すが、今度彼様あんなまね挙動エすれば直ぐ追出すからそう思え」

富「恐入りました」

と是からこそ、部屋へ這入って、と見ると頭に血が染みました。

富「お隅は万まんざら更でもねえ了簡であるのに、あゝ太え婆アだ」

なに自分が太い癖に何卒どうかしてお隅を手に入れ様と思ううち、ふと思ひ出して胸へ浮んだ
 のは、噂に聞けば去年の秋大生郷の天神前で、安田一角と花車重吉の喧嘩の起因もとはお隅か
 ら、よし彼奴あいつを力に頼んでと是れこからべらゝの怪しい羽織を着て、ちよこゝ横曾根村
 へ来て安田一角の玄関へ掛り、

富「お頼み申すゝ」

六十二

門弟「どうーれ、何方どつちから」

富「手前は隣りんそん村むらに居る山倉富五郎と申す浪人で、先生御在宅なれば面会致し度態たくわざく参りました、是は此方様こなたさまへほんのお土産で」

門「少々お控えなさい、先生」

安田「はい」

門「近村の山倉富五郎と申す者が面会致し度いと、是は土産で」

安「山倉とは知らぬが、此方こちらへお通し申せ」

門「此方へお通りなすつて」

富「成程是は結構なお住居すまいで、成程是は御道場でげすな…ようがすな御道場の向うが…
丁度是から畑の見える処が…是はどうもまた違いますな」

安「さアくはへ、何卒どうぞ、是はく」

富「え、山倉富五郎と申す疎忽そこつもの者此の後ごとも御別懇に」

安「拙者が安田一角と申す至つて武骨者此の後とも、えー只今はお土産を有難う」

富「いゝえ詰らん物で、ほんのしるしで御笑納下さい、大きに冷気になりましたが日にっち
中ゆうは余程お暑い様で」

安「左様で、今日こんにちはまた些ちつとお暑い様で、よくお出で、えー何か御用で」

富「はい少々内々で申し上げ度い事が有つて、彼の方は御門弟で」

安「はい」

富「少々お遠ざけを願います」

安「はい、慶治御内談があつて他聞を憚ると仰しやる事だから、彼方へ行つておれ、え
―用があれば呼ぶから」

慶「へえ左様で」

富「え、もうお構いなく、先生お幾歳でげす」

安「手前ですか、もういけません、何で、四十一歳で」

富「へえお若うげすね、御氣力がお慥かだからお若く見える、頭髮の光沢も好し、立派な惜しい先生だ、此方に置くのは惜しい、江戸へ入らつしやれば諸侯方が抱えます立派なお身の上」

安「何の御用か承り度い」

富「手前打明けたお話を致しますが、只今では羽生村の名主惣次郎方の厄介になつておる者でござるが、惣次郎の只今女房という訳でない、まア妾同様のお隅と申す婦人、彼は御案内の水街道の麴屋に奉公致した酌取女、彼の隅なるものに先生思召があつ

たのでげすな、前に惚れていらしたものでげすな貴方」

安「これは初めてお出でゞ、他人の女房に惚れているなどといや挨拶の仕様がな、麴屋にいた時分には鼻屑にした女だから祝儀も遣つて随分引張つて見た事もあるのさ」

富「恐れ入ったね、それが然う云えぬもので恐入りました、其処が大先生で、えーえらい」

安「何しにお出でなすつた、安田一角を嘲 哂なさりにお出でなすつたか、初めてお出でゞ左様な事を仰しやる事がありますか」

富「御立腹ではどうも、中々左様な訳ではない、手前剣道の師とお頼み申し、師弟の契約をした心得で罷り出ましたので、実は彼のお隅と申すは同家にいるから、段々それまア江戸子同士で、打明けた話をするとお前さん此処に長くいる気はあるまい、此処は腰掛だろう、故郷忘じ難かろう、私と一緒に江戸へ、というと、私も実は江戸へ行き度い、殊に江戸には可なりの親類もあり、仮令名主でも百姓の家へ縁付いたといわれては親類の間えも悪い、然うなればといて御新造という訳ではなし、へえ〜云つて姑の機嫌も取らなければならんから実は江戸へ行き度いというから、然うなれば何故一角先生の処へいかぬ、向は何でも大先生、弟子衆も出這入り、名主などは皆弟子だから、彼処へ行って御新

造になれば江戸へ行つても今井田流の大先生、彼処の御新造になれば結構だになぜ行かぬ
 というと、夫には種々義理もあつて、親父の借金も名主惣次郎が金を出してくれた恩も
 あるから、先生の処へ行かれもしないというから、それなら先生が斯うと云つたらお前行
 く気があるかと云つたら、私は行き度いが、先生には色々綾があるから行かれぬとい
 から、然うなれば私が行つて話し、私も江戸へ帰る土産に剣道を覚えて帰り度い、よい師
 匠を頼もうと思つていた処だというので、然うなればと頼まれて参つたので、先生彼を御
 新造になさい、どうぞげす」

安「お帰んなさい、何だお前は、これ汝は何だ、惣次郎方の厄介になつてゐる者なれば、
 惣次郎がどうかして安田を馬鹿にして遣れというので来たな、初めて逢つて他人の女房を
 貰えなどと、はい願いますと誰がいう、殊に惣次郎には、去年の秋聊かの間違で互に遺恨
 もあり、私も恨みに思つてゐる、其の敵同士の処へ来て女房に世話をしましうなどと、
 はい願いますと誰がいう、白痴め、帰れ」

富「成程是は至極御尤も、どうもお氣分に障るべき事を申したが、まア」

安「騒々しい、帰れつたら帰れ」

富「まア、重々御尤も、是には一つの訳がある、ようがすか、手前が打明けた話を致

しましう、手前も武士で二言はない手前は本所北割下水で千百五十石を取つた座光寺源三郎の用人山倉富右衛門の倅富五郎、主人は女太夫を奥方にした馬鹿ですから家は改易、仕方なし、手前は常陸に知己しるべがあるから参つたが、ふとした縁で惣次郎方の厄介、処が惣次郎人遣いを知らず、名主というを権けんにかつて酷ひどい取扱いをするは如何いかにも心外で、手前は浪人でも土民どみんなぞにへえつくする事はない、残念に心得ているが、打明話を致すが、江戸に親類ども、ある身の上、江戸へ帰るにも何か土産がないが、実は今まで道楽をして親類でも採上とりあげませんから、貴方の内弟子になってお側で剣道を教えて頂いて、免許目録を貰つて帰ると、親類でも今まで放蕩をしても田舎へ行つて、是々い先生せんせいの弟子になつてと書かきつけ付つけを持って帰れば、それが価値ねうちになつて何処どこへでも養子に行かれる、処が、御門人にといつても、月々の物を差上げる事も出来ません身の上でございませうが、それを承知で貴方の弟子に取つて下さるなれば、私わたくしは弟子入の目録代りに、御意ぎよいに適かなつたお隅を、御新造しんぞうに、長熨斗ながのしを付けて持つて来ましよう」

安田「是は面白いぞ、惣次郎という主ぬしのある者をどうして持って来られます」

富「惣次郎が有つてはいけません、惣次郎を一ひ刀かたなに斬つて下さい」

安「黙れ、馬鹿をいうな、帰れ、帰れ、汝われは惣次郎と同意して手前の氣を引きに来たな、うゝん帰れく」

富「これは成程、至極御尤もですが、まア」

安「騒々しい行けく」

富「じやア有ありてい体に申します、正直なお話を致しますが、貴方の遺恨ある角力取の花車重吉が来て、法恩寺村の場所が始まるので、去年の礼というので、明晩になりますと、惣次郎が金かね三十両遣ると、ようがすか、用をしまうのは日の暮方まで掛りましょう、帳ちようあ合いなどを致しますからな、用が終つて飯を食つてはどうしても夜の六よつ過すぎになります、其そこ處で三拾両持つて出掛ける、富五郎がお供でげす、ずうっと河原へ出て、それから弘くぎよ行寺うじの松の林の処へ出て黒門の処までは長い道でございますから其処へ出て来ましたら、貴方は顔を包んで芒すゝきだゝみの影に隠れていて、手前が合ちようちん提灯を消すと、途端に貴方が出てずぷりと遣り、惣次郎を殺すと金が三十両あるから持つて宅うちへ帰り、構わず寝て入らつしやい、まアさお聞きなさい、手前は面部きずへ疵を付けて帰つて、今狼藉ろうぜきもの者が十四

五人出て、旦那も切合つて私も切合つたが、多勢に無勢敵わぬ、早く百姓をといたので大勢来て見ると、貴方は宅へ帰つて寝て居る時分だから分らぬてえ、気の毒なといって死骸を引取り、野辺送りをしてしまつてから、ようがすか、其の後は旦那様が入らつしやりませんでは私がいても濟みません、殊には彼アいう処へお供をして、旦那が彼アなれば猶更どうも思い出して泣く許りでございますから、江戸表へという、惣次郎が死ねばお隅さんも旦那様がいなければ此の家においても余計者だから私も江戸へ帰るといふ、江戸へ行くなれば一緒にというので、お隅を連れて来てずうつと貴方の処へ長熨斗を付けて差上げる工夫、富五郎の才覚、惚れた女を御新造にして金を三拾両只取れるという、是迄種を明してこれでも疑念に思召すか、え、どうでげす」

安「成程是は面白い、それに相違ないか」

富「相違あるもないも身の上を明してかくお話をして、是をどうも疑念てえ事はない、宜しい手前も武士で金打致します…今日はいけません…木刀を帯して来たから今日は金打は出来ませんが、外に何の様なる証拠でも致します」

安「じゃア明晩酉刻というのか」

富「手前供を致します、彼処は日中も人は通りませんから、酉刻を打つて参り、ふ

ツと提灯を消すのが合図」

安「よろしい、相違なければ」

と約束して帰りました。安田一角は馬鹿でもない奴なれども、お隅にぞつこん惚れてい
るから、全く然ういう了簡で連れて来るのではないかと思ひ、是から胸に包んで翌日仕度
をして早くから家を出て、諸方を廻つて、夜に入つて弘行寺の裏手林芒畳へ蹲んで待つて
いる事とは知りません、此方は富五郎が、お隅を手に入れるに惣次郎が邪魔になりますが、
惣次郎は剣術も心得ておりますから、自分に殺す事が出来ぬから、一角を欺して惣次郎を
殺させて後、お隅を連出して女房にしようという企でございませぬ、実に悪い奴もあるもの
でございます。富五郎は書物が分りませんから眼を通してと、惣次郎へ帳面を見せ、態
と手間取るから遅くなります。是から夜食を食べて支度をして提灯を点けて出かけようと
する、何か虫が知らせるかして母親もお隅も遣りたくない、

隅「何だか遅いから、明日先方から参りますから今日はお止めなさいな」

惣「なアに直ぐ帰るから」

隅「そうでございますか、富五郎お前一緒にどうか気を付けておくれよ」

富「へエ大丈夫、どんな事があつても旦那様にお怪我をさせる様な事はございませぬ、

手前も剣道を心得ておりますから」

と空を遣そらつかつて惣次郎の供をして出掛けましたが、笠阿弥陀を横に見て、林の処へ出て参りますと、左右は芒畳で見えませんが、左の方の土手向うは絹川の流れドウくとする、ぽつりくと雨が顔にかゝつて来る。

惣「富五郎降つて来たようだ」

富「大した事ありません、恐れ入りましたが一寸小用こようを致しますから」

惣「小便ちようずをするなれば提灯は持っていて遣る、これと何処どこへ行く提灯を持って行つては困る」

という中富五郎はふつと提灯を吹消しました。

惣「提灯が消えては真暗まっくらでいかぬのう」

富「今小用致しますから」

という折から安田一角は大松おおまつの蔭に忍んでおりましたが提灯が消えるを合図にスツクと立つて透すかし見るに、真暗ではございますが、晃きらつく長いのを引抜いてこう透して居ります。

惣「富や、おい富く、何なんだかこそくして後うしろにいるのは、富やく」

という声を当あてにして安田一角が振ふり被かぶる折ひから、向むの方こうから来る者ものがありますが、大きな傘ひっかつを引ひ担かついで、下駄げだも途中で借かりたと見えて、降くだる中なかを此こゝ処ところに來き合あわせましたは、花車はなぐるま重吉しむつとという角力すもつとり取とでござります。是こゝからは芝居しばいなればだんまり場ばでございます。

六十四

引き続きお聞きに入れいまするは、羽生村はねむらの名主なぬし惣次郎そうじらうを山倉やまぐら富五郎とみごろうが手引てびきをして、安田一角やすだかくと申まをす者に殺ころさせます。是こゝは富五郎とみごろうが惣次郎そうじらうの女房にようぼうお隅ぐもに心底こぞつ惚こんれておりまして、惣次郎そうじらうがあるので邪魔じゃまになりますから、寧いっそかたづけて自分の手てに入れようという悪心あくしんでござりますが、田舎いんかにいて名主なぬしを勤こめるくらいであるから惣次郎そうじらうも劍術けんじゆつの免許めんぎょぐらい取とつて居ゐります。富五郎とみごろうは放蕩無頼はうたうむらいで屋敷やしきを出でる位くらいで、少しも劍術けんじゆつを知しりませんから、自分で殺ころす事は出来こりません、茲こゝで下手てでも安田一角やすだかくという者は、劍術けんじゆつの先生せんせいで弟子でしも持つて居ゐるか、丁度ていどお隅ぐもに惚ほれているのを幸さいい、一角かくを*おいやつて惣次郎そうじらうを殺ころし、惣次郎そうじらうの歿ない後のちにお隅ぐもを無理むりに口説くちがいて江戸えどへ連れて行いつて女房にようぼうにしようという企たくみを考え、やまで嚇おどして上手うまに見えるが田舎いんか廻まわりの劍術けんじゆつ遣やだから、安田一角やすだかくが惣次郎そうじらうより腕うでが鈍鈍くて、若もし惣次郎そうじらう

が一角を殺すような事になれば、此の企は空しくなるというので、惣次郎が常に帯さして出ます脇差の鞘を払って、其の中へ松脂まつやにを詰めて止めを致して置きました、実に悪い奴でございませぬ。惣次郎は神ならぬ身の、左様な企を存じませぬから富五郎を連れて、彼の脇差を帯して家を出て、丁度弘行寺の裏林へ掛りますと、富五郎がこそく匍はつて行くようですから、なぜかと思つて後を振り返る、とたんに出たのは安田一角、面部を深く包み、端折はしよりを高く取つて重ね厚あつの新刀を引き抜き、力に任せてプスーリ一刀いっとうあびせ掛けましたから、惣次郎もひらりと身を転じて、脇差の柄に手を掛け抜こうとすると、松脂をつぎ込んでから一日たつて居るので粘つて抜けない、脇差の抜けませんのにいら立つ処を又たまた一ひとかたなな刀な バツサリと骨を切れるくらいに切り込まれて、向むへ倒れる処を、又また一ひとかたなな刀な あびせたから惣次郎は残念と心得て、脇差の鞘ごと投げ付けました、一角がツと身を交かわすと肩の処をすれて、薄すくの根方ねがたへずぽんと刀が突立つつたから、一角は血のりを拭いて鞘に収め、懐中へ手を入れて三十両の金を胴巻ぐるみ盗んで逃げようとする、向の方から蛇の目の傘を指さし、高足駄たかあしだを穿くいて、花車重吉という角力が参りました時には、一筋道ひとすじみちで何処どこへも避さけることが出来ません、一角は狼うろたえて後あとへ帰ろうとすれば村が近い、仕方がないからさつさつと側の薄畳の蔭の処へ身を潜め、小さくなつて隠れて居ります。此方こちうは富五郎はバツ

サリ切つた音を聞いて、直に家へ駈けて行く、其の道すがら茨か何かで態と蚯蚓腫れの傷を拵えましてセツ／＼と息を切つて家へ帰り

* 「けしかけるおだてるそゝのかす」

富 「只今帰りました」

という。処が富五郎ばかり帰つたから恟りして、

隅 「おや富さんお帰りかい何うかおしかえ」

富 「へエもう騒動が出来ました、あの弘行寺の裏林へ掛つたら悪漢が十四五人でで出まして、二人とも懐中の金を出せ身ぐるみ脱いで置いて行けと申しましたから、驚いて旦那に怪我をさせまいと思ひまして、松の木を小楯に取りまして、不埒至極な奴だ、旦那を何と心得る、羽生村の名主様であるぞ、粗相をすると許さんぞという、大勢で得物／＼を持って切つて掛るから、手前も大勢を相手に切り結び、旦那も刀を抜いて切り結びまして、二人で大勢を相手にチョン／＼切結んでおりましたが、何分多勢に無勢旦那に怪我があつてはならぬと思つて、やつと一方を切り抜けて参りました、此の通り顔を傷だらけにして：早くお若衆早く／＼」

と誠しやかにせえ／＼息を切つていきますから、お隅は驚いて、それ早く／＼というの

で、村の百姓を頼んで手分てわけをして、どろ／＼押して参りましたが、もう間に合いは致しません、斬った奴は疾とつに家へ帰つて寝ている時分、百姓衆が大勢行つて見ると、情ない哉かな惣次郎は血に染つて倒れておりますから、百姓衆も氣の毒に思い、死骸を戸板に載せて引き取り、此の事を代官へ訴え、先まず検視も済み、仕方なく野辺送りも内葬の沙汰で法蔵寺へ葬りました。是程の騒ぎで村の者は出掛けて追おいはぎ剥の行方を詮議致し、又四方八方八州の手が廻つたが、殺した一角は横曾根村に枕を高く寝ておりますので容易に知れません。惣次郎と兄弟分になつた花車重吉という角力は法恩寺村にいて、場所を開こうという処へ此の騒ぎがあるのに、とんと悔くやみにも参りませんから、母も愚痴が出て

母「あゝ家の心しん棒ぼうがなくなれば然そうしたもんか、情ないもの」

と愚痴たら／＼。そうこうすると九月八日は三七日みなのかでござります、花車重吉が細長い風呂敷に包んだ物を提げて土間の処から這入つて参りまして、

花「はい御免なせい」

多「いやお出でなさいまし」

花「誠に大分御無沙汰致しました」

多「家うちでもまあ何どうしたかつてえねえ、一寸知らせるだったが、家がまあ忙せわしくつて手

が廻らないで、まア一人で歩いてることも出来なえから誠に無沙汰アしましたが、旦那様ア殺された事は貴方知って居るだね」

花「誠にまア何とも申そう様はございません、知って居りましたが旦那と私とは別懇の間柄だから、私が行って顔を見ればお母様やお隅さんに尚更歎きを増させるような者だから、夫故まア知っていながら遅くなりました、多助さん、飛んだ事になりましたね」

多「飛んだにも何にも魂消てしまつてね、お内儀様はハア年い取つてるだから愚痴いいうだ、花車は内に奉公をした者で、殊に角力になる時前の旦那様の御丹精もあるとねえ、惣次郎とは兄弟じゃアねえか、それで此の騒ぎが法恩寺村迄知んねえ訳ア無え、知つて来ないは不実だが、それとも知んねえか、江戸へでも帰つた事かとお内儀さんあんたの事をば云つて、ただ騒いでいるだ、どうか行つて心が落ち着くように気やすめを云つて下さえ、泣いてばいいいるだからねえ」

花「はい、来たいとは思いますが少し訳があつて遅く参りました、まア御免なせえ」
多「さア此方へお這入り」

というので風呂敷包を提げたなり奥へ参ります。来てみると香花は始終絶えませぬから其処らが線香臭うございます。

多「お内儀さん法恩寺の関取が参りましたよ」

母「やア花車が来たかい、さア此方へ這入つておくんなせえ」

花「はい、お内儀さん何とも此の度は申そう様もございません、さぞ御愁傷様でござい
ましよう」

六十五

母「はい只どうもね魂消てばいいいます、お前も知っている通り小せえ時分から親孝行で
父様アとは違つて道楽もぶたなえ、こんな堅い人はなえ、小前の者にも情を掛けて親切
にする、あゝいう人がこんなハア殺され様をするというは神も仏もないかと村の者が泣い
て騒ぐ、私もハア此の年になつて跡目相続をする大事な忰にはア死別れ、それも畳の上
で長煩いして看病をした上の臨終でないだから、何たる因果かと思えましてね、愚痴
い出て泣いてばいいいます、それにお隅は自分の部屋にばい這入つて泣いて居るから、
間もお寺へ行つたら法蔵寺の和尚様ア因果経というお経を読んで聴かせて、因果という
者アあるだから諦めねばなんねえて意見をいわれましたが、はアどうも諦めが付かなえで、

只どうも魂消てしまつて、どうかまアこういう事なら父アんの死んだ時一緒に死なれりやア死にたかつたと思えますくらいで」

花「はい、私もねえお寺詣りには度々参ります、それも一人で、実は人に知れない様に参りました、是には深い訳のあることで、私が不実で来ないと思つて定めて腹を立て、お出でなさるとは知つていますが、少し来ては都合の悪い事があつて来ませぬ、お前さんは今まで泣いたことはありません、又大きな身体をして泣くのは見つともねえから、めろく泣きはしませんけれども、外に身寄兄弟もなし、重吉手前とは兄弟分となつて、何んでもお互に胸にある事を打ち明けて話をしよう、力になり合おうといつておくんないました、其のお前さん力に思う方に別れて、実に今度ばかりは力が落ちました、墓場へ行つて花を上げて水を手向けるときにも、どうも愚痴の様だけでも諦めが付かないでついには泣きます、まア何んともいい様がありません、嘸お前さんには一と通りではありませんまい、お察し申しております、お隅さんも嘸御愁傷でしよう」

母「はい私の泣くのは当り前のことだが、あのお隅は人にも逢わなえで泣いてばいおるから、そう泣いてばいいると身体に障るから、些と氣い紛らすが宜え、幾ら泣いても生返る訳でなえというけれども、只彼処へ蹲んで線香を上げ、水を上げちやア泣いてるだ、

誠にハア困ります」

花「はいお隅さんを一寸茲へお呼びなすつて下さい」

母「お隅やちよつくり此処へ来うや、関取が来たから来うや」

隅「はいく」

母「さア此処へ来や、待つてるだ」

隅「関取おいでなさい」

花「はいお隅さんまア何んとも申そう様はありません、とんだことになりました、嘸ぞお力落しでございましょう」

隅「はい、もうね毎日お母さんと貴方の噂ばかり致しまして、どうしておいでなさいませんか、何かお心持でも悪いことがありはしまいか、よもや知れない事もあるまいが、何か訳のある事だろうと、お噂を致しておりましたが実に夢の様な心持でございましてねえ、それは貴方とは別段に中が好くつてねえ、旦那が毎も疝癩を起しておいでなされる時にも、関取がおいでなさいますと、直に御機嫌が直つて笑い顔をなさる、こうやって関取が来ても旦那様がお達者でいらしたら嘸お喜びだと存じまして、私は旦那の笑顔が目になります」

母「これ泣かないが宜え、そう泣かば病に障るからというのに聞かなえで、彼様に泣いてばいいから、汝が泣くから己がも共に悲しくなる、泣いたって生返る訳工なえから諦めろというだ、ねえ関取」

花「へエ、御愁傷の処は御尤でございませが、お隅さん、旦那をば何者が殺したという処の手掛は些とはございませるか」

隅「もう関取の処へ早く行き度いというのが、御用があつて二日ばかり遅くなりましたから、是から富五郎を供に連れて関取にお目に掛りに参ると仰しやるから、今日は大分遅いから明日になすつたら好かろうといつても、是非今日はといつて、何ういう事か大層急いてお出でになりました、処が丁度弘行寺の裏林へ通り掛りますと、十四五人の狼藉者が出まして、得物くを持って切り付けましたから、旦那はお手利でございませから直に脇差を抜いて向うと、富五郎も元は武士で剣術も存じておりますから、二人で十四五人を相手に切り結んだけれども、幾ら旦那が御手練でも向は大勢でございませから、仕方なく、富五郎が旦那にお怪我をさしてはならぬとやと切り抜け駆け付けて来ました、直に村の若い衆も大勢参りましたけれども、其の甲斐もなくもう間に合いませんで、誠に情ないことではございませす」

花「じゃ富五郎さんが一緒に附いて行って弘行寺の裏林へ掛った処が十四五人狼藉者が出て取巻いたから、旦那も切結び、富五郎も切り合ったという処を誰も見た者はないので、富五郎が帰って其の事を話したのですね」

隅「左様でございます」

花「うん、富五郎という人は内におりますか」

隅「お母さん、今日は富五郎は何処かへ使いに参りましたか」

母「今何まで使に遣つたゞ、何処まで行つたかのう、又水街道の方へ廻つたか知んなえ、じき横會根まで遣つたがね」

花「御新造さん、留守かえ、そんなら話をしますが、あの富五郎という奴は、べちやくちや世辞をいう口前の好い人だね、実は私はね、人には云わないが旦那の殺されたばかりの処へ通り掛つた処が、丁度廿五日で真暗だ、私がずん／＼行くと、向から頭巾を被つた奴が来やアがる様子だから、はて斯んな林に胡散な奴がおる、ことに依つたら盜賊かと思つたから、油断せずに見ると、其奴が脇道へ曲つて、向へこそ／＼這入つて行くから、何でもこれは怪しいと思つて、急いで来ると、私の下駄で蹴付けたのは脇差じゃ、はて是は脇差じゃが何うして此処に在るかと思つて、見ると向からワイ／＼とお百姓が来

まして、高^{たか}声^{こえ}上げて、あゝ情ないもう少し早かつたらこんな事にはならぬ、無惨なことをした、情ないことをしたというから、こいつしまった、そんなら頭巾を被った奴が旦那を殺したと思つて、其の事を皆の中で話をしようかと思つたが、旦那と私と深い中のことは知つて居るし、若^もし角力が加勢をすと思つて、遠く逃げてしまわれたら手掛りはないから、是は知らぬ積りで家^{うち}へ歸つたが好いと思つて、其の脇差を提^さげて歸つてからは何^{どこ}へも出ず、外^{ほか}の者にも黙つてろ知らぬ積りでいるといい付けて来ずにいきましたが、今日は斯^こうして脇差を持つて来ました」

母「あれやまア、どうも不思議なこんだ、殺された処へ通り掛つて脇差い拾つたつて、其の斬つた奴は何^{どんな}様奴だかね」

花「お隅さん、それはね此の脇差はどうしたのか知れないが、ちよつくり抜けない、私^{わし}の力でもちよつくり抜けない、何^{なん}でも松^{まつ}脂^ぢか何か附いてると見えて粘^ねばくしてゐるから、ひつついて抜けないが、これは旦那の不断差す脇差で私も能く知つております」

母「あれやまアどうも、お前が知つてるのが手に這入るのは不思議だねえ」

隅「お母様つかさん、もう少し関取が早かつたら助かりましたものを」

花車「此の通り抜けない、抜けないから脇差を投ほうり付けたのを盗賊どろぼうが置いて行つたか、其処そこは分らんが、今富五郎が私わしも切り合い旦那も切合つたが、相手が大勢で敵かたわんというので駈付けて来て知らしたというのは、それはどうも私は胡散なことと思う、仮令たとえ相手が多かろうが少なかろうが、旦那さん様が危あぶないのを一人措おいて逃げて来るといふ訳はないねえ、然そうじゃないか、大切な主人と思えばどこ迄も助けるには側にいなければならぬ、それを措いて来るとは、怖いから逃げたと思えない、旦那が脇差を抜いて切合つたというのが抜けばやしない、ねえ、どうしても抜けない刀を抜いて切合つたといふ道理がないから、どうも富五郎という奴が怪しい、といふ訳は、お隅さん、去年の秋大生郷の天神前で喧嘩を仕掛けた奴がお隅さんが麴屋に居た時分お前さんに惚れて居て冗談をいつた奴がある、処がお隅さんは堅いから、いふ事を聞かんで撥はね付けたのを遺恨に思うていふことを知つている、事に依よつたら安田一角が旦那を切つて逃げやアしないかと考えた、就つては山倉富五郎という野郎は、口前は好いい奴だが心に情なさけのない慾張つた奴だから、事に依つたら一角にお出で〜をされて鼻薬を貰うて、一角の方に付いて、彼奴あいつが手引をして殺させやア

せんかと思う、それ此の通り抜けぬのに抜いて切合ったというのが第一おかしいじゃないか」

母「あれやまア其^{そこ}処^こらには気が付かんで、只まア魂消てばいいました、ほんにそうかもしんねえよ、其の頭巾冠^{かぶ}つたのはどんな恰好だつきやア」

花「それは暗^{やみ}だから確^{しつ}り分^からんが、一角じやないかと私^{わし}の心^{こゝろ}に浮^うんだ、斯^こうしておくんなさい、私は黙^{もく}つて歸^{かへ}るが、富五郎が歸^{かへ}つたら、今日花車^{はなぐるま}が悔^くみに來^きて種^{いん}々^く取^{とり}こんだ事があつて遅^{おそ}くなつた、就^つては他^わへ二百兩ばかり貸^かしたが、どう掛合^かつても取^とれないから、どうかして取^とろうと中^なへ人^{ひと}を入^いれたが、何^{なに}分^{ぶん}取^とれないが、若^もし富五郎さんが間^まへ這^は入^いつたら向^むの奴^{やつ}も怖^{こゝろ}いから返^{かへ}すだろう、若^もしお前の腕^{うで}から二百兩取^とれたら半分は礼^{れい}に遣^やるが、どうか催促^{めいそ}の掛合^かに往^いつてくれまいかと、花車^{はなぐるま}が頼^{たの}んだが行^いつて遣^やらんかといえは、慾^{よく}張^はているから屹^{きつ}度^と遣^やつて來^きるに違^{ちが}いない、法恩寺村^{ほつおんじむら}の私^{わし}の処^{こゝ}へ來^きたら富五郎さんくと

いうて富五郎を側^{わき}に寄^よせ、腕^{うで}を押^おえてさア白^{しろ}状^{じやう}しろ、一角に頼^{たの}まれて鼻^{はな}薬^{ぐすり}を貰^{もら}つて、惣^{そう}次^じ郎^{らう}さんを殺^{ころ}したと云^いえ、どうだくいわなけりやア土^ど性^{じやう}骨^{ぼね}を殴^うて飯^いを吐^はかせるぞ、白^{しろ}状^{じやう}すれば、命^{いのち}は助^{たす}けて遣^やるといふたら、痛^{いた}いから白^{しろ}状^{じやう}するに違^{ちが}いない、實^{じつ}は是^{こゝ}れくくく

くであるぞ喋^{しゃべ}つたら旨^{あじ}いもんで然^そうしたら富五郎はくりく坊^{ぼく}主^{ぬし}にして助^{たす}けても好^よし、

物置へ投り込んでも好いが、愈々一角と決つたらお隅様は織細い女、お母様は年を取つて居り、惣吉様はまだ子供だから私が先へ行きます、一角の処へ行つて、偕先生大生郷の天神前で、飛んだ不調法を致しましたが何卒堪忍しておくんなさいと只管詫びる、然うすれば斬ることは出来ぬからうっかり近寄る近寄つたら両方の腕を押えて動かさぬ、さア手前が惣次郎を殺した事は富五郎が白状した、敵を取るから覚悟をしると腕を押えた処へ、お前様が来て小刀でも錐でも構わぬからずぶ／＼突ついて一角を殺すが好いどうじゃ」

隅「本当に有難いこと、嘸旦那様が草葉の蔭でお喜びでございましょう、関取私は殺されてもいゝから旦那様の敵を取つて」

母「何分にもよろしくねがえます」

花「余り敵／＼と云わないがいゝ、私は先へ帰りますから」

と脇差を元の如く包んで帰りました。後へ入り替つて帰りましたのは山倉富五郎、

富「へエ只今帰りました」

母「富や、大層帰りが遅かつたね」

富「なに帰り掛けに法蔵寺様へ廻りまして、幸い好い花がありましたからお花を手向けましたが、お墓に向いましてなア、実に残念でございまして、何だか此間まで富／＼と仰

しやつたお方がまアどうも、石の下へお這入りなすつたかと存じましたら胸が痛くなりまして、嫌な心持で、又家へ帰つて貴方がたのお顔を見ると、胸が裂ける様な心持、仏間に向つて御回向致しますると落涙するばかりで、誠にはや何んとも申そう様はありません」

母「まア能く心に掛けて汝が墓参りするつて、嘸草葉の蔭で喜んでゐるベエ」

富「どうも別に御恩返しの仕事がありませんから、お墓参りでもするより外仕方がありません、仏様にはお念仏や花を手向けるくらいで、御恩返しにはなりません、それより外に仕方がありません、ヘエ」

隅「あの富さん先刻花車関が悔みに参りましたよ」

富「おや／＼／＼左様でござりましたか、ヘエ成程何うなすつたか、御存じないのかと思いましたが」

母「ナニ知つてたてや、知つてたけれども早く来て顔を見せたら、深え馴染の中だと思へ出して歎きが増えて母様が泣くべえ、それに種々用があつて来ねえでいたが悪く思つてくれるなつて、大い身体アして泣いただ」

富「そうでげしよう、兄弟の義を約束した方でございますから嘸御愁傷でげしようお察し申します」

母「就てねえ、あの関取が他へ金え二百両貸した処が、向の奴がずりい奴で、返さなえで誠に困るから、どうか富さんを頼んで掛合つて貰えてえ、富さんの口前で二百両取れたら百両礼をするてえいうだ、どうだい、帰つたばかりで草臥て居るだろうが、行つて遣つてくろよ」

富「へエ成程関取が用立つた処が向の奴が返さんのですか、なに直ぐ取つて上げましよう、造作ありません、百両……百両……なアに金なんぞお礼に戴かぬでも御懇意の間でげすから直ぐに行つて参ります」

と止せばよいのに黒い羽織を着て、一本帯して、ひよこく遣つて来ましたのが天命。

富「はい御免なさい、関取のお宅は此方でげすか、頼みますく」

弟子「おーい此処だい」

花「これく一寸此処へ来い、富五郎という人が来たら奥へ通して己が段々掛合いになるので、切迫詰つて彼奴が逃げ出すかも知れないから、逃げたらば表に二人も待つて、逃やがったら生捕つて逃がしてはならぬぞ、え、初めは柔和な顔をして掛合うから」

弟子「逃げたら襟首を押えて」

花「こうくそんな大きな声を、此方へお這入りなさいといえ」

六十七

弟子「此方こつちへお這入こつちなせい」

富「御免ごうむを蒙まうります」

花「さア富さん此方こつちへ、取次も何もなしにずか／＼上あがつて好いいじやないか、さア此方へ来て下さい」

富「えー其ごの後は存外御無沙汰を、えー毎いっも御壮健で益々御出精ごしゅっせいで蔭ながら大悦致たいえつ致します、閑取は大層評判が好ようげすから場所が始まりましたら、是非一度は見物致そうと心得ていましたが、御案内の通りさん／＼の取込で、つい一寸の見物も出来ません、併しかし御評判は高いものでござります、昨年から見ると大した事で、お羨うらやましゆう、実に関取は身体も出来て入いらつしやるし、殊ことには角力が巧じょうず手で、愛敬があり、実に自力のある処の閑取だから、今に日の下開かいざん山横綱の許しを取るのはあの閑取ばかりだといつて居ます」

花「余計な世辞は止して下せい、私わしは余計な世辞は大嫌いだから」

富「いや世辞は申しません、これは譬たとえの通り人情で、好きなものは一遍顔を見た者に

は、知らぬ人でも勝たせたいと思うのが人間の情じょうでげしよう、況まして旦那とは兄弟分けいでこ
うやって近ちか々、拝顔を得ますから、場所中は、どうか関取がお勝になる様にと神信心を
していますよ」

花「それは有り難い、仮令たとえ虚言うそでも日の下開山横綱と云つて貰なえば何なんとなく心嬉しい、
やア、お茶を上げろよ、さア此方こつちへ」

富「関取、さぞ御愁傷ごしゆうきやうで」

花「やアお互たがひのことで、嘸さぞお前さんもお力落しでございましょう」

富「イヤ此度こんどは実に弱りまして、只もうどうも富五郎は両親ふたおやに別れたような心持が致
しますなア」

花「然そうでございましょう、私わしも実は片腕ひとでしもがれた様だといましようか」

富「然そうでげしよう、私も実に弱りましたね」

花「就ついて富さん、お前さんが供に行つたのだとねえ」

富「左様」

花「どんな奴でございますえ、切つた奴は」

富「それはもう何なんとも残念千万、弘行寺の裏林へ掛ると、面部を包んで長い物をぶち

込んだ奴が十四五人でずつと取り巻いて、旦那が金を三十両持っているのを知って、出せ身ぐるみ脱いで置いてけというから、旦那に怪我をさせまいと思つて、旦那を何と心得る、旦那は羽生村の名主様だぞ、若し無礼をすれば引縛つて引くから左様心得ろというとなに、と突いきなり然竹槍をもつて突いて来るから、私も刀を抜いて竹槍を切つて落し、杉の木を小楯に取つてちよん／＼／＼／＼暫く大勢を相手に切合いました、すると旦那も黙つている気性でないから、すらり引抜いて一生懸命に大勢を相手にちやん／＼切合いましたから、刀の尖とつさき先から火が出ました、真に火花を散すとはこの事でしょう、けれども多勢に無勢と云う譬えの通りで、逆も敵かなわぬから、旦那に怪我があつてはならぬと、危うい処を切抜けて駆込んで知らせたから、そら早くというので大勢の若い衆しゅがどつと来て見ましたが、間に合いません、実に残念で、どうも」

花「お前さん供をしたから、嘸さぞ残念だつたらうねえ」

富「実にどうも此の上ない残念で」

花「そこで、何なんですかい、向は十四五人で、其の内一人か二人捕つかまえるとよかつたね」
富「処かなが向が大勢おおぜいでげすから、此方こつちが剣術を知つていても、大勢で刃物を持つて切付けるから敵かないません」

花「じゃア旦那が刀を抜いて切合った処をお前さんは見ただろうねえ」

富「そりやア見ましたとも、旦那はお手利てぎでげすからちよんくくく切合いました」

花「それに相違ないねえ」

富「相違も何もありません、現在私わしが見ておつたから」

花「うん然そうかえ、富さん、もつと側へお出でなさい、今日は一杯飲みましょう」

富「それは誠に有難いことで、時に何かお頼みがあるという事でげすが早速取立てまし

よう、なに造作もないことで」

花「それに付いて種々いろく話があるのだがもつと側へ」

富「じゃア御免を蒙こうむつて」

花「さて富さん、人と長く付合うには嘘を吐ついてはいかないねえ」

富「それは誠に其の通り信がなくてはいけませぬねえ」

花「今お前のいったのは皆嘘と考えて居る、旦那様が脇差を抜いてちよんく切合い、

お前も切結んだと、そんな出鱈目でたらめの事をいわずに正直なことをいってしまいいねえ」

富「な何なんだ、これは恐入おそつたね、どうも怪けしからん事を、ど、どういふ訳でな何なんで」

花「やい、それよりも正直に、慾に目が眩くらんで一角に頼まれて恩人の惣次郎を私わしが手引

で殺させましたといつちまいねえ」

富「これは怪しからん、怪しからん事があるものだね、関取外の事とは違います、私わしは一角という者は存じませぬ、知りもしない奴たとえに仮令たとえどの様な慾があつても、頼まれて旦那様を殺させたらうという御疑念は何等なんらの廉かどを取つて左様なことを仰しやる、と関取で無ければ捨置いしごんけぬ一言、手前も元は武士でござる、何を証拠しんこに左様な事を仰せられるか、関取承りたいな」

花「嘘そらつくくない、正直にいつてしまいな、手前てめえが鼻薬を貰つて、一角に頼まれて旦那を引き出したといつてしまえば、命許ばかりは助けてやる、相手は一角だから敵かたきを打たせる積りだが、何処どこ迄も隠せば、抛よんなくお前めえの脊骨せきこを殴ぶして飯を吐かしても云わせにやららん」

富「これはどうも怪しからん、関取の力で打たれりやア飯も吐きましようが、ど、どういふ訳で、怪しからん、なな何を証拠しんこに」

花「そんなら見せてやろう、是は其の時旦那だんなの帯おびして行つた脇差わきざしだろう、これを帯して出た事は聞いて来たのだ、さどうだ」

富「左様どうして是を」

花「是は手前てめえが刀を抜いてちよん／＼切合つたという後あとで丁度其の側を通り掛つて此の

刀を拾うたが、些とも抜けない、此の抜けない脇差をどうして抜いて切合ったかそれを聴こう」

富「それア、それア私が転倒致した」

花「何が転倒した」

富「それは私は大勢を相手に切結んでおり、夜分でげすから能く分りませぬが、全く鞘の光を見て拔身と心得ましたかも知れませぬが、私が手引をして：是は怪からん事でげす、どうも左様な御疑念を蒙りましては残念に心得ます」

花「それ／＼手前のいうことは皆間違つていらア、鞘の光を見て拔身で切合ったと思つたというが、鞘ごと切れば鞘に疵がなけれアならねえ、芒尖から火花を散したというが鞘ごと切合つてどうして火花が出るい」

富「じやア全く転倒致したのでげす、全く向同士ちよ／＼切合つて火花が出たのでげしよう、大勢の暗撃で向同士：どうも左様な手引をして殺したという御疑念は手前少しも覚がございません」

花「なに云わなけりやア脊骨を殴して飯を吐せても云わせるぞ」

富「ア、痛い／＼痛うござります、ア、痛い、腕が折れます、ア痛い」

花「さ、云つて了え、云わなければ殴すぞ」

富「ア、痛うござります」

花「やい能く考えて見ろ、実は大恩があるのに濟みませぬが、旦那は私が手引をして殺させました、其の申訳の為に私は坊主になつて旦那の追善供養を致しますといえば、お内儀様に命乞をして命だけは助けて遣るから、一角が殺したと云つてしまえよ」

富「云つて了えと仰しやつても、あゝ痛い痛うござります、だから私は申しますがね、あ痛い是はどうも恐入つたね、あゝ痛い、腕が折れます、あゝ申しますく、申しますからお放し下さい然う手をぐつと関取の力で押えられると骨が折れてしまいますから、アゝ痛いどうも情ないとんだ災難でげす、無実の罪という事は致し方がないなア、関取能くお考えください、私は恥をお話し致しますよ、昨年夏の取付きでしたが、瓜畑を通り掛りました、真桑瓜を盗んで食いました、既に縛られて生理になる処を、旦那様を通り掛つて助けて家に置いて下さるお蔭で以て、黒い羽織を着て、村でも富さんくといわれるのは全く旦那の御恩でげす、其の御恩のある旦那を、悪心ある者の為に手引をして殺させるとい様な事は、どの様なことがあつても覚えはござりませぬが、アゝ痛たゝゝアゝ痛うござります、腕が折れてしまいます」

花「なに痛い、腕を折ろうと脊骨を折ろうと己の了簡だ、己が兄弟分になつた旦那を、殺した奴を捜して敵を討たにやならぬ、手前一人に換えられないから云わなければ殺してしまふ、それとも殺させたといえば助けて遣るが、云わないか此の野郎」

と松の木の様な拳を振上げて打とうと致しました時には、実に驚に捕まつた小鳥の様なもので、逃げるも退くも出来ません、此の時に富五郎がどう言訳を致しますか、一寸一息つきまして。

六十八

富五郎が花車に取つて押えられましたは天命で、己が企みで、惣次郎の差料の脇差へ松脂を注ぎ込んで置きながら、其の脇差を抜いて惣次郎がちよん／＼切合つたという処から事が顛られて、富五郎は何といつても遁れ難うございます。殊に相手は角力取り、富五郎の片手を取つて逆に押えて拳を振上げられた時には、どうにもこうにも遁途がありません。せぬ、表の玄関には二人の弟子が張番をしていて、若し逃げ出せば頸を取つて押えよう

と待つておりますから、此の時は富五郎が真青になつて、寧ろ白状しようかと胸に思い

ましたが、其処そこは素もとより悪才たに長けた奴。

富「関取、御疑念の程重々御尤も、もうこうなれば包まず申します、申しますからお放し下さい」

花「申しますと、云ってしまえばそれでよい」

富「云ってしまいます、是迄の事を残らずお話し致します、致しますが関取、そう手を押えていては痛くつてく喋ることが出来ません、こうなった以上は遁にげも隠れも致しませぬ、有ありてい体に申すから其の手を放して下さい、あゝ痛い」

花「云ってしまえばよい、さア残らず云ってしまえ」

と押えた手を放しますと、側に大きな火鉢がありまして、かんくと火が起おこつております。それに掛つている大薬おやかん鐘を取つて、

富「申上げまする」

といいながら顛ひっくりかえ覆かえしましたから、ばつと灰神樂はいかぐらが上あがりまして、真暗まつくらになりました。なれども角力取等ちからは大様おおようなもので、胡坐あぐらをかいたなり立上りも致しません。

花「何をするぞ」

という内に富五郎は遁出にげだしましたが、悪運の強い奴で、表へ遁げれば弟子でしが頑張つてい

るから直すくに取つて押えられるのでございませぬが、裏口の方から駈出し、畑を踏んで逃げたの逃げないの、一生懸命になつてドンくくく遁げましたが、羽生村へは逃げて行か
れませぬから、直に安田一角の処へ駈込んで行つて、

富「ハ、ハ、先生く」

安「なんだ、サア此方こちらへ」

富「は…ア水を一杯頂ちようだい戴」

安「なんだ、ナニ水をくれと、どうしたんだ、喧嘩でもしたか」

富「いいえ、どうも喧嘩どこではございませぬ、脊骨をどやして飯を吐かせるて、
実際に驚きました」

安「誰だれが飯を吐いたか」

富「なに私わしが吐くので、先生運好よく此処こゝまで逃げたが、もう此処にもおられぬので、
直に私は逃げますから、路銀を二三十金拝借致し度たい」

安「どうしたか、そう騒いではいかない」

富「どうも先生、これくでげす」

と一部始終の話をしますると、相手は角力取ですから一角も不気味ぶきびでございませぬが、

安「然うか、驚くことはない、私が殺したという事を云いはしまい」

富「何で：それはいいませぬ、足下とちやんとお約束を致した廉がありますから、仮令脊骨をどやされて骨が折れてもそれは云わん、云わぬに依つてこんな苦しい目を致したから、可哀そうと思つて二三十金ください、直に私は逃げますから」

安「何んだ、何んにも怖いことはない」

富「怖いことはないと仰しやるが、足下知らないからだ、何うも彼奴の力は無法な力で、只握られたばかりでもこんなに痣になるのなもの」

安「じゃア貴公に路銀を遣るから逃げるがよい」

富「足下も早く、直に跡から遣つて来ますよ」

安「遣つて来ても云いさえせんければ宜しい」

富「理不尽に：」

安「幾ら理不尽でも白状せぬのに踏込んでどうこうという訳にはいかぬ」

富「無法に打ちますよ」

安「なに打たれはせぬ、仔細ない」

富「仔細ないと仰しやるが、私の跡を追掛けて来て富五郎はいるか、隠まつたらう、イ

工懃まわぬ、居ないといえはじやア戸棚に居ましようといふので捜しましよう、そうで無いにしても表で暴れて家を揺ると家が潰れるでしょう、奴の力は大した者だから、やアというと家に地震が揺つて打潰されて了います、何にしても家にいると面倒だから逃げて下さい、え、先生」

安「じやア路銀を遣るから先へ逃げな」

富「逃げるなら一緒に逃げたいものです」

安「一緒に逃げては人の目に立つてよくない、己が手紙を一本付けるから之を持って、常陸の大方村という処に私の弟子があるから、其処へ行つて隠れておれば知れる訳は無いから、ほとぼりが冷めたら又出て来い、私は一足後から、ナニ暴れても仔細ない、逢い度いといえは余義ない用事が出来て上総へ行つたとか、江戸へ行つたとか、出鱈目を云つておれば取り附く島が無いから仕方が無い、貴公は先へ行きな」

富「じやア路銀を頂戴、私はすぐ行きます」

安「そう急がずに」

と落着いて手紙一本書いて、路銀を附けて遣ると、富五郎は其の手紙を持って人に知れぬ様に姿を隠し、問道くと到頭逃げ遂せて常陸へ参りました。安田一角も引続いて

逃げる、花車重吉は、

花「おのれ逃げやアがったか」

と直すぐに後あとを追掛けましたけれども、羽生村では此方こつちへは来ないというから、サテ怪しいと諸方を尋ねたが何分手掛りがありません。一角の様子を聞くと是は私用があつて上総まで出たというので、頓とんと手掛りが無い、風を食くらつて二人とも逃げてしまったから、もう帰る気遣いはないが、安田一角の家うちは其の儘になつて弟子が一人留守番に残っている。どういふ訳か分らぬが何なんでも怪しいから取とつて押えなければならぬが、それには先ます第一富五郎はどうかして押えなければならぬと心得、

花「残念な事をしました、これ／＼これ／＼で押えた奴を逃げられました」

というと、お隅も母も残念がつて歎きますけれども致いたしかた方かたがない。翌よぐげつ月の十月の声を聞くと、花車は江戸へ参らなければならぬから、花車重吉が暇いとまひ乞こいに来て、

花「私はこれ／＼で江戸へ参りますが、何事があつても手紙さえ下されば直に出て来て力に成つて上げますから、心丈夫に思つてお出でなさい」

と二人にいい聞かして、花車重吉は江戸へ帰りました。跡方は惣吉という取つて十歳の子供とお隅に母親と、多助という旧来此の家にいる番頭よう様の者ばかりで、何なんと無く心細い。

十一月の三日の事で、空は雪催しで、曇りまして、筑波下しの大風が吹き立て、身を裂れるほど寒うございます。

母「あゝ寒いてえ、年イ取ると風が身に泌みるだ、そこを閉つてくんろよ、何んだか今年に成つて一時に年イ取った様な心持がするだ、酷く寒いのも、多助やびつたり其処を閉つてくんろよ」

多「なにあんた、そんなに年イ取った〜といわなえがいゝ、若え者でも寒いだ、何だかハア雪イ降るばいと思ふ様に空ア雲つて参りました」

母「其処を閉つて呉んろよ、お隅は何処へか行つたか」

隅「はい」

と部屋から着物を着換え、乱れた髪を撫付けて小包を持って参りましたから、

母「このまア寒いのに何処へか行くかい」

隅「はい、改めてお願いがござります」

六十九

隅「不思議な御縁で、水街道から此方へ縁付いて参りました処が、旦那様もあゝいう訳でおかくれになりました、旦那がおいでならお側で御用を達して、仮令表向の披露はなくとも、私も今迄は女房の心持で働いておりましたけれども、斯様なつて旦那のない後は余計者で、却つて御厄介になる許りでございますし、江戸には大小を帯す者も親類でもございますから、何卒江戸へ参り度いと思ひまして、私もべんぐと斯うやつても居られません今の内なら、何うか親類が里になつて縁付く口も出来ましようと思ひまして、私は江戸へ帰りますから、どうか親子の縁を切つて、旦那はいなくつても貴方の手で離縁に成つたという証拠を戴きませぬと、親類へも話が出来ませぬから、御面倒でも一寸お書きなすつて、誠に永々お世話さまになりました」

母「それはア困りますな、今お前に行かれてしまうと心細えばかりでなく、跡が仕様が無えだ、惣吉は年イ行かなえで、惣次郎のなえ後はお前が何も彼もしてくれたから任して置いて、己アまア家内の勝手も知んなくなつたくれえだね、何うかまアそんなことを云わずに、どうかお前がいてくれねえば困りますから」

隅「有難う存じますけれども、どうも居られませぬ、居たつて仕方がありませんもの、ほんの余計者になりましたから、どうか御面倒でも…今日直ぐと帰ります、水街道の麴屋

に話をして帰りますから」

母「そりやアハア間違つた訳じやアねえか、お前は今迄まア外の女と違つて信実な者で、己ア家へ縁付いても惣次郎を大切に、姑へは孝行尽し、小前の者にも思われる位で、流石お武家さんの娘だけ違つたもんだ、婆様ア家は好い嫁え貰つたつて村の者が誰も褒めねえ者はなえ、惣次郎が無え後も僅かハア夫婦になつた許りでも、亭主と思えば敵イ打たねえばなんなえて、流石侍の娘は違つた者だと村の者も魂消て、なんとまア感心な心掛けだつて涙ア溢して噂アするだ、今に富五郎や安田一角の行方は関取が探してどんな事をしてても草ア分けて探し出して、敵イ打たせるつて是迄丹精したものを、お前がフツと行つてしめえば、跡は老人と子供で仕様がなえだ、ねえ困るから何うか居てくんよ」

隅「嫌ですねえ、江戸で生れた者がこんな処に這入つて、実に夫婦の情でいましたけれども、斯うなつて見ると寂しくつていられますぬもの、田舎といつても宿場と違つて本当に寂しくつて居られませんからねえ、何卒直に遣つて下さいな、此処に居たつて仕方が有りません、江戸へ行けば親類は武士でございますから、相当な処へ縁付けて貰います、私も未だそう取る年でもございませぬから、何時までもべんくとしてはいられませぬ、お前さんはどうせ先へ行く人、惣吉さんは兄弟といった処が元をいえば赤の他人でございま

すからねえ、考えて見ると行末ゆくすえの身が案じられますから」

母「じゃアどうあつても子供や年寄が難儀イぶつても構わなえで置いて行くゆくというかい、今迄敵かたきイ討ぶつとといったじやアなえか、今それに敵イ討たなえで縁切おきになつて行くとア訝おかしかんべい、敵イ討つとといった廉かじがなえというもんじやア無なえか」

隅「初はじまりは敵かたきを討うとうと思ひましたけれども、誰が敵だか分らぬじやアありませんか、善よく々々考えて見ますと、富五郎を押えて白状きつとさして、愈いよく々々一角が殺したと決つたら討とうというのだが、屹度きつと富五郎、一角ということも分らず、それも関取が附かいていればようございですが、関取もいず、して見れば敵が分つても女の細腕かえりうちでは敵に返かえり討うになりますからねえ、又それ程何方どなたにも此方こちら様に義理はありません、漸ようく嫁やかたづいて半年位なのとで、命を捨て、敵を討つという程の深い夫婦の間柄まがらでもありませんから、返討かえりにでもなつては馬鹿ばかくしゆうございしますから、敵かたき討うはお止やめにして江戸へ帰ります」

母「魂たまげ消たなアまア、それじやア何なんだア今迄敵かたきイ討ぶつと云つたことア水街道の麴屋もちやでお客きやくに世辞せじをいう様に、心にもなえ出鱈でたらまえをいつたのだな、世辞せじだな」

隅「いゝえ世辞せじではない、関取を頼たのみにして大丈夫と思つていましたが、関取もいなければ私は厭いやだもの、そんな返討かえりになるのは詰りませぬからねえ」

母「呆れたよまア、何と魂消たなア、汝がそんな心と知んなえで惣次郎が大い金え使つて、家い連れて来て、真実な女と思つて魅されたのが悔しいだ、そういう畜生の様な心なら只た今出て行けやい、縁切状を書えてくれるから」

隅「出て行かなくて、当り前だアね」

多「お隅さんまア待つておくんなさえ、お内儀さん貴方人が善いから直き腹ア立つがお隅さんはそんな人でなえ、私が知つてゐるから、さてお隅さん、此処なア母様ア江戸を見たこともなし、大生の八幡へも行ったことアなえという田舎氣質の母様だから、一々気に障る事アあるだろうが、実はこういう事があつて気色が悪いとか、あゝいう事をいわれはならぬという事があるなら、私かに話しておくんなさえ、まア旦那が彼アなつてからは力に思うのはお前様の外に誰もないのだ、惣吉様だつて彼の通り真実の姉様か母様アの様にして縋つてゐるし、敵の行方は八州へも頼んでえたから、今に関取が出て来れば手分えして富五郎を押えて敲いたら、大概敵は一角に違えねえと思つてくるくらいだから、機嫌の悪い事が有るなら私にそういつて、どうか機嫌直してください、ねえお隅さん」

隅「何をいうのだね、お前は何も気を揉むことはないやね、お母さんも呆れて出て行け

というから離縁状を貰っておくんなさい、私は仇あだうち打は出来ません、仕方なしに仇を打つと云ったので実は義理があるからさ、よくよく考えて見れば馬鹿げている、それ程深い夫婦でもありませぬからねえ」

多「それじゃアお隅さん、本当に旦那の敵い打つてえ考えもなえ、惣吉さんもお母様も置いて行くというのかア」

隅「左様さ」

多「魂消たね本当かア」

隅「嘘にこんなことがいえるものか、今日出て行くというのだよ」

多「呆れたなア、そんだら己えいうが」

隅「何をいうの」

七十

多「旦那が麴屋へ遊びに行つた時酌に出て、器量は好し、人柄に見えるが、何処どこの者だもんという、元は由よしある武士さむらいの娘で、これくで奉公しております、外の女みななア皆みな枕まくら付つきで

いる中に私は堅気で奉公をしようというんだが、どうも辛くつてならねえて涙こぼして云うだから、旦那かたがわいが憫然きんぜんだというので、金えくれたのが初まり、それから旦那かたがわいが貰もれえ切つてくれべいといった時、手を合せて、誠に然そうなれア浮びます助かりますと悦よろこんだじゃアなえか、それに又旦那様かたがわいア斬殺きりころされたというのも、早はえ話が一角という奴めえがお前めえに惚めえれていたのを此方こちへ嫁付かたづいたから、それを遺恨に思つて旦那かたがわいア殺したんだ、して見れアお前めえが殺したも同じ事じゃアなえか、それを弁わえなえでお母様つかさまや惣吉むねきちさんを置いて出れば、義理も何も知んねえだ、狸阿魔たぬきあまめ」

隅「何なんだ狸阿魔たぬきあまとは、失礼な事をお云いで無い、そりやア頼みもしましたから恩も義理もあるには違ちがひないけれども、それだけの勤めをして御祝義あたりまえを戴あいたので、当あた然りの事だアね、それから私を貰もい切つて遣はるから来い、諾はいといつて来ただけの事だから、旦那かたがわいが殺されたつて、敵を討つ程の義理もないじゃアないか、表向披露ひらめをした女房むすめというでもなし、いわば妾も同様だから、旦那かたがわいがいなけりやア帰りますよ」

多「此の阿魔あまどうも助けられなえ阿魔あまだ、打ぶつぞ、出るなら出る」

隅「なんだい手を振上げてどうする積りだい、怖い人だね、さ打ぶつなら打つて御覽、是程の傷が出来ても水街道の麴屋うつつやが打捨うちやつては置かないよ」

多「十二麴屋……金をくれた事アあるけど麴屋がどうした」

隅「此の間お寺へ行くといつて、路銀を借りようと思つて麴屋へ行つて話をして、江戸へ行けば親類もありますから、江戸へ行きたいと思ひますが、行くには少し身装みなりも拵こしらへて行きたいから、まア此こゝ処で、三年も奉公して行きますからお願ひ申しますといつて、証文の取極めをして、前ぜん金きんも借りて来てあるのだから、是から行つて麴屋で稼とぎ取りをして行こうと思うのだ、もう私の身体は麴屋の奉公人になつてゐるのだから、少しでも傷がが附けば麴屋で打捨うつておかないよ、願つて出たら濟いむまい、さ、打ぶつなら打ぶつて御覽」

多「呆あれたア、此こゝ奴いつ何んどうも、お内儀かみ様さん此こ間ねお寺えだへ墓はか参めりに行ゆく振ふいして麴屋へ行つて証文しやうぶんぶつて来たてえ、此この阿魔あまこりやア打ぶてねえ、え、内儀かみ様さま、義理も人情も、あ、これエ本ほん当たうに何なにうも打うてねえ阿魔あまだ」

母「やア、もう宜いいワイ、恩も義理も知んなえ様な畜生と知らずに、惣次郎だまが騙だまされて命いのちまで捨すてる事ことになつたなア何なんぞの約束やくそくだんばい、そんな心こゝろなら居ゐて貰もらつても駄目だまだから、さア此こ処けえ来こう、離縁りえん状書じやうしょえたから持もたしてやれ」

多「さア持もつてけ、此この阿魔あまア、これエ打うてねえ奴やつだ」

隅「持もつてかなくつてどうするものか」

とお隅は離縁状を開いて見まして、苦笑いをして懐へ入れ、

隅「有難い、ア、これでさっぱりした」

多「ア、さっぱりしたと云やアがる、どうも悪い口い敲きやアがるなア此の阿魔」

隅「なんだねえ、ぎやアくおいでない、長々御厄介様になりました、お寒さの時分ですから随分御機嫌よう」

多「えゝぐずく云わずにサツサと早く行かなえかい」

隅「行かなくつて何うするものか、縁の切れた処にいろつても居やアしない」

と悪口をいいながらつかくと台所へ出て来ますと、惣吉は取つて十歳、田舎育ちでも名主の息子でございますから、何処か人品が違います、可愛がつてくれたから真実の姉の様に思っておりますから、前へ廻つてピツタリ袂に縋つて、

惣「姉様ア、お母アが悪ければ己があやまるから居てくんなよ、多助があんなこと云つても、あれは誰がにという男だから、己があやまるから、姉さん居てくんなえ、困るからヨウ」

隅「何んだい、其方へお出でよ、うるさいからお出でよ、袂へ取ツつかまって仕ようが無いヨウ、其方へお出でツたらお出でよ」

多「惣吉さん、此方へお出でなさえ、今迄坊ちゃんを可愛がったなア、世辞で可愛がった狸阿魔だから、側へ行かないが好え」

母「惣吉や、此処え来う、幾ら縋つても皆世辞で可愛がったでえ、心にもない世辞イいつて汝がを可愛がる振りしたゞ、それでも子供心に優しくされりやア、真実姉と思つて己があやまるから居てくんろというだ、其処えらを考えたつて中々出て行かれる訳のものでアなえ、呆れた阿魔だ、惣吉此処え来い」

多「此方いお出でなさえ、坊ちゃん駄目だから」

隅「来いというから彼方へお出でよ、今までお前を可愛がったのもね、お母さんのいう通り抛なく兄弟の義理を結んだからお世辞に可愛がったので、皆本當に可愛がったのじゃアないよ、彼方へお出で、行つておくれ、行かないか」

多「あれ坊ちゃんを突き飛ばしやアがる、惣吉さんお出でなさえ…此奴ア…又打てねえ…さつくと行けい」

隅「行かなくつてどうするものか」

とお隅は土間へ下り、庭へ出まして門の榎の下に立つと、ピューピューという筑波風が身に染みます。

隅「あゝもう覚悟をして思い切つて愛想づかしを云わなけりやア為にならんと思つて彼れまで迄にいつて見たけれども、何も知らない惣吉が、私の片袖に縫つて、どうぞ姉さん私があやまるから居ておくれ、坊が困るといわれた時には、実はこれ〜と打ち明けて云おうかと思つたが、※じい云えばお母さんや惣吉の為にならんと思つて思い切つて、心にもない悪体を云つて出て来たが、是まで真実に親子の様に私に目を掛けておくんなすつた姑に對して実に濟まない、お母さん、其のかわり屹度、旦那様の仇を今年の中に捜し出して、本望を遂げた上でお詫びいたします、あゝ勿体ない、口が曲ります、御免なすつてください」

と手を合せ、耐え兼てお隅がわつと声の出るまでに泣いております。

多「まだ立つてやアがる、彼処に立つて悪体口をきいていやアがる、早く行け」

隅「大きな声をするな、手前の様な土百姓に用はないのだ、漸つとサバ〜した」と故意と口穢いことを云つて、是から麴屋へ来て亭主に此の話をすると、

亭「能く思い切つて云つた、よし、己がどこ迄も心得たから、心配するな、先ず手拭でも染めて、すぐ披露をするが好い、これ〜これ〜拵えて」

というので、手拭等を染めて、残らず雲助や馬方に配りました。

亭「今までとは違つてお隅は扱よんどころない訳が有つて客を取らなくつちやアならん、皆みんなと同じに、枕付で出るから方々へ触れてくれ」

という、此の評判がぼつとして、今までは堅い奉公人で、殊ことに名主の女房にもなつた者が枕付で出る、金さえ出せば自由になるといふので大層客がありまして、近在の名主や大だいじん尽が、せつせとお隅の処へ遊びに来ますけれども、中々お隅は枕を交かわしません。お隅の評判が大変になりますと、常陸にいる富五郎が、此の事を聞きまして、

富「しめた、金で自由になる枕付きで出れば、望みは十分だ」

と天命とはいいいながら、富五郎が浮うかく々々とお隅の処へ遊びに参るといふ、これから仇あだう打うちになりまするが、一寸一息。

七十一

お隅は霜月の八日から披ひろめ露を致しまして、客を取る様になりました。なれどもお隅は貞て心いしんな者でございますから、能いいように切り脱ぬけては客と一つ寝をする様なことは致しません、素もとより器量は好よし、様子は好よし、其の上世辞がありまするので、大して客がござり

ます。丁度十二月十六日ちらく雪の降る日に山倉富五郎が遣つて参りましたが、客が多いので何時まで待つてもお隅が来ません、其の内に追々と夜が更けて来ますが、お隅は外の客で来る事が出来ませぬから、代りの女が時々来ては酌をして参り、其の間には手酌で飲みましたから、余程酒の廻つている処へ、隔の襖を明けて這入つた人の扮装はじやがらつぽい縞の小袖にて、まア其の頃は御召縮緬が相場で、頭髮は達磨返しに、一寸した玉の附いた簪を挿し散斑の斑のきれた櫛を横の方へよけて挿しており、襟には濃くり白粉を付け、顔は薄化粧の処へ、酒の相手でほんのりと桜色になつております、帯がじだらくになりましたから白縮緬の湯巻がちらく見えるという、前とはすつぱり違つた拵えで、

隅 「富さん」

富 「イヤこれはどうも、どうも是は」

隅 「私やアね富さんじやないかと思つて、内々見世で斯うくいう人じやアないかというと然うだというから、早く来度いと思ふけれども、長ツ尻のお客でねえ、今やつと脱けて来たの、本当に能く来たね」

富 「これはどうも、甚だ何うも御無沙汰を、実は其の不慮の災難で御疑念を蒙りまし

た、それ故お宅へ参ることも出来ない、こんな詰らぬ事はないと存じて、存じながら御無沙汰を、只今まで重々御恩になりました貴方が、御離縁になつて、此方へ入らつしやつた事を聞いて尋ねて参りました、どうも妙でげすねえ、御様子がずうツと違いましたね」

隅「お前さんも知つてる通りべんく〜とあゝやつていたつても、先の見当がないし、そんならばといつて生涯樂に暮せるといつた処が、あんな百姓家で何にも見る処も聞く事もなし、只一生樂に暮すというばかりじやア仕様がなから、江戸へ行こうと思つて、江戸には親類が有つて大小を帶さす身の上だから、些ちつとも早く頼んで身を固め度たいと思つて離縁を頼むと、不人情者だつて腹を立つて、狐阿魔だの狸阿魔だのというから、忌々いまくしいから強情に無理無体に縁切状を取つて出て来ましたの、江戸へ行くにも、小遣がないもんだから、こんな真似をして身装みなりも拵こしらえたり、金の少しも持つて行き度いと思つて、遂ついに斯こんな処へ落ちたから笑つておくんなさい」

富「笑う処か誠にどうも、なに必ず私は買いに来たという訳ではありませんから、決して御立腹下さるな、そんな失敬の次第ではないが、何どういう訳で羽生村をお出遊でばしたかと存じて御様子を伺おうと思つて参つた処が、数すう献こん傾かけて大酪おおめ酏いてい」

隅「まア是から二人で樂々と一杯飲もうじやアないか、早く来て久振りで、昔話をした

いと思つても、長ツ尻のお客で滅多に帰らぬからいろく心配して、やつとお客を外して来たの、まあ嬉しいこと、大層お前若くなつたことね」

富「恐入ります、あなたの御様子が變つたには驚きましたねえどうも、前とはすっかり違いましたねえ」

隅「さお酌致しましょう」

富「これはどうも、まあ一寸一杯、左様ですか」

隅「私は大きな物でなくつちやア酔わないから、大きな物でほつと酔つて胸を晴したいの、いやな客の機嫌きげんを取つて、いやな気分だからねえ、富さん今夜は世話をやかせませよ」

富「大きな物で、え湯呑で上りますか、御酒は些ちつとも飲あがらなかつたんですが、血に交われば赤くなるとか、妙でげすなア、お酌を致しましょう、これは妙だ、どうも大きな物でぐうと上れるのは妙でげすな、是は恐入りましたな」

隅「私は酔つて富さんに我儘な事をいうけれども、富さんや聞いておくれな」

富「うゝんお隅さん必ず御疑念はお晴しなすつて、惣次郎さんを私が手引して殺させたというので花車の関取が私の背中をどやして、飯を吐はかせるというから、私は驚いて、あの

腕前では迎も叶わぬから一生懸命逃げたんだが、あのくらい苦しいことはありません、それ故御無沙汰になつて、あなたが枕附で客をお取りになるという事を聞いて、今日口を掛けたのは相済みませぬが、実はどういう訳かと存じて只御様子を伺いたいというので参つただけで」

隅「まあそんな事は好いじやアないか、今夜私は酔うよ」

富「お相手をいたしましょう」

隅「お相手も何もいるものか」

と大きな湯呑に一杯受けて息も吐かずにくつと飲んで、

隅「さア富さん」

富「私はもう数献…えお酌でげすか、置注ぎには驚きましたね…それだけは…妙なものでげすな、貴方はお酒はもとから上りましたか」

隅「なに旦那の側にいる時分には謹んで飲まなかつたんだが、此家へ来てから戴く様になりました」

富「へえ有難う、もう…お隅さんどうか御疑念をね…これだけはどうか…私は詰らん災難で、私が何ほ何でも、一角は知らない奴、逢つた事もない奴に何で此の如く、な、御

疑念が掛るか、私も元は大小を帯たいた者、此の儘には捨置けぬと、余程争あついしましたが、関取むやみが無暗ぶに打つというから、あの力で打たれては堪らぬから逃げると云う訳で、実に手前詰らぬ災難でげて……」

隅「好いいじや無いか、私に何も心配はありやアしないやね、羽生に居る時分には、悔しい、敵かたきうち打をするというから私も連れて然そういったけれども、もう彼処あそこを出てしまやア、何なんにも義理はないから私に心配はいらぬが、只聞きたいのは富さん忘れもしない羽生に居る時、お前が酔つて帰つたことがあつたらう、其の時お前が旦那のいな所ところで私の手を掴まえて、江戸へ連れて行つて女房にして遣らう、うんといえば私が身の立つようにするが、江戸へ一緒に行つて呉れぬかと云つておくれの事があつたねえ、あれは本当の心から出て云つたのか、私が名主の女房になつたから、お世辞に云つたのか聞きたいねえ」

七十二

富「これは恐れ入りました、こりやア何どうも御返答に差支さしつかえる……こりやア恐入つたね、富五郎困りましたね……おやく／＼またいっぱいになつた、貴方そばから置き注つぎ

はいけません……余程よほど酔つて居るからもう御免なさい……あれはお隅さん、貴方が恩人の内宝ないほうになつてゐるから、食客いそろうの身として、酔つたまぎれで、女房になれ……江戸へ連れて行くといつたのは実に濟まない……濟まないが、心には云われん様な者で、富五郎深く貴方を胸に思つてゐるから酔つた紛れに口に出たので、どうも実に御無礼を致しました、どうか平ひらに御免を……」

隅「あやまらなくつても宜いいやアないか、本当にお前が心に思つてくれるといえば嘘にも嬉しいよ、富さん、私もね、何時いつまでもこんな姿なりをしていたくない……江戸へ知れては外聞わいぶんが悪いからねえ……江戸へ行くつたつて親類は絶えて音信いんしんがないし、真実ほんとうの兄弟もないから何なんだか心細くつて、それには男でなければ力にならぬが、こういう汚けがれた身体になつたから、今更いまいけない、いけないけれどもお前がねえ、私の様な者でも連れて行つて女房にすると云つておくれなら、私も親類へ行つて、この人も元はこれ〴〵のお侍でございましたが、運が悪くつてこういう訳になつたからといって頼むにも、二人ながら武士の家に生れた者だから、親類へも話しが仕好いい、よう富さん、本当にお前、私がこういう処へ這入つたからいけないかえ……前にいつたことは嘘かえ」

富「こりやアなんとも恐れ入つたね……旨いことを仰しやるなア……又一またぱいになつた、

そう注いじやあいけない……えゝ……本当にそんな事をする氣遣いは無いで……どうか御疑念の処は……私は困るよ……どうも理不尽に私を疑つて、脊骨をどやすというから、驚いて、言訳する間は無いから逃げたのだが、神かけて富五郎そんな事はないので……」

隅「そんな心配は無いじやアないか、何だねえ、お前、私がこんな身の上になつていても、敵とか何とか云つて騒ぐと思つてるのかえ、私は表向き披露をした訳でもなし、敵を討つという程な深い夫婦でもない、それ程何も義理はないと思うから、悪体を吐いて出たのだから」

富「そりやア義理はありましようが、私はあなたが、あんな愚痴婆の機嫌を、よく取つてお在でなさると思つていました。あなたがこれを出るのは本当でげす、御尤もでげすねえ」

隅「だからさ、お前がいやなら仕方がないけれども、本当なら、お前の為にどんな苦勞をしても、いやな客を取つても、張合があると思つてゐるのさ、それには、判人がないといけないから、お前が判人になつて、そうして私が稼いだのをお前に預けるから、私を江戸へ連れて行つておくれな」

富「本当ですか」

隅「あら本当かつて、私が嘘をいうものかね、悪らしいよ」

富「あゝ痛い、捻つねつてはいけない、そういう……又充いっばい溢あふになつてしまった……いけない

いねえ……だが、お隅さん、本当に御疑念はお晴らしください、富五郎迷惑至極だてねえ」

隅「どうも、うるさいよ、未だ何処まどこまで疑うたぐるのだね、そんなに疑るなら証拠を出して見せようじゃないか、そら、是が羽生村から取つて来た離縁状と、是はお客に貰つた三十両あるのだよ、お前が真実女房に持つてくれる気なら、此のお金と離縁状を預けるがお前も確たしかな証拠を見せておくれよ、富さん」

富「本当ですか、本当なら私だつて、親類もあるから、お前さんと二人で行つて、話しをすればすぐだね、そりやア、小さくも御家人の株ぐらいは買つてくれるだろう、お隅さん本当なら、生涯嘘はつかないねえ」

隅「まあ嬉しいじやアないか、富さん本当かい」

富「そりやア本当」

隅「有難いねえ、じやア証拠を見せておくれな」

富「別に証拠はない」

隅「だから悪にくらしいよ」

富「悪らしいってあれば出すけどもないもの、じゃア外に仕方がないから斯うしよう、そう話がきまれば、此処こゝに永く奉公さして置きたくないからね、どこまでも金の才覚をして早く江戸へ行こう、富五郎浪人はしていても、百や二百の金は直すぐに出来るから」

隅「そう、そんなに入らないが、路銀と土産ぐらい買つて行きたいねえ」

富「こう仕よう」

隅「だつて急にお前に苦勞させては濟まないから、此処で私が二年も稼いでから」

富「なに宜いい、いゝから、斯こうしよう、一角を騙だまして百兩取ろう」

隅「おや一角さんは何処どこにいるの」

富「うん、まあいゝや、お隅さん本当に御疑念の処は」

隅「又そんなことを、本当にお前は悪らしいよ、じゃアお前は一角となれあつて殺したことがあるから、私がどこまでも仇を狙かたきつてしていると疑るのだろう、そんな疑りがあつて、私を女房にしようというのは余程よっぽど分らない、恐い人だね、もう止しましょう、書付かきつけまで見せて、生涯身を任して力になろうと思う人がそう疑つてはお金も書付も渡されなから。止しにしましょう」

富「そういう訳ではない、決して疑る訳ではない、決して疑る訳では無いがね」

隅「だからさ疑る心が無ければ、一角さんは何処どこにいと云ったって好いじゃないか、どうして騙だまして金を取るのか、それをお云いよ」

富「うーん、それは一角がお前に惚れているのだから」

隅「そうかい」

富「前から惚れてる、それだから一角の処へ行つて、お前がこうくでございますから貴方御新造にしてお遣りなさい、就つては内証ないしょうに百兩借金がありますから、之を払つて遣れば直すぐに此処ここへ来られる訳だ、出して下さいといえは是非金を出す：いゝえ出るに極こつているのだから、出したら借金を払つてお前と二人で、ねえ、江戸へ行こう、こいつが宜いいじゃないか」

隅「どうも嬉しいことねえ、一角さんは何処どこにいるの」

富「うーん、それ」

隅「おかしいねえ、もう夫婦になつてお前は亭主だよ、添そつてしまつて、今夜一晩でも枕を交せば大事な生涯身を任せる亭主だもの、前の亭主の敵かたきといつて、刃やいばが向けられますか、私も武士の娘、決して嘘はつきませぬよ」

七十三

富「こりやア驚いた、流石は武士の御息女、嬉しいな…又充溢になつてしまつた…こりやア有難い、それじゃア云おうねえ、実は私は、お前にぞつこん惚れていたが、惣次郎があつては仕様がな、邪魔になるといつても、富五郎の手に負いない、所が幸い安田一角がお前に惚れているから、一角をおいやつて弘行寺の裏林で殺させて置いて、顔に傷を拵えて家へ駈込んだが、あの通り花車が感付きやアがつて、打つというから、此方は殺されては堪らぬから、逃げてしまつた、全く一角が殺しは殺したんだが、実は私がおいやつて遣らしたのだ」

隅「私もそう思つてたけれどもね、羽生にいる時は義理だから敵といつていたけれども、こう出してしまうば義理も糸瓜もない他人だアね、あんな窮屈な処にいるのはいやだと思つて出たんだが、富さんこうなるのは深い縁だねえ、どうしても夫婦になる深い約束だよ」

富「是は妙なもんだね、不思議なもので、羽生村にいる時から私が真に惚れ、ばこそ色々な策をして、惣次郎を討せたのも皆お前故だねえ」

隅「一角さんは何処にいるの」

富「一昨日おとといの晩三人で来て前の家うちは策で売らしてしまつたから、笠阿弥かさあみ陀堂だどうの横手に交こ遊庵うゆうあんという庵室あんしつがありましよう、二間室ふたままがあつて、庭ちつも些ちつとあり、林はやしの中で人に知れないからというので其処そこを借りていて、今夜私わたしに様子を見て来いというので、私が来たのだから、こうくといえ、えゝというので百両出す、なに大丈夫だ、其れで借金を片付けて行つて了しまやア彼奴あいつは何なんともいえない、人を殺した事を知つて居るから何ともいえずやアしないから、烟けふに巻かれてしまわア、追掛おつかけようといつても彼奴江戸へ出られる奴でないから大丈夫」

隅「そう、本当に嬉しいねえ、真底お前の了簡りょうかんが知れたよ」

富「これ程お前を思つてるのに其れを疑うたがはるといふことではない、誠に詰つまらぬこと…」

隅「此処ここで寝るといけなから彼方あつちへおいでよ、彼方に床とこが取つてあるから、さ此のお金と書付を」

富「やアそんなもの」

隅「落おつことすといけなからお出し」

と、金と書付を引ひたくつて、無暗むやみに手を引いて、細廊下の処とこを連れて行くと、六畳ばかりの小間こまがありました、其処そこに床とこがちやんと敷いてある。

隅「さ、お寝と云つたらお寝、あら俯伏しちやいけないから仰向けにお成り」と仰向に寝かし、枕をさして、

隅「さ、寒いから夜具これを」

富「あゝ有難い、こつちイ這入つて寝なよ」

隅「今寝るが、寒いから搔卷かいまきを」

富「好いいよ、雪は何どうしたえ」

隅「なに雪は降っているよ、夫婦の固めに雪が降るのは縁が深いとかいう事があるねえ」

富「うーん、そりやア深雪みゆきというのだ」

隅「富さん、私という事があるよ」

富「どう」

隅「あら顔を見られると恥かしいから被かぶつておいでよ」

とお隅は搔卷を富五郎の目の上まで被せて其の上へ乗りました。

隅「私は馬乗りに乗るわ」

富「何をするのだ、息が出なくって苦しい、何をする、切ないよ」

隅「本当に富さん不思議な縁だね」

といいながら隠してあつたヒ首あいくちを抜いて、

隅「惣次郎を殺したとは感付いていたけども、お前が手引で…一角の隠れ家まで…こういう事になるといふのは神仏のお引合せだね」

富「実に神の結ぶ縁だねえ」

隅「斯こういふ事があるうと思つて、私は此の上ない辛い思いをして、恩ある姑しゆうとや義理ある弟に愛想あいそづか尽しを云つて出たのも全くお前を引寄せる為、亭主の敵かたきばちあた 当りの富五郎覺悟しろ、亭主の敵」

と富五郎の咽喉のどへ突込つっこむ。

富「うーん」

というのを突込んだなり呑口を明ける様にぐツぐツと抉えぐると、天命とはいいなながら富五郎はばたく苦しみまして、其の儘うーんと呼吸いきは絶えました様子。お隅はほつと息を吐つき、ヒ首の血のりを拭ぬぐつて鞆たもとに納め、

隅「南無阿弥陀仏〜」

と念仏を唱え、惣次郎の戒名を唱えて回向えこうを致します。お隅は沈着おちついた女で、直すぐに硯すざり箱ばこを取出し、事細かに二通の書置したづを認めて、一通は花車へ、一通は羽生村の惣吉親子の

者へ、実は旦那の仇あだを討ち度たい許ばかりで、心にもない愛想尽しを申して家うちを出て、麴屋へ参つて恥かしい身の上になりましたが、幸いに富五郎が来て、これくの訳と残らず自分の口から申して、一角の隠家かくれがもこれくと知れましたから、女ながらも富五郎は首尾能く打留うちとめたから、今夜直ぐに一角の隠家へ踏込んで恨みを晴し、本望ほんもうを遂とげる積り、なれども女の細腕こゝろ、若もし返り討になる様な事があつたならば、惣吉が成人の上、関取に助太刀を頼んで旦那と私の恨うらみを晴らして下さい、敵かたきは一角に相違ない事は富五郎の白状きまで定りましたという、関取と母親の方へ二通の書置を残して傍そばに掛っている湯沸しの湯を呑み、懐へ匕首はだしを隠して庭の方の雨戸を明けると、雪は小降になつた様でもふツツと吹っかける中を跣足はだしで駈出して、交遊庵という一角の隠家へ踏込みますというお隅あだうち打のお話を次回に。

七十四

申し続きまする累ヶ淵のお話で、お隅が交遊庵という庵室に隠れている一角の処へ斬り込みますという、女ながらもお隅は一生懸命でござりまして、雪の降る中を傘もなしに

手拭を冠かぶりまして跣足はだしで駈けて参つて、笠阿弥陀堂から右に切れると左右は雑木山でござります、此の山の間を段々と爪先上あがりに登つて参りますと、裏手は杉檜などの樹木がこう／＼と生い茂つて居ります処へ、門の入口の処に交遊庵の三字を題しました額が掛つております。門の締りは嚴重になつておりまするなれども、家へは近ちかうござります、何処どこか外ほかから這入口はいりぐちはなかるうかと横手に廻つて見ても外に入口いりぐちはない様子、暫しばらく門の処に立つて内の様子を窺うかがつてみると、丁度一角が寝酒を始めて、貞藏ていざうという内弟子を相手にぐび／＼と遣やりましたから、門弟も大分酩酊致しております様子。

隅「御免なさいまし、御免なさいまし、一寸此所こゝを明けて下さいまし、あの、先生は此方ちうにいらつしやいますか」

というと戸締りは嚴重にしてあり、近いといつても門から家までは余程隔へだつて居りますが、雪の夜よで肅然しんとして居るから、遙はるかに聞える女の声。

安「貞藏／＼誰たれか門を叩いて居る様子じや」

貞「いや大分雪が降つて参りました、私先程台所を明けたらぷつと吹込みました、どうして中々余程の雪になりましたから、此の夜やちゆうこと中殊せつちゆうに雪せつちゆう中に誰たれも参る筈はございませぬ」

安「でも、それ門を叩く様子じゃ」

貞「いゝえ大丈夫」

安「いや左様でない…それそれ見ろ…あの通り…それ叩くだろう」

貞「へえ成程えゝ見て参りましょう、えゝ少々御免遊ばして、大層酩酊致しました、ひよろゝ致して歩けませぬ、えゝ少々…なに誰だだれい、誰か門を叩くかい…誰だだれい」

隅「はい、あの安田一角先生は此方こちらにいらつしやいますか」

貞「安田と、安田先生ということを知つて来たのは誰だ」

隅「はい私は麴屋の隅でございますが、一寸先生にお目に掛り度たいと存じまして、わざゝ雪の降る中を参りましたが、一寸此処こゝをお明け遊ばして下さいませんか」

貞「あ、少々控えていな」

とよろよろしながら一角の前へ来て、

貞「へえ先生」

安「来たのは誰だ」

貞「麴屋のお隅が、先生にお目に掛つてお話し申し度い事があつて、雪の降る中を態わざ々参つたといひます」

安「隅が来たか、はて、うっかり明けるな、え、彼は此の一角を予て敵と附狙うことは風説にも聞いていたが、全く左様と見える、うっかり明けて、角力取などを連れてずかく、這入られては困るから能く気を附ける、え、全く一人か、一人なら入れたつても好いが」

貞「これ、お隅、何かえ、お前誰か同伴がありますかい、大勢連れてお出でかい、角力取は来ましたのかい」

隅「い、え私一人でございませぬ、一寸此処を明けて下さいませんか、お前さん貞藏さんじゃありませんか」

貞「なに貞藏、己の名を知つてるな、うん成程知つてる訳だ、私が水街道へ先生のお供にいった事があるから、今明けるよ、妙なもんだな、おう好い塩梅にこれ雪が上つて来た、大層積つたなア、お、お、ふツ、足の甲までずかく踏み込む様だ、待ちな今明けるぞ、待ちな、門がかつて締りが嚴重にしてあるから、や、そら、おや一人で傘なしかい」

隅「はい少しは降つておりましたが、気が急きましたから、跣足で参りました」
 貞「お、私はやつと此処まで雪を涉つて来たのだが、能く夜中に渡しの船が出たねえ」

隅「はい、あの、船頭は馴染でございますから、頼んで渡して貰って、漸やっとのことで参りました」

貞「それはえらい、さア此方こつちへ、先生たつた一人で渡を渡って跣足で参つたと云うので」
安「それは思い掛けない、なに傘なしで、それはそれは、雪中といい、どうも夜中とい、一人でえらいのう、誠にどうも、さア此方こつちへ」

隅「先生誠に暫くお目に掛りませんで」

安「いや誠にこれは、うーん己は無沙汰をしております、暫く常陸へ参つた処あちが、彼方あちで些ちつと門弟も出来たから、近郷の名主庄屋などへ出稽古を致して、久しく彼方あちにいて、今度又此方こちらへ来た処あちが、先に住すまった家は人に譲つたから、まア家の出来るまで、当期此の庵室におる積りで、だが手前能く尋ねて来たねえ」

隅「誠にどうも御無沙汰を致しまして」

安「此の夜中雪の降る中を踏分けて何どうして来た」

七十五

隅「あの今日富五郎が来ましてね、何か先生に頼まれた事があると云って、私の処へ客
 になって来まして、お酒に酔つて何だか種々なんくな事を云いますの、けれども其の様子がさ
 つぱり分りませんから、其の事に付いて先生にお目に掛らなければ様子が分りませんから」
 安「それはどうも、富五郎が行つたかい、貞藏、富五郎が行つたつて」

貞「だから私が先生に申上げて置きました、彼奴あいつは誠にあゝいう処ばかり遊びに参るの
 が好きでげす、全体道楽者でげすからなア、彼奴余よつぽど程婦人好ずきでげすよ」

安「で、富五郎が往つて何うどいう話し振の、まア一杯飲め」

隅「有難うございます、まアお酌を」

安「イヤ一杯飲め」

隅「左様でございますか、貞藏さん、お酌を、恐れ入ります」

貞「いや久し振りでお酌をする、私わしの名を心得ているから妙でげすな、久しい前に一度
 先生のお供を致しましたが、其の時逢つた一度で私の名まで覚えていられるというのは、商売
 柄は又別なものでげす、お隅さん相変らず美しゆうございますな」

安「これお隅、手前名主の手を切つて麴屋の稼ぎ女になつたとか、枕附で出るとかいう
 噂があつたが嘘だろうな」

隅「いゝ嘘ではございません、誠にお恥かしゆうございますけれどもべんぐとあゝ遣つてもいられませんから、種々考えました処が、江戸には親類もありますから、何卒江戸へ参り度いと思ひまして、故郷が懐かしいまゝ無理に離縁を取つて出ましたが、手振り編笠、姑が腹を立つて追出すくらいでございますから、何一つもくれませぬ、それ故少しは身形も拵えたり、江戸へ行くには土産でも持つて行かなければなりません、それには普通の奉公では埒が明きませんから、いやゝながら先生お恥かしい事になりました」

安「才、左様か、じゃア自ら稼いで苦しみ、金を貯めてなにかい身形を拵えて江戸へ行くこうと云う訳か、どうも能く離縁が出たのう」

隅「それが向で出さないのを此方から強情に取りましたので、先生誠に久し振でございませぬえ」

安「ウンそれは妙だなア」

貞「これは先生妙でげすな、貴方の方で呼び遊ばさぬのにお隅さんが此の雪の降る中を尋ねて来るなんて、自然にどうも貴方の：実に感服でげすなア」

安「なにそう云う訳でもなからう、何か是には訳があつて来たんだらう、なにかい富五郎がどういふ事を云つたい」

隅「はい、富さんの云うには、べん／＼とこんなア卑しい奉公をするよりも、一角先生の御新造にならないかといえますから、馬鹿なことをお云いでない、一旦名主の家へ縁付いたのだから、披露はしないでも、今度行けば再縁をする訳じやアないか、それだから先生は決して御新造になさる訳はない、妾にすると仰しやればまだしもの事だけれども、御新造にというのは訝しいじやアないかという、いゝえ全くお前さえよければ先生は御新造になさる思召しがあるのだから、お前がたつて：頼みたいと思うなら、骨を折つて宜いように執成すから了簡を決めろといえますから、それは誠に思掛ない有難いこと、私のような者を先生が仮令妾にでもなすつて下さるなら、私は本当に浮ぶ訳で、べん／＼とこんな処にいたくないから、屹度執成しておくれかという、お酒が始まって、すると彼人の癖で直に酔つてしまつて、まア馬鹿らしいじやアありませんか、先生に取持つ代りにおれの云う事を聞けといつて口説き始めたんでございますよ」

安「こりア怪からん奴だ、どうだい貞藏」

貞「でげすから彼は先生いけませぬ、先生は彼奴を御鼻肩になさいますが、全体よくない奴で、そういう了簡違いな奴でげすからなア、一体先生が余り鼻肩になさり過ぎると思つていましたが、どうも御新造に取持つとうという者、いわば仲人が一旦自分のいう事を

きかして、それから縁かたづ付けると、そんな事がありましたでしょうか、だから彼あれはもう、お置きなさん方が宜よい、お為になりませぬからなア、彼奴あいつが来てから私は彼奴あいつに使つかわれるような訳で、先生もう彼奴あいつはお止し遊あそばした方がようございますよ」

安「お隅、それからどうしたい」

隅「それで、私が馬鹿な事をおいいでないと云うと、そんな詰つらんことを云わんでも宜いいじゃアないかといえますから、宜いいじゃアないかつて、お前さんのいう事を聞いた上で先生の処ところへ妾めかけに行ゆけるか行ゆけないか考かんえて御ご覧、富とみさん酔ようにも程ほどがある、冗談冗談は大概たいていにおしよと云いつて居ゐりましたら、終しまには甚ひどく酔よつて来きまして、短みづかかいのを抜ぬいて、いう事を聞きかなければ是これだと嚇おどし始めはじめましたから、私も勃むっ然然として、大概たいていにおしなさい、お前は腕うでずくで強ごういん淫淫をする積しほりか、馬鹿ばかな事をする怖こい人ひとだ、いやだよと云いつて行ゆこうとすると、そうはやらぬと私の裾すそを押おえて離はなさない処ところへ、お兼かねさんやお力りきさんが出て参まりまして取と押おえる拍は子こに、お兼かねさんが指ゆびに怪我けがをするやら、金かねどんも親指おやゆびに怪我けがをしまして、漸ようやくの事ことで宥なだめて刃物やいばを抉もぎ取とつたんでございますが、全く先生の処ところから来きたのなら、明日あすの朝あさ先生せんせいが入いらつしやるであろう、其の上その上じやう人ひとも酒さけが醒さめるだろうから、まア縛しばつて置おくが好いいというので縛しばつて置おきました」

七十六

安「こりやアどうも怪しからん、白刃を振つておどすなぞとは、えゝ貞藏」

貞「どうも怪しからん、彼奴はいけません、彼奴一体そういう質の奴でげす、何うも怪しからん、抜刀で口説くなんて、実に詰らん訳でげすなア、だから先生もう彼奴はお止しなすつて家に置かぬ方が宜しい、何うもそういう……」

安「お隅、貴様はなにか主人に話をして来たか」

隅「はい何ともいいませんけれども、お力さんに頼んで置きました、何しろ先生の御様子をお聞かなければ分らない、誠に恥かしいことでございますけれども、先生の処へ行つて御様子を聞いて、そうして先生に宥めて戴き度いと思つて出て参りました」

安「左様か、雪の夜ではあるし、是から行くといつても大變だがあんな馬鹿にからかわないが宜いよ」

隅「なにもう明日でも宜うございますけれども、私は是から一人で帰るのは辛くつて、参る時は一生懸命で来ましたが、帰るとなると怖くつていけません、どうかお邪魔様で

も今夜一晚泊めて下さる訳にはいきましますまいか」

安「うん、それは宜い、泊つて往くなら、なア貞藏」

貞「是は先生御恐悦でげすなア、お隅さんの方から泊つて宜いかと云うのは、こりやア自然のお授かりでげすな」

安「なにお授かりな事があるものか、のうお隅、だが貴様には何うも分らぬことが一つある、というのは惣次郎の女房になつて何ういう間違いかは知らんけれども、安田一角が惣次郎を殺害致したというので、私を夫の敵と狙つて、花車重吉を頼んで何処までも討たんければならぬと云つて、一頻り私を狙つて居るといふ事を慥に人を以て聞いたそう云う手前が心で居たものが、又た此処に来て、一角の女房になろうとは些と受取れぬじやないか、のう貞藏」

隅「いゝえ、ねえ貞藏さん考えて御覧、羽生村に居るうちは義理だから敵を討つとか何とか云いましたけれども、なにもねえ元々私が麴屋に奉公をして居て、あの時分枕付ではありませんが、彼の名主に受出されて行つて、妾同様表向の披露をした訳でもなし、ほんの半年か一年亭主にしただけでございますから、母親の前や村の人や角力取の前で義理を立て、敵を討つといひは云いましたが、よくよく考えてみた処が、貴方が屹度殺した

ということが分りもしない、こんな的あてもないのに敵を討つと云ったつても仕方がない訳だから、寧いっそ敵かたきうち討やという事は止めてしまおう、それにしては何時いつまでもべんくとしてもらえませんか、思い切つて暇を貰つて出たのでございますから、もう今になれば些ちつともそんな心は有りやアしません、ねえ、貞藏さん」

貞「成程こ是りやア本當でげしよう、先生は人を殺す様な方でないし、只お前さんへ執心が有つた処から角力取と喧嘩、ありやア一体角力の方がいけないよ、変に力が有つてねえ、あれだけは先生ひと甚やく野暮ぼになりますな」

安「詰らん疑念を受けて飛んだ災難と思つたが、此方こつちに居ては面倒だから暫く常陸へ行つて居たんだが、手前全くか」

隅「本當でございますから疑りを晴はらして一献ひとつ戴きましよう」

安「手前飲めるか」

隅「はい、何なんだか寒くつていけません、跣足はだしで雪の中を駆けて来たもんですから、足が氷の様になつていますもの」

安「うーん中々飲める様になつたのう」

隅「勤つとめをして居て仕方なしに相手をするので上りましたよ」

安「ふん妙だのう貞藏」

貞「是はくお隅さん貴方御酒を飲あがりますか、お酌を致しましょう」

隅「はい有難うございます」

と大杯たいはいに受けたのをグイと飲んで、

隅「貴方何なんだか真面目でいけないから、私がお酌を致しましょう」

と横目でじつと一角の顔を見ながら酌をする。一角は素もとより惚れている女が酌をしてくれるから快く大杯で二三杯傾けると、下地の有った処でござりますからグツスリ酔えいが廻つて来ます、貞藏も大變酩酊致しまして、

貞「私わたくしもう大層戴きました、お隅さん私わたしは御免を蒙こうむりまして、長く斯こういう処にいるべきものでありませんから、左様なら先生御機嫌よう」

隅「まあお待ちなさいよ、先生がお酔いなすったから、おやく次の方に床が取つてありますねえ」

貞「いゝえ私床を取つて置いて、先生がぐつと召上つてしまふと直すぐにお寝やすみという都合にして置きました、えゝ誠に有難う」

隅「じゃア先生一寸貞藏さんを寝かして来ますからお床の中に居てねえ、寝てしまつて

はいけませんよ」

安「なに貞藏などは棄て、置きよ」

隅「いゝえ、そうで有りません、ひよつとして貴方が私の様な者でも娶よんで下さいますと、禍わざわいは下からといって、あゝいう人に胡麻を摺たまされると堪たまりませんからねえ」

安「なに心配せんでも宜よい、じやア己こ此こ処こに、なに寝やあせんよ、お、酔よつた、貞藏隅が送つて遣るとよ」

貞「いや是は恐れ入ります、じやア先生御機嫌よう、お隅さんようございます」

隅「いゝえ、よくないよ、そらく危あない、何ど処こへ、彼方あちがお台だ所こかえ」

と躡よる貞藏の手を取つて台所だの折廻おつた処の杉戸を明けると、三畳の部屋ががござりま
す。

隅「さ、貞藏さん此こ処こかえ、おやゝお床が展のべてあるの」

貞「いゝえ私の床は参つてから敷しつぱなしで、いつも上げたことはないから、ずっと遣るとこう潜り込むので、へえ有難う」

隅「恐ろしい堅かつた様な夜具よですねえ」

貞「えゝなに薄うつぺらでげすが、此の上へ布団を掛けます、寒さけりやア富五郎がが有り

ますから其れを掛けてもいいので、へえ有難う」

隅「さア仰向におなり、よく掛けて上げるから」

貞「是は恐れ入ります、へえ恐れ入ります、御新造に掛けて載いて勿体至極もない」

隅「さ、掛けますよ、寒いから額まですつかり掛けますよ、そう見たり何かすると間が

悪いわね、さ、襟の処を」

貞「あゝ有難う」

隅「どうも重たいねえ」

貞「へえ有難う暖かです」

隅「何だか寒そうなこと、何か重い物を裾の方に押付けると暖かいから」

というので台所を捜すと醤油樽がある、丁度昨日取ったばかりの重いやつを提げて来て

裾の方に載せ、沢庵石と石の七輪を搔卷の袖に載せると、

貞「アゝ有難う、大層暖かです、些と重たいくらいです」

といったが是は成程重たい訳、石の七輪や沢庵石や醤油樽が載っておりますから、当人は押付けられる様な心持。

貞「へえ有難う、暖かです」

といたたぎりぐうぐうと好い心持に寝付きました。

七十七

お隅はそつと奥の様子を見ると、一角が躑けながら、四畳半の床の上に横になった様子でございますから、そつと中仕切の襖を閉つて、台所の杉戸を締め、男部屋の杉戸を静に閉つて懐中から出して抜いたのは富五郎を殺害して血に染まった儘の匕首、此の貞藏があつては敵討の妨げをする一人だから、先ず貞藏から片付けようというので、仰向に寝て居る貞藏の口の処へどんと腰を掛けながら、力任せに咽喉を突きましたから、

貞「ワーツ」

といったが搔卷と布団が掛つて居りますから、苦む声が口籠つて外へ漏れませぬ。一ひ抉り抉ると足をばた／＼とやつたきり貞藏は呼吸が絶えました。お隅はほつと息を吐いて搔卷の袖で匕首の血を拭つて鞘に納め、そつと杉戸を明けて台所へ来て、柄杓で水をぐつと呑み、はッはッという息づかい、もう是れで二人の人を殺しましたなれども、夫の仇を討とうという一心でござりますから、顔色の変つたのを見せまいと、一角の寢床

へそつと来て、顔を横に致しまして、

隅「先生くもうお寝やすみなすったか」

安「うーん貞藏は寝たか」

隅「はい能く寝ました、大層酔いましてねえ」

安「酔っても宜いいから、あんな奴に構うな、寝ろよ」

隅「寝ろつて夜具がありません、私は食いそ客ろうでございますから此こ処いに坐まっています」

安「そんな詰らぬ遠慮にはおよばぬ、全く疑念が晴れて、己の女房になる気なら真実可愛ついと思うから、手前に樂をさして真実つ尽くすぞ」

隅「誠に有難いこと、勿体ないけれども、そんなら此の搔卷の袖の方から少ば許かり這入りまして」

安「いや少し許りでなくつて、たとと這入れ」

隅「それじゃア御免なさいまし」

と夜着よぎの袖をはねて、懐中から出した匕首はきを布団の下に挿はんで、足で踏んで鞘を払いながら、

隅「じゃア御免遊ばせ、横になりますから」

安「さア這入れ」

と一角が夜着の袖を自ら揚げる処を、

隅「亭主の敵」

と死物狂いに突掛るといふ。お話二つに別れまして麴屋では更に斯様な事は存じません。曉方あけがたになつてお隅つつかがいないい処から家うちじゆう中ちゆう搜しても居ない、六畳の小間が血だらけになつているから搔卷はねを撥ると、富五郎が非業な死に様よう、傍わきの処に書置が二通あつて、これにお隅の名が書いてあるから、亭主は驚きまして、直すくに是を開いて読んで見ると、富五郎の白状に依よつて夫の敵は一角と定まり、女ながらも富五郎は容易たやすく仕止めたから、直に一角の隠れ家交遊庵へ踏ふんご込んで、首尾よく往いけば立帰つて参りますが、女の細腕も、若し返り討になりました時は、羽生村へ話をして此の書置を遣り、又関取へもお便りなすつて、惣吉成人のちの後関取を頼んで旦那と私の敵を討たして下さい、証拠は富五郎の白状に依つて手引をした者は富五郎、斬つた者は一角と定まりました、夫それゆえ故に今晚交遊庵に忍び入ります、永々ながくお世話様になりました、有難い。という重ね／＼の礼まで書残してあるから、それツというので、麴屋の亭主は大勢の人を頼んで恐々こわ／＼ながら交遊庵に参つたのは丁度夜の曉方あけがた、参つて見ると戸が半ば明いて居ります、何事か分りません、小座敷には酒肴さけな

が散かつて居り、四畳半の部屋に来て見ると情ない哉お隅は返り討に逢つて非業な死に様。

主「あゝ気の毒なこと、可哀そうに、でも女一人で往くのは実に不覺であつた」

もう今更どうも仕方が無いが一角はというと、一角は此処を遁れて行方知れず二畳の部屋を明けて見ると沢庵石だの、醤油樽だの七輪の載せてある夜具の下に死んで居る者が一人ござりますから、是から直に麴屋から慥に証拠があつて敵討をしようと思つて返討に成つたという事を訴えになり、直にお隅の書置を羽生村へ持たせて遣りました時には、母も惣吉も多助も

「ア、左様とは知らずに犬畜生の様な恩知らずの女と悪んだのは悪かつた、あゝいう愛想尽しをいつたのも、全く敵が討ちたいばかりでお隅が家を出たのであつたか、憫然なことをしたが、お隅が心配して命を棄てたばかりに敵は一角と定まり先ず富五郎

は討止めたが、一角の為に返り討になつて死んだといえれば悪いは一角、早く討ち度い」

と思ひますが、何しろ年を取つた母と子供の惣吉許りでございますから、関取を頼んでと、もう名主役も勤まりませんから、作右衛門という人に名主役を預けて置き、花車重吉が上総の東金の角力に往つたということを聞きましたから、直に其所に行こうというので旅立の支度を致し、永く羽生村の名主を致して居りましたから金は随分ござります、

これを胴巻に入れたり、襦袢じゆばんの襟に縫附けたり、種々いろくに致して旅の用意を致します、其の内に荷拵にこしらえが出来ると、これを作右衛門の蔵へ運んで預けると云う訳で、只今まで名主を勤めて盛んであつたのが、ぽったり火の消えた様でござります。

七十八

母「多助や」

多「へエ」

母「作右衛門が処とけへ行つて来たかい」

多「へエ行つて参めえりました、蔵の方にや預かる者があるから心配しなえが好ええ、何時いつでも帰けえつたら直ぐに出すばいて、蔵の下は湿しけるから湿なえ高たけえ処とこに上げて置くばいといつてね、作右衛門どんも旧きゆうれえ来の馴染ではア何どうか止め度たいと思うが、敵を討ちに行くてえのだから止められねえツて名残なごりイ惜おしがつてるでがんす、村の者もねえ皆御恩みんなになつたゞから渡わたしぐち口まで送り度てえといつてますが、あなたそういうから年い取つた者ア来ないで好ええといつて置きました、私わしだけは戸頭とがしらまで送り度てえと思つて支度ウしました」

母「汝も送らなえで好いから若え者を止めて呉んろよ、汝が送ると若え者も義理だから戸頭まで送りばいと云つて来るだ、そうすりやア送られると送られる程名残い惜いから、汝も送らなえでも好いよ」

多「だけんどもはア村の者は兎も角も私はこれ十四歳の時から御厄介になつて居りまして、お前様のお蔭でこれ種々覚えたり、此の頃じゃアハア手紙の一本位書ける様になつたの、ア前の旦那の御厄介でがんすから、お家がこうなつて遠い処え行くてえ事たら私も附いて行かないばなんねえが、婆様塩梅が悪うござえまして、見棄てちやアなんねえというから、あなたのお心へ任して送りはしねえが、切めて戸頭まで送りにえと思つて居ります、塚前の彌右衛門どんは死んだかどうか知んねえが、通り道から少し這入るばかりだから、ちよつくり塚前へも寄つたが宜い」

母「それもどうするかも知んなえが、汝は送らなえが好いよ」

多「でも戸頭まで送るばいと思つて居ります」

母「送らんで宜いというに何故そうだかなア、汝ア死んだ爺様の時分から随分世話も焼かした家の用も能く働いたから、何ぞ呉れ度えと思ふけれども何も無えだ、是ア惣次郎が居る時分に祝儀不祝儀に着た紋附だ、汝も是れから己ア家が無くなれば一人前の百

姓に成るだから、祝儀不祝儀にやアこういう物も入るから、此の紋附一つくれればいと云う訳だよ、それから金も沢山呉れ度えが、茲に金が七両あるだ、是ア少し訳があつて己が手許にあるだから是を汝がにくればい、此の細縞ア余り良くなえが丹精して捻をかけて織らした細縞で、ちよくく阿弥陀様へお参りに往つたり寺参りに着て往つた着物だから、是を汝がに呉れるから仕立直して時々出して着るが好え、三日でも旅という譬えがあるが、子供を連れて年寄が敵討に行くだから、一角の行方が知んなえは何時帰つて来るか知んなえ、長え旅で死ななえともいわれなえ、是ア己が形見だから、己が無え後も時々これを着て己がに逢う心持で永く着てくんろ、よ」

多「はい、私戸頭まで送るばいと思つたに：どうも是れいりません：形見……形見なんて心細えこといわずにの、あんたも惣吉さんも達者で帰つて、もう一度名主役を惣吉さんが勤めなえば私の顔が立ちませんから、どうか達者で帰つておくんなさえよ、惣吉さん今迄とア違うから、母様に世話ア焼せねえ様に、母様ア大事にしなえばなんねえよ、惣吉さん、好いかえ、今迄の様なだだいっちやアなりませんよ、いゝかえ、どうか私は戸頭まで」

母「送らんで好えというに汝が送るてえは皆若え者も送りたがるから、誰か来たじやな

えか」

作「へエ御免」

多「やア作右衛門どんが」

母「さア此方へお這入りなさえ」

作「誠にどうも、魂消て、どういふ訳で急に立つことになつたか、村の者もどうか止め

度えというから、馬鹿アいうな、止められるもんか、今度ア物見遊山でなえ、敵討に行く

だというと、成程それじゃア止められねえが、まア名残惜いってね、若え者ば皆恩にな

つてるだから心配ぶつております、留守中は役にア立たないがお帰りまでア慥に荷物は

皆蔵へ入れて置きました、何卒まア早く帰つてお出でなさる様に願え度えもんで」

母「はい、お前方も古い馴染でがんしたけんども、今度が別れになります、はい有難う

ござえます、多助や誰か若え者が大勢来たよ」

多「やア兼ね、さア此方へ這入れ、お、太七郎此方へ」

太「はい有難う、誠にまアどうも明日立つだつて、魂消て来たでがんす、どうもこれ名

残惜くつて渡口まで送るといふ者が沢山ござえます」

母「ありやまア、送らねえでも好えよ、用がえれえに」

太「なに用はなえだから皆送り度えと思えまして、名残い惜いが寒い時分だから大事にしてねえ」

母「はい有難う、又祝いの餅い呉れたつて気の毒なのう、どうか婆様ア大事にして」

太「へエ婆アもどうかお目に掛り度えといつております」

母「お、誰だい、さア此方へ這入りな」

甲「へエ、誠にはア、魂消まして、どうかまア止め度えといつたら止めてはなんねえつて叱られた、随分道中を大事に」

九「へエ御免」

母「誰だい」

九「九八郎で、誠にどうもさつぱり心得ませんで、急にお立だと云うこつて、お名残い惜ゆうござえます」

母「おや、上の婆様、あんた出で来なえで好えによ」

婆「はい御免なさえ、誠にまアどうも只お名残い惜いから、どうぞ碌に見えない眼だが、ちよつくりお顔を見てえと思つてお暇乞に参りました、明日立つだつて、なんだかあつけなえこつたつて、私の嫁なんざア泣えてばいいるだ、随分大事になえ」

母「はい有難うござえます、お前も随分大事にして、毎も丈夫で能くねえ」

乙「へエ誠にどうもお力落しでがんです」

丙「おい〜何だつてお力落しなんていうんだ」

乙「でも飛んだ事だと云うじやアなえか」

丙「馬鹿いえ、敵討にお出でなさるのに力落しという奴があるか」

乙「へエ誠にそれはアお目出度えこつて」

丙「これ〜お目出度えでなえ」

乙「なんでも好いじやアなえか」

という騒ぎで、村中餅を搗きましたり、蕎麦を打ったり致して一同出立を祝するという、

惣吉仇討に出立の処は一寸一息。

七十九

さて時は寛政十一年十二月十四日の朝早く起きまして、旅仕度を致しますなれども、三代も続きました名主役、仮令小村でも村方を離れて知らぬ他国へ参りますものは快くない

もので、殊ことには年を取りました惣右衛門の未亡人びぼうじんが、十歳になる惣吉という子供の手を曳ひいて敵討かたきうちの旅立でありますから、村方一同も止める事も出来ず、名残を惜んでおります、皆小前の者がぞろ／＼と大勢川端まで送つて参ります。

母「さア作右衛門さんこれで別れましようよ、何処どこまで送つても同じ事ことだからこれで」
作「だけんども船へ乗るまで送り申し度ていと皆こういつている」

母「だけんども却けえつて船に私乗わしつかつて、皆みんなが土手の処ところにいかい事皆が立っていると、私快くねえ、名残惜なごりおぼくつて皆が昨宵ゆうべから止められるのでね、誠に立度たちたくごぎえませんよ、何卒どうぞお前まへが差さしずして帰かえしておくんなさいましよ」

作「はい、それじゃア皆みんなな是これにてお別れとしまししようよ、えゝ送れば送られる程御新造は心持こころもちい悪わるいてえからよう」

村方の者「左様ならまア随分ずいぶんお大事だいじに」

村方の者「左様ならハアお大事だいじに」

村方の者「左様ならお大事だいじに、早くお帰かえりなさいましよ」

作「何卒どうぞ早くお帰かえりをお待ち申まをしますよ」

母「さアよ多助たすけどうしたもんだ、汝われ其所こゝに立たつていいるから皆みんな立たつていいべえじゃアねえか、

汝から先き帰ろというに」

多「おれだけは戸頭まで送る」

母「送らねえでも宜えてえに」

多「送らねえでも宜えたつて、村の者と己とは違う、己はあんた十四の時から側にいるので、何所まで送つても村の者は兎や角云う氣遣ねえから送り申しますよ」

母「あゝ、いう馬鹿野郎だもの、汝が送ると云えば皆が送ると云うから汝帰れてえに、昨宵いつたこと分らなえか」

多「へエ、じゃア御機嫌よく行つておいでなせえ、惣吉様道中でお母様に世話やかしてはいけませんよ、今までは草臥れゝば多助が負つて上げたが、もう負つて上げる者はねえよ、エ、氣の毒でもあんた歩いてまいらなえばならんだ、永旅だから我儘してお母様に心配かけてはなりませんよ、大事に行つておいでなさいましよ」

惣「うーん、大丈夫だよ、多助も丈夫で」

多「こんな別れの辛い事ア今迄ねえね」

母「別れエ辛えたつておつ死ぬじやアなし、関取がに逢つて敵い討つて目出度く帰つて来たら宜えじやアねえか」

多「それまア楽たのみにするだが、あんた昨宵ゆうべも人間は老少不定ろうしやうふじやうだなんていわれると心持よくねえからね」

母「これで別れましようよ」

多「左様なら氣い付けてね、初めから余あんまりたんと歩かねえようにしてねえ、早く泊る様にしなければなんねえ、寒い時分だから遅く立つて早く宿へ着かなければいけませんぞ：ア、押おねえでも宜ええ危あぶえだ、前めは川じやアねえか、此処こゝへ打ぶ箆ちつたらどうする：何卒どうぞ大事えじに行つて来てお呉まんなせえましよう：なに笑うだ、名残なごりい惜おいから声かけるになんだ馬鹿野郎ばやう、情合じやうあのねえ奴やつだ、笑やアがつて……あれまア肥料こいた桶づか担かげ出しやアがつた、桶づかをかたせ、ア、桶づかを下おろして挨拶あいさつしているが……あゝ兼かねだ新しん田でんの兼かねだ、御厄ごやく介けいになつた男おとこだからなア、あの男も……惣吉そうきち様さま小ちせえだけでも怜り惻そうだから矢や張つばり名残なごりい惜おがつて、昨宵ゆうべも己おらは行くのは厭いやだけんども母か様さまが行くから仕方がねえ行くだつて得心うしろしたが、後うしろを振ふり返えりく行く……見ろよ……あゝ誰たか大でえ馬うまア引出ひ出しやアがつて、馬うまの蔭かげで見えなくなつた、馬うまを田くろの畦おつへ押お付つけるや：あれまア大こえ庚申こうしん塚づかが建あつたな、彼あれア昔あからある石いだが、あんなもの建あてなけりやアいゝに、庚申こうしん塚づかが有あつて見えやアしねえ、庚申こうしん塚づか取か除たせ」

村方の者「そんなことが出来よかえ」

と伸上りのびあがりく見送いしまつて暇を告げる者はどろく帰る。此方は後こちらあとに心が引かされるから振返りく、漸々ようよくのことで渡を越して水街道から戸頭へさして行きまゆす。すると其の翌年になりまして花車重吉という関取は行違ゆきちがいになりましたことで、毎年まいねん春になると年始に参りますが、惣次郎の墓詣はかまいりをしたと出て来ましたが、取急ぎ水街道の麴屋へも寄らず、直すくに菩提所へ参りまして和尚様に逢うと、是れくこといいい、つい話も長くなりましたが、墓場に香花を沢山あげて、

花車「あゝお隅様情ない事になった、敵かたきを打つなれば私わしに一言話をして呉れ、ばお前まへにこんな難儀もさせまいに、今いうは愚痴だが、だが能くお前が死んで呉れた許ばかりで敵は安田一角という事が分りましたから、惣吉様に助太刀して屹度花車がお前さん様の恨を晴します、アゝ入違いになり上総の東金へ行きなすつたか、嘸情さぞない事だと思いなすつたらうが、私はこれから跡追掛てお目に掛り、何処どこに隠れ住すまうとも草を分けても引摺り出して屹度敵を討たせませすから」

と活いきている者に物をいう様に分らぬ事を繰返し大きに遅れたと帰ろうとすると、ばら／＼降出して来て、他ほかに行く処ゆもないから水街道の麴屋へ行ゆこうとすると、和尚様は

「少し破れてはいるがこれをさして、穿きにくかろうがこの下駄を」

というので下駄と傘を借りて、これから近道を杉山の間の処からなだれを通つて、田を廻つてこう東の方へ付いて行くと、大きな庚申塚が建て、在つて、うしろには赤松がこう四五本ありまして、前には沼があり其の辺に枯れ蘆が生えております、ずうツと見渡すばかりの田畑、淋しい処へばら／＼降っかけて来る中をのそり／＼やって来ると、突然に茂みからばら／＼と出た武士が、皆面部を包み、端折を高くして小長い大小を落し差しにしてつか／＼と来て物をもいわず花車の片方の手を一人が押える、一人は前から胸倉を押えた、一人は背後から羽交責に組付こうとしたが、関取は下駄を穿いており、大きな形で下駄穿だから羽交責処ではない、漸く腰の処へ小さい武士が組付きました。

八十

花車は恟りしたが、左の手に傘を持って居り、右の手は明いて居りましたが、おさえ付けられ困りました。

花車「なんだい、何をなさる」

武士「我々は浪人者で食方に困る、天下の力士と見かけてお頼み申すが、路銀を拝借したい」

花「路銀だつて、あんた、私はお前さん角力取で金も何もありませんが、困りますよ、そんなことして金持と見たは眼違いで、金も何もありません、角力取だよ」

武「金がなければ気の毒だが帯して居る胴金から煙草入から身ぐるみ脱いで行つて貰い度い」

花「そんなこといって困りますよ、身幅の広いこんな着物を持つて行つたつて役に立ちません、煙草入だつて、こんな大きな物持つて行つたつて提げられやあせん、売つたつて錢にもならぬに困りますよ、然う胴突いては困るよ〜」

といいながら段々花車は後へ下ると、後の見上げる様な庚申塚の処へこう寄り掛りました。前の奴は二人で、一人は右の腕を押え、一人は胸倉を取つて押える、後の奴はせつない、庚申塚と関取の間にはさまれ、

「もつと前に」

といつても同類の名をいうことが出来ない。此の三人は安田一角の廻し者、花車を素つぱだかにしてなぶり殺しに致すようにすれば、是れだけの手当を遣るといふことに疾うよ

り頼まれて居る処、出会つて丁度幸い、いゝ正月をしようという強慾非道の武士三人、漸と捕まいたが、花車は伶俐ものだから、此奴らは悪くしたら廻し者だろうと思ひ、

花「まアそんなに押えられては困りますね、待ちなさい上げますよ、達つてと云えば上げますよ〜」

武「呉れぬといえは許さぬ、浪人の身の上切取強盗は武士の習い、云い出しては後へ引かぬからお氣の毒ながら切り刻んでもお前の物は残らず剥ぐぜ、遁れぬ事と諦めて出いな、裸体はお前の商売だ、裸体で行くのは何でもないわ」

花「だから上げるけれども、待ちなさいよ」

と左の手に持つて居た傘をぽんと投出し前から胸倉を取つて押えて居る一人の帯を押えて、

花「お前さん、そう胸倉を押しては私は着物を脱ぐことが出来ぬから、胸倉を緩めて、裸体になりますよ、私も災難じゃア、寒くはないから、私に裸体になれてえはなりませんから、胸倉を押えては脱げませんから緩めて」

前の奴のうっかり緩める処を見て、

花「なにをなさる」

といいながら一人の奴の帯を取ってぽんと投げると、庚申塚を飛越して、後の沼の中へ、ぼかんと薄氷の張った泥の中へ這入った。すると右の手を押えた奴は驚きバラ／＼逃げ出した。

花「悪い奴じや、こんな村境の処へ出やアがって追剥をしやアがって悪い奴じや、今度此辺アうろ／＼しやアがると打殺すぞ、いや後に誰れか居やアがるな、此奴組付て居やアがったか」

武「誠にどうも恐入った」

花「誠に糞もいらん、これ汝の様な奴が出ると村の者が難儀するから此の後為ないか」

武「為る処ではござらぬ、誠にどうも」

花「悪いことするな、是からは為ないかどうだ此の野郎」

と押付けると、

武「うーん」

と息が止った。

花「野郎死にやアがったか、くたばったか、野郎死だか、ア、死にやアがった、馬鹿な奴だ」

と捻り倒すと、尾籠のお話だが鼻血が出ました。

花「みつともねえ面だなア、此奴も投込んで遣れ」

と襟髪を取つて沼へ投げ込み、傘を持つてのそり／＼水街道の麴屋へ帰るといふ、角力取という者はおおまかなもので、扱お話は二つに分れて此方は惣吉の手を引き、漸々のことで宿屋へ着きましたなれども、心配を致しました揚句で、母親がきり／＼癩が起りまして、寸白の様で、宿屋を頼んでも近辺に良い医者もございませんから、思う様に癒りません、マア癒るまではこのので、逗留致して居りました。其の内に追々と病氣も癒る様子なれども、時々きやく／＼痛み、固い物は食われませんから、お粥を拵えてこれを食い、其のうち年も果て正月となり、丁度元日で、元日に寝ていては年の始め縁起が悪いと、田舎の人は縁起を祝つたもので、身体が悪いくせに我慢して惣吉の手を引いて出立致し、小金ヶ原へ掛り、塚前村の知己の処へ寄つて病氣の間厄介になろうと、小金の原から三里許り参ると、大きな観音堂がございりますが、雲がぱら／＼降出して来て、子供に様で道は歩取りません、とつぷり日は暮れる、すると頬に痛くなりました。

惣吉「母様また痛いかえ」

母「ア、痛い、あゝあのお医者様から貰つたお薬は小さえ手包の中へ入れて置いたが、

彼処あすけえ上げて置いたが、あれ汝われ持つて来たか

惣「あれ己おれ置いて来た」

母「困るなア、子供だア、母様塩梅あんべあじ悪いだから、薬でいじ大事だからてえ考かんげえもなえで」

惣「だって、己いもう宜いいてえから、よかんべえと思つて何も持つて来きなかつた」

母「困つたなア、あゝ痛いゝゝ」

惣「母様雪降つて来た様だから、此処こゝに居ると冷てえから、此の観音様の御堂に這入つて些ちつと己おつぺそう」

母「そうだなア、押してくれ」

惣「あい」

母「おゝ、大でえ観音様のお堂だ、南無大慈大悲の觀世音菩薩様少々此処こゝを拝借しまして、此処で少し養生致します。さア惣吉力一ぺえ押せよ」

惣「母様此処な処かえ」

母「もつとこつち」

惣「もつと塩梅あんべあじが悪くなると困るよう、しっかりしてよう、多助たすけ爺ぢいやアを連れて来ると宜よかつた」

と可愛らしい紅葉もみじの様な手を出して母の看病をして、此処を押せと云われて押ししても力が足りません。

母「あゝ痛いゝ、そう撫なでても駄目だから拳骨で力一ぺえおつべせよ、拳骨でよ、あゝ痛いゝ」

八十一

女「何なんだか大層うな呻る声こゑが聞えるが……貴方かえ」

母「へえ、旅りょの者ものでござえますが、道中みちなで塩梅あんばいが悪くなりましてね、快くなえうち歩いて来ましたから、原中なげえ掛かつて寸白すんぱくが起おこつて痛いたうござえますから、観音くわんおん様のお堂どうをお借り申しました」

女「それはお困りだろう、お待ち、どれゝ此方こちへ這入りなさい」

と観音堂くわんおんどうの木連格子きつれごうしを明けると、畳たたみが四畳敷よじやうぢきいてございます。其の奥おくは板いたの間まになつて居ゐります、年の頃ころ五十八九ごじゅうはちくにもなりましよう、色白いろしろのでつぷりした尼に様やう、鼠木綿ねずもめんの無地むぢの衣いを着きて、

尼「さア此方へお這入りさアく擦つて上げましよ憫然に、此の子が小さい手で押し
ても、擦つても利きはしない、お、酷く差込んで来る様だ」

母「有難うござえます、痛くつて堪らねえでね、宿屋へ一寸泊りましたが癒らねえで」

尼「こう苦むに子供を連れて何処まで……なに塚前まで、是から三里ばかりで近くはな
い、薬はお持ちかえ」

母「はい、薬は有つたが惣吉がにいい付けて置いたら、慌てゝ、包の中へ入れて置いた
のを置いて参りました」

尼「薬がなくつては困つたもの、斯ういう時は苦い物でなければいけない、だらすけが
宜いが、今此の先にねえ、あの榎の出で居る家が有る、あれから左の方へ構わず曲つて行
くと、家が五六軒ある、其処の前に丸太が立つて、家根の上に葭簀が掛つて居て、其処に
看板が出てあつたよ、癩だの寸白疝気なぞに利く何とか云う丸薬で、*黒丸子の様なも
ので苦い薬で、だらすけみたいなもので、癩には能く利くよ、お前ねえ、知れまいかねえ、
行つて買つて来ないか、安い薬だが利く薬だが、先刻通つた時榎があつて、一寸休む処が
有つて、掛茶屋ではないが、あれから曲つて一町ばかり行くと四五軒家があるが、何う
か行つて買つて来て、私が行つて上げたいが手が放されないから」

* 「漢方医の調剤する腹痛の丸薬。こくがんし」

惣「有難う」

尼「茲にお錢があるからは是を持って行つておいで、心配せずに」

惣「じやア母様私が薬買って来るから」

母「よくお聞き申して早く行つて来うよ」

惣「はい、御出家様お願え申しますよ」

尼「あいよ心配せずに行つておいで、憫然に年もいかぬに旅だからおろくくして涙ぐんで、いゝかえ知れたかえ、先刻通つた四五町先の榎から左に曲るのだよ」

惣「あい」

とおろくくしながら、惣吉は年は十だが親孝心で発明な性質、急いで降る中を四五町先を見当にして参りました。先刻通りました処は覚えて居りまして、榎の所から曲ると成程四五軒家がある、其処へ来て、

惣「此辺に癩に利く薬でだらすけという様な薬は何処で売って居ますか」
と聞くと、

男「此辺に薬を売る処はない、小金まで行かなければない」

惣「小金と云うのは」

男「小金までは子供ではからは逆も行かれない、其の中には暗くなつて原中で犬でも出れば何うする、早くお帰り」

と云われ心細いから惣吉は帰つて観音堂へ駈上つて見ると情ないかな母親は、咽喉を二巻程丸ぐけで括られて、虚空を掴んで死んで居る。脊負つた物も亦母が持つて居た多分の金も引浚つて彼の尼が逃げました。

惣「ア、お母様、何うして絞殺されたかねえ」

と頸に縛り付けてある丸ぐけを慄えながら解いて居る処へ、通り掛つた者は、藤心村の観音寺の和尚道恩と申しまして年とつて居りますが、村方では用いられる和尚様、隣村に法事があつて男を一人連れて帰りがけ、

和尚「急がんじゃないかん」

男「何だかヒイ〜という声が聞える様に思うだ」

和「ヒイ〜と」

男「怖かねえと思つて、此処はね化物が出る処だからねえ」

和「化物なぞは出やせん」

男「けれども原中でヒイ〜という声が訝しかんべえ」

和「何も出やアしない」

男「あれ冗談じゃアねえ、だん〜、あれ〜」

和「彼れは観音様のお堂だ、彼処に人が居るのではないか、暗くって見えはせん提ちようち灯ん出しなよ」

と提灯を引つたくつて和尚様が来て見ると、縊くびり殺された母に縊すがり付いて泣いて居る。

和「どういう訳か」

と聞くと泣いてばかり居て頓とんと分りません。漸ようやくだまして聞くと是れ〜という。

和「飛んだ事だ」

と直すぐに供の男を走らして村方へ知らせますと、百姓が二三人来て死骸と共に惣吉を藤心村の観音寺へ連れて来て、段々聞くと、便たよる処もない実に哀れの身の上でありますから、

和「誠に因縁の悪いので、親の菩提の為、私わしが丹精して遣かたきるから、仇を討つなぞということとは思わぬが宜いい、私の弟子になつて、母親や兄あにさんの為に追善供養を吊かたきうが宜いい」

と此の和尚が丹精して漸ようやく弟子となり、頭を剃そりこぼち、惣吉が宗そうかん観かんと名を替えて観音寺に居る処から、はからずも敵かたきの様子が知れると云うお長いお話。一寸一息吐きまして。

八十二

扱一席申上げます、久しく休み居りました累ヶ淵のお話は、私も昨冬より咽喉加答児
でさっぱり音声が出ませんから、寄席を休む様な訳で、なれども此の程は大分咽喉加答児
の方は宜うございませう、また風を引き風声になりまして、風声と咽喉加答児とが掛
持を致して居りますると云う訳でもござりませんが、何時までもお話を致さずにも居ら
れませんから、此の程は漸く少々よろしゅうございますから、申し残りの処を一席お聞き
に入れます。さてお話が二つに分れまして、ちょうど時は享和の二年七月廿一日の事で
ございませう。下総の松戸の傍に、戸ヶ崎村と申す処がございまして、其処に小僧弁天と
いうのがあります、何ういう訳で小僧弁天と申しますか、敢て弁天様が小さいという
訳でもなし、弁天様が使いに往く訳でもないが、小僧弁天と申します。境内は樹木が繁茂
致しまして、頓と掃除などを致したことはなく、破れ切れた弁天堂の縁は朽ちて、間から
草が生えて居り、堂の傍には落葉で埋もれた古井があり、手水鉢の屋根は打つ壊れて、
向うの方に飛んで居ります。石塚は苔の花が咲いて横倒しになって居ります程の処、

其の少し手前に葎よしずつぱり張があつて、住いではありません、店の端には駄菓子すまの箱がありま
 す、中にはお市いち、微塵みじんぼう棒、達磨だるまに玉たまうさぎ、兎うさぎに狸くねの糞くそなどという汚きたない菓子きに塩煎餅しんせんがあ
 りますが、田舎のは塩を入れますから、見た処では色が白くて旨うまいそうだが、矢張やはりこつ
 くり黒い焼方の方が旨うまいようです。田舎の塩煎餅は薄っぺらで軽くてべらべらして居りま
 する、大きな煎餅壺いに一杯這入つて居ります、それから鳥でも追う為か、渋しぶ団扇うちわが吊ぶ
らさが下り、風を受けてフラ／＼煽あおつて居ります、これは蠅はえよけ除であると申す事ことで。袖無そでなし
 を着た婆ばアさまが塵埃除ほこりよけの為に頭へ手拭てぬぐいを巻き付け、土ど竈べつの下したを焚たき付けて居りま
 する。破れた葎よしずの衝立ついたてが立たつてあり、看板かんばんを見ると御休おんやすみどころ所ところ煮染酒にしめと書いてあり
 まするのは、いかさま一膳飯いちぜんはんぐらいは売るのでござります。丁度其の日の申まう下り、日
 はもう西へ傾いた頃、此の茶見世へ来て休やすみんでいる武士さむらいは、廻まわし合羽がつぱを着て、柄袋えいぶくろの掛かつ
 た大小を差し、半股引はんこの少し破やれたのを穿かいて、盲めくら縞しまの山なしやまなしの脚半きゃはんに丁寧ていねいに刺さし
 た紺足袋こんあしぶくろ、切緒きせの草鞋わらじを穿かき、傍かたわらに振り分け荷にを置き、菅すげの雪ゆき下おろしの三度笠さんだを深く冠かぶり、
 煙草たばこをパクリ／＼呑のんで居ゐりますと、門口かどぐちから這入はいつて参まゐりました馬方うまがたは馬うまを軒のきの傍かたわらへ
 繋つないで這入はいつて来きながら、

馬「婆ばあさま、お茶ちや一杯いっぺえくんねえ、今の、お客おきゃくを一人新高野しんこうやまで乗のけて来きた」

婆「おめえさまは何時もよい機嫌だのう」

馬「いゝ機嫌だつて、機嫌悪くしたつて錢の儲かる訳でもねえから仕ようがねえのよ」といいながら彼の縁台に腰を掛けていたる客人を見て、

馬「お客さん御免なせえ、あんた何方へおいでゝごせえやすねえ、もうハア日イ暮れ掛つて来やしたから、お泊は流山か松戸泊が近くつてようごせえましよう、川を越してのお泊は御難渋ようだが、今夜は何処へお泊りか知りやせんが、廉くやんべえかな」

士「馬は欲しくない」

馬「どうせ帰り馬でござえやす、今ね新高野までお客ウ二人案内してね、また是から向へ往くのでござえやすが、手間がとれるから、鱒ヶ崎の東福寺泊りと云うのだが、幾らでもいゝから廉く遣るべえじやアねえか」

士「馬は欲しくないよ」

馬「欲しくねえたつて廉かつたら宜えじやアねえか」

士「廉くつても乗り度くないというのに」

馬「そんな事を云わずに我慢して乗つてツて下せえな」

士「うるさい、乗り度くないから乗らんというのだ」

馬「乗り度くねえたつて乗つてお呉んなせえな、馬にも旨え物を喰わして遣りてえさ、立派な旦那様、や、貴方ア安田さまじやありやせんか」

士「誰だ」

馬「おゝ先生かえ、誠に久しく会わねえ、まア本当に思えがけねえ、横會根村にいた安田先生だね」

士「大きな声をするな、己は少々仔細有つて隠れている身の上だが、突然に姓名をいわれては困る、貴様は誰だ」

馬「誰だつて先生、一つ処にいた作藏でござえやすわね」

士「なに作藏だと、おゝ然う〜」

作「えゝ誠にお久しくお目に懸りやせんが、何時もお達者で若えねえ、最早慥か四十五六になつたかえ」

士「汝も何時も若いな」

作「己アもう仕様がねえ、貴方実はね私も先刻から見た様な人だと思つてたが、安田一角先生とは気が附かなかつたよ」

士「己の名を云つてくれるなというに」

作「だつて、知んねえだから氣イ附かずに云つたのさ、併し何うも一角先生に似て居ると思つたよ」

安「これ名を云うなよ」

作「成程善々視れば先生だ、何でも隠し事は出来ねえねえ、笠ア冠っているから知れなかつたが安田先生だつた」

安「これくゝ困るな、名を云うなと云うに」

作「つい惘然いうだが、もう云わねえ様にしやしよう、実に思え掛けねえ、貴方今何処にいるだ」

安「少し仔細あつて此の近辺に身を隠しているが、汝何うして彼方を出て来た」

作「仕様がねえだ、己アこんなむかつ腹を立てる氣象だが、詰らねえ事で人に難癖え附けられたから、此所ばかり日は照らねえと思つて出て来たのさ」

安「汝は慥か森藏の宅に厄介になつていたじやアねえか」

作「はい、森藏といつちやア彼処では少しは賭博打の仲間じやア好い親分だが、何一つてももう年い取つてしまつて、親分は耄碌していやすから、若え奴等もいけえこといやすから、私も厄介になつてると、金松と云う奴がいて、其奴か毀れた碌でもねえ行

李りを持っていて、自分の物は犢鼻ふんどし褌でも古手拭みんなでも皆みな其なん中なけ置くだ、或時おれ己おれが其なの行李りを棚おろから下おろしてね、明あけて見ると、財布せえふが這へ入えつて、金かが一分二朱と六百あつたから出して使てつてしまふと、其奴おれがいうには、此この行李りの中なへ入れて置おいた財布せえふの金かが無なえ、手前てめえ取とつたろうというから、己おれ取りやアしねえが只黙もつて使てつたのだという、此この泥坊野郎どと云いうから私わが合が点ちしねえ、泥坊どとは何なんだ、何どういう理窟りで人ひとの物ものを出でして使てつたつて泥坊どと云いうのだ、只われが金かえ出して使てつたばかりで、黙もつて人ひとの物ものを出でして使てつたつて泥坊どと云いう理窟りが何ど処こに在あるか、喧嘩けんかをおおつ始はめたというわけさ」

安やす「矢張やはり泥坊どの様ようだな」

八十三

馬うま「親分ちんべんのいうには、泥坊どに違ちがえねえとツて己おれの頭かぶア打ぶ擲なつて、汝われの様ような解とれらねえものアねえと、親分ちんべんまで共ともに己おれに泥坊どの名なを附つけただが、盗ぬすんだじやアねえ只無断しで使てつたものを泥坊どなんぞという様な氣きの利りかねえ親分ちんべんじや仕様しやうがねえと思おもつて、おおつ奔はつて了しまつたが仕様しやうがねえから今いまじやア馬うま小屋こや見てえな家うちを持もつて、ここう遣やつて、馬うま子こになつて僅わずか飲の

代みしろを取つて歩いてるんだが、ほんの命つなを繋いでるばかりで仕様がねえのさ、賭博打の仲間へ這入る事も出来ねえから、只もう馬と首くび引きだ、馬ばかり引いてるから脊骨へないらが起おこるかと思つてるよ、昔馴染こづけえに、小遣こづけえを少しばかりおくんなさえな」

安「そんなら汝てまえは風来で遊んでるのか」

作「遊あそび人にんという訳でもねえが、馬を引いてるから、賭博ぶを打つて歩く事も出来ねえのさ」

安「少し汝てまえに話があるから婆アを烟草でも買いに遣つてくれねえか」

作「はア宜ようござえやす、婆ばアさま、旦那さま烟草買つてくんと仰しやるから買つて来て上げなよ、此の旦那は好いんでなけりやア氣に入るめえ、唯の方ではねえ安田一角先生えてえ」

安「これく」

作「はア宜ようござえやす、立派な先生だから悪わりい烟草なんぞア吞まねえから、大急ぎで好いのを買つて来きなせえ……あんた錢有りますかえ」

安「さ、これを」

作「サ婆さま是で買つて来て上げな」

安「使い賃は遣るよ」

婆「はい畏りました、直にいつて参りまする」

と婆さんは使賃という事を聞いて悦んで、烟草を買いに出て参りました。後は兩人差向で、

安「汝馬を引いてるのが幸いだ、己は木卸へ上る五助街道の間道に、藤ヶ谷という処の明神山に当時隠れているんだ」

作「へー、あの巨大え森のある明神さまの、彼処に隠れているのかえ、人の往来もねえ位の処だから定めて不自由だんべえ、彼処は生街道でえので、松戸へ通ン抜けるに余程近えから、夏になると魚ア車に打積んで少しは人も通るが何だつてあんな処に居るんだえ」

安「それには少し訳があるのだ、己も横會根にいられんで当地へ出たのだ」

馬「何だか名主の惣次郎を先生が打斬たてえ噂があるが、え、先生の事だから随分やり兼ねえ、殺つたんべえ此の横着もの奴、そんな噂がたつて居難くなつたもんだからおつ走つて来たんだらう」

安「そんな事はねえが武士の果は外に致方もなく、旨い酒も飲めないから、どうせ

永い浮世に短い命、斬り取り強盜は武士の習だ、今じやア十四五人も手下が出来て、生街道に隠れていて追剥おいはぎをしているのだ」

作「え、追剥を、えれえウーン怖おっかねえウーン、おれ剥ぐなよ」

安「汝てまえなぞを剥いでも仕様がないが、汝は馬を引いてるんだから、偶たまには随分多分の金を持つてるよい旅人りよじんが、佐原さばらや潮来いたあたり辺から出て来るから、汝其の金のありそうな客を見たら、なりたけ駄賃やすを廉くして馬に乗せ、此処こゝは近道でございませと旨く騙だまかして生街道へ引張り込み、藤ヶ谷の明神山の処まで連れて来てくれ、併しかし薄暗くならなくつちやア仕事が出来ねえから、宜いい加減どこに何処どこかで時を移すか、のさく歩けば自然と時が遅れるから、そうして連れて来て呉れ、ば、多勢おおぜいで取巻いて金を出せといえは驚いてしまふ、汝は馬を置おきつ放ばなしてなり引張つてなり逃げてしまひねえ、そうして百両金があつたら其の内一割とか二割とか汝に礼をしようから、おれの仲間にならねえか」

作「そんなら礼が二割といえは百両ありやア二十両己にくれるのか」

安「そうよ」

作「うめえなア、只馬を引張つて百五十文ばかりの駄賃を取つて、酒が二合にしんに鯁にしんの二本も喰あじえば、後あしに銭が残らねえ様な事をするより宜いいが、同類もになつて、若もし知れた時は首

を打斬れるのかよ」

安「そうよ」

作「ウーン、それだけだな、己はもうこれで五十を越してゐるんだから百両で二十両になるのなら、こんな首は打斬られても惜くもねえから行るべえか」

安「汝馬を引いておれの隠家まで来い、あの明神山の五本杉の中に一本大きな楠がある、其の裏の小山がある処に、少しばかり同類を集めてゐるんだ」

馬「じやア彼のもと三峰山のお堂のあつた処だね、よくまア彼様な処にいるねえ、彼は狼や蟒が出た処なんだから、尤も泥坊になれば狼や蟒を怖がつていちやア出来ねえが、そうかえ」

一角は懐から金を取り出し作藏に渡しながら、

安「これは汝が同類になつた証拠の為、少しだが小遣錢に遣るから取つて置け」

作「え、有難え、これは五両だね、今日は本当に思え掛けねえで五両二分になつた」

安「なぜ」

作「不思議な事もあるものだ、今日はね、あのもさの三藏に逢つたよ、羽生村の質屋で金かした婆ア様が死んだつて、其の白骨を高野へ納めるてえ来たが、今日は廿一日だから

新高野山へお参りをするてえので、與助を供に伴れて、己が先刻東福寺まで送つてツたが、昔馴染だから二分くれるツて云つたが、有難うござえやす、実に今日は思え掛けねえ金儲けが出来た」

安「其の五両を取つて見ると、もう同類だから是切り藤ヶ谷へ来ずにて、若し汝の口から己の悪事を訴人しても汝は矢張り同罪だ、仮令五両でも貰つて見れば同類だから然う思え」

作「己も覚悟を極めて行くからには屹度遣りやすよ、それは宜いが、あんた直に独りで往くか、馬に乗つて往かないか、歩いて往く、そうか、左様なら……あゝ其方へ往つてア損だから、其の土橋を渡つて真直においでなせえ、道い悪いから氣い付けて行きなせえ、なア安田先生も劍術遣いだから、どうして劍術遣いじやア飯ア喰えねえ、あの人は旧時から随分盗賊ぐれえ遣つたかも知んねえ、今己がに五両呉れたは宜いが、是を取つて見れば同類に落すといつたが、困つたな、あゝもう往つてしまつたか、立派な男だ、婆アさまは何処まで烟草を買えに往つたんだらう尤も要らないのだ、人払えの為に買えに遣つたんだが余り長えなア」

と独言をいつている後から、

男「おい作」

作「え、誰だえ己を呼ぶるのア誰だ」

男「お、己だ、久しく逢わねえのう」

八十四

作「誰だ、人が何処どこにいるのだ」

と云いながら、方々見廻し、振返つて見ると、二枚折にまいおりの葎よしの屏風の蔭に、蛇形じゃがたの単ひ物とえものに紺献上の帯を神田に結び、結城平ゆうきひらの半合羽を着、傍わきの方に振分ふりわけの小包を置き、年頃三十ばかりの男で、色はくつきりと白く眼のぱつちりとした、鼻筋の通つた、口元の締つた美しい男で、其の側に居るのは女房と見え、二十七八の女で、頭髮あたまは達磨返しに結び、鳴海なるみの単衣ひしえに黒縹子の帯をひっかけに締め、一杯飲んで居る夫婦連づれの旅人りよじんで、

男「作や、此方こつちへ這入へえんねえ」

といいながら、葎屏風よしびょうぶを明けて出て来た男の顔を見て、

作「イヤア兄あにいか、何どうした新吉さん珍らしいなア、久し振りだ、これは何うも珍らしい

い、実に思え掛けねえ」

新「汝、大きな声で嘯鳴つて居たが相変らずだなア」

作「おやお賤さん、誠にお久し振でござえやした」

賤「おやお作藏さんお前の噂は時々していたが、相変らず宜い機嫌だね」

作「本当にお賤さん、見違える様になった、少しふけたね、旅をしたもんだから色が黒くなつたが、思え思つた新吉さんとうとう夫婦になつて彼処をおッ走つたのかえ、今まア何処にいるだえ」

新「彼方此方と身の置き処のねえ風来人間で仕方がねえが、是も皆人に難儀を掛け、悪い事をした報と思つて諦めているが、何商売を仕度くも資本がないのだ、汝まぶな仕事を安田と相談していたが、己も半口載せねえか」

作「お前あの事を聞いたか、是ハア困つたなア、実は銭がねえで困るから這入る真似しただだア、だが余り這入り度はねえんだ」

新「旨くいってるぜ、併し三藏は何処へ往つたんだ」

作「三藏かえ、彼はね婆さまが死んだから其の白骨を本當の紀州の高野へ納めに往くつて、祠堂金も沢山持つてる様子だ、お累さんもあゝいう死様をしたのも矢張お前ら二

人でした様なものだぜ」

新「汝てめえ是从新高野へ馬を引いて往くのなら矢張やっぱり歸りけえは此処こゝを通るだろう」

作「鱒ヶ崎の方へ廻るのだが此方こつちへ来ても宜い」

新「そうか、おい作」

作「え何んだ」

新「一寸耳を貸せ」

作「ふーん、怖い事だな」

新「汝馬てめえを引いて先方むこうへ往つて、三藏を此処こゝ迄乗せて連れて来たら、何か急に用が出来

たと云つて、馬を置おきつ放ばなして逃げてしまつてくれねえか、併しかし馬を置いて往かれちやア三

藏に逢つて仕事をする邪魔になるから、引いてつてくれ、其の代り金を三十両やらア」

作「え、三十両本当に己ア金かねうん運うんが向いて来た、じゃア金をくんろえ、してどういう理

窟だ」

新「三藏とは一旦兄弟とまでなつたが、お累が死んでからは、互たげたげに敵同志かたぎの様になつ

たのだ」

作「敵同志だつて汝おめえが三藏を怨むのアそりやア兄ちい些ちと無理だんべえ、成程お賤さんの

前もあるから、そういうか知んねえが、三藏を敵と思えば無理だぞ、お前が養子に往つても男振が宜いもんだから、お賤さんに見染められ、互えに死ぬの生るのと騒ぎ合ひ、お累さんを振捨て、お賤さんとかういう事になつたから、お累さんも上せて顔が彼様に腫れ出して死んで了つたのだから、却つて三藏の方でお前を怨んでいるだろうが、何もお前の方で三藏を悪み返すという理合はあんめえぜ」

新「汝は深い事を知らねえからそんな事をいうんだが、何でも構わねえ、己が三藏に逢つて、百両でも二百両でも無心をいつて見ようと思ふのだ」

作「三藏殿がお前に金を貸す縁があるかえ」

新「貸しても宜い訳があるのだよ」

作「三十両呉るなら遣附けやしよう」

新「若し與助の野郎が邪魔でもしたら、汝打擲つてくれなくっちゃアいけねえぜ」

作「與助爺なんざアヒヨロ／＼してるから川の中へ投ほり込んで了うがそれも矢張金づくだがね」

新「強請事をいわずに遣つて呉れ、其の代り首尾よく遣つて利を見た上で汝に又礼をしよう」

作「それじゃア三藏に貸してくれといつても貸さねえといえば礼はねえか、困ったな、じゃア後の礼の処は当にはならねえな」

新「まア其様なものだが、多分旨く往くに違えねえ、若しぐずぐずして貸さねえなんど、いったら、三藏與助の二人を殴つ殺して川の中へ投げ込んでしまふ積りだ、己も安田の提灯持位えは遣るす簡だ」

作「お賤さん新吉さんが彼様な事を云うぜ」

賤「お前度胸をお据え仕方がないよ、私も板の間稼ぎぐらゐは遣るよ」

作「アレマア彼様な綺麗な顔をしていながら、あんな事をいうのも皆新吉さんが教えたんだらう、己はどうせ安田の同類にされたから、知れ、ば首は打斬れる様になつてゐるんだから仕方がねえ、やるべえく、お、婆アが帰つて来やアがった」

新「それじゃア手前馬を引いて早く往け」

作「ハイ、そんなら直に馬ア引いて新高野へ三藏を迎えに参りやしよう」

と出て行きました。これから新吉お賤も茶代を払つて其処を立出でました。其の内もう日はとつぷりと暮れましたが、葎簀張もしまい川端の葦の繁つた中へ新吉お賤は身を隠して待つて居ると、向から三藏が作藏の馬に乗つて参りました。

作「與助さん貴方もう何歳になるねえ、まだ若えのう、長く奉公してるが五十を一つ二つも越したかえ」

與「そうでねえ、もう六十に近くなつたから滅切年を取って仕舞つた」

作「羽生村の旦那ちよつくら下りてお呉んなせえ」

三「なんだ」

作「なんでも宜いから」

三「坂を上つたり下りたりするので己も余程草臥れたが、馬へ乗つて少し息を吐いたが、馬へ乗ると又矢張腰が痛いのう」

作「旦那誠に御無心だが、私はね、少し用があるのを忘れて居たが、実は此の先へ往つて炭俵を六俵積んで来て呉れと頼まれてるんだが、どうしても積んで往かねばなんねえ事があるだ、誠にお氣の毒だが此処で下りて下せえな、もう此処から先は平な道だから歩いても造作ねえんですが」

三「それじゃア何でもい、汝が困るなら下りて歩いて往こう」

と云いながら馬から下りる。

作「私は少し急ぎますから御免なせえ」

と大急ぎで横道の林の蔭へ馬を引込みました。

八十五

日はどつぷりと暮れ、往来も止りますと、戸ヶ崎の小僧弁天堂の裏手の草の茂みからこそく、と葦を分けながら出て来た新吉は、ものをもいわず突然與助の腰を突きましたから堪りません、與助は翻筋斗を打って、利根の枝川へどぶんと水音高く逆とんぼうを打って投げ込まれましたから、アツと行って三藏が驚いている後から、新吉が胴金を引抜いて突然に三藏の脇腹へ突込みました、アツと行って倒れる処へ乗掛り、胸先を抉りました、が、一刀や二刀では容易に死ねません、死物狂い一生懸命に三藏は起上り、新吉の髻をとって引き倒す、其の内與助は年こそ取って居りますが、田舎漢で小力もあるものでございませうから、川中から這い上って参りながら、短いのを引き抜き、

與「此の野郎なにをしやアがる」

と斬って掛る様子を見るよりお賤は驚き、新吉に怪我をさせまいと思ひ、窃と後から出て参り、與助の髻を取って後の方へ引倒すと、何をしやアがるかといひながら、手に障った

石だか土の塊かたまりだか分りません、それを取つて突いきなり然お賤の顔を打ちました。お賤は顔から火が出た様に思い「アツ」といつて倒れると、乗し掛り斬ろうとする処へ、馬子の作藏が與助の傍わきから飛び出して、突いきなり然足を上げて與助を蹴りましたから堪たまりません、與助はウンといつて倒れました。新吉は刀を取直して又ま一刀三藏の脇腹をこじりましたから、三藏も遂ついに其の儘息が絶えました。すると手早く三藏の懐へ手を入れ、胴巻の金を抜き取つて死骸を川の中へ投げ込んで仕舞い、

新「お賤く」

賤「アイ、ア、痛い、どうも酷ひどい事をしやアがつた、石か何か取つて、いやという程私の顔を打ぶちやアがつた」

新「手出しをするからだ、黙つて見ていればいゝに」

賤「見て居いればお前が殺されて仕舞つたのだよ、與助の野郎がお前の後うしろから斬りに掛つたから、私が一生懸命に手伝つたのだが、もう少してお前斬られる処ところだったよ」

新「そうか、夢中でいたから、ちつとも知らなかつた」

賤「與助をよく蹴倒したのう」

作「え、なに己だ、林の蔭に隠れていたが、危ねえ様子だから飛び出して来て、與助野

郎の肋骨を蹴折つて仕舞つた、兄い無心処じやねえ突然に行つたんだな」

新「汝はもう帰つたのかと思つた」

作「林の蔭に隠れていて、何うだか様子を見ていたのよ」

新「誰か人は来やアしねえか、汝気を附けて呉れ」

作「大丈夫だ、誰も来る氣遣はねえが、割合を貰え度えなア」

新「汝はよく嘘を吐く奴だな、三藏が高野へ納める祠堂金を持つてるといふから、懐を探して見たが、金なんぞ持つていやアしねえ、漸く紙入の中に二両か三両しかありやアしねえ」

作「冗談じやアねえぜ、そんな事があるもんか」

新「だつて汝嘘を吐いたんだ」

作「なに己が嘘なんぞ吐くものか、此の野郎殺して置いて其の金を取つて仕舞つたに違えねえ、そんな事をいつても駄目だ」

新「なに本当だよ」

作「死骸はどうした」

新「川の中へ投げ込んでしまつた」

作「嘘をいえ、戯ふざけずに早くよこせよ、戯ふざけるなよ」

新「なに戯ふざけやアしねえ」

といわれ、作藏は少し怒ど気を含み、訛だみご声を張上げ、

作「手前てまえの懐を改めて見よう、己だつて手伝つて、姐あねさんを斬ろうとする與助を己が蹴

殺して、罪を造つているんだ、裸はだか体になつて見せろやい、出せつてばやい」

といいながら新吉に取とり継つがる。

新「遣るよ、遣るから待てというに、戯ふざけるな、放せ」

作「なんだ、人を欺だまして、金え出せよう」

新「遣るから待てよ、遣るといふに、お賤、その柳やなぎ行ぎ李りの中に少し許ばかり金へえが這入つて
るから出して作藏に遣んな、三藏の懐には無ねえんだから沢山たんは遣れねえ、十両ばかり遣ろ
う」

と気休めをいいながら隙すきを覗ねらつてどんと作藏の腰を突くと、どぶりと用水へ落ちました
が、がば／＼と直すくにああがつて参りまする処を見て、ずーんと脳わりを割わり附つけると、アツ、とい
つてがば／＼と沈しみましたが、又這上りながら、

作「斬りやアがつたなア此の野郎」

と云う声がりーんと訝こたがして川に響なきました。尚も這上ろうとする処を、また一つ突きましたから、仰むけにひつくりかえりましたが、又這上つて来るのを無暗むやみに斬り附けましたから、馬方の作藏は是迄の悪事の報いにや遂ついに息が止つたと見え、其の儘土手の草つを攫つかんだなり川の中へのめり込んで仕舞いました。

賤「お前まア恐ろしい酷ひどい事をするねえ」

新「此の野郎はお饒舌しやべりをする奴だから、罪な様だが五両でも八両でも金を遣るのは費ついえから切殺して仕舞つたが、もう此処こゝにぐずぐずしてはいられねえ」

賤「私はどうも殴ぶれた処とこが痛いたくつて堪たまらないよ」

新「何なんだか暗くらくつて判然はつきり分わらねえ」

といいながら透すかして見ると、石だか土塊どろだか分りませんが、機はみとはいいなながら打ぶたれた痣あざは半面紫色に黒み掛り、腫はれ上つていましたから、新吉がぞつとしたと申すは、丁度七年後の七月廿一日の夜、お累が己を怨うらみ、鎌で自殺をした彼の時に、蚊帳あの傍そばへ坐つて己の顔を怨めしように睨にらめた貌かおが、実に此の通りの貌だが、今お賤が思い掛ない怪我をして、半面へんそ変相へんそになるというのも、飽あくまでお累が己の身体あに附纏つきまつつて祟たりかど、流石さすがの悪党あくも怖気こわ立ち、ものをも言わず暫くは茫ぼん然やりと立たつて居ゐりましたが、お賤

は気が付きませんから、

賤「お前早く人の来ない中に何処かへ往つて泊らなくっちゃアいけない」

といわれ、漸々心付き、これからお賤の手を取つて松戸へ出まして、松新という宿屋へ泊り、翌日雨の降る中を立出でて本郷山を越し、塚前村にかゝり、観音堂に参詣を致し、はか図らずお賤が、実の母に出逢いまするお話は一息つきまして。

八十六

申続きました新吉お賤は、実に仏説で申しまする因縁で、それ程の悪人でもございませんでしたが、為る事す為す事なに皆悪念が起り、人を害す様な事も度々たびくになります。扱二人は松戸へ泊り、翌廿二日の朝立とうと致しますると、秋の空の変わり易くやす、朝からどんどと抜ける程降りますから立つ事が出来ませんで、ぐず／＼して晴れ間を待つている中に丁度午刻過ひるすぎになつて雨が上りましたから、昼飯ひるはんを食べて其処を立ちましたなれども、本街道を通るのも疵持きずつ脛すねでございまするから、却かえつて人通りのない処がよいといふので、是から本郷山を抜け、塚前村へ掛りました時分は、もう日が暮れかゝり、又吹掛ふっかけ降ぶりに雨が

ざア〜と降つて来ましたから、

新「ア、困つたもんだ」

と云いつゝ二三町参りますと傍の林の処に小さい門もんがまえ構うちの家に、ちらりと燈火あかりが見え
ましたから、

新「兎も角も彼処あそこへ往つて雨止あまやみをしよう」

といいながら門の中へ這入つて見ると、木連格子きつれぎょうしに成つてゐる庵室あんしつで、村方の者が奉納
したものか、丹たんで塗つた提灯ていとうが幾つも掛けてあります。正面には正觀しょうかん世音ぜんおんと書いた額
が掛けてあります。

新「お賤」

賤「あい」

新「こんな処に宿屋はなし、仕方がないから此の御堂おどうで少し休んで往こう、お賽銭さいせんを
上げたらよからう、坊さんがいるだろう」

といいながら格子の間から覗のぞいて見ると、向に本尊むこうが飾つて有ります。正觀世音しょうかんぜんおんの像
を小さいお厨子ずしの中へ入れてあるのですが、余り良い作ではありません、田舎仏師こしらの拵こしら
たものでございましょう、なれ共金箔きんぱくを置き直したと見え、ぴか／＼と光つて居ります

る、其の前に供えた三つ具足は此の頃納まったものか、まだ新しく村名が鏝り附けてあり、坊さんが畠から切つて来たものか黄菊に草花が上つて居ります、すると鼠の単物を着こしころも腰衣こしころもを着けた六十近い尼が御燈明を点けに参りましたから、

新「少々お願いがございしますが、私共は旅のもので此の通りの雨で難渋致しますが、どうか少々の間雨止を仕度いと存じますが、お邪魔でも此の軒下を拝借願ひ度いものでございしまする」

尼「はい、御参詣のお方でございしますかえ」

新「いえ通り掛りの者ですが、此の雨に降りこめられました、尤も有験な観音様だと聞いておりますからお参りもする積りでございしまする」

尼「吹掛け降りですから其処に立つてお出でゞは嘸お困りでございしましょう、すぐ前に井戸もありますから足を洗つて此方へ上つて、お茶でも飲みながら雨止をなすつていらつしやいまし」

新「有難う存じます、えお賤、金か何か遣れば宜いから上んねえ、じゃア御免なさい、誠に有難う存じます」

尼「其処に盥もありますから、小さい方を持つて往つて足を洗つてお出でなさい」

新「へえ」

と是れこから足を洗い、

新「誠に有難うございます」

と上りましたが、新吉もお賤もあつかましいから、囲炉裡いろりの側へ参り、

新「お蔭様で助かりました」

賤「誠にどうもとんだ御厄介さまでございました」

尼「おや／＼御夫婦連づれで旅をなさいますの、藤心村まで出るとお茶漬屋ぐらいはありますが、此の辺には宿屋がございませんから定めてお困りでしょう、遠慮なしにもっと囲炉裡の側へお寄んなさい」

新吉は何程か金子を紙に包んで尼の前へ差出し、

新「是は誠に少し許ばかりでございますが、お蔭で助かりましたから、お茶代ではありませんが、どうかこれで観音様へお経でもお上げなすつて下さいまし」

尼「いえ／＼それは決して戴きません、先刻貴方さつきあんたは本堂へお賽銭をお上げなすつたから、それでもう沢山さわでございます、御参詣みんげの方は皆お馴染なじみになつて、他村たそんのお方が来ても上あがり込んで、私の様な婆ばあでも久しく話をして入らつしやいますのですから御心配ゆっくなく寛りとお

休みなすつて入らつしやいまし」

と云われ、新吉はお賤の顔を見ながら小声にて、

新「だつて、きまりが悪^わりいな、これはほんの私の心許りでございますから、貴方^{あと}後でお茶^{ちやうけ}請でも買つて下さいまし」

尼「いえ私は喰^{たべ}物^{もの}は少しも欲しくはありませんお賽錢^{あげ}を上たからもうお金などは宜^ようございますよ」

新「そんな事をいわずに何卒^{どつつか}取つて置いて下さいまし」

尼「そうでございますか、又気になすつては悪いし、折角^{おほしめし}の思^{おぼ}召^{めし}ですから戴いて置^おきましよう、日が暮れると雨の降る時は寒うございます、直^{じき}に本郷山^{やまびえ}が側ですから山冷^{やまひや}がしますから、もつと其の麁^{そだ}朶^たをお焚^くべなさいまし」

新「へい有難う存じます」

といいながら松葉や麁朶を焚べ、ちよろくと火が移り、燃え上りました光で、お賤が尼の顔を熟^{つく}々^々見ていましたが、

賤「おやお前はお母^{つか}アじやないか」

八十七

尼「はい、どなたえ」

賤「あれまア何うもお母アだよ、まア何うしてお前尼におなりだか知らないが、本当に見違えて仕舞つたよ、十三年後に深川の櫓下の花屋へ置去にして往かれた娘のお賤だよ」と云われて尼は恟りし、

尼「え、まアどうも、誠に面目次第もない、私も先刻から見た様な人だと思つてたが、顔貌が違つたから黙つてたが、どうも実に私は親子と名乗つてお前に逢われた義理じやアありませんが、頭髪を剃つて斯んな身の上になつたから逢われますもの、定めて不実の親だと腹も立ちましようが、どうぞ堪忍して下さいあやまります」

賤「それでも能く後悔してね」

尼「此の通りの姿になつて、まア此の庵室に這入つて、今では毎日お経を上げた後では観音様へ向つて、若い時分の悪事を懺悔してお詫び申していますけれども、中々罪は消えませんが、頭髪を剃つて衣を着たお蔭で、村の衆がお比丘様とか尼様とか云つて、種々喰物を持つて来て呉れるので、何うやら斯うやら命を繋いでいるというだけのこと、

此の頃は漸々心附いて、十六の時置去にしたお賤はどうしたかと案じていても、親子で有ながら訪ねる事も出来ないというのは皆罰と思つて後悔しているのだよ」

賤「どうもね本当に、それでも能くまア法衣を着る了簡になつたね」

といいながら、新吉に向い、

賤「お前さんにも話をした深川櫓下の花屋の、それね……お前さんの様な親子の情合のない人はないけれ共能くまア後悔してお比丘におなりだね」

尼「比丘なんぞになり度い事はないが、是も皆私の作つた悪事の罰で、世話のして呉れ人もなくなり、段々老る年で病み煩いでもした時に看病人もない始末、あゝ何うしたら宜かろう、あゝ是も皆罰ではないかと身体のきかない時には、真に其の後悔というものが出て来るものでのお賤、して此のお方はお前の良人かえ」

賤「あゝ」

新「いつでも此女から話は聞いていました、一人お母様があるけれ共生死が分らない、併し丈夫な人で、若い気象だったから達者でいるかとお噂は能くしますが、私は新吉と云う不調法ものでございますが、今から何分幾久しゆう願います」

尼「此のお賤は私の方では娘とも云えませぬ、又親とは思いますまい、憎くつてねえ、

あゝ実にお前に会うのも皆みんな神かみ 仏ほとけのお叱りだと思つて、身を切られる程つらいと云う事を此の頃始めて覚えましたが、云わない事は解りますまいが、私は此の頃は誰が来ても身の懺悔をして若い時の悪事の話を致しますと、遊びに来る老翁おじいさんや老婆お婆あさんも、おゝゝそうだのう、悪い事は出来ないものだと思つて、又其の人達が若い時分の罪を懺悔して後悔なさる事があるから、私が懺悔をしますと人さまもそれに就つて後悔して下されば私の身の為にもなろうと思つて、逢う人毎ごとに私の若い時分の悪事を懺悔してお話を致します、私も若い時分の放蕩と云うものは、お賤は知りませんが中々一通りじやありませんでしたよ」

新「お母つかさん、なんですか、お前さんは元もと何処どこの出のお方でございます、多分江戶えじつこ子でしよう」

尼「いえ私の産れは下総こがの古河こがの土井さまの藩中の娘で、親父おやじは百二十石の高たかを戴いた柴田しばた勘六かんろくと申して、少々ばかりは宜よい役を勤めた事もある身分でございましたからお嬢様育ちで居たのですが、身性みじょうが悪うございまして、私が十六の時家来の宇田うだ金五郎きんごろうという者と若氣わかしの至りで私わたし通とほをし、金五郎に連れられて実家を逃出し江戸へ参り、本郷菊坂ほんきょうきくざかに世帯しよたいを持つて居りましたが丁度うまどしあの午年うまとしの大火事のあつた時、宝曆ほうれき十二年でござ

いましたかね、其の時私は十七で子供を産んだのですが、十七や十八で児を拵える位だから碌なものではありません、其の翌年金五郎は傷寒を煩らつて遂に亡くなりましたが、年端もゆかぬに亭主には死別れ、子持ではどうする事も出来ませんのさ、其の子供には名を甚藏と附けましたが、何に肖かつたのか肩の処に黒い毛が生えて、気味の悪い痣があつて、私も若い時分の事だから気色が悪く、殊に亭主に死なれて喰い方にも困るから、菊坂下の豆腐屋の水船の上へ捨児にして、私は直ぐ上総の東金へ往つて料理茶屋の働き女に雇われて居る内に、船頭の長八という者といゝ交情となつて、また其処をかけ出して出るような事に成つて、深川相川町の島屋と云う船宿を頼み、亭主は船頭をし、私は客の相手をして僅かな御祝儀を貰つて何うやら斯うやらやつて居る中に、私は亭主運がないと見え、長八がまた不図煩いついたのが原因で、是も又死別れ、どうする事も出事ないから心配して居ると、島屋の姐さんのいうには、逆もお前には辛抱は出事まいが、思ひ切つて堅気にならないかと云われ、小日向の方のお旗下の奥様がお塩梅が悪いので、中働に住み込んだ処が、それでも若い時分は此様な汚ない婆アでもなかつたから、殿様のお手が附いて、僅な中に出来たのは此のお賤」

八十八

尼「此娘も世が世ならばお旗下のお嬢さまといわれる身の上だが、運の悪いというもの
 は仕方がないので、此のお賤が二歳の時、其のお屋敷が直に改易に成つてしまい、仕様
 がないから深川櫓下の花屋へ此の娘を頼んで芸妓に出して、私の喰い物にしようと言
 了簡でしたが、又私が網打場の船頭の喜太郎という者と私通をして、船で房州の天
 津へ逃げましたがね、それからというものは悪い事だらけさ、手こそ下して殺さないでも
 口先で人を殺すような事が度々で、私の為身に身を投げたり首を縊つて死んだ男も二三
 人から、皆其の罰で今斯う遣つて居るのも、彼の時に斯ういう事をしたから其の報いだ
 と諦め、漸々改心をしましたのさ、仕方がないから頭髮を剃こかし破れ衣を古着屋で買
 つてね、方々托鉢して歩いて居る中、此の観音様のお堂には留守居がないからお比丘さん
 入つて居ないかと村の衆に頼まれるから、仮名附のお経を買つて心経から始め、どう
 やら斯うやら今では観音経ぐらいは読めるように成つたが、此の節は若い時分の罪滅
 しと思ひ、自分に余計な物でもあると困る人にやつて仕舞うくらいだから、何も物は欲
 しくありません、村の衆が時々畠の物などを提げて来てくれるから、もう別にうまい物を喰

度べたいという気もなし、只観音様へ向つてお詫事をして居るせえか、胸の中うちの雲霧くもぎりが晴れて善おもむに赴いたものだから、皆さんがお比丘様びくと云つて呉れ、此の観音様も段々繁昌して参り、お比丘さんにお灸きゆうを据すえて貰たまえのお呪まじないをして貰たまい度たいのといつて頼みに来るから、私も何も知らないが、若い時分から疝せん氣きなら何処どこが能いとか齒の痛いたいのは此こ処こが能よとか聞きいてるから据すえて遣まると、向むこうから名なを附つけて観音様の御夢想ごむそうだなどと云つて、今ではお前さん何不足なく斯こう遣まつて居ますが今日けふ図はからずお前達に逢あつて、私は尚なお、観音様の持つて入いらつしやる蓮はすの蕾つぼみで脊中せきちゆうを打うたれる様に思いますよ、まだ二人とも若い身の上だから、是こゝから先さきき悪い事はなさないように何卒どうぞ氣きをお附つけなさい、年を老とると屹きつ度とむく報はつて参まります、輪りん回ね応おう報ほうという事はないではありませんよ」

と云われ新吉は打うち菱しおれ溜息なげ息を吐つきながらお賤せんに向むかひ、

新「何なにうだえお賤せん」

賤「私も始めて聞いたよ、そんならお母つかさんお前まへがお屋敷へ奉公あがに上あつたら、殿様のお手が附ついて私わたしが出来たといえ、其のお屋敷が改易かいぎにさえならなければ私はお嬢様、お前は愛妾めかけとか何なにんとか云いわれて居ゐるのだね」

尼「お前はお嬢様に違ちがひないが、私は追出おきされてでも仕舞し舞まう位の訝おかしな訳わけでね」

新「へい其の小日向の旗下とは何処どこだえ」

尼「はい、服部坂上の深見新左衛門様というお旗下でございます」

といわれて新吉は恟びっくりし、

新「エ、そんなら此のお賤は其の新左衛門と云う人の胤たねだね」

尼「左様」

新「そうか」

と口ではいえど慄ぞつと身の毛がよだつ程恐ろしく思いましたは、八年前ぜん門番の勘藏が死際いまわに、我が身の上の物語を聞けば、己は深見新左衛門の次男にて、深見家改易まえの前に妾が這入り、間もなく、其の妾のお熊というもの、腹へ孕やどしたは女の子それを産落すとまもなく家が改易に成つたと聞いて居たが、して見ればお賤は腹違いの兄弟であつたか、今迄知らずことに夫婦に成つて、もう今年で足掛七年、あゝ飛んだ事をしたと身体に油の如き汗を流し、殊ことには又其の本郷菊坂下へ捨児すてこにしたというのは、七年以前、お賤が鉄砲にて殺した土手の甚藏に違いない、右の二の腕あせに痣があり、それにべつたり黒い毛が生えて居たるを問ひし時、我は本郷菊坂へ捨児にされたものである、と私への話し、さては聖天山へ連れ出して殺した甚藏は矢張やっぱりお賤の為には血統ちすじの兄であつたか、実に因縁の深い事、ア、お累が

自害の後此のお賤が又斯う云う変相になるといふのも、九ヶ年前狂死なしたる豊志賀の崇なるか、成程悪い事は出来ぬもの、己は畜生同様兄弟同志で夫婦に成り、此の年月互に連れ添つて居たは、あさましい事だと思ふと総毛立ちましたから、新吉は物をも云わず小さくかたまつて坐り、只ポロ／＼涙を落して居りました。

八十九

尼「とんだ面白くもない話をお聞かせ申したが、まア緩くりお休みなさい」

新「実に貴方の話を聞いて、私も若い時分にした悪事を考えますと身の毛がよだちますよ」

尼「お前さん何をいふのです、若い時分などと云つてまだ若い盛りじゃアないか、是から罪を作らん様にするのだ」

新「お母様、私は真以て改心して見ると生きては居られない程辛いから、私を貴方の弟子にして下さいな、外に往き処もないから、お前様の側へ置いて下されば、本堂や墓場の掃除でもして罪滅しをして一生を送り度いので、段々のお話で私は悉皆精神を洗い、誠

の人になりましたから、どうか私をお弟子にして下さいまし」

尼「よくね、私の懺悔話を聞いて、一凶いちげずにア、悪い事をしたと云って、お前さんのような事を仰しやるお方も有りますが、其の心持が永く続かないものですから、そんな事を云わなくつても、只ア、悪い事をしたと思えば、其所そこが善いので」

新「お賤、お前とは不思議の悪縁と知らず、是まで夫婦になつて居たけれ共、表向盃をしたという訳でもないから、夫婦の縁も今日限りとし、己は頭髪あたまを剃すつて、お前のお母さんだが、己はお母さんとは思わない、己を改心させてくれた導きの師匠と思ひ、此のお比丘さんに事つかえて、生涯出家を遂とげる心に成つたから、もう己を亭主と思つて呉れるな、己もまたお前を女房とは思わねえから、何卒どうかそう思つて呉れ」

賤「おい何をいうんだ、極りを云つてるよ、話を聞いた時には一凶いちげずに悪い事をしたと思ふが、少し経つと直しきに忘れて仕舞うもの、一寸精進をしても、七日仕ようと思つても三日も経つともう宜たかろうと喰たべるのが当あたりまえ前まへじゃアないか」

新「今迄の魂たまの汚よごれたのを悉すつかり皆洗つて本心になつたのだから、もう己の傍そばへ寄つて呉れるな」

賤「おや新吉さん何をいうのだよお前どうしたんだえ」

新「お前はまあ本当に……どうして羽生村なんぞへ来たんだなア」

賤「新吉さん、お前何をいうのだ、来たつて、あゝいう訳で来たんじやアないか、それが何うしたんだえ」

新「お前は何も解らねえのだ、ア、厭だ、ふつゝ厭だ、どうぞ後生だから己の側へ寄つてくんなさんな」

といわれてお賤は少しムツとした顔付になり、

賤「あゝ厭ならおよしなさい、だが私もね、お前と二人で悪い事を仕度くもないが、喰い方に困るものだから一緒にしたが、昨日私が斯んな怪我をして、恐ろしい顔になったもんだから、他の女と乗り替える了簡で、旨くごまかして、私を此寺へ押付け、お前はそんな事をいつて逃げる心だろう」

新「決してそういう訳じやアないが、お前どうして女に生れたんだなア」

賤「何を無理な事をいうの、女に生れたつて、氣違じみ切つて居るよ」

新「お前に口を利かれても総毛立つよ」

尼「喧嘩をしてはいけません、私もお賤の為には親だから死水を取つて貰い度いが親子でありながらそれも云われず、又お賤も私の死水を取る気はありますまい」

新「まだ此のお賤は色気がある、此こんち畜生しやうめ奴、本当にお前や己は、尻尾しつぽが生えて四つん這よんげになつて腕わんの中へ面ア突つっこ込んで、肴さかなの骨でもかじる様な因果に二人とも生れたのだから、お賤てめえ手前も本当にお経でも覚えて、観音さまへ其の身の罪を詫る為に尼に成り、衣を着て、一文ずつ貰つて歩く気になんな、今更外に仕方がないからよ」

賤「なんだね厭だよ、そんな事が出来るものか」

新「そう側へ寄つて呉れるなよ、どうか私の頭髪あたまを剃すつて下さい」

尼「まあく三四日こゝ此寺に泊つておいでなさい、又心の変るものだから、互に喧嘩をしないで、私はお経をあげに往つてくるから、少し待つておいでなさい」

新「私も一緒に参りましょう」

賤「おい新吉さんお前本当にどうしたんだえ、私は何どうしてもお前の傍そばは離れないよ」

新吉はもう誠に仏ぶつ心しんと成りまして、

新「お前はまだ色気の有る人間だ、己は真しんに改心する氣に成つた」

賤「本当にお前どうしたんだよ」

と云いながら取り縋すがるのを、新吉は突つき放はなし、

新「此ん畜生奴、己の側へ来ると蹴飛しりぞすぞ」

といわれお賤は腹の中にて、私の顔貌が斯んなに成つたものだから捨て、逃げるのだと思うから油断を致しませんで、此寺に四五日居ります中に、因果のむくいは恐ろしいもので、惣右衛門の倅惣吉が此の庵室を尋ねて参るといふ処から、新吉はもう耐え兼ねて、草苜鎌を以て自殺致しますという、新吉改心の端緒でございませう。

九十

偕さて申し続きました深見新吉は、お賤を連れて足かけ五年間の旅たびちゆう中の悪行あくぎようでございませう、不図ふと下総の塚前村と申しまする処の、観音堂の庵室に足を留とどめる事に成りました。是は藤心村の観音寺という真言寺持しんごんてりもちでございまして、一切の事は観音寺で引受けて致します。村の取附とりつきにある観音堂で、靈驗れいげん顕著あらたかというので信心を致しまする者があつて種々いろくの物を納めまするが、堂守どうもりを置くと種々の悪い事をしていなくなり、村方のものも困つて居る処で、通り掛つた尼は身性みじようも善いといふ処から、これを堂守に頼んで置きました。是へ新吉お賤が泊りましたので、比丘尼びくには前ぜん名みを熊と申す女にに似に気げな放蕩無頼を致しました悪婆あくばでございませうが、今はもう改心致しまして、頭髪あたまを剃そり落

し、鼠の着物に腰衣を着け、観音様のお堂守をして居る程の善心に成りまして、新吉お賤に向つて、昔の懺悔話をして聴かせると、新吉が身の毛のよだつ程驚きましたは、門番の勘藏の遺言に、お前は小日向服部坂上の深見新左衛門という御旗下の次男だが、生れると間もなくお家改易になつたから、私が抱いて下谷大門町へ立退いて育てたのだが、お家改易の時お熊という妾があつて、其の腹へ出来たは女という事を物語つたが、そんなら七ヶ年このかた以来夫婦の如く暮して来たお賤は、我が為には異腹はらちがいの妹であつたかと、総身そうしんから冷い汗を流して、新吉が、あゝ悪い事をしたと真しん以て改心致しました。人は三十歳位に成りませんければ、身の立たないものでございます。お賤は二十八、新吉は三十になり、悪い事は悉く仕尽した奴だけあつて、善にも早く立帰りまして、出家を遂とげ、尼さまの弟子と思つて下さい、夫婦の縁は是限りと思つて呉れお賤てめえも能く考えて見ろ、今までの悪業くごうの罪障消滅つみほろぼしの為に頭を剃りこぼつて、何どの様な辛苦修行でもし、カン／＼坊主に成つて今迄の罪を滅ほろぼさなくつちやア往いく処へも往かれねえから、己の事は諦めて呉れとはいいましたが、汝は己の真実の妹だとはいひ兼て居り、尼が本堂へ往けば、お熊比丘尼あとの後あとに附いて参り、墓場へ往けば墓場へ附いて往く、齋ときが有ればお供を致しようとして参り、兎角にお賤の傍そばへ寄るを嫌いますから、お賤は腹の中にて、思いがけない怪我をして

半面変相になり、斯こんな恐ろしい貌かおに成つたから、新吉さんは私を嫌い、大方母親おふくろが此の庵主に成つて居るから、私を此処こゝへ置き去りにして逃げる心ではないかと、まだ色気がありますから愚痴許ばかりいつて苦情が絶えません。新吉の能く働きます事というものは、朝は暗い内から起きて、墓場の掃除をしたり、門前を掃いたり、畠へ往つて花を切つて参つて供えたり、遠い処まで餅菓子を買いに往つて本堂へ供えたり、お斎が有るとお比丘さんの供をして参り、仮名振の心経や観音経を買つて来て覚えようとして居りますのを見て、尼「誠に新吉さんは感心な事では有るが、一時いちじに思い詰めた心はまた解ほれるもの、まアくく気永きながにしているが宜よい、只悪い事をしたと思えばまだお前なんぞは若いから罪滅しは幾らも出来ましょう」

と優しくいわれるだけ身に応えます。ちょうど七月二十一日の事でございます、新吉は表の草を刈つて居り、お賤は台所で働いて居ります処へ這入つて参りましたのは、十二三になる可愛らしい白しろ色いろなお小僧こぞうさんで、名を宗観と申して観音寺に居ります、此の小坊主を案内して来ましたは音助おとすけという寺男で、二人連づれで這入つて参り、

音「御免なせえ」

新「おいでなさい、観音寺様でございまするか」

音「上の繁右衛門殿の宅で二十三回忌の法事があるんで、己ア旦那様も往くんだが、何うか尼さんにもというので迎えに参つたのだ」

新「今尼さんは他のお齋に招ばれて往つたから、帰つたらそう云いましょう」

音「能く掃除仕やすねえ、墓の間の草ア取つて、跨いで向うへ出ようとする時にやアよく向脛を打ツつけ、飛つ返るように痛えもんだが、若えに能く掃除しなさるのう」

新「お小僧さんはお小さいに能く出家を成さいましたね、お幾歳でございまする」

宗「はい十二に成ります」

九十一

新「十二に、善いお小僧さんだね、十一二位から頭髮を剃つて出家になるのも仏の結縁が深いので、誠に善い御因縁で、通常の人間で居ると悪い事許りするのだが、斯う遣つて小さい内から寺へ這入つてれば、悪い事をしても高が知れてるが、お父様やお母さんも御承知で出家なすつたのですか」

宗「そうじゃアありません、抛なく坊さんに成りました」

新「抛なく、それじゃアお父さんもお母さんも、お前さんの小さい中に死んで仕舞つて、身寄頼りもなく、世話の仕手もないのでお寺へ這入ったという事もありますが、そうですか」

音「なにそういう訳じゃアなえが、此のまア宗観様ぐらえ憫然な人はねえだ」

新「じゃアお父さんやお母さんは無いのでございますか」

宗「はい、親父は七年前に死にました」

といいながらメソ／＼泣出しました。

音「泣かねえが宜えと云うに、いつでも父様や母様の事を聞かれると宗観様は直に泣き出すだ、親孝行な事だが、出家になるのは其処を諦める為だから泣くなど和尚様がよくいわつしやるが、矢張り直に泣くだが、併し泣くも無理はねえだ」

新「へえ、それは何ういう因縁に成つて居りますのです」

音「ねえ宗観様、お前の父様は早く死んだっけ」

宗「七年前の八月死にました」

音「それから此の人の兄様が跡をとつて村の名主役を勤めて居ると、其処へ嫁子が這入つて何んともハヤ云い様のなえ程心も器量も善い嫁子だったそうだが、其所に安田八角

か、え、一角とか云う劍術遣が居て其の嫁子に惚れた処が、思う様にならねえもんだから、劍術遣の一角が恋の遺恨でもつてからに此の人の兄さんをぶつ斬つて逃げたとよ、其奴に同類が一人有つて、何んとか云つたのう、ウン富五郎か、其の野郎が共謀になつて、殺したのだ、すると此の人の宅の嫁子が仮令何んでも亭主の敵い討たねえでは置かねえつて、お武家さんの娘だけにきかねえ、なんでも仇討ちをするつて心にもねえ愛想づかしをして、羽生村から離縁状を取り、縁切に成つて出て、敵の富五郎を欺して同類の様子を聴いたら、一角は横堀の阿弥陀堂の後の林の中へ来ているというから、亭主の仇を討ちぶつ切るべえと思つて林の中へ這入つたが、先方は何んてツても劍術の先生だ女ぐれえに切られる事はねえから、惘然に其の劍術遣えが、此の人の姉様をひどくぶつ切つて逃げたとよ、だから口惜しくつてなんねえ、子心にも兄さんや姉さんの敵が討ちてえツて心易い相撲取が有るんだ：風車か：え：花車、そうかそれが、力量アえれえから其の相撲取をたのむより仕様がねえと、母親は年い老つてるが、此の人をつれて江戸へ往くべえと出て来る途中で、小金原の観音堂で以てからに塩梅が悪くなつたから、種々介抱して、此の人が薬い買えに往つた後で母親さんを泥坊が縊り殺し、路銀を奪つて逃げた跡へ、此の人が帰つてみると、母様は喉を締められておつ死んでいたもんだから、ワア／＼泣てる処へ己

ア旦那が通り掛り、飛んだことだが、皆因縁だ、泣くなど、兄さんと云い姉さんと云い母さままでもそういう死さまをするというのは約束事だから、敵討なぞを仕様といわねえで兎も角も己ア弟子に成つて父さまや母さまや兄さん姉さまの追善供養を弔つたが宜かろうと勧めて、坊主になれといつてもならねえだから、和尚様も段々可愛がつて、気永に遣つたもんだから、遂には坊様になるべえとツて漸く去年の二月頭をおつ剃つたのさ」

新「へエ、そうでございますか、何んですか、此のお小僧さんのお宅は何方でございまして」

音「え岡田郡か……岡田郡羽生村という処だ」

新「え、羽生村、へえ其の羽生村で父さんは何というお方でございます」

音「羽生村の名主役をした惣右衛門と云う人の子の、惣吉さまというのだ」

と云われ新吉は大きに驚いた様子にて、

新「え、そうでございますか、是はどうも思い掛けねえ事で」

音「なんだ、お前さん知ってるのか」

新「なに知つて居やアしませんかね、私も方々旅をしたものだから、何処どこの村方には何なんという名主があるかぐらいは知つて居ます、惣右衛門さんには、水街道辺で一二度お目に掛つた事がございますが、それはまあおいとしい事でございましたな」

というものゝ、音助の話を聞く度たびに新吉が身の毛のよだつ程辛いのは、丁度今年で七年前、忘れもしねえ八月廿一日の雨の夜よに、お賤が此の人の親惣右衛門の妾に成つて居たのを、己と密通し、剩あまつさえ病中に縊くびり殺し、病死の体ていで葬りはしたなれ共、様子をけどつた甚藏め奴は捨てゝは置かれねえとお賤が鉄砲で打殺うちころしたのだが土手の甚藏は三十四年以前にお熊くまが捨児にした総領の甚藏でお賤が為には胤たね違ちがいの現在の兄を、女の身として鉄砲で打殺すとは、敵同士の寄合、これも皆因縁だ、此の惣吉殿のいう事を聞けば聞く程脊筋しへ白刃らばを当てられるより尚なほ辛い、ア、悪い事は出来ないものだど、再び油の様な汗を流して、暫くは草刈鎌を手に持つたなり黙もく然ねんとして居りました。

音「あんた、どうしたアだ、塩梅あんべえでも悪いわりか、酷ひどく顔色ひどが善よくねえぜ」

新「へエ、なアに私はまだ種いろく々罪があつて出家を遂とげ度たいと思つて、此の庵室いんしつに参つて居りますが、此のお小僧さんの様に年もいかないで出家をなさるお方を見ると、本當

に羨ましくなつて成りませんから、私も早く出家になろうと思つて、尼さんに頼んでも、まだ罪障つみが有ると見えて出家にさせて呉れませんか、斯こう遣つて毎日無縁の墓を掃除すると功德になると思つて居りますが、今日は陽氣の為か苦患くげんでございまして、酷く気色が悪いようで」

音「お前さんの鎌は甚えらく錆びて居やすね、研とげねえのかえ」

新「まだ研ぎようを本当に知りませんが、此間こないだお百姓が来た時間いて教わつたばかりでまだ研がないので」

音「己おらア一つ鎌をもうけたが、是を見な、古い鎌だが鍛きが宜いいと見えて、研とげば研ぐ程よく切れるだ、全ぜん体て此の鎌はね惣吉どんの村に三藏という質屋があるとよ、其家そこが死絶こつちえて仕舞つたから、家は取とり毀こわして仕舞つたのだ、すると己おらア友達が羽生村に居て、此方こつちへ来たときに貰わつただアが、汝われ使つて見ねえか宜よく切れるだが」

と云いながら差出す。

新「成程是は宜いい、切れそうだが大層古い鎌ですね」

と云いながら取り上げて見ると、柄えの処えに山形に三の字の焼印がありますから驚いて、新「これは羽生村から出たのですと」

音「そうさ羽生村の三藏と云う人が持つて居た鎌だ」

と云われた時、新吉は肝きもに応えて恟びつくり致し、草刈鎌を握り詰め、あゝ丁度今年で九ヶ年以前、累ヶ淵でおひさを此の鎌で殺し、続つゞてお累は此の鎌で自殺し、廻り廻つて今また我手へ此の鎌が来るとは、あゝ神かみほとけ 仏わしが私の様な悪人をなに助けて置こうぞ、此の鎌で自殺しろと云わぬばかりの懲こらしめかあゝ恐ろしい事だと思ひ詰めて居りましたが、

新「お賤一寸来ねえ、お賤一寸来ねえ」

賤「あい、何なんだよ、今往くよ」

と此の頃疎うとく々しくされて居た新吉に呼ばれた事でございますから、心嬉しくずかくと出て来ました。

新「お賤、此こゝ処ちにおいでなさるお小僧さんの顔を汝てめえ見み覚ええて居るか」

と云われお賤はげんな顔をしながら、

賤「そう云われて見ると此のお小僧さんは見た様だが何なんだか薩さつぱり張解らない」

新「羽生村の惣右衛門さん様のお子で、惣吉さん様といつて七歳ななつか八歳やっつだったろう」

賤「おやあの惣吉さん様」

新「此の鎌は三藏どんから出たのだが、汝てめえのめくと知らずに居やアがる」

と云いながら突いきなり然お賤の髻たぶざとを捉つて引倒す。

賤「あれー、お前何をするんだ」

というも構わず手元へ引寄せ、お賤の咽喉のどぶえへ鎌を当てプツリと刺し貫きましたから堪りたまません、お賤は悲鳴を揚げて七顛八倒の苦しみ、宗觀と音助は恟びつくりし、

音「お前めえ気でも違つたのか、怖おっかねえ人だ、誰か来て呉れやー」

と騒いで居る処へお熊比丘尼が帰つて参り、此の体ていを見て同じく驚きまして、

尼「お前は此間こないだから様子ようすが訝おかしいと思つてた、変な事ばかりいって、少したじれた様子だが、何なんだつて科とがもないお賤を此の鎌で殺すと云う了簡しやくになつたのだねえ、確しつかりしないじゃいけないよ」

九十三

新「いえ〜決して気は違いません、正気でございますが、お比丘さん、お賤も私わっちも斯こう遣つて居られない訳があるのでございます、お賤てめえは己おれを本当の亭主と思つてるが、汝なは定めて口惜しいと思うだろうが、汝一人は殺さねえ、汝を殺して置き、己も死なねばな

らぬ訳があるんだ、汝は知るめえが、あゝ悪い事は出来ねえものだ、此の庵室へ来た時にはお前さんの懺悔話を聞くと若え時に小日向服部坂上の深見という旗下へ奉公して、殿の手がついて出来たのがお賤だと仰しやつたが、私も其の深見新左衛門の次男に生れ、小さい時に家は改易と成つたので町家で育つたもの、腹は違えど胤は一つ、自分の妹とも知らないで七年跡から互に深く成つた畜生同様の兩人、此の宗觀様のお父様は羽生村の名主役で惣右衛門というお方でしたが、お賤を深川から見受けして別に家を持たせ樂に暮させてお置きなすつたものを私は悪い事をするのみならず、申すも恐ろしい事だが、惣右衛門様をお賤と私とで縊り殺したのでございます、さ、斯う申したら嘸お驚きでございませう、誰も知つた者はありません、病死の積りで葬つて仕舞つたが、人は知らずとも此の新吉とお賤の心には能く知つて居ります、畜生のような兄弟が斯うやつて罪滅しの為夫婦の縁を切つて、出家を遂げようと思ひました処へ宗觀様がおいでなすつて、これ〜と話をして聞いて見れば逆も生きては居られません、此の鎌は女房のお累が自害をし、私が人を殺めた草苧鎌だが、廻り廻つて私の手へ来たのは此の鎌で死ぬという神、私の懲めでございますから、其のいましめを背かないで自害致します、私、共、夫婦のものは、あなたの親の敵でございます、嘸悪い奴と思ひ召ましようから何卒此の鎌でズタ〜に斬つ

て下さいまし、お詫びの為め一言申し上げますが、お前さんの兄さん姉さんの敵と尋ねる剣術遣の安田一角は、五助街道の藤ヶ谷の明神山に隠れて居るといふ事は、妙な訳で戸ヶ崎の葎簀張よしずつぱりで聞いたのですが、敵を討ちたければ、其の相撲取を頼み、其処へ往つて敵をお討ちなさい、安田一角が他の者へ話しているのを私が傍で聴いて居たから事実を知つてるのでございます、お賤、汝と己が兄弟ということを知らないで畜生同様夫婦に成つて、永い間悪い事をしたが、もう命の納め時だ、己も今直に後から往くよ、お賤宗観様にお詫を申し上げな

賤「あい〜」

と血に染つたお賤は聴く毎にそうであつたかと善に帰つて、よう〜と血だらけの手を合せ、苦しき息の下から、

賤「惣吉様誠に濟まない事をしました、堪忍して下さいまし、新吉さん早く惣吉さんの手に掛つて死度い、あゝ、お母さん堪忍して下さい」

と苦しいから早く自殺しようとする鎌の柄に取り纏るを新吉は振り払つて、鎌を取直し、我左の腹へグツと突き立て、柄を引いて腹を搔切り、夫婦とも息は絶々、に成りました時に、宗観は、

宗「あゝ、お父さんを殺したのはお前たち二人とは知らなかったが、思い掛けなくお父さんの敵が知れると云うのは不思議な事、また兄さんや姉さんを殺した安田一角の隠れ家を知らせて下され、斯んな嬉しい事はありませんから決して悪いとは思いません、早く苦痛のないようにして上げ度い」

と云いながら後をふりかえると、音助はブル／＼して腰も立たないように成つて居ました。

宗「お父さんや兄さん姉さんの敵は知れたが、小金原の観音堂でお母さんを殺した敵は、いまだに分らないが、悪い事をする奴の末始終は皆斯ういう事に成りましょう」

というのを最前から聞いていましたお熊比丘は、袖もて涙を拭いながら宗觀の前へ来て、尼「誠に思い掛けない、宗觀様お前さんかえ」

宗「へえ」

尼「忘れもしない三年跡の七月小金原の観音堂でお前さんのお母さんを縊り殺し、百二十両と云う金を取つたは此のお熊比丘尼でございますよ」

宗「エ、これは」

と宗觀も音助も悔くり致しました。絶え／＼に成つていました新吉は血に染つた手を

突き、耳を敬たつて聞いております。

尼「私も種々いろく悪い事をした揚句、一度出家はしたが路銀に困っている処へ通り合せた親子連の旅人りよじん小金原の観音堂で病に苦しんで居る様子だから、此の宗觀様をだまして薬を買いに遣った跡で、お母様をふくろさん縊殺くびりころしたのは此のお熊、私はお前様さんのお母様つかさんの敵だから私の首を斬つて下さい」

と新吉が持つていました鎌を取つて、お熊比丘尼は喉を搔切つて相果てました。其の内村の者も参り、観音寺の和尚様も来て、何しろ捨すてては置かれないと早速此の由よしを名主から代官へ訴え検死済の上、三人の死骸は観音堂の傍わきへ穴を掘つて埋め、大きな墓はかじるし標しるしを立てました。是が今世に残つております因果塚で、此の血に染つた鎌は藤心村の観音寺に納まりました。扱さて宗觀は敵の行方が知れた処から、還げんぞく俗して花車を頼み、敵討したが仕度いと和尚に無理頼みをして観音寺を出立するという、是から敵討に成ります。

九十四

塚前村観音堂へ因果塚を建立致し、観音寺の和尚どうおん道恩ことごとが尽く此の因縁を説いて回向を

致しましたから、村方の者が寄集まつて餅を搗き、大した施餓鬼が納まりました。斯くて八月十八日施餓鬼祭を致しますと、観音寺の弟子宗観が方丈の前へ参りまして、

宗「旦那様」

道「いや宗観か、なんじや」

宗「私はお願ひがありますが、旦那さまには永々御厄介に相成りましたが、私は羽生村へ帰り度うございます」

道「ウン、どうも貴様は剃髮する時も厭がつたが、出家になる因縁が無いと見える、何故羽生村へ帰り度いか、帰つた処が親も兄弟もないし、別に知るものもない哀れな身の上じゃないか、よし帰つた処が農夫になるだけの事、実何うしても出家は遂げられんか」

宗「はい私は兄と姉の敵が討ちとうございます」

道「これ、此間もちらりと其の事も聞いたから、音助にも宜う宗観にいうてくれと言附けて置いたが、敵討という心は悪い心じや、其の念を断らんければいかん、執念して飽くまでも向を怨むには及ばん、貴様の親父を殺した新吉夫婦と母親を殺したお熊比丘尼は永らく出家を遂げて改心したが、人を殺した悪事の報いは自滅するから討つがものは無い、

己おのれと死ぬものじやから其の念を断つ処が出家の修行で、飽く迄も怨む執念を断きらんければ
いかん、それに貴様は幾歳いくつじや、十二や十三の小坊主が、敵手あいては劍術遣じやないか、みす
く返り討になるは知れてある、出家を遂げれば其の返り討になる因縁のがを免れて、亡なら
れた両親やまた兄嫂あによめの菩提を吊うが死なれた人の為じや、え」

宗「ハイ毎度方丈様さんから御意見を伺っておりますが、此の頃は毎晩く兄あにさんや姉あねさ
んの夢ばかり見ております、昨夜ゆうべも兄さんと姉さんが私の枕元へ来まして、新吉が敵の隠か
家くれがを教えて知つているに、お前が斯こう遣つてべん／＼と寺にいてはならん、兄さん姉
さんも草葉の蔭で成仏する事が出来ないから敵を討つて浮ばして呉れろと、ありくくと枕
元へ来て申しました、実に夢とは思われません、してみると兄様あにさんや姉様あねさんも迷つていと
思いますから、敵を討つて罪作りを致しますようでございますけれども、どうか両人ふたりの怨
みを晴して遣り度とうございます」

道「それがいかん、それは貴様の念が断きれんからじや、平常敵ふだんを討ち度たい、兄さんは怨
んではせんか、姉さんも怨んではせんか、と思う念が重なるに依つて夢に見るのじや、そ
れを仏書に睡眠と説いて有る、睡うつは現眠うつはねむる汝てまいは睡ねむつてばかり居るから夢に見るのじ
や、敵討の事ばかり思うているから、迷いの眠りじや、それを避ける処が仏の説かね

ていう教えじゃ、元は何も有りはせんものじゃ、真言の阿字を考えたら宜^よかろう、此の寺に居て其の位な事を知らん筈は無いから諦めえ」

宗「ハイ、何^どうしても諦められませんが、永らく御厄介に成りまして誠に相済みません、敵討を致した上は出家に成りませんが、でも屹^{きつと}度御恩報じを致しますから、どうかお遣んなすって下さいまし、強^たつて遣^たつて下さいませんかければお寺を逃出し黙^{もく}つて羽生村へ帰ります」

道「いや／＼そんならば無理に止めやせん、皆因縁じゃからそれも宜^よかろう、やるが宜^よかろうが、確^{しつ}かりした助太刀を頼むが宜^よい、先^{さき}方は立派な剣術遣^しい、殊^{こと}に同類も有^あらうから」

宗「はい親父の時に奉公をしたもので、今江戸で花車という強いお相撲さんが有^ありますから。其の人を頼みます積^たりで」

道「若^もし其の花車が死んでいたら何^どうする、人間は老^{ろう}少^{しょう}不定^{ふじょう}じゃから、昨日^{きのう}死にましたといわれたら何^どうする、人間の命は果^は敢^かないものじゃが、あゝ仕方がない、往^いくなら往^きけじゃが、首尾好く本懐を遂^{つひ}げて念^{ねん}が断^きれたらまた会いに来てくれ」

と実子のような心持で親切に申します。

宗「これがお別れとなるかも知れませんが、誠にお言葉を背^{そむ}きまして相済みません」

道「いや、念が断れんと却つて罪障になる、これは小遣に遣るから持つて往け」

と、三年此の方世話をしたものゆえ実子のように思ひまして、和尚は遣りともながるのを、強つてといふので、音助に言付け万事出立の用意が整いましたから立たせて遣り、漸く五日目に羽生村へ着致しましたが、聞けば家宅は空屋に成つてしまひ、作右衛門という老人が名主役を勤めており、多助は北阪の村はずれの堤下に独身活計をしているといふから遣つて参り、

宗「多助さん、多助爺やア」

多「あい、なんだ坊様か、今日は些とべえ志が有るから、銭い呉れるから此方へ這入んな」

宗「修行に來たんじやアない、お前は何時も達者で誠に嬉しいね」

多「誰だ、」

宗「はいお前忘れたかえ、私は惣吉だアね、お前の世話に成つた惣右衛門の悴の惣吉だよ」

多「おい成程えかくなつたねえ、まア、坊様に成つたアもんだから些とも知んねえだ、能くまア来たあねえ」

と嬉し涙に泣き沈み漸々涙を拭いながら、

多「あゝ三年前にお前さまが宅を出て行く時はせつなかつたが、敵討だというから仕方がねえと思つて出して上げたが後で思え出しては泣いてばかりいたが、作右衛門様の世話でもつて、何うやら斯うやら取附いて此処にいやすが、お前様を訪ねてえつても訪ねられねえだが、お母様は小金原で殺されてからお前様が坊様に成つたという事ア聞いたから、チヨツクラ往きてえと思つても出られねえので無沙汰アしやしたが、能くまア来て下せえやした、本当に見違えるような大く成つたね」

惣「爺やア、私は和尚様に願ひ無理に暇を戴いて、兄さんや姉さんの敵が討ちたくつて来たが、お父様お母様の敵は知れました」

とお熊比丘尼の懺悔をば新吉夫婦が細やかに聞き、遂に三人共自殺した処から、村方が者が寄集まつて因果塚を建立した事までを話すと、多助も不思議の思ひをなして、是から作右衛門にも相談の上敵討に出ましたが、そういう処に隠れて泥坊をしているからには同

類も有ろうから、私とお前さんと江戸へ往つて、花車関を頼もうと頼つて多助と惣吉は江戸へ遣つて参り、花車を便りて此の話を致して頼みました。此の花車という人は追々出世をして今では二段目の中央まで来ているから、師匠の源氏山も出したがりませんのを、義に依てお暇を下さいまし、前に私が奉公をした主人の惣右衛門様の敵討をするのでございまずからと、義に依つての頼みに、源氏山も得心して芽出立いたし、日を経て彼の五助街道へ掛りましたのが十月中旬過ぎた頃もう日暮れ近く空合はドンヨリと曇つております。三人はトットと急いで藤ヶ谷の明神山を段々なだれに登つて参りますと、樹本生茂り、昼でさえ薄暗い処殊には曇つておりますから漸々足元が見えるくらい、落葉の堆れている上をザク／＼踏みながら花車が先へ立つて向を見ると、破れ果てたる社殿が有つてズーツと石の玉垣が見え、五六本の高い樹の有る処でポツポツと焚火をしてる様子ゆえ、彼処らが隠れ家ではないかと思ひながら傍の方を見ると、白いものが動いておりますが、なんだか遠くで確と解りません。

花「多助さん確かりしなせえ」

多「もう参つたかねえ、私はね剣術も何にも知んねえが此の坊様に怪我アさせ度くねえと思うから一生懸命に遣るが、あんたア確かり遣つて下せえ」

花「私わしイ神明しんめい様さんや明神あきみ様さんに誓ちかを立てゝるから、私が殺されても構わねえが、坊様に怪我アさせ度たくねえ心持だから、お前度胸まへどしよを据すえなければいかんぜ」

多「度胸据えてる心持だアけんども、ひとりでに足がブル／＼顫ふるえるよ」

花「氣おちつを沈着おちつけたが好ええ」

多「氣おちつイ沈着おちつける心持で力ア入れて踏張ふんばれば踏張ふんばる程足イ顫ふるえるが、何どういうもんだろ
う、私わしイ斯こんなに身体顫ふるつた事ことアねえ、四年前よねねに瘡おこりイふるつた事が有あつたがね、其の時は
幾いくら上から布団をかけても顫ふるつたが、丁度其の時のように身体が動くだ」

花「ハテナ、白い物が此方こつちへころがつて来るようだが何なんだろう、多助さん先へ立つて往まきなよ」

多「冗談じやうだんいっちゃアいけねえ、あの林とこの処とこに悪わる漢ものが隠れているかも知れねえから、お前めえさん先へ往まつてくんねえ」

と云いながら、やがて三人が彼かの白い物の処とこへ近ちか附ついて見ると、大杉おほすぎの根元とこの処とこに一人の僧そうが素裸すつぱだ体かにされて縛むすられていまして、傍わきの方に笠かさが投げ出して有あります。

九十六

花「おい多助さん」

多「え」

花「憫然かわいそうに、坊様だが泥坊に縛られて災難あわに逢しやツたと見え素裸体だ」

多「なにしても足がふるえて困る」

花「そう顫えてはいけねえ」

と云いながら彼の僧かに近づき、

花「お前さんく泥坊のために素裸体にされたのですか」

僧「はい、災難に逢いました、木きおろし風まで参りまする途中でもって馬方が此道こいが近いからと云うて此処こゝを抜けて参りますと、悪漢わるものが出ましたものじやから、馬方は馬を放り出した儘逃しまげて了うと、私は大勢おほいに取巻かれて衣服きものを剥はがれ、直すぐ逃がして遣ると此方こつちの勝手が悪い、己おれら達が逃げる間此処こゝに辛抱ごんぱうしていると申して、私は此の木の根方へ縛り附けられ、何どうも斯こうも寒くつて成りません、お前さんたちも先へ往くと大勢で剥がれるから、後あとへお返りなさい」

花「なにしろ繩を解いて上げましょう、貴僧あなたは何処どこの人だえ」

僧「有難うございます、私は藤心村の観音寺の道恩というものです」

と聞くより惣吉は打驚き駈けて参り、

惣「え、旦那様か、飛んだ目にお逢いなされました」

道「お、く宗観か、お前此の山へ敵討に来たか」

惣「はいお言葉に背いて参りました、多助や、私が御恩に成った観音寺の方丈様だよ」

多「え、それはマア飛んだ目にお逢いなせえやしたね」

道「酷い事をする、人の手は折れようと儘、酷く縛って、あゝ痛い」

と両腕を摩りながら、

道「中々同類が多勢居る様子じやから帰るが宜い」

花「なにしても風を引くといけないから、それじやア斯うと、私の合羽に多助様お前の

羽織を和尚様にお貸し申そう、さア和尚様、これをお着なさい、それから多助様此処を下

りて人家のある処まで和尚様を送ってお上げなさい」

多「己此処まで惣吉様の供をして、今坊様を連れて山を下りては四年五年心配打った

甲斐がねえ」

花「惣吉様が永らく御厄介に成った方丈様だから連れてって上げなさいな」

多「敵も討たねえで、己山を下りるといふ理合はねえから己ア往かねえ、坊様に怪我アさせてはなんねえから」

花「そんな事をいわずに往つておくんなせえ」

惣「爺やア、どうか和尚様をお送り申してお呉れ、お前が往かなけりやア私が送り申さなければならぬのだから、往つておくれな」

多「じゃア何うしても往くか、己此処まで来て敵も討たずに後へ引返すのか、なんだツて此の坊様はおつ縛られて居たんだナア」

とブツ／＼いいながら道恩和尚の手を引いて段々山を下り、影が見えなくなると樹立の間から二人の悪漢が出て参り、

甲「手前たちは何だ」

花「はい私共は安田一角先生が此方にお出なさると聞きまして、お目にかゝり度く出ましたもので」

乙「一角先生などという方はおいでではないワ」

花「私共はおいでのを事を知つて参りましたものですが、一寸お目にかゝり度うございませす」

乙「少し控えて居ろ」

と二人の悪漢は、互に顔を見合せ耳こすりして、林の中へ這入って、一角に此の由を告げると、一角は心の中にて、己の名を知っているのは何奴か、事に依つたら、花車が来たかも知れないと思うから、油断は致しませんで、大刀の目釘を露し、遠くに様子を伺つて居りますと、子分がそれへ出て、

甲「やい手前は何者だ」

九十七

花「いえ私は花車重吉という相撲取でございますが、先生は立派なお侍さんだから、逃げ隠れはなさるまい、慥かに此処にいなさる事を聞いて来たんだから、尋常に此の惣吉様の兄さんの敵と名のつて下せい、討つ人は十二三の小坊主様だ、私は義に依つて助太刀をしに参つたものだから、何十人でも相手になるから出てお呉んなせい」

といわれ、悪漢どもは、あゝ予て先生から話のあつた相撲取は此奴だなど思いましたから、直に一角の前へ行きまして此の事を告げました。一角も最早観念いたしております

るから、

安「そうか、よいく、手前達先へ出て腕前を見せてやれ」

といわれ、悪漢どもも相撲取だから力は強かろうが、剣術は知るめえから引包んで餓鬼諸共打つてしまえ、とまず四人ばかり其処へ出ましたが、怖いと見えまして、

甲「尊公先へ出ろ」

乙「尊公から先へ」

丙「相撲取だから無闇にそういう訳にもいかない、中々油断がならない、尊公から先へ」
丁「じゃア四人一緒に出よう」

と四人均しく刀を抜きつれ切つてかゝる、花車は傍に在った手頃の杉の樹を抱えて、総身に力を入れ、ウーンと揺りました、人間が一生懸命になる時は鉄門でも破ると申すことがございます。花車は手頃の杉の樹をモリくくと拗り切つて取直し、満面朱を灌ぎ、掴み殺さんず勢いにて、

花「此の野郎ども」

といいながら杉の幹を振上げた勇氣に恐れ、皆近寄る事が出来ません。花車は力にまかせ杉の幹をビュウ〜振廻し、二人を叩き倒す、一人が逃げにかゝる処を飛込んで打倒

し、一人が急いで林の中へ逃げ込みますから、跡を追って参ると、安田一角が野袴のばかまを穿き、長い大小を差し、長髪に撫で付け、片手に種ヶ島の短銃たんづつに火縄を巻き附けたのを持つて、

安「近寄れば撃つてしまふぞ、速すみやかに刀を投出して恐れ入るか、手前てめえは力が強くても此れでは仕方があるめえ」

と鼻の先へ飛道具を突き附けられ、花車はギョツとしたが、惣吉うしろを後へ囲んで前へ彼の杉の幹を立てたなりで、

花「卑怯だ〜」

と相撲取が一生懸命に呶鳴る声だから木霊こだま致してピーンと山間やまあいに響きました。

花「手前てめえも立派な侍じゃアねえか、斬り合うとも打合うともせえ、飛道具を持つとは卑怯だ、飛道具を置いて斬合うとも打合うともせえ」

一角もうすっかり引金を引く事が出来ませんから威おどしの為に花車の鼻の先へ覗ねらいを附けておりますから、何程力があつても仕様がありません、進むも退ひくも出来ず、進退谷きわまつて花車は只ウーン〜と呻うなつております。多助は彼の道恩かを送っていきせき帰つて来ましたが、此の体ていを見て驚きましてブル〜顫ふるえております。すると天の助たすけでございますか、

時雨空の癖として、今まで霽れていたのが俄かにドットと車軸を流すばかりの雨に成りました。そう致しますと生茂おいしげった木葉このはに溜った雨水が固まってダラ〜と落おちて参つて、一角の持つていた火繩に当つて火が消えたから、一角は驚いて逃げにかゝる処を、花車は火が消えればもう百人力と、飛び込んで無茶苦茶に安田一角を打据うちずえました、これを見た悪漢わるものどもは「それ先生が」と駈出して来ましたが側へ進みません、花車は傍かたえを見向き、花「此の野郎共傍そばへ来やアがると捻ひねり潰すぞ」

という勢いに驚いて樹立の間へ逃げ込んで仕舞いました。

花「サア惣吉様遣つてお仕舞いなせえ、多助様、お前助太刀じゃアねえか確しつりしなせえ」
惣吉は走り寄り、

惣「関取誠に有難う、此の安田一角め兄あにさん姉あねさんの敵思い知つたか」

多「此の野郎助太刀だぞ」

と惣吉と兩人ふたりで無茶苦茶に突くばかり、其のうち一角の息が止ると、二人共がっかりしてペタ〜と坐つて暫らくは口が利けません。花車は安田一角の髻たぶさを取り、拳を固めてポカ〜打ち、

花「よくも汝われは恩人の旦那様を斬りやアがった、お隅様さんを返かえり討うちにしやアがったな此

の野郎」

「といたながら鬢びんの毛を引抜きました。同類は皆ちり／＼に逃げてしまったから、其の村方の名主へ訴え、名主からまたそれ／＼へ訴え、だん／＼取調べになると、全く兄姉あねの仇討かたきうちに相違ちがないことが分り、花車は再び江戸へ引返し、惣吉は十六歳の時に名主役となり、惣右衛門の名を相続ついでいたし、多助を後見ごけんといたしました。花車が手玉てたまにいたしました石へ花車と彫り附け、之を花車石と申しまして今に下総しげの法恩寺ほおんじ中に残りおります。是で先まずお芽出度めでたく累ヶ淵のお話は終りました。

(拋小相英太郎速記)

青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 巻の一」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集巻の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」と同様に用いられている二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたような形の繰り返し記号）は、「々」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼の」と「彼」の「と」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わ

りを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「*」は注釈記号です。その内容は底本では上部欄外に書かれています。

※表題は底本では、「真景《しんけい》累《かさね》ヶ一淵《ふち》」となっています。

入力：小林繁雄

校正：かとうかおり

2000年4月18日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真景累ヶ淵

三遊亭圓朝

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>